The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代日本女性の生き方意識に関する研究 -特に宗教的意識および倫理的価値意識の側面から-
Author(s)	山縣, 喜代
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3060100
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代日本女性の生き方意識に関する研究

――特に宗教的意識および倫理的価値意識の側面から――

山縣喜代

目　　次

序　章

第１節　本研究の主題の位置づけ・・・・・・・・・・・・・　1

第２節　いくつかの視点・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

第３節　研究テーマの構成・・・・・・・・・・・・・・・・　5

第Ｉ部　理　論　編

第２章　本研究の前提となる諸概念

第１節　”女性性”をめぐる考察・・・・・・・・・・・・・　１０

第２節　”宗教概念”の暫定的了解・・・・・・・・・・・・　２３

第３節　”ライフサイクル・世代”のとらえ方・・・・・・　２７

第４節　”真の教育”が意味するもの・・・・・・・・・・・　３８

第３章　宗教的意識や心情

第１節　神の概念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４４

第２節　死後の世界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６１

第３節　日本人の信仰心・・・・・・・・・・・・・・・・・　７０

第４章　倫理的価値意識

第１節　善悪の判断や罪意識・・・・・・・・・・・・・・・　８８

第２節　判断の基準・行動の基準・・・・・・・・・・・・・１００

第３節　人生で大切なもの・・・・・・・・・・・・・・・・１１３

第４節　生きがい感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１９

第II部　実　証　編

第５章　調査方法

第１節　質問紙法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３７

第２節　被調査者の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４０

第３節　調査期日および手続・・・・・・・・・・・・・・・・・１４２

第６章　宗教的意識や心情－－結果と考察－－

第１節　各群の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４４

第２節　神の概念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５７

第３節　死後の世界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８７

第４節　信仰心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９９

第５節　宗教的意識や心情の因子構造・・・・・・・・・・・・・２１６

第７章　倫理的価値意識－－結果と考察－－

第１節　善悪の判断や罪意識・・・・・・・・・・・・・・・・・２５１

第２節　判断の基準・行動の基準・・・・・・・・・・・・・・・２６１

第３節　人生で大切なもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７３

第４節　生きがい感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８０

第５節　倫理的価値意識の因子構造・・・・・・・・・・・・・・２８７

第III部　総　括　編

第８章　本研究の諸結果の要約と総括

第１節　各群の結果の要約・・・・・・・・・・・・・・・・・・３２０

第２節　種々の視点からの要約・・・・・・・・・・・・・・・・３４６

第３節　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５７

第　９章　本研究の諸制約・・・・・・・・・・・・・・・・・・３６３

第１０章　本研究の意義と展望・・・・・・・・・・・・・・・・３６７

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７２

資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８５

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１８

序　章

第１節　本研究の主題の位置づけ

日本人の国際舞台での活躍が目覚ましくなってきた近年、日本人の考え方・行動の仕方の特異性が、いい意味でも悪い意味でも世界の注目を集めるようになり、日本人の間でも”日本人性”ということが強く意識されるようになってきた。数年前まではたいして目につかなかった”日本人”に関する本が、最近盛んに店頭を賑わすようになった。

以前から日本人の生き方や価値観に関して興味があり、その研究を少しずつ進めてきた筆者は、これ幸いとずいぶん多くの文献を入手したが、次々に読み進めていくうちに、多くの疑問が浮上してきた。この本が対象としている日本人とはいったい誰のことか。それは現代の日本人全般に言えることなのか。古代の日本人の大和心が、そっくりそのまま現代の日本人の特性であるかのように記述されているのではないか。あるいは高齢の日本人像を１０代の若い日本人にまでも通用する普遍の日本人像のように一般化しすぎてはいないだろうか。また、それらの文献を読み比べていくと互いに矛盾してくる面も出てくる。しかし、そのどちらが真の日本人像なのかと問いただしたところで、それぞれがよりどころとしている文献や現象が異なるので、結論は出しにくい。日本人性をめぐる対談などを聞いていても、それぞれがそれぞれの解釈に合う文献や歴史的人物を引用するため、平行線で話が進められていることもあるし、果たしてその引き合いに出された歴史上の個人が一般的日本人を代表しているのかもはなはだ疑わしい。また反対に、ほとんどの本が「日本人はこれこれであり、西洋人とは異なる」と、あたかも自明の理のように書いている日本人の特性なるものも、日常の観察からして必ずしもそうとは言い切れないのではないか、この日本的特質といわれているものは、案外西洋人にも共通なのでは

ないかと思う場合もある。確かに、ある程度言い当てているものもあるだろうが、あたかもそれがすべてであるかのように宣伝され、それを基準に物事が判断されるのを目にすると恐ろしいような気さえする。

現実に、現代の日本に生活している日本人の意識や心情にはどんな特色があるのだろうか。そして、どのような点は洋の東西を問わず共通な意識や心情なのだろうか。これが、”実証的な研究”の必要性を感じるゆえんである。

実証的な日本人研究が皆無というわけではないが、少なくとも日本人の生き方を左右するような価値観に関する研究は少ない。冒頭に記したような日本人の思考や行動様式の底流にある日本人の”生き方にかかわる価値観”を吟味してみる必要性があると思われるのだが、なかなかその点を突っ込んで実証的に研究したものは見当たらない。

その理由として、そのテーマ自体のもつ無限の広がりや深さ、複雑さ、つかみ難さがあげられる。一方では、上記のようなテーマ自体がもつ性質から、科学的に明快な実証研究とはなりえないという不安がある。そして他方には、そのような深い内容をそして人間の微妙な心の動きを、機械や器具にかけて測定し、処理されてはたまらないという根強い実証研究に対する不信感もある。このような懸念から実証研究のテーマはおのずと実証がなされやすいもの、操作化が容易なものへと流れ、その分野は急速に発展しているにもかかわらず、人間にとってもっと根本的な問題は、敬遠され手つかずに終わってしまっている場合が多い。

しかし、近年心理学の世界でも測定が比較的容易な世界にのみ焦点をあて、人間自身をあるいはその価値観をブラックボックスに入れておくような傾向には警告が発せられるようになり、問題中心的オリエンテーションも強調され始めている。それと同時に、方法論的にも一層洗練された操作化、体系化の試みも始められている。

筆者もこのような動きに賛同するものの一人として、微力ではあるが、あえてこの難題に挑戦してみることにしたのが本研究である。

さらに、筆者は長年女子教育に携わってきた関係から、また自分自身が職業をも

つ女性として社会のなかで働いてきた経験から、現代のそして未来にむけての女性の生き方というものに非常に関心がある。この女性の生き方に関する問題も、近年とみに社会的な問題としてクローズアップされ、話題に上ることが多くなってきた感がある。そして、女性性に関して、女性のこれからの生き方に関して、女性に対する社会の見方やシステムに関して、書物も多く出されるようになってきたが、やはり実証的な研究は数える程しかない。特に心理学の分野での実証研究では、長い間男性のサンプルによる調査結果が、あるいは男性の見方に立った分析結果が、女性をも含めた人間の心理現象として論じられてきた場合が多く、その男性の調査結果を基準として女性の具体的なケースが判断され、時には価値判断までなされたこともあって問題となった。アメリカでは男性のための男性による理論を拒否しようとする動きすらあり、人間の成長は男性の場合と女性の場合は異なるのであるから女性のための理論を構築しようとする動きも出てきている。筆者の男女を対象とした調査[1]からも生きがい感、価値観に関する男性のとらえと女性のそれとは異なるという結果を得ているが、これは当然のことといえよう。男女を問わず人間として共有する部分も多いことと思うので、極端なまでにその考え方を推し進めていくことには賛同しがたいが、女性に焦点を当てた実証研究の必要性は痛切に感じる。

そこで、本研究では日本人の生き方意識のなかでも、特に日本人”女性”の生き方にかかわる意識や心情に焦点を絞って研究を進めることとする。

第２節　いくつかの視点

調査、分析にあたっては、下記のようないくつかの視点が設定された。

① 日本的メンタリティから発した調査・分析

第１にあげられるのは、東洋人、正確には日本人のメンタリティによって調査、分析を進めるということである。これまでの心理学の種々の研究では、その準拠する概念や理論が西洋のメンタリティに基づいたものがほとんどであり、西洋人を基

準にして作成された調査票やテストをそのまま、あるいは多少手直しして使用している場合が多い。日本人心理の特異性をそのようなテストを用いて描き出しても、それはあくまでも西洋人の立場からみた日本人的特色であり、それはそれで意味はあるものの、西洋人の概念図式にはないものは落とされることになる。これが、日本人自身の概念図式によって、日本人像を描こうとするゆえんである。

本研究では、日本人である筆者の感覚に頼って、日本の文献に目を通し日本人である筆者の目で観察した日常の諸現象を分析して作成された調査票を用い、日本人の手で分析してみようとするものである。

この研究は日本人性の研究であるので、日本人を中核に据えて研究を進めていくのは当然であるが、出てきた調査結果が、果たして日本人に特有なものであるのかを見極めるためには、他のものと対比する必要がある。本研究では、日本人の宗教的な問題を扱う際には必ずと言ってよいほど常に比較の対象とされる、西洋のキリスト教文化圏内の調査結果と比較検討する。この比較により、日本人の調査結果のうち、どの点は日本人の特質なのか、どの点は国境や民族の違いを越えて通じる人間のもつ普遍性なのかをも吟味したいと思う。比較のためには日本人の被検者に使用したものと同じ調査票を用いることになるが、この場合日本人の概念図式によって作成された調査票をもって西洋人の意識を測ることになり、前述の日本人性を西洋の調査票をもって測ろうとする場合に起こる問題と同じ問題が発生することは当然のことであろう。しかし、相互の調査を繰り返すことにより、相互の視覚が導入されることになり、度を重ねる毎により正確なそれぞれの像が浮上してくるであろうという期待はある。

いずれにせよ、今回の場合は日本人の意識や心情を中核に据えた研究であるので、日本人のメンタリティに立った調査の方法は意味あることと思っている。

しかし、少しでもより正確に両者の意識を把握するために、手続きの項で詳述するが、連鎖的に比較していく方法を導入する。

② 学校教育の影響の吟味

さらに、日本人の特質として抽出されたもののうち、どの点は学校教育により変化しうるものなのか、どの点は受けている学校教育とはあまり関係なく日本人の血の中に流れているような特性なのかをも吟味する。調査対象としては、当初中学生から上の生徒と学生を予定していたが、調査票が出来上がってみると中学生には難解であるとの現場の先生方からの指摘もあって、高校生と大学生を対象とすることとなった。すなわち、日本の宗教教育を実施していない一般校の高校生と大学生、日本のキリスト教の学校でキリスト教教育を受けている高校生と大学生、そしてキリスト教文化圏で現在もその影響を強く受けているアイルランドと英国の高校生と大学生とを比較検討する。(2)

③ ライフサイクル・世代の視点に立った検討

さらに、日本の高校生群、大学生群、壮年者群、老年者群の調査結果を比較することにより、どの点は年代を問わず日本人一般の特性なのか、どの点は年代によって異なるものなのかを吟味する。こうして、日本人一般の特性と日本人の各年代における特性とを知ることにより、その意味を発達段階的なパースペクティブのもとでとらえたい。

第３節　研究テーマの構成

「現代日本女性の生き方意識」という人間にとって本質的な問題を、一まとめにして抱え込むと身動きが取れなくなる可能性があるので、今回は先ず問題を重点的に絞って、その一部ではあるが生活の根底を流れているであろうと思われる”日本人の宗教的意識と心情”および”倫理的価値意識”を中心に研究をすすめることにより、その領域での日本人の特性を描き出していきたいと思う。

しかし、これでもまだ一括して扱うにはあまりにも茫漠としているので、そのな

かを下記のようにいくつかに分割して分析し、考察していく。

「宗教的意識や心情」

－神の概念

－死後の世界

－信仰心

－因子構造

「倫理的価値意識」

－善悪の判断や罪意識

－判断の基準・行動の基準

－人生で大切なもの

－生きがい感

－因子構造

以上が、分析考察にあたっての便宜上の区分であるが、これらは当然のことながら密接に関連しているものであり、切り離すことによる難点が出てくることは覚悟しなければならない。本論文の最後には、それらをできるだけ統合的に見ていく努力はするつもりである。

（１）山縣喜代　１９８７　生きる意味の意識と価値観に関する研究
－自己教育力の心理学的基礎をめぐって－　　大阪大学修士論文
（未公刊）

（２）ａ）BRITANNICAの　Book of the Year 1981 によると、世界における
キリスト教徒の割合は、下記のようである。

	北米	南米	ヨーロッパ	アジア
ｷﾘｽﾄ教信者	237,096,500	175,114,000	342,630,400	95,987,240
全信者*	244,171,140	177,176,600	362,223,520	1,501,166,600
人口	369,759,000	245,067,000	750,198,000	2,557,562,000

	アフリカ	オセアニア	世界
ｷﾘｽﾄ教信者	128,617,000	18,058,500	997,503,640
全信者*	275,211,250	18,674,500	2,578,623,610
人口	469,361,000	22,775,000	4,414,722,000

* 全信者とは、キリスト教、ユダヤ教、回教、ゾロアスター教、神道、道教儒教、仏教、ヒンズー教の信者

b）アイルランドは現在でも自他ともに認めるキリスト教国であるが、イギリスの青年も、昭和５３年７月に総理府青少年対策本部が出した『世界青年意識調査（第２回）結果報告書』によると、多くはキリスト教を信仰していることがわかる。

以下にその一節を引用する。（pp.119-120）

「アメリカ、イギリス、西ドイツ、スイス、インド、フィリピン、ブラジルの７ヵ国では、信仰をもっている青年は９０％前後に達する。（中略）

キリスト教（ローマン・カトリック）は、フィリピンが９０％でその率は最も高く、ブラジルが７５％でこれにつぐ。アメリカ、西ドイツ、フランス、スイスは、いずれも３０～５０％台となっている。（中略）

キリスト教（プロテスタント）は、イギリスが６８％でその率は最も高く、西ドイツが５４％でこれにつぐ。アメリカ、スイスとオーストラリアは、ほぼ３０～５０％となっている。（中略）

要するに、わが国とインドを除く各国（筆者「注」－アメリカ、イギリス、西ドイツ、フランス、スイス、スウェーデン、オーストラリア、フィリピン、ブラジル）について、青年が信仰している宗教の多

くは、キリスト教のローマン・カトリックとプロテスタントということになる。

第Ⅰ部　理論編

第２章　本研究の前提となる諸概念

本章においては、本研究を進めていくにあたって前もって考察しておくべきであると思われる諸概念について検討する。

第１節　”女性性”をめぐる考察

女性論や婦人問題が、大きな関心事として取り上げられるようになって久しい。最近ではその内容も多彩で、取り組みも多方面にわたってきている。日本では、職場において男女雇用機会均等法が施行され、これを契機に女性にも自己の能力を開発して直接社会に貢献できる可能性が開けたとか、職場における男女の力学が変化しつつあるなどとも騒がれている。

しかし、それでは女性論とは何なのか、婦人問題とは何なのか、と面と向かって問いただしてみると、その含む内容の大きさとつかみ難さに戸惑う。一体社会のあり方がどのようであり、女性としてのあるいは男性としての教育はどのようであることが望ましいのか。そこから女性は何を導き出そうとしているのか、何を導き出したいと思っているのか。人間として、男女は平等である。人間的に言って、女性は男性に遜色がない。このような人間観は、現実にどう見られているか、現実に女性がどう扱われているかは別として、論議のうえでは根本的な前提として一致していることが多いが、それではそのことは具体的に何を意味するのかということになるとたちまち意見は分かれる。人間として男女が平等であるということは、男性性・女性性そのものを否定することなのか。職場で男性と互角に働けることなのか、男性が家事を分担することなのか。そもそも、男性性・女性性とは何なのか、等々。また、人間性がひどく痛めつけられ、女性は男性の所有物のようにみられている

社会での婦人問題と、フェミニストが大いに息巻き、言葉の相違にも敏感で、history という言葉も his storyではなく her storyであるとか、chairmanではなくchairperson である等との論議を戦わせている社会での婦人問題と、慎み深く忍耐強く細やかな心遣いをする目立たないが現実にはしっかり家を守っている女性が、婦人としての鏡のように思われてきた伝統をもつ日本社会での婦人問題とでは、同じ「女性論・婦人問題」といっても、その課題は決して一様ではなく、各々の力点は大いに異なるに違いない。それと同時に、多くの一見異なる様相のもとにある問題も根本は、全く同じなのかも知れない。それではどのような面で異なり、どのような面は相通じる共通の課題なのであろうか。

ここでは、日本人の女性の生き方を模索していくうえで、心にとめて考えたらよいと思われるいくつかの点を、日本での日常生活において耳にする情報や意見を中心に取り上げ、そこに筆者自身が日頃考えていることも問題提起として付け加えておきたいと思う。

まず「女性性・男性性」という分け方の問題に触れよう。

フェミニストの多くは、そもそも女性性、男性性等と分けて考えること自体に、抵抗を示している。彼らは、男性、女性という区別はなく、男女は一つの性であると主張する。女性は全く男性と同じで、ただ生理的に多少違いがあるだけなのだという。そしてこのわずかな違いすらも実は教育とか環境によるものであるという。一頃、いわゆるユニ・セックスといわれる男女が同じような洋服を着ることが流行したが、このような流行も上記のような背景が大きく影響しているのであろう。このような考え方の土台には、今迄の社会において男性は女性を卑下してきた、差別してきた、同等の人間として扱わない男性中心の社会を築いてきたという抗議や非難がある。

これほどまでに、男性と女性とを同一視しなくとも、やはり今迄の男性中心の社会に対して、女性の真の価値を認めるように迫る女性たちの声や動きは日増しに強まってきている。このような流れのなかにあって、女性自身のみならず男性のほうからも、そのような問題の改善を目指す動きは活発化してきている。上記の「男女

雇用機会均等法」が多くの未解決の問題を含みながらもスタートしたことは、その一つの現われといえるであろう。

女性が社会で活躍できる場が広がってくるにつれ、女性は家庭のなかだけではなくさまざまな場で仕事を持ち、それによって自分の可能性を広げ、生きがいを感じることも多くなってきた。それと同時に今まで女性が守ってきた家庭というもの、具体的には家事や育児はどうなるのかが緊急の課題としてのしかかってきている。男性と同じように朝早くから夜まで会社で働いても、家事・育児は女性の仕事で、女性は疲れた体にむち打って家に帰ってもまた家庭の仕事をこなさなければならないのか。それとも、夫である男性と分業していく時代なのか。あるいは今までのように、外で働くのは男性、家で働くのは女性という固定的分業の考え方を根本的にあらためて、互いに相談してどちらを選ぶのかを自由に決めるのか。しかしたとえそのように話し合って互いの了解のもとに分業しても、社会の目が、社会のシステムがそのようになってはいない。それでは、両者が心置きなく、時間を気にすることもなく働けるような乳児のための施設とか保育所等さまざまな施設の設置が緊急の課題なのか。それもそうであろう。しかし、子供を育てるとか教育していくということは、そのようなことで解決する問題なのか。家庭というものそれ自体が一つの大切な生きていくうえでの場であって、そこにはゆったりとしたくつろぎ、団欒、手のこんだ心のこもった食事や衣服の用意、部屋のアレンジ、そのための多少の無駄などが必要なのではないか。それとも家事というものは要領よく片づけて、他のことのためにできるだけ時間をまわしたほうがよいほどに大した意味のないものなのか。

均等法時代にあってコース別人事制度が導入された企業では、意欲と能力が申し分ないと判定されて補助的業務を一切免除された女性たちが、新しい世界を見つけて生き生きと働いている姿を紹介されることも多くなった。この資格を得るためにも、男性はほとんどの場合無条件で取得できるのに対して、女性はさまざまな適性検査や能力テストはパスしなければならないという難関があるようだ。しかし、たとえそれを無事に通り抜けて総合職についたとしても、それで洋々とした世界が広

がっているわけではない。現在の日本企業の状況では、上記のさまざまな課題に加えて、会社の命令にしたがってどこへでも転勤しなければならない、深夜までも残業をこなさなければならない等々、主婦として母としての立場を無視しなければならないような状況が多々ある。それでは、男性である夫と女性である妻が社会に出て、自分の可能性を存分に発揮することにより、生きがいのある生活を送ろうとすることで、犠牲になるのは誰か。その答を、我々は日々の生活の中ですでに多く見てきた。　「鍵っ子」等と騒がれ、マスコミで大々的に取り上げられたのはもう遠い昔のことで、母親の就労があたり前のことのようになっている今ではその対象となっている子供たちの数も非常に多く、その問題の現れ方も複雑で表面に明確には現れにくい。

しかし、ひるがえって考えてみると、果たして”今の時代の男性のように”活動することが、あるいは”男性的に”振る舞うこと、すなわち”男性化すること”が、男女が平等であるということになるのかという問題も出てくる。男性のように大股で闊歩し、男性のように太い声でいかめしく演説し、男性のように．．．．ということが、女性の人間性を高めることになるのだろうか。女性が女性らしさをやめて”いわゆる男性”のようになろうとすることは、自らの手で女性の人間性を否定し、女性の尊厳を貶めることになるのではないだろうか。男性も女性も人間として平等であり、同じ価値があるが、それは同じセックスであることではなく、生得的な相違があるのではないか。その相違は大切なものであって決して抹殺されるべきものではなく、生かされてこそ女性の尊厳が保たれ、助長されるのであり、それによって社会も豊かになっていくのではないだろうかとも思う。

それでは、”女性性””男性性”とはどのような特質を指すのであろうか。

一般に学問の世界でも、日常生活においても、女性的なるものと男性的なるものを分けて考える傾向がある。よくあげられる特質を列挙してみると、大体次のようなものではないだろうか。

男性的なものというと、積極的、活動的で、対象に侵入していくような性格を持ち、革新的で、政治的であり、支配的である。自分の信念を守り、自立していて、

強い性格をもっている。また、知的、分析的で非常に思考的な特質をもつ。古典的なユンギアンは、女性的なるものと男性的なるものを分けて考えていて、男性的なものというときには、そこに、ロゴスとか、太陽とか、輝きとかといったような意味をもたせている。

女性的なものということで一般に上げられている特質としては、おとなしく、受動的で、従順であり、かわいらしい。詩的で、感情的で、人と共感できる心をもつ、優しい性格である。物事に忠実でもある。ユング派で女性的なものというとエロスとかかわっていて、月であり、何か漠然とした柔らかい感じというように考えられている。

”理知的な男性””気持の暖かい女性”像は、聞き古した男性像、女性像である。そして往々にしてこの像は、男女の人間性の優劣につながる価値判断となっている。「合理的な認識とそれに基づく行動は積極的かつ肯定的に評価されてきているが、感情や感覚に対してはそれほど重くみられなかったし、時には人間の理性を曇らせてしまう厄介なものという偏見があり、しかもそれが女性的と判断されてきているわけである」(1) と岡堂が述べていることに、現実の世界を眺めれば大した反論もないであろう。彼は次のようにも言っている。「女性の精神的特徴としてたびたび指摘されている受動性、服従性、気分易変性、知性欠如性などの心理は、普遍性をもった構造なのであろうか。あるいは女性の達成動機、何かを成し遂げようとする意欲は、男性に比べてはるかに弱いといわれるが、これまた女性にとって一般性のある真実であろうか。事実を言えば、高校卒業生のうち進学する女性は年ごとに増加し、男性を凌駕するほどであるし、大学における学業成績も悪くはない、しかし皮肉にもつねに女性は師の教えに従順だからよい成績を得るにすぎないのだと誤信されることが多い。この誤信は、女性より優位に立つと教えこまれてきた男性だけでなく、女性自身が自分の達成度を低くみつもっていることからも生じている。それに、卒業後の就職先に関する限り、エリート女性は別として、女子学生大衆にとって道はあいかわらず閉ざされている。彼女たちにとって明日はいつくるか、何になりうるかは、まさに見通しを立てることができないのだ。そこで生じた不安

やストレスから自分を守るために、いろいろな自我防衛の構造化がはじまる。いわば青年期固有のアイデンティティの危機が、若い女性をとらえてしまうのである。この危機は、若い女性だけにとどまらず、育児と家事に専念する女性はもちろん、中年から更年期の女性にも等級の低い二級市民ではないかといった疑念をもたせ、女性としての同一性と連続性の感覚を喪失させるほどの状態を招来することがありうるのだ」[2]

最近になって女性への職場の開放が法律的に多少進展したとはいえ、岡堂が指摘する上記の状況は今尚続いている。いや、むしろ今迄眠っていたような女性の意識も呼び起こされることが多くなってくると、ますますアイデンティティの危機は高じてきているようでもある。

単に、女性開放への動きに刺激されて、女性の意識が目覚めてきただけではない。日常の女性を取り巻く条件が、大きく変化してきているので、自己の存在意義を問わざるをえなくなってきているとも言える。

便利な食品の開発や電化製品の著しい発達・普及により家事にさほど時間を取られなくなり、住宅事情の悪化から掃除するべき部屋も手入れするべき庭も大してなくなってきた現代の日本の社会の中にあって、主婦は家事に振り回されることもなく日々の生活にゆとりをもつようになった。また、自分の生きがいとして没頭することを可能にしていた育児や子育ても、子供の数の減少から期間が短くなった。平均的結婚では子供たちは両親が４５歳までに青年期に達し、親から離れていくという。一方、寿命は著しく長くなり、子供たちが家庭を離れて自立し独自の道を歩み始めてからの、したがって母親が独り家に取り残されたような状態になってからの、女性の人生は長い。このような物理的、精神的なゆとりは、女性をして人生とは何か、生きがいとは何か、自分の人生は果たして意味のあるものなのか等の問いかけを自らにむけてする機会を多く生み出したといえる。その中にあって、女性は女性としての意識にあらためて目覚め、自己のアイデンティテイを問うことも多くなってきている。また一方においては、自分のまわりのおびただしい情報の氾濫、価値観の多様化に戸惑い、それらを吸収して自らのうちに統合していくよりは、翻弄

されてしまい不安になることも多い。

このようなさまざまな女性を取り巻く状況は、女性たちを、人生の種々の段階で、アイデンティティの危機にさらし、自己を見失いがちにさせるのである。

また現代では、別の意味で危機にさらされている女性たちもいることが報告されている。すなわち、徐々にではあるがいろいろな可能性が女性たちの前に開けてくると、自らの力で判断して選択し、責任を持って実行していくような、大人としての自立性を今までに育んで来なかった女性たちは、そのための心の準備ができていないために戸惑い、不安におののいてアイデンティティの危機に見舞われるということである。シンデレラ・コンプレックス[3] と呼ばれている心理状態がその一つである。自分の前に大きく開かれていきそうな可能性を前にしてたじろぎ、自立することを恐れて、他者に面倒を見てもらいたいという心理的依存に押えつけられてしまっているのである。

さて男女の特質の問題に戻るが、果たして前述のような男女の特質というものは普遍的なものであろうか。あるいは生得的なものであろうか。さまざまな分野で女性性・男性性というものが前提となって論議されていることが多いが、果たしてその前提の存在自体を吟味する必要はないのだろうか。

我々は、現実の生活の中で、非常に感情的に物事を処理する男性を見ることもあり、非常に論理的に筋の通った思考ができる女性を見ることもある。しかし、ここで述べている普遍性とは一般的な傾向であって、一握りの例外の人を対象としているわけではない。それでは、理性的な女性は女性の例外であろうか。日常生活において、男女の言動を見るかぎり前述の男女の特性は一般的に見られる傾向であるからこそ、そのような見方が定着したのだという見解をもつ人も多いだろう。しかし、Beauvoir,S[4] をはじめ多くの者が指摘しているように、その一般的な傾向は長い歴史のなかで形作られてきたものではないのか。我々は、小さい頃からたくましく強くするような遊びを男の子には進め、女の子には人の面倒を優しく見るような遊びをあてがってきたのではなかったか。男の子が転んで泣きそうになると、「男の子だもん、強い、強い」と励まして、歯を食いしばってでも泣かないように仕向

けてきたのではないか。小さいころの女の子は往々にして兄や弟より腕力も気も強いということがあるが、その女の子が兄弟をかばって友達に戦いを挑もうものなら、大人は、「女の子なのに、気が強くて困ると」嘆いたり、「女の子なのだからもっと優しくなりなさい」と声をかけたりしていたのではないか。同様のことは知的な面の強さ弱さについても言えるのではないか。男女が同等に教育を受けても、女性のほうが男性より知的に劣るというよりは、男性と女性とに期待・要求される知的能力の開発の程度が異なるが故のことではないか。理屈っぽい女性は疎まれ、人形のようにかわいい女性が好まれるということはまだまだ日常茶飯事である。女性の知的能力の開発に対する期待の薄さがその教育の機会の不均等をもたらし、その長い歴史が現在見られるような「論理的である男性」「非論理的で感情的である女性」の像をつくりだしたのではないのか。

次に示した余暇開発センターの調査結果[5]は、そのほんの一例に過ぎないが、今迄述べてきたような考え方を、ある程度裏付けるものであろう。

女子は何ごとも男子を立てるように教育された。

全サンプル	あてはまる	５４．０％（女性は57.1％）
	どちらとも言えない	２７．３
	あてはまらない	１８．７
女性の年代別肯定率	２０代	４２．６
	３０代	４８．３
	４０代	６８．２
	５０代	７２．０
	６０代	７７．８

成人になるまでに育った家庭では、女というものは良い家庭を作り、家事全般をしっかりやるべきものとされた。

全サンプル	あてはまる	７１．６（女性は74.1）

	どちらとも言えない	２１．２
	あてはまらない	７．２
女性の年代別肯定率	２０代	５５．１
	３０代	７２．６
	４０代	８４．０
	５０代	８６．２
	６０代	８９．６

年代別肯定率が、年が上がるにつれて上がっているところを見ると、だんだんと男性女性というもののとらえ方が変わってきていること、変わり得るものであることも読み取れる。

また、文化が異なれば男性像・女性像も変わるという事実も、この両者のいわゆる特質がかならずしも普遍的でないことを証明しているのではないか。

例えば、Meadはニューギニアの３種族について調査を行い、典型的な男性役割と女性役割は、種族間で相当の相違があったことを報告している。「アラペッシュ族では、男性も女性も同じように受身的で、”母性的”、協力的で、非暴力的であった。アラペッシュ族と地理的に近いムンガムール族では、男性も女性も同様に荒々しく、残酷で、攻撃的で、自己主張が強かった。３番目の種族チャンブリ族は、異なったパターンを示した。男性は受身的で、工芸品の製作に専念しているのに対し、女性は主張的で、菜園を耕し、生計を立てなければならなかった」[6] という。

男性、女性の特質の文化による違いは、ニューギニアの例を上げるまでもなく、身近にもその事例を見ることができる。我々はしばしば、西欧は男性的で、日本は女性的であるという意見を耳にする。河合隼雄もその一人である。彼は言う。「日本人の自我が欧米人のそれと比較して異なっていることは事実であると思われる。このような日本人の自我の特性を、象徴的に表現するものとして、筆者は日本の昔話が西洋の昔話と異なる点に注目し、西洋人の自我は『男性像』によって表すのが適切であるのに対して、日本人の自我は『女性像』によって表すのが適切であると

いう仮説を提唱してみた（『昔話と日本人の心』岩波書店）。これは大胆な主張である上に、象徴的な表現を用いて述べているので、一般には理解されないのではないかと危惧したが、わが国においては、思いのほかにひろく受けいれられ、嬉しく思ったのである」[7]　彼はまた『昔話と日本人の心』のなかで、昔話をの解釈して、次のようにも述べている。「男性のイメージをもって日本のカルチャーの中に入って来ようとする者は、まず殺されることが多い、なかなか受け入れてもらえない、ということです。これは男がどうの女がどうのということではなくて、日本のカルチャーというものが、男性的なはたらきに対して、それを排除する、あるいは殺してしまう、抑圧するというところが非常に強いのではないかと思うわけです」[8]

司馬遼太郎もドナルド・キーンとの対話の中で、「ひょっとすると、これは少し大胆すぎる言い方ですけれども、上代日本人は『ますらおぶり』というものを、中国言語を通して学んだのじゃないか。だから原形的には、日本人というのは『ためおやぶり』の民族じゃないか」[9] と述べている。

以上のような、見方、考え方を突き詰めていけば、西欧の女性は男性的で日本の男性は女性的であるということをも意味することになろう。事実、西欧の男性の場合は勿論のこと女性でも、その考え方感じ方に、日本人一般と比べてはるかに”いわゆる男性的”な傾向が見られるのに対し、日本においては、女性は勿論のこと男性にも、絶えずまわりの動きに心を使いながら、その場の空気で物事を処理していこうとする”いわゆる女性的”な感じがする言動が多い。河合の欧米における体験も、そのことを示唆している。「彼らと筆者とは同様のことを言っていながら、やはり女性といえども西洋では今までの伝統があるので、その『女性意識』の主張に男性的な感じがつきまとうのである。そのような点で、筆者の話はその提示の仕方そのものから『女性意識』のパターンに従っているので興味をもたれたのであろう」[10]

このように考えていくと、男性性・女性性というのはどう言うことなのか。これは単に異なった極があり、その両極を結ぶ線上にそれぞれの極と様々な度合いでつ

ながっているいろいろな性質があると考え方てはいけないのだろうか。たとえここで言う「男性・女性」ということは現実の男性・女性を意味するのではなく「男性性・女性性」という象徴として用いられているとはいえ、なぜわざわざ女性性、男性性という紛らわしい分類をして、種々の性質をむりやりにどちらかに押し込め、そのカテゴリーのなかで物事を判断していかなければならないのだろうか。そしてその無理な単純な分類分けが、表層しか受け取らない一般の社会のなかで独り歩きをして、男女の人間性の評価の不平等にまでつながっていくもととなっているのである。

とはいえ、筆者は男女それぞれに備わっているだろうと思われる大切な特質を否定するものではない。真の意味での女性、男性それぞれの特質は何であろうかと、その点に強くこだわる。

男性と異なる女性の身体の構造、そしてそこから来る生理的、機能的な相違は、子供を「身籠ること」そして「産むこと」であろう。女性の場合には、生涯の始めからさまざまな段階において、そのための準備がなされていく。そのための身体の成長に伴う、心の発達もある。そして時が満ちればそれが実現し、開花するのである。そして女性は、この過程を通して、心の飛躍的な発達を体験する。

このことを一言で要約すれば、『母性性』が開花していくということになるのであろう。そしてこの『母性性』の開花の過程は、ユンギアンが、リズムと周期の時間として満ちたりかけたりしながら自然を、生けるものを、支配していく「月時間」と対応させて考えているように、質的に等質ではない、異なった時間であって、時々刻々変化しつつ、その質を変えていくようなものなのであろう。この「受胎」「出産」の過程で、女性は自分の全存在をもって胎児とかかわり、捕らえられ、動かされることにより、人格の変貌を経験するのであろう。

そのような胎児とのかかわりによる変貌とともに、もう一つ女性が経験する貴重な体験は、ユング派の人々が月時間とあわせて説明する「受け入れる」ということと「待つ」ということである。自分のなかに芽ばえてくる命をそのまま受け入れ、己をそれと調和させていこうとする。そして時が満ちるまで、「じっと待つ」「待

ち通す」ということである。女性には、このことを、頭で理解するだけでなく、身体をもって理解する機会が与えられるのである。この”受け入れる”ということを、Neumann,E.も指摘しているように「単なる受身な従順さや、為されるがままと混同してはならない。母権的意識の自我が父権的意識の自我と比べて受身であるのは、活動的であることができないからではなく、自分がそこでは”為す”ことができず、ただ”任せる”ほかないある過程に身をゆだねていることを、よくわきまえているからにほかならない。女性的なものは、その存在のあらゆる決定的状況において、単に男性的でしかないものよりもはるかに多く、自然の聖性とその作用にゆだねられている、というよりその”掌中にある”。だからこそ、その自然と神性とに対する関係は、より親しく内密で、その無名の超人間的なものとの結びつきは、個々の男性との結びつきよりも以前からのものであり、影響されるところもより深いのである。（中略）妊娠も出産も、年余にわたる心構えとその切替えを要求し前提とするような、心身の総体にかかる変化を伴わずにはいない。生まれてくる子供がどんな性格なのか、男か女かーーこれらは母権文化にあっても父権文化にあってもきわめて重要な意味をもつことが多いーーはたして健康だろうか、どんな運命を負っているのか、こうして女性の気がかりの一切は、神の力と恩寵にゆだねるほかはない。そして自我は活動を休止し、介入をあきらめるほかない」[11] このような過程で体現される母権的意識の精神活動は「思いをめぐらし、考えを抱き暖めるといった活動で、推論や判断の持っている目的指向性を持っていない」[12]このような意識は「的を射抜いたり、ナイフのようによく切れる分析をこととしたりはしないのである。事実やデータよりも意味に関心を抱く。因果的・機械的あるいは因果論的であるよりも、有機的な成長にふさわしく目的論的な傾向を持つ」[13]という。

このほかにも女性としての特質はあるのだろうが、上記の特質ーーもちろんこれは男性にとっても重要なことではあるがーーは、身体的そしてそれに伴う心理的条件等から女性にこそ本来的なものであると思われる。これは現実の物理的受胎・出産を通して最も端的に実現されるのであろうが、女性は生来的にその可能性を与え

られているからこそ、その場に直面したときに、受け入れ、そして開花していかれるのではないかとも考えられる。そうであれば子供に恵まれない女性でも、本人の心の持ち方により開花させることも可能であろう。また、それは出産を経験した女性たちにとっても、実際に子供を身籠り、出産するときだけのことに限らず、生涯のあらゆる場で生かしていける、あるいは生かしていくべき特性であると考えられる。

そうであるなら、女性が社会で男性と同じように貢献していくということは、男性と女性が共有している種々の能力や性質ーーこのなかにはいわゆる男性的特質といわれるものの多くが含まれていると筆者は考えるのだが、そしていろいろな違いは個人個人の差であると考えているのだがーーを、十分活用することは言うまでもないが、この母性的な特質を大いに生かしていくことではないだろうか。

男性中心で動いてきた社会はなるほど人類に大きな進歩をもたらしてきた。しかし、その効率的・合理的な目的指向性がもたらしたひずみも否定することはできない。自分たちだけが甘い汁を吸っているようにフェミニスト達から非難を浴びせられている男性たちのどれだけが、実際に自分たちの人間性を開花させ、人生を謳歌しているのだろうかと思う。少なくとも日本の社会におけるかぎり、朝早くから夜遅くまで、身も心もすりへらして会社のために尽くしている男性達がいかに多いことかと思う。そしてこの直線的に突っ走っている社会においては、そこから抜け出すことは容易ではない。

もしここに、即座に反応が生じたりその働きがすぐに目に見える形になることを期待せず、もう少し「思いを巡らし」「考えを抱き暖め」るという要素が入り込んだら、もう少し、自分たちのおなかのなかから生まれた子供たちが、これから生きていく世の中には何が大切なのか、何が子供たちを真の意味でしあわせにするのかということを、母親的な感覚をもって追求していくゆとりがあれば、社会は地道な形で大きく変革されていくのではないかと思う。このことは単に男性と同じ雇用の機会を与えられ、男性と同じように転勤し、男性と同じように生産性を高めていくこと、そしてそれを可能にする保育所などの施設を増やし、男性にも家事を手伝っ

てもらうようにするといったこととは次元を異にする、もっと根本的な問題である。

事実やデータを生のまま出来るだけ有効に活用するというだけではなく、その事実の意味するところをじっくりとみて、思いをめぐらし、その思いや考えを暖めて醸造させるというのだろうか、あるいはじっと待ち、受け入れ、時間をかけて成熟させていくというのだろうか、あるいは全てのものをその全一性のうちに取り入れ、その取り入れたものをおのれともどもに変化させていくというのだろうか、そしてその結果考えられることを、人間の真のしあわせを約束する価値を基準として、実行に移していくというのだろうか。まだそのような社会が実現していないので、具体的にどのような社会なのかイメージに表したり、言葉化することは難しいが、このような取り組み方も大切にされるような、そのようなアプローチが頼りにされるような社会の構造を築きあげていくことが、これから必要とされているのであろうと思う。そして、そのような社会こそが男性も女性も人間として平等に尊重され、一人ひとりが、職場であれ、家庭であれ、その両方であれ、それぞれにあった場で生きがいをもって生活できる社会なのであろうと思う。

第２節　”宗教概念”の暫定的了解

宗教とは何か。日常生活の会話の中で頻繁に使われているこの”宗教”という概念について、正しく定義しようとするとなかなか容易ではない。そして、異なった社会、異なった文化の中に住む人々から出てくる回答は種々さまざまで、その考え方には大きな開きがあることだろう。同じ日本という社会、日本の文化伝統の中に住んでいる日本人の間でさえ、同一の”宗教”という言葉を使いながら、意味している内容は異なっているということも十分にありうる。

学問的分野における従来の研究成果を外観しても、宗教についての定義はおびた

だしい数に上っている。Brown,L.B.もこのことを取り上げ「我々は宗教についての唯一の理論を期待することはできない。精神分析のような一つの伝統のなかにおいてさえ、意見の違いがある。例えば、Freud, Jung, Melanie Klein, Ricoeurという深層心理学あるいは力学的心理学の代表者たちの間においてさえ意見の相違がある。そしてそれらの相違は、宗教心理学自身の根底にある宗教的仮説のうちに見いだすことができる」[14]と言っている。

岸本英夫はこれら多くの宗教の定義を大別すると、大体３つの類型に分けられるとして、次のように述べている。

「第１の類型に属する定義は、神の概念を中心として、宗教を規定しようとするものである。宗教学の創設者の一人であるティーレの『宗教とは、神と人との関係である』という古典的な定義は、その典型的なものである。神の概念は、多くの宗教の中に見出される。また、神をたてるほどの体系の中では、神の概念は、重要な役割を担っている。

しかし、それにもかかわらず、宗教の中には、神をたてないものがある。たとえば日本人の身近にある仏教は、その著しい例である。（中略）神をたてない宗教があるとすれば、神の概念を中心にして、宗教を規定することは、困難になる。

定義の第２の類型は、人間の情緒的経験の上に、宗教としての特徴を見出そうとするものである。神々しさ、清浄感、神聖感、畏敬の情などは、宗教体験に伴って現われてくる特徴的な情緒経験である。（中略）この特徴は、すべての宗教現象に、同じように含まれているということはできない。

さらに、これは、人間を、宗教的行動にかりたてる原動力でもない。むしろ、人間の宗教的ないとなみの結果としてあらわれる副産物的なものである。それゆえ、その情緒的な特徴は十分にみとめるとしても、それを手がかりとして、宗教を規定することが、必ずしも、適当とは考えられないのである。

これら２つの類型に対して、第３の類型がある。それは人間の生活活動を中心として、宗教を捉えようとする立場である。人間の生活活動の中で、宗教は、どのような役割をつとめているか、そこを視点において、宗教を規定しようとするもので

ある。（中略）本書の研究も、この第３の立場をとる。」[15]

上述の第３の立場にたって、岸本は研究にあたって、観察の対象とする宗教に、次のような、作業仮説的規定を与える。

「宗教とは、人間生活の究極的な意味をあきらかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりをもつと、人々によって信じられているいとなみを中心とした文化現象である。」[16]

岸本はこの「究極性」に関し「人間の問題の解決をはかるものは、宗教だけではない。科学も技術も、発明も発見も、政治も経済も、すべて、人間の問題の解決を目ざしている。文化のあらゆる面における人間の努力は、それを目的としている」しかし「宗教に較べると、他の文化体系の方法は、どれも、その解決が、相対的である。限界的な制約をもっている。（中略）宗教は、人間の問題という与えられた課題を『究極的』に解決しようとする。そこに、宗教の特徴的な性格があるといってよいであろう」[17]と説明している。

松本滋は、岸本の考え方の多くを取り入れ、彼の所論は明快で分かり易いものであるとしながらも、「究極性」の概念の説明としては奥行に欠けるうらみがないとは言えないとして、「『究極的』ということは、つきつめてゆくと人間主体の関わる対象の問題にまで関係してくる。岸本はそれをどこまでも人間の側、人間の生活活動の範囲内で意味づける立場をつらぬいたのである。先に述べたように、彼は定義の但書で神概念と神聖性の問題に触れている。[18]しかし、それらが究極的ということで特徴づけられる宗教といかに絡み合うのか、詳しい説明がないままに終っている」[19]という。

松本は、Tillich.P の、信仰とは人間が「究極的に関わっている状態」言いかえれば、「究極的関心」であるという所説にそって考察を進め、宗教を、「人間の究極的関心を表出し、かつ喚起するところの象徴の体系である」[20]と定義づける。このような「究極的関心」とは、「一方では『究極的な（無限・無制約的な）関心』であると同時に、他方では『究極的なるもの（無限者・絶対者）への関心』である。すなわち究極的関心という語は、信仰の主体的側面と客体的側面との両方を表

わすもの」[21]である。

このような究極的関心としての信仰は、その人の全人格、全存在をあげての営みであり、決してその一部分あるいは一機能だけの動きではない。また、真実の信仰においては、信じる対象が、本来有限なるもの究極的でないものを、究極性の地位にまで高められたものまでも含むようなものではない。「本来の究極的関心は、何を通して表わされるにせよ、究極的なるものへの関心」[22]なのである。

以上宗教に関する種々の概念を概観したあとで、本研究で対象とする”宗教”の作業仮説的規定を明確にしなければならない。ここで対象とする宗教は、仏教や神道、キリスト教やイスラム教といった特定の宗教ではない。大多数の日本人がもっていると思われる広い意味での宗教的意識である。日本の一般庶民の日常生活を観察すると、そこには岸本が分類している第１の類型も、第２の類型も、第３の類型もみな存在している、というよりは混在しているように思われる。それ故、どれか一つを選び出し、その定義に基づいて調査をすると、大切な部分を落としてしまう懸念がある。その意味では、主客一体の宗教概念を説くTillichi.P. の所説を土台として構築されている松本の宗教の定義はより適切かもしれない。しかし、初詣の人波を眺めていると、それら多くの人々のうち、どこまでが”全存在をあげて”宗教的営みにかけているのかに疑問がわく。また、稲荷神社での参拝者のうち、どれほどの者が”真に究極的なるもの”を拝しているのだろうかとも思う。

日本人の宗教意識を調査するにあたって規定する作業仮説は、調査の結果によってはより狭義なものになりうるとしても、スタートの段階では漠然としたあらゆるものを包み込むようなものでなければ、重要な要素が調査の網から漏れてしまう恐れがある。このような考えにたって、一般的な宗教の概念を捜し出すべく、広辞苑をひもとくと、宗教とは「神または何らかの超越的絶対者、あるいは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事。また、それらの連関的体系。云々」とある。この概念が本研究では一番妥当なものであろう。さらに平易に言えば、喜多川忠一が彼の著書の一節「日本人の宗教心」の中で述べている宗教心に関する叙述が、最も適切であろうと思われるので、ここに引用する。

「ここで宗教観と言わずに宗教心と言うのは、仏教とかキリスト教のような特定な宗教に対する信仰の有無強弱ということだけでなく、大多数の日本人がもっていると考えられるもっと広い意味での宗教的な意識、すなわちカミ・ホトケはもちろん、大自然とか天とかいった存在に対する日本人の感じ方、受け取り方、かかわり方を問題にしたいからである。もちろん日本人の宗教観、宗教心といえば、日本が生んだ数々のすぐれた宗教家の信仰や思想を無視するわけにはいかない。それらの人々の宗教思想は、日本人の宗教心を代表するものであるからである。しかしここでは一般庶民の宗教心を中心に考えていくことにする」[23]

このような暫定的了解のもとに、以下の研究を進めていくのであるが、特定の宗教に対する信仰ではないとはいえ、仏教や神道などの宗教が一般の日本人に与えている影響は大きく、これを無視することはできない。それぞれの宗教の教義等の深いところには入り込まないものの、一般庶民が日常生活で知っているような知識、経験しているような事柄に関しては取り入れていくつもりである。

また、序章で述べたとおり、日本人の宗教心を解明するためには、何らかの比較的なパースペクティブをもつことも大切なので、その意味で、”日本の宗教”について考える場合必ず引き合いに出される一神教の宗教のうち、キリスト教の所説も取り上げる。

第３節　”ライフサイクル・世代”のとらえ方

現代日本女性の生き方意識の特性を探究していくにあたって、考慮に入れたいくつかの点がある。それは、ライフサイクルや世代とのかかわり、および教育とのかかわりである。これらは宗教的意識や倫理的価値意識に、大きな影響を及ぼすものだと思われるからである。

そこで、本節ではライフサイクルや世代をめぐるさまざまな見解をとりあげて検

討する。

1．ライフサイクル

同一の人間であっても、生き方意識は、その個人が人生のどの発達段階にいるかにより、ずいぶん異なるのではないかと思われる。あるいは、またどの段階にあってもほとんど変わらないものもあるのかもしれない。もちろん個人個人がその時々に出会うさまざまな体験が、考え方や感じかたを大きく左右するであろうことは言うまでもない。しかし、生まれてから死ぬまでの過程において――旅としてとらえる人もいる――、人は個人個人によって際限なくさまざまな形で進むが、それにもかかわらず、そこには人間として共通な一定のパターンがあるのだろうというのがライフサイクルの考え方である。Levinson,D.J. は「その旅の途中で数々の影響力を受けて、それがその旅の内容を決める。途中で別のルートを取ることになったり、回り道をするはめになるかもしれない。予定よりいくらか足を速めたり、あるいはペースを落とすことになるかもしれない。場合によっては、完全に歩みを止めることさえあるかもしれない。だが、旅が続く限りは、一定の順序で進むのである」[24]という。

この人間のライフサイクルを四季のサイクルに重ねあわせて考えるとらえ方がある。Levinsonは続けて、次のようにこのライフサイクルの基本的な意味について説明している。

「人生は連続した一定不変の流れではない。質的に異なる季節から成り、それぞれの季節は独自の性格をもつ。ある季節はその前後の季節と共通点も多いが、まったく別個の存在である。各季節のもたらすイメージはさまざまである。一年という単位で見れば、春は開花のときであり、冬は枯死のときだが、冬はまた再生のとき、新しいサイクルの始まりのときでもある。一日も夜明け、正午、夕暮れ、深夜と分けられ、それぞれその日によって、雰囲気によって、また心理学的にも異なるひとときである。（中略）季節という言い方をするのは、ライフコースには一定の形があり、限界のはっきりした一連の段階を経て発展するということである。季節は

ライフサイクル全体から見れば比較的安定した時期を言う。夏は冬とは異なる性格をもち、たそがれどきは日の出どきとはまったく違う。だが季節が比較的安定していると言っても、動かないとか静止しているということではない。それぞれの季節のなかでも変化が進んでおり、ある季節から次の季節への移行には過渡期が必要である。どの季節のほうが良いとか、どの季節のほうが重要だというようなことはない。それぞれライフサイクルの中で大切な位置を占め、その独自の性格でライフサイクル全体に寄与している。過去と未来を結び、過去と未来の両方を包含して、ライフサイクルの有機的一部となっている。」[25]

松本滋は春夏秋冬の４段階とErikson,E.H.の人生８段階とを考えあわせて、春を幼少期、夏を青年期、秋を成人期、冬を老年期としている。もちろん若死にしても人生の秋まで経験し十分な実りを刈り取る人もいるということで、３０歳で夭折した吉田松陰が獄中で弟子や知人にあてて書いたものの一節「春種し、夏苗し、秋刈りし、冬蔵す」を引用している。さらに松本は、宗教のレベルでは、この世での生にとどまらないのではないかということで、冬の後に”再びめぐってくる　春”についても言及している。「現在の人間の普通の次元から見れば、生まれてから死ぬまでがライフサイクルである。しかし、宗教にもよるが、一般に宗教的な立場から言えば、生まれてから死ぬまででライフサイクルが終わるのではない。死んだ後どういう形になるかについては見方が分かれるにしても、死後の生命、永遠の生命、来世などの視点が入るとなると、この世のライフサイクルの考え方も違ったものとなってくる。つまり死は終わりではないということである。春夏秋冬の”冬”が来ても、それは近く新たな”春”がやって来るのを告げている、ということになるのである。その”春”を希求しつつ宗教的な人々はこの世を去ってゆくのである。死を新たな春の始まりと見る、つまり生命の永遠性・連続性に生きがいを見いだすという生き方が、宗教者の特色と言えよう。宗教心理学的には、そういう角度からライフステージやライフサイクルを見直さなければならない」[26]という。

松本は、彼の別の著書『宗教心理学』の中で、このライフサイクルにおけるそれぞれの段階の特徴を、先行研究を土台としてまとめている。ここでは、後に続く実

証研究との関係から、青年期についての記述を一部引用しておく。

青年期とは「大体下限は１２歳から１４歳位、上限は２０歳から２５歳位と言うことができる。（中略）したがって今のわが国について言えば、中学校入学前後から大学卒業前後までの年齢層、さらにはその後２、３年ないし数年、男女ともに結婚生活に入るまでの時期も含めて考えることが妥当であろう。

青年期の基本的特徴として、とくに挙げられるべきものは、種々のレベルにおける不均衡の状態である」「このようなアンバランスな状況におかれているため、青年はきわめて不安定な緊張と動揺に満ちた心理状況を特徴的に示す。それは形の上では、人生問題についての煩悶、伝統的権威に対する疑惑、文化的社会的体制への反抗などとなって現われる」「こうした青年期の一般的特徴は、宗教生活の面では、まず懐疑という形をとって現われる。青年期においては、幼少期における素朴無邪気な信仰心」が失われる。「幼い時は両親や権威ある目上の人の言うことを、素直に疑うことなく受け入れていたのに、青年期に入ると、いろいろな原因から、幼少期に与えられた宗教的観念や習慣に疑問を抱きはじめる。」[27]

Allport,G.W.も、未成年者の宗教に関する懐疑ついて「通常は思春期にさしかかってはじめて宗教情操の進化に重大な転換が起こる。発達のこの時期において青年は宗教的態度－実際あらゆる態度－を自己のパーソナリティに対するうけうり的な適合から第一義的なものへと変えられるように強いられる。もはや両親の考えに任せておけない。場合によりこの転換は円滑に気づかれないまますむことがあるが、よりしばしば反抗期があらわれる。

多くの研究が示すところでは、児童のほぼ３分の２において両親や文化の教えに対する反動が起きる。その半ば近くは１６歳を境として生じる。一般に女のほうが男よりもその時期が早いようである」と述べている。[28]

Fowler,J.W. の人間発達の心理と意味の探究としての”信仰の段階”の研究[29]は、数少ないこの方面での研究の１つであるので、その要約を載せておく。

「第１段階は”直観的・投影的信仰”として特徴づけられる。前概念的で前言語的信頼を包含している。それは空想に満ち、論理的思考に拘束されていないもので

、神は魔術的で人間の姿以前のものとしてとらえられている。７歳から１１歳の第２段階は、神話的散文的な信仰を包含している。そこでは神は人間の姿をしていて王者風だが、行動の意図を見分ける公平な立法者である。第３段階は、象徴的慣習的な信仰を包含している。それは広げられつつある社会的経験を一体化するアイデンティティあるいは見解に組み込む。この段階は青年期に発達するが、大人の大多数の宗教的姿勢を描写している。それは、自己感知を深めることによって、また自分自身の経験の相対性あるいは分散性を認識することによって変えられていく。第５段階である『逆説的で堅固にする信仰』は中年までは発展しない。”深い自己”の無法の声によって非常に個人的な神を構築するのである。第６番目で最後の”普遍化した信仰”は少数の例外的な人の人生に見いだされる。」

こうした春夏秋冬に例えられるようなライフサイクルは男性にも女性にもあるが、それぞれの性が各季節に含んでいる意味内容はかなり異なっていると思われる。ところが、今までのライフサイクルについての研究は、そのほとんどが男性の研究者による男性を対象とした研究であって、そこで扱われている人間とはすなわち男性のことである、つまりその人間とは男性の置き換えにすぎないのではないかという疑問が噴出してきている。女性の心理的発達も、同じ人間という面で男性のそれと共通するものもあるが、大きく異なっている部分があるにもかかわらず、男性を基準とした尺度をもって女性をも測り、しばしばその結果で女性の価値づけをもしているのではないかという懸念が続出している。

男性のライフサイクルの研究も有意義であることは言うまでもないが、女性論の章で扱ったように女性の場合は、学校を卒業してからの人生で、女性としての特性をもっとも深く体験することになるのである。すなわち「受胎」と「出産」を通して、健全な女性は飛躍的に成長するのである。これは男性が決して同じようには体験し得ないものである。また出産に続くその後も、中高年を迎える時期までに女性が経験する育児・子育て・子離れといった段階は、女性に限った経験ではないにしても、男性のそれとは大いに異なる。

このような意味から男性の心理発達イコール女性の心理発達と考えるのは、あま

りにも単純に過ぎ、誤解を招くもととなりやすいことは、男女の別はどのような意味からも全くないと断言する人達以外は、誰しも認めるところであろう。

Erikson,E.H.や Kohlberg,L.などが提示したライフサイクルの図式や道徳性の発達段階の理論等は男性による男性のための図式であるにもかかわらず、その物差しで女性をも測って判断をくだしているところに悲劇があるとして出版された" In a Different Voice:Psychological Theory and Women's Development"[30]が、反響を呼んだのも、いかに女性の側からの女性のための研究が必要とされているかを物語っている一つの表れであろう。もっともっと当然のこととして女性の発達心理の研究がなされ、実りある成果が待ち望まれている。

また、現在の日本の社会にあっては、女性が、学校卒業後にあらためて学んだり訓練を受けたり出来る場がほとんどない。もちろん男性にとっても十分な機会があるわけではなく、生涯教育のための環境整備が必要であるが、まだ男性は職業の場で直接的にも間接的にも多少の機会はある。ある意味では男性よりも長い期間にわたってラディカルな変化を続ける女性は、高校や大学卒業後も、その時々の段階に応じて自らを教育していける自己教育力を身に着けることが必要であることは言うまでもないが、社会的にも女性がその時々の変化や発達にともなって学んで行かれるような教育環境が整備、改善されなければならないと思う。このような、その時々の変化に応じ、発達に伴って、生涯学んでいかれるような状況や環境の改善・整備のためにも、真の意味での女性性、女性のライフサイクルの研究が急務であろうと思われる。

さらに、ライフサイクルについてもう一点考慮したいことは、春や夏の研究ばかりでなく秋や冬の研究も、今後より一層力を入れていくべきであるということである。

というのは、今迄の発達心理研究の状況からすると、新生児から児童期、青年期までの研究は比較的よくなされているが、それ以降の研究は、皆無ではないにしてもあまりなく、発達心理は青年期止まりという感が強いからである。　これにはいくつかの理由が上げられる。その一つは、子どもが発達して大人になるのであり、

大人になるまでは不安定で危機に満ちているが、大人になれば安定して発達はそこで止まるという考え方、また身体的な能力をはじめ計測可能な能力からすれば大人になって年をとるにつれて退歩することはあっても発達することはないとする見方である。さらに、精神分析理論による影響もある。精神分析にとっては１歳から６歳までの時期が中心的なステージで、人生に現れる諸問題は、その時期の解決によって色付けられるものなのである。彼らによれば、人生の動きは過去の繰り返しである未来に流されていくのであって、本当の新しさはないということになり、研究は大人になるまでの段階に集中し、特に幼児体験を重視している。その他の秋冬の研究が少ない理由としては、成人・老人の複雑さがあげられる。人間は幼ければ幼いほど、その人生経験も限られており、様々な意味で単純であるので、条件を統制したり、変数を孤立させることも可能であるが、年をとればとるほど経験も多様になり、心の動きも複雑になるので研究が難しいということである。

成人以降の人間の複雑さというものは、いつまでも残るものであり、それを計測可能にするためにあまりにも単純化することは、害こそあれ利するところはないと思うが、そのような複雑さを丸抱えにしながらの研究は、今後ぜひとも必要となるだろうと思われる。事実そのような傾向が見え始め、アメリカでは急激に盛んになりつつあるようである。

考え方としても、大人になるまでを「発達」としてとらえ、それ以後を単に衰退の過程としてとらえるのではなく、それぞれの段階にそれなりの「発達」があり、意味があるとする考え方もしだいに定着してきている。

また、単に原因－結果の連鎖で考える発達心理学ではなく、Jungのように人生における異なったアーキタイプを強調する考え方が、またあらためてブームを呼んでいる。特にJungは若い成人期から中年期への移行を人間にとっての本質的に重要な変り目ととらえている。ここで個人が直面するのは単なる外的世界への適応問題ではなく、新しい精神的価値に目覚めるという問題、すなわち自分の内的存在への適応の問題であると言う。

また一頃の、心理学を自然科学とし強調するあまり、計測可能な現象のみを取り

上げて人間を規定していく研究の仕方にも警鐘が発せられるようになってきて、発達のとらえ方も大きく変わってきている。

このような状況にあって、人生の春夏秋冬それぞれのかけがえのない味を見せてくれるようなライフサイクルの研究は、今後大きく期待されることになろう。

2．世代

前述のライフサイクルのところでは、個人の発達的変化は個人個人が遭遇するさまざまな個人的出来事が影響することは疑いえないにもかかわらず、そこには人間としての共通な一定のパターンがあるのだろうことを述べた。

ここでは、それに加えて”世代的・歴史的”影響についても考えてみたい。歴史的な出来事は、しばしば各コホートにそれぞれ異なる影響を与える。そのような特殊な体験の共有を基盤にして、世代が形作られる。歴史はこの世代を媒介にして、個人の発達に影響を与えるのである。井上忠司は世代について次のように説明している。

「世代とは、共通の歴史的状況のなかで、体験をともにし、なんらかの社会意識と行動様式を共有する、同時代者の群をいうのである。その課題領域は、社会の歴史と個人の生活史とをむすぶ接点にあって、時代の社会心理を反映し、表現する。裏をかえしていえば、世代を分析し、考察することによって、われわれは、時代の社会心理を浮き彫りにすることができるのである。」(31)

共通の歴史的状況のなかで、体験を共にした同時代の人々は、何らかの社会意識と行動様式を共有し、自分たちは世代が同じであることを実感する。つまりこれらの人々の間に、類似の世代感覚が芽ばえるのである。

日本の場合その世代感覚の基準となってきたものとしてよく耳にするのは、太平洋戦争への関わり方であろう。すなわち太平洋戦争からの距離により、「戦前派」「戦中派」「戦後派」の３つに区分され、さらに最近ではそれに「戦無派」が加わって、４つの世代として規定されている。このように、太平洋戦争とのかかわりと一言で表現しても、その意味するところは多様である。実際の戦争の残忍さ、恐ろ

しさ、惨めさ等の直接的な体験とどの年代のときに、どのようにかかわっていたかということだけではない。目には見えないが、もっともっと根深い大きな影響が存在する。戦前・戦中には、命をかけるほどに大切にされ、そのために国民がすべてを犠牲にして忍びに忍んできたその価値が、戦争が終わるやまったくの無に帰した、あるいは逆転したという事実を目の前にしたのは、どの年頃でどのようなかたちであったのか。あるいは昨日まで、信頼していた教師からこれが真実だと教えられていたその内容を、墨で抹殺するように支持された幼い児童たちの、教師への、大人への気持はどのような打撃を受けたのか。あるいは、多感な青年期に、信奉してきた皇国史観が全面的に誤りであったと言われた青年たちは、思想的にどのような影響を受けたのか。さらに、異なった観点から見れば、現代のように情報過多の時代に青年期を送っている者たちと、量的にも内容的にも情報過少の時代に青年期を過ごした者たちとは、考え方においてどのような違いがあるのか、等々。

また太平洋戦争に限らず、戦争の体験があるかないかと言う基準から、世代の区分をすることもできる。人生の前半を戦争とのかかわりのうちに生活した者と、まったく戦争自身をそして戦後の苦しさをも体験したこともない者たちとが、共存している現在の日本の社会である。満州事変、日中戦争、そして太平洋戦争へと軍国主義が急速に力を増し、狂ったように吹き荒れ、日本を破滅へ追いやった時代に感受性の強い少年時代から青年時代を送った者もいれば、そのある部分を共有する者もおり、さらには戦争というものーー日本が直接巻き込まれているーーをまったく知らない世代もあるのである。これらの世代が、それぞれ異なる見解、感覚を持つのは当然であろう。

また井上は、”戦争からの距離”という基準にとってかわって、国民的な規模で、目下われわれの世代感覚を最も大きく規定している状況として、いわゆる高度経済成長によってもたらされた”大衆化状況”をあげている。「国民ひとりひとりが、それをどのような発達段階でむかえたか、にかかっているのである。『大衆化状況とのかかわり』という基準こそ、１９６０年代以降の世代感覚を解くカギである、といわなければならない」[32]という。「１９６０年代における１０年間の、わ

が国の激変ぶりは、過去の数世紀にも等しいものがある。いわゆる高度経済成長は、人々の生活様式を、それ以前と以後とで、すっかり変えてしまった。

生活文化に関するかぎり、農・山、漁村のすみずみにいたるまで、都市化の現象がゆきわたり地域差はおおはばに減少した。学校教育の普及と、交通・通信技術やマス・メディアのめざましい発達によって、文化の平準化はしだいに助長され、定着していった。職住分離もすすんで、各家庭はおしなべてサラリーマン化し、階層差の意識もへって、国民の９割までもが”中流”を自認するほどである。このような文化の平準化現象をかりに『大衆化』とよぶなら、現在は大衆化状況の成熟期にある、ということができるであろう。（中略）大衆化状況の成熟にともなって、国民的な規模で、人びとの価値観は変わっていった。消費は、かつての”悪徳”から”美徳”へとかわり、人びとのモラルも、”禁欲”のモラルから”欲望”のモラルへとうつった。公的な価値が下落して、かわって私生活を重視する傾向がつよまった。こうして価値観の変化は、世代の断層をうみださざるをえない。大衆化状況へのかかわり方が、世代感覚の基準となったゆえんである。

くしくも１９６９年にはマスコミ界において、『断絶の時代』ということばが流行した。折から吹き荒れていた大学紛争をめぐって、Ｐ．Ｆ．ドラッカーの『断絶の時代』にかこつけて、”世代の断絶”がしきりに取り沙汰されたものである。当時の社会の変動ぶりは、世代の”断絶”をしいるほどに、はげしかったといえよう」[33]と、大衆化状況について説明している。

しかし今日においては、もはやこのような大きなスパンで世代をとらえることができるのだろうかという疑問も出てきている。状況の変化のあまりの速さに「十年一昔」どころか「一年一昔」の感さえある。特に若者たちの間では、２、３年下の者たちともジェネレーション　ギャップを感じるらしいことは、筆者も学生たちと話していてよく感じることである。われわれがこれまで抱いていたような世代の枠組では、解釈し切れないほど社会は複雑となり、またその変化の動きは速い。何もかもあらゆる現象を、世代の枠組と結びつけて判断することは危険であろう。世代論の限界と、世代を越える連続性に留意しながら、それぞれの世代が共有する感覚

をみていく必要がある。

一方、日本人はその世代世代が体験した貴重なしかし痛みのある経験を、いともあっさりと葬ってしまうようなところもある。あるいは、あまりの辛さにその痛みから目をそらしたいのかもしれない。過去の過ちを心に止めて、同じ轍を踏まないように、自分たちが学んだことをはっきりと次の世代に表明するというよりも、過去の歴史を美化してしまう傾向があるとも言われる。人間は誰でも過去の過ちを見たくなく、美化したいものだが、「歴史への批判、時代への批判の弱い日本では、歴史美化の傾向が強い」[34]と隅谷三喜男は警告を発している。

これに関連して、山本七平が述べていることは大変意味深いことであると思うので、ここに一部引用しておく。

「．．．．終戦の年の２学期になると教科書を墨で塗った。いわば『現在』に不都合なことは墨で抹殺をしたわけです。この抹殺をするということは、わからなくなるということですが、本当をいいますと歴史というものはそれを絶対にしてはならないのでありまして、あるものをそのままにしておく。そのあとに、ただしこの点はここがまちがっていると、そういう注解を書いていくことがじつは人間が過去を正確に知る方法であります。

この際、本文と注解とは絶対に混合させてはなりません。もちろんその注解も、戦後３０年たってみれば間違いということになるかもしれない。人間の、ある一時点の思想または考え方が永久に正しいとはいえなのでありまして、絶えず新しく注解を加えて行くのが当然なのです。（中略）こうやっていきますと、人間というのははじめて自分の過去というものを正確につかむことができまして、同時にこれの延長線上に自分の未来を予測することができるわけです。

われわれはそういう行き方を致しません。明治のときにも、日本人が『われわれには歴史はない。われわれの歴史はこれからはじまるのだ』と言うので外人教師が驚いたという記録があります。これもまたその昔のこといわば徳川時代のことは全部墨で塗って消してしまうという態度であって、われわれは常にこういう発想をするわけであります。（中略）墨で塗って消してしまうということは、考えようによ

りましては、環境の変化にいちばん適合できる生き方であります。いわば『思想の衣がえ』のようなことですが、しかし、これをしますと、逆に、わからなくなった過去に呪縛されるような形になり、自己の内実は無意識の無変化を持続するという形になります。

と申しますのは、教科書は墨で消しても、教えられたことは人びとの心に残りますので、その人たちは、自分の基本的発想が何に由来するかがわからなくなりますので、逆に、それから脱却できなくなるわけです。」(35)

このように考えていくと、日本人の場合の世代感覚は、言葉に表現できるような意識のうえのことより、本人もしかとつかめないような無意識的なものが多く、その世代が体験した歴史的なできごとを生かしていけるような世代間の話し合いなども難しいのかもしれない。

第４節　”真の教育”が意味するもの

人の成長発達には、その人がどの国に生まれ、育ち、どの世代に生きているのか、個人としての日常生活においてどのようなできごとに遭遇するのかなどが大きく影響する。人間形成にそのような大きな影響を与える作用の一つとして「教育」の果たす役割も無視できない。「教育」と一口に言っても無意図的なものもあれば、意図的で計画的な人間形成としての教育もある。そして、現代の社会のなかで後者のカテゴリーに属するものとして代表的なものは、学校という形態のなかで行われる教育であろう。この現代の日本の学校のように、一時に大勢の人を長時間手もとにおいて教え指導するような教育が及ぼす、人間形成への影響ははかり知れないものがある。その国の国民であると言うことで、その国のイデオロギーや目標を植えつけていくために『学校教育」が利用されることもままあると言う事実は、その影響力の大きさを如実に物語っている。

このような学校教育の持つ機能から、現代の多くの国においては、前の世代から、今の世代へ、そして次の世代へと文化を順次伝達していくために、学校教育が大いに利用されている。本研究で取り扱う価値観の伝達に関しても、学校教育の果す役割は大きいと思われる。「学校とは、まさに世代間（教師－生徒）の相互行為の場であり、しかも教師から生徒への価値伝達という流れを動因としていることを思えば、教育側の価値規範が拡散しつつあるいまの状況が、次世代の精神形成に与える影響は想像以上に大きなものがあろう」[36]と加藤潤は言う。

ところで、この伝達とは一体どういうことであろうか。Spranger,E. が言うように、単に伝達しようとするものの「引渡しや詰込みや意識の権威的な型造り以外には何も知らぬということ」であれば誤りであり、不幸であろう。「全くの伝承にとっては自己の意味付与行為の顕現が問題にされている」のである。「教育は伝達しなければならない。だが、それ以上に『意味付与行為の産出』」が求められているのである。もう少し平易な言葉に置き換えると、数学の定理などを、表面的な意味でことばを知り、それを暗記させるだけでは十分ではなく、「理解」させなければならないということである。ところが、ここで考えられている「意味理解」は決して強制することはできず、自分から、心のうちからそれをなし遂げなければならない類のものである。したがって教育者にできることは「引き出すこと、取り出すこと、光をあてること」だけである。

この教育に対する考え方は、前述のような数学の定理の理解もさることながら、宗教的価値や生き方にかかわる価値の理解に関して、ますますもって言えることではないかと思われる。Sprangerは上記の産出援助を「覚醒」の概念と同一視して論を進めており、Bollnow,O.F.によれば、「Sprangerが覚醒と言う概念をそのためにこそ教育学の根本概念として導入した決定的問題は、＜道徳教育＞の問題なのである。道徳的といいうるのは、人間がいっさい外部から強制されずに自分の自由な決断で決心するところの振舞いだけ」[37]なのである。この、自由な道徳的決断のもっとも内なる段階を、Sprangerは『良心』と言う語で言い表わしているのであるが、それは今日でもなお広く流布している、良心とはもともと外部からまた社会から人

間に課せられた要請の「内面化以外の何ものでもない」とみなす理論を拒否するものである。なぜなら「良心が実際にそのようなものにすぎないとするならば、良心が当の人間がその中で生きているところの支配的な道徳の要請に<逆らって>でもみずからの態度をとるように人間に促すことは、不可能であるはずで」「人間が良心の声にしたがって支配的な道徳に反抗して自分自身の生命を賭けるというまさにその場合に、断固として決起することは不可能だろう」からである。「良心の中に、その絶対的性格において他のあらゆる生から抜きんでている、端的に要求するあるものが経験される」(38)のである。

それでは、どのようにして教育者はこうした自由な振る舞いを外部から来る影響によってつくり出せるのであろうか。また、どのようにしてその振る舞いを自分に正しいと思われる方向へ導くことができるのだろうか。ここにこそ、本来の意味における「覚醒」の現象が始まるのである。すなわち、良心はだれにも植えつけることはできず、また良心を「形成する」こともできず、ただそれを目覚ますことができるだけである。しかも、目覚ますことは、教育においてされなければならないのである。Sprangerは教育をただ成長に委ねることとは見ていない。「精神はひとりでに内的合法則性にしたがって発展するのではなくて、まずもって目覚まされなくてはならない」(39)という。しかし、それは一時に成されるはずのものではなく、潜在的なかたちでは以前から存在しているが、その年齢に応じて徐々に目覚めてきているものへの、時宜に適った覚醒作用でなければならない。もちろんこの覚醒は特別の教育的意図なしにいつか起こる外的な出来事によって生じる場合もあるが、必ずしもその出来事が適切な時期に生じるとは限らず、全く生じないで終わることもありうる。この起こるか起こらないかわからない偶然のみに、その覚醒をゆだねきることは出来ないとすれば、教育者の果たすべき役割は非常に大きい。

このように考えていくと、学校教育における価値の教育の影響ははかり知れないものがあるとは言え、それが真の意味での自由への教育となるほどに影響があるものとなっているかは、単なる引渡しや詰め込み押し付けによる伝達に終わらずに、真の理解につながる覚醒としての教育であるかどうかにかかっているといえよう。

（１）岡堂哲雄　１９７７　現代女性の精神構造　現代のエスプリ，１１７，
p.７
（２）岡堂哲雄　前掲書　p.６
（３）Dowling,C.　１９８１　The Cinderella Complex - Women's Hidden Fear
of Independence -　Summit Books.
ダウリング　C.　柳瀬尚紀（訳）　１９８５
シンデレラ・コンプレックス　三笠書房
（４）Beauvoir,S.　Le Deuxième Sexe
ボーヴォワール　S.　生島遼一（訳）　１９６６　第２の性　人文書院
（５）余暇開発センター　１９７８　人間と社会に関する総合研究IV
－現代日本社会研究－　pp.　１４２－１４３
（６）Jourard,S.M. & Landsman,T.　１９８０　Healthy Personality
-An Approach from the Viewpoint of Humanistic Psychology-
Macmillan Publishing.　p.２５６
（７）河合隼雄　１９８４　日本人とアイデンティティ　創元社　pp.６－７
（８）河合隼雄　１９８２　昔話と日本人の心　岩波書店　p.６３
（９）司馬遼太郎・キーン　D.　１９８４　日本人と日本文化　中央公論社
p.２７
（１０）河合隼雄　１９８４　日本人とアイデンティティ　創元社　p.１１
（１１）Neumann,E.　１９５３　Zur Psychologie des Weiblichen.
Rascher & Cie.
ノイマン　E.　松代洋一・鎌田輝男（訳）　１９８０　女性の深層
紀国屋書店　p.１１６－１１７
（１２）Neumann,E.　前掲書　p.１１８－１１９
（１３）Neumann,E.　前掲書　p.１１９
（１４）Brown,L.B.　１９８７　The Psychology of Religious Belief.
Academic Press.　p.９６

（１５）岸本英夫　１９６１　宗教学　大明堂　pp.１４－１６

（１６）岸本英夫　前掲書　p.１７

（１７）岸本英夫　前掲書　pp. ２９－３０

（１８）岸本は宗教の作業仮説的規定のあとに、「宗教には、そのいとなみとの関連において、神観念や神聖性を伴う場合が多い」という但書をつけ加えている。

（１９）松本滋　１９７９　宗教心理学　東京大学出版会　pp.３８－３９

（２０）松本滋　前掲書　p.４２

（２１）松本滋　前掲書　p.１３４

（２２）松本滋　前掲書　p.４２

（２３）喜多川忠一　１９８３　日本人を考える－国民性の伝統と形成－
日本放送出版協会　p.６６

（２４）Levinson,D.J. １９７８　The Seasons of a Man's Life.
The Sterling Lord Agency,Inc.
レビンソン D.J.　南博（訳）　人生の四季　１９８０　講談社
p.２０

（２５）Levinson,D.J. 前掲書　pp.２０－２１

（２６）松本滋　１９８９　宗教とライフサイクル
カスタニエダ　H.／長島正（編）　ライフサイクルと人間の意識
金子書房　pp.２６９－２７０

（２７）松本滋　１９７９　宗教心理学　東京大学出版会　pp.９２－９４

（２８）Allport,G.W.　１９５１　The Individual and His Religion
- A Psychological Interpretation-　Constable and Co.
オルポート　G.W.　原谷達夫（訳）　１９５３　個人と宗教
岩波書店　pp. ３５－３６

（２９）Fowler,J.W. １９８１　Stages of Faith: The Psychology of Human Development and the Quest for Meaning.　Harper & Row.

（３０）Gilligan,C. １９８２ In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development. Harvard University Press.
ギリガン C. 岩男寿美子（監訳）生田久美子・並木美智子（共訳）１９８６ 川島書店

（３１）井上忠司 １９８６ 世代の社会心理
間場寿一（編） 社会心理学を学ぶ人のために 世界思想社 p.１５０

（３２）井上忠一 前掲書 p.１５４

（３３）井上忠一 前掲書 pp. １５４－１５６

（３４）隅谷三喜男 １９９１ 時の流れを見すえて 岩波書店 p.１３

（３５）山本七平 １９７８ 日本人の人生観 講談社 pp.４２－４４

（３６）加藤十八 １９９１ 教育制度と日本の教育体制
酒向健・高森充（編） 教育と社会・制度・経営を学ぶ 福村出版 p.７６

（３７）Bollnow,O.F. １９７６ Erziehung zur Frage.
森田孝／大塚恵一（訳編）１９７８ 問いへの教育－哲学的人間学の道－ 川島書店 p.６３

（３８）Bollnow,O.F. 前掲書 p.６４

（３９）Bollnow,O.F. 前掲書 p.６０

第３章　宗教的意識や心情

第１節　神の概念

宗教についての考察ではまずその核となる”神”の存在が云々されるが、たとえその神の存在を肯定しても、この神という言葉の意味する内容は人により、宗教によって異なることは日々の生活のなかでも感じられることであり、宗教について論じる場合に論議を呼ぶ点でもある。それゆえこの問題は非常に難解ではあるが、日本人の宗教的意識や心情の特性を探究するにあたっては、避けて通ることはできない課題であろう。

一般にこの神のとらえ方は、風土や国民性と深くかかわっていると言われる。和辻哲郎の言う砂漠的風土とモンスーン的風土の対比は有名であり、そこから出てくる神概念とパラレルな見解が論文や書物となって多く出まわっているが、果たしてそのとらえが現在の日本にも妥当なのかは甚だ疑問である。

以上のような問題意識をもって、この章では”神”概念に関する種々の見解を整理し、問題となる点を洗い出してみたいと思っている。

１．唯一絶対の神と八百万の神々

神は唯一絶対であるという考え方と、種々様々な神々が存在するという考え方とは、神の超越性が意味することとも関わる本質的な問題のように思われる。

神が唯一絶対であるという場合、これは神の二通りの超越姓を示すものである。神はその”存在”と”完全性”のゆえにあらゆる他の存在から完全に独立し、超越している。神の本質は存在であり、したがって神は全面的に必然的存在である。これに反して神以外のものは偶然のものであって、その存在は全面的に神に依存して

いる。また、神は絶対的に完全なものであり、その属性は無制限で、その完全性には限界がない。神は全能、全善、全知であって、その聖性も限りがない。このような神の絶対性から複数の神々の存在はありえず、したがって神は唯一である。

このような考え方とは対照的に、種々様々な神々の存在を認める立場がある。このような見方の場合、神をどのようにとらえるかにより神々の属性等にも著しい差異が出てくる。

一般的に、前者の神を信じる宗教はユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの遊牧文化型の流れを汲むものであり、後者の神々を信じる宗教はヒンドゥー教、仏教、道教、あるいはユーラシア大陸に多く見られる古代宗教などの農耕文化型の流れに属するものであるといわれている。

一神教にしてもその内容は一律ではないが、多神教の場合その神々をどうとらえるかには無数の見解があると言えよう。その様々なケースを並列していくと考え方に矛盾が出てきたり、詳細な注をたくさんほどこさないと混乱してくることにもなるが、同一人物が全てを信じているわけでもなく、またこの点を特に強調したいが、理論的には一見矛盾していると思えることを日常生活においては深く考えることもなく信じているケースが非常に多いという予備調査結果から、あえて特に整理することをしないで、一般の日本人の日常生活の中に見られる神の数とそれに伴う様々な神概念を並べあげてみたいと思う。

唯一絶対の神概念は前述のような意味合いをもつので、他のものを”神”ととらえることはその性質上不可能であるが、他の見解に対する態度には、いくつかの違いが見られる。

その一つは唯一絶対の神を奉じてこれ以外の神を信じることを固く禁じ、他の神々と呼ばれるものを拒絶、あるいは絶滅していこうとする立場である。

これは一見最も厳しくこの立場を堅持してるようであるが「対立の立場を絶つのが絶対」であり、「対立の地平のうえで一方を絶対化するというのはほんとうの絶対ではなく、むしろ絶対主義とでも言うべきもの」で「きわめて相対的」であるという考え方もある。この立場によると「絶対性こそ宗教の基本性格であるが、それ

は文字どおり『対立を絶する』ことであり、対立の地平そのものを越えて、対立するものを自己のうちに包むことである」という。この場合絶対性は「いっさいの対立を無くして包むのではなく、対立のすがたを生かしたままで包むのである」[1]

この唯一絶対の神を信じる立場と、多神教の立場との中間に位するものとして、次の立場が上げられる。それは唯一の最高者の観念をもっているが、それは我々の認識を越えるものであるから、目に見える世界のなかにその神の顕現を認めそれを崇拝する立場である。その崇拝の対象が太陽、大地、月、雨などとともにある神の力であるのか、あるいは太陽などの形をとって現われた神々として多神教的に崇拝するのか、ここにもとらえ方の違いがある。

またさらに汎神論では、この世界は唯一の絶対的な実在としての神の有限な様態の総和に過ぎないとみて、一切は神であり、神と世界は一体のものとする。

日本は多神教の世界であるというのが一般に広く認められているところである。日本人ほど寛容にどの神々も受け入れる民族も珍しいとまで言わている。しかし、多神教と一言で言ってもその意味するところはさまざまである。神という同じ言葉で言い表わされ得る共通の概念は何か、如何なる属性までが神のものとして許容されうるのかなどなど、触り始めたら足もとをすくわれるような泥沼の世界である。

河合隼雄はその著書のなかで宮川透、坂部恵、中村雄二郎らの、日本には「超越者が不在であるということは」「直ちに、超越性が不在であるということにはなるまい」「いろいろな超越性があり」「垂直でない、水平の超越性」もあるという意見を取り上げ、さらに日本においては相対化の働きが著しいと述べている。[2] 八百万の神々が等しく神と呼ばれうる共通の基盤はその”水平の超越性”にあるのではないだろうか。唯一絶対の神の超越性は絶対的なものであるのに対し、八百万の神々のそれは相対的であるということであろう。

関根文之助は「やまとごころ」の三つの特色の一つに神々しい心をあげる。「もったいないという気持ち、拝みたいという気持ち」「すなわち一種の神聖観」であり「日本人が山川草木に神霊を認めるというのもこの神々しい心である」[3] という。山そのものをご神体とする伝統は、今も残っている。ここには明らかに山や森

林に対する畏敬・畏怖の心情が伺われる。また、日本の古代人は太陽をもって日の神とし、朝な夕な東天にのぼる日を拝み、それを拝むことを非常な光栄と感じた。そうした気持や習慣は今日なお続いており、高い山に登ってご来光を仰ぎ、のぼる太陽にたいして手を合わせ、柏手を打つ。そしてそれはそのまま日本の姿であり「神聖」そのものの姿なのだという感覚は強い。「神」という言葉の語源に関しては諸説があるが、そのなかに「かび」つまり「日」から出た言葉であるという説があるが一理あるように思われる。(4)

また、「かくりみ」という言葉の首尾の２語をとって、「神」といったという説もある。「隠身」とは「生きている人間の目には見えないからだ」ということで、我々がいわゆる生きているというのは「現身」として、「現世」にあるわけであるが、「息往」んで後は「隠身」として「隠世」にあると考えるわけである。しかしその「隠世」は、実際には「現世」にあるのであるから、ただ目に見えないということだけである。(5) 日本の八百万の神々とはこうした意味から来ているものが多く、こうした神観念は古代のみならず現代に至るまで生き続けている。そして子孫たちは、現世にあってはその親に仕えるように、祖先にたいしても同じ思いで祭る、すなわち仕えまつるのである。

さきだった祖先の霊は何回か忌を経て、霊はしだいに個性を失い昇華されてゆき、ついには他の自然霊と同様に神として祭られるに至るという説もある。(6) この場合こういう祖先があって今日の自分があるという考えが出てくる。このような集団儀礼的要素を日本の宗教は強くもっているようである。日本人は「神」と「仏」とを厳密に区別してものを言おうとしない。むしろ「神も仏も」というように並列して考える傾向があるが、一般日本人は死人のことをよく「仏」と称するのもこのあたりと関係があろう。

また家・村・郷土・国家など一つの結合組織にとって功労のあった人を神として祭るのも古来からの通例である。

以上のような神人同一の神観念は、神と人との間にギャップがないばかりでなく、人は霊を媒介に神に連なり、神として祭られることにもなる。

このような考えを推し進めていくとそのような考えの行き着くところとして、悪人であろうと死ねば仏になり、時には極悪人と思われていた人が非凡な霊的存在と考えられ、殺人者や盗賊などの犯罪者の霊を祭るとか、その墓参者が絶えないとか言う奇妙な現象も起こる場合がある。

日本の神々の発生を見ていくとき、そにに見られる原則はユティリティー原則であろうという説もある。[7] 守護神信仰がその顕著な例で、前述のような家の先祖、地域の鎮守、氏神、などそれぞれの集団はそれぞれの集団として守護神をもっている。その守護神が最も包括的に生活を保護してくれる役に立つもので、その守護神が十分に力を発揮しえないような新しい事態に立ち入ると、そこに神々の専門化が起こってくるが、それは守護神と別に矛盾しない。守護神の機能の分化であって、守護神ときわめて調和的に併存する重層的構造になっている。これは明らかに唯一絶対の神の超越性とは異なっている。超越的な力の存在を信じていると同時にまたその力に方向づけを与えたいという呪術的傾向もそのなかにはある。

人間の霊が神に連なるだけでなく八百万の神々のなかには動物も存在する。稲荷神社のきつねはそのよい例であろう。きつねを神自身と見るか神のお使いと見るかは拝んでいる人によって異なっているようであるが、近代建築の一角に神社があり新鮮な「油あげ」が供えられているのを我々は日頃よく目にする。またおおいに疫病を流行させて人民を苦しめたという、蛇に化身する神を祭っている神社もある。[8] このような場合はその神に保護を望み、自分たちの願いを適えてもらうというよりは災厄をもたらす古い「たたり神」に対する畏怖の念が土台になっていると思われる。

山姥を殺してからそのたたりを恐れて、社を建て産土神として祭るというのさえある。[9] このような場合は、人を食べるとされていることの多い山姥が死んでからは肯定的な存在それも神として祭られることになるのである。

また、民衆レベルの日本人の宗教の根底の一つを成すものとして、教祖や教主などのカリスマ的人格が、生き神さまとして祭られているという傾向も見逃せない。昔から日本人が維持してきた「人が神になる」「霊が神になる」あるいは「人神」

の理念が信徒をして教祖や会長を神たらしめ、それをまた教団が自己成長のために活用していく風潮が近年特に強く見られることはマスコミなどでよく報道されている一つの現実である。

結局のところ汎神論ではないかと思われ見方もある。お寺の仏像から路傍の草花、そしてまた山河大地一切がみな等しく礼拝の対象となっており、それらは皆「仏」であり「神」であって－あるいはその顕現であって－八百万の神々への信仰といった様相を呈しているのである。

現象界に絶対的意義を認めようとするこの思惟方法について中村元は次のように述べている。「日本人は一般に『お水』『お茶』というように種々の事物に『御』という敬称をつける。事物につねに敬語を付して日常会話をしている民族は、おそらくほかにはないであろう。ところが日本人たちのあいだにあっては、さほど奇異な感じを与えない。これを単なる敬称と見なすことは困難である。むしろ、いかなる事物にも神聖性と存在意義を認めようとする思惟方法がはたらいているのであると考えられる。西洋人の批評によると、日本人にとっては"Everything is Buddha"なのである。」(10)中村の考えによれば、「日本人の思惟方法のうち、かなり基本的なものとして目立つのは、生きるために与えられている環境世界ないし客観的諸条件ををそのまま肯定してしまうことである。諸事象の存する現象世界をそのまま絶対者と見なし、現象を離れた境地に絶対者を認めよとする立場を拒否するにいたる傾きがある」(11)のである。

神の数を問題とした実証研究としては、世界１３ヵ国を対象に余暇開発センターが調査企画・分析し、ギャラップ・インターナショナルが実施した『１３ヵ国価値観調査』(12)がある。

ここではその１３ヵ国のうち、本調査に直接関係のある日本とイギリス、また日本がさまざまな形で追随していると思われるアメリカ、そして隣国韓国を取り上げ、今迄述べてきた内容とかかわりがあると思われる項目を抜き出して、Ｔａｂｌｅ３・１・１ａ「神の存在と数」にまとめてみた。

Ｔａｂｌｅ　３・１・１ａ「神の存在と数」

（余暇開発センターの資料より）

数字は％

	日本	英国	韓国	米国
神は存在する	77.3	83.6	81.0	95.4
この世にはただ１つの絶対の神が存在する	7.8	57.2	26.4	76.1
この世にはたくさんの神が存在する	14.5	4.7	3.5	2.4
はっきりわからないが神は存在在するような気がする	55.0	21.7	51.1	16.9
この世には神は存在しない	21.5	9.7	16.5	2.0

次にあげるものは、余暇開発センターが　”ヨーロッパ価値観システムグループ”（ＥＶＳＳＧ：The European Value Systems Study Group）の調査に参加して実施した『日米欧価値観調査』[13]の結果である。対象となった７ヵ国のうち、日本とイギリスのものを抜き出すと、Ｔａｂｌｅ　３・１・１ｂ［神の存在と数」に示したようになる。

Ｔａｂｌｅ　３・１・１ｂ「神の存在と数」

（ＥＶＳＳＧの資料より）

数字は％

	日本	英国
神は存在する	38.8	75.6
この世には唯一の神が存在する	5.4	30.6
何らかの神または人を動かす見えない力が存在する	28.9	38.3
そのようなものが存在するような 気もするし　存在しないような気もする	36.7	18.6
神も人を動かす見えない力も存在しない	11.3	8.6

後者に関しては、イギリス人の７５．６％が　”神は存在する”ことを支持している以外は多数意見はなく明白な傾向はつかめないが、前者の調査結果からは、日本人が神を”唯一絶対のもの”として認めていなことは明白である。しかし、日本人の多くが、八百万の神々の存在を認めているとは断言しにくい。他の国と比較すると多少多神教よりの傾向が見られると言えるかもしれない。日本や韓国は明確な神概念を伴わないかたちで、神の存在を肯定している者が多いのが特徴であろう。

2．神の母性性と父性性

一般に神あるいは神的存在を、母親的・母性的なもの（母なる神）としている宗教と、父親的・父性的なもの（父なる神）として把握している宗教とに大別することができると言われている。「母性的な宗教」と「父性的な宗教」という二つのタイプは人間心理のダイナミズムを基礎にしたものであり、母性的宗教とは母性原理をに基づいた宗教、父性的宗教とは父性原理に基づいた宗教であるという。

したがって、この神の母性性・父性性について吟味する前に、この母性原理による母親の愛、父性原理による父親の愛について取り上げてみたいと思う。

母親の愛というもの、父親の愛というものは同じ愛であっても、本質的に異なった特性をもつものと思われている。親として子供を愛する気持ちには変りはないもののその愛し方は本質的に異なっているというのである。その母親の愛と父親の愛の理念型として一般に広く通用していると思われる概念を、E.Fromm.の言葉を借りてまとめてみると、次のようである。[14]

まず、母親の子供に対する愛の真の姿は、無条件的である。母親が子供を愛するのは、「その子供が特別な条件を満たしたからとか、あるいは、特別の期待に応じた行動をしたからというような理由からではない。母親はそれが自分の子供であるという理由で愛しているのである。」子供の側からすれば、「私は現在のあるがままの姿で愛されている。あるいはおそらくもっと正確には、私が私であるゆえに愛されるということであろう。この母親によって愛されているという経験は、受け身の経験である。そこには愛されるために自分がしなければならぬことは何一つない（中略）母親はわれわれが生まれてくる家庭である。彼女は自然であり、大地であり、大洋である。」

父親への関係はこれとはまったく異なっている。父親にはそのような自然的な家庭を意味するものはない。子供は生まれてから数年の間は、父親とはほとんど何の関係をも持たない。父親は自然的な世界を表してはいない。「しかし彼は人間存在の他の極を表している。思想・人間の作った事物・法律と秩序・訓練・旅行と冒険

の世界を表している。父親は子供を教える人であり、彼の世界への道を示す人なのである（中略）父親の愛は条件つきの愛である。その原則は『おまえが私の期待を満たしているから、おまえの義務を果たしているから、私に似ているから、私はお前を愛するのだ』と言うのである。（中略）父の愛の性質の中においては、柔順が主な徳となり、不柔順は主たる罪となると言う事実が見られる。――その罰は父の愛が撤回されることである。その積極的側面も等しく重要である。父の愛は条件づけられているので、私がそれを獲得するために何かすることができる。そのために努められることが必要なのである。父の愛は母の愛ほど統御できないものではないのである。」

このように「母親は子供の生命を安全にする機能を持ち、父親はその子供が生まれてきた特種な社会が彼に直面させる問題に打ち勝つことを教え、指導すると言う機能を持っているのである。」

さらに松本滋は[15]、「女性的・母性的」ということは、人間の基本的行動様式が意志的であるというより情緒的であるということ。人間の行動を動機づけるものが、主としてその場における心理的緊張を表出したり、またそれを和らげ、解きほぐすという情動性にあるということ、この情動性ということは、T・パーソンズが、かつて「感情表出的－統合的」として特徴づけた志向様式に対応するものであると言っている。

これに対して、「男性的・父性的」なものというのは、情緒的というより意志的な行動原理に基づいている。それから人間の行動の基本的な志向様式も「目的志向的」あるいは「目的手段的・適応的」な特色をもっている。その社会あるいは文化の意志とか価値というものを自らが体現して、それによって子供のあり方に規範的な枠組あるいは方向づけを与えようとするものである。「筋を通す」という言葉があるが、何事につけても筋道を通す、筋目を正しくつけることによって、子供を外にむかって正しく生きていけるよう導いていく、支えていく存在が「父性的」なものであると言う。

以上要するに、母親が自然的な世界を表わすならば、父親は規範的な世界を象徴

している。母親があるがままの世界に結び付いているならば、父親はあるべき世界に関わっている。すなわち、母親は子をあるものとして愛し包むが、父親は子をあるべきものとして愛し導くということになるのである。

これを宗教的象徴のレベルと結びつけていくと、「母なる神」はすべてのものを受け止め、それを自分の内に包み込み、再生させていく力のある「大地」のシンボルをもって表され、「父なる神」は地上的な煩瑣なかかわりを越え、大きくおおらかで無限に広がっている、そしてその運行は寸分の狂いもなく筋道だっているイメージを持つ「天」のシンボルを持って表されると言うのである。

以上のことから考えていくと、母性原理に基づく「母なる神」は、無条件的な包容性・寛容姓を特色としていることになる。つまり人間の原初的・自然的な側面、人間がそこに生まれ、そこに根ざし、そこに故郷を感じるような安らぎを与える神である。どの人間も、自分がどんなであろうとも、彼が彼であるがゆえに、現在あるがままの姿で愛されている。特別にどんな期待に応えたわけでもなく、無条件に愛されていると感じるような、そんな包み込むような暖かさをもっている神である。共同体の中にあっては、優しい包容者としてメンバーに対し、共同体内の緊張を和らげ、調和統合をはかってくれるような神でもある。

これに対して「父なる神」は、意志の発達に伴う、より分化した父子関係の現われる段階に心理的根源を有し、条件的規範性を主要な原理としている神であると言える。この神はあるべき世界を指し示し、強力な権威や権力を持って特定の目標へと人間を引っ張り導いていくもので、人間がそれに応じること、自分の義務を果たすことを要求する。そして不柔順である場合は、罰としてその愛が撤回されることにもなるような厳しさがある。共同体の中にあっては、ある特定の目標にむけて力強い権威を持って集団の成員を支配し、統率していく。このような「父なる神」はしばしば支配者・権力者として描かれている。

日本では母性的宗教がきわめて有力であると多くの識者が様々な表現で指摘している。日本文化の基層的な価値志向、つまり、はっきり表出されないが、暗々裡のうちに流れている基本的な価値志向は、父性的というより明らかに母性的である。

すなわちあるべきものより、あるがままのものを、規範的な分離よりも自然的なつながりを、自律的な個性よりも包容的な共同体を強調する傾向が伝統的にあるという。こういう基本的な価値志向の原形（プロトタイプ）をたとえば日本神話のなかで最も重要な神であるアマテラス（天照大御神）の神格においてみる者もいる。アマテラスは古事記などに描かれている姿を見れば、慈悲深く、やさしく、包容的な女神である。日の神（太陽神）でもあるが、日の光りが非常になごやかな恵みに満ちたものとしてとらえられるような日本の風土的条件における日の神であり、砂漠地帯における強力な太陽の神格化とは異なる。日本人の宗教思想は一般にこのアマテラスによって代表されるような「母なる神」が中心であると言う。また、仏教的イメージも阿弥陀仏や観世音菩薩のごとき慈悲の権化のような対象が人々の心を引きつけてきたという事実もある。

これに対して、父性的な宗教の代表としては、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教等がよく上げられる。思想内容から見れば明らかに父性的な特色を有しているという。すなわち、神は唯一絶対の超越的創造神であり、万有の主宰者とされ、その神と人間の関係は「契約」の観念に代表されるように、情緒的というより意志的・倫理的色彩が濃いように見られるからである。もちろん一口にキリスト教といってもそのなかには多様な流れがあり、父性的原理の強調の度合いも様々であるが、日本に初めてキリスト教が渡来した時、その内実はともかく、日本人の目には極めて非妥協的規範的な厳しい宗教、母性的というよりはるかに父性的な宗教として映ったために多くのものがこのようにとらえているという意見もある。それは「日本人のキリスト教の神に対する誤解」であり、『聖書』が教えるところの「父」としての「神」は、母性的とも言える暖かさを感じさせるではないかとの反論もある。キリスト教は善悪や真偽の原理を教え、教えるだけではなくそれに従うことを命じ、それに背けば罰をも下す父の愛を示すと同時に、原罪を負う人間たちのために自らを犠牲にして十字架上に死んだキリストは、すべての人間を許す無辺の愛を解き、かつ実証し、その愛はすべてのものに生命を与え、生命を再生させる大地母神にも通じる母の愛の宗教でもあるというのである。

実証研究としては、下記のようなものがある。

Nelson,M.O.[16] は、神は威厳を身にまとった”父”であるという仮説を検証するため、Stephenson,W. のQ分類法で検査したところ、母親の概念のほうが父親の概念よりも一層神の概念に近かったと報告している。

しかし一方、Strunk,O.J.[17] は、神の概念と父親の概念が酷似しているという結果を得ている。

Vergote,A.とTamayo,A. [18]は、被検者にそれぞれ１８ずつの母らしいまた父らしい項目（例”暖かさ””寛大さ””力強さ”等）に関して意味評定をさせた。まず第１に、母親と父親のシンボルとして、次に神に対するシンボルとして評定させた結果、おおよそ下記のような結果を得た。父親像は母親像が父らしいよりももっと強く母らしい性質をもつ。同様に神にあっては父的要素より母的要素のほうがより重要であり、父親像より母親像に近い。しかしながら複雑なもので、父親像は母親像よりも、神のシンボルとしてはより適当なシンボルなのである。それ故、神の表象は、親の像とはまったく独立して、父的項目から構成されているのである。神は立法者であり、審判者、倫理的に重大な事がらの象徴として見られ、力強く堅固だが、忍耐強く、愛に満ちた方であり、正しく公正だが、厳しくはないものとして見られているのである。

さらに、神を「親のイメージ」とか「父なるもの」「母なるもの」の分化として考察できうる以前のものとしてとらえる見方もある。逆説の論理学は、神は最高の実在であるが人間はその実在をその矛盾においてのみ認めることができるのであり、思考においては決して究極の実在者、唯一者そのものを認めることはないといっている。人間は、神はかくあるものではないということを非常によく知っていても神がかくあるものであるということは決して知ることはできない。人間は究極の存在の否定面を知りうるのみであり、決して肯定面を知らないし、それを表現することもできないというのである。この考え方は結局、神は「絶対無」であるという帰結に至るのであろう。

また、神に母性性父性性という親的イメージが結びつかない存在として把握して

いる者たちの中には、神を人格として認めず、何か大きな宇宙にある意志のような存在としてみている場合がある。西行の作といわれる「なにごとのおわしますとは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」の神もこのような神であるのかも知れない。この歌が長く日本人の心に響き続けてきた事実からすれば、このような神は非常に日本的な神の姿であるとも考えられる。

3．自然と神

日本人一般のあいだに、与えられた現象世界に即して絶対者を把捉するとか、あるいは自然を愛好するとかいう思惟方法の特徴があらわれた理由として、中村元は日本の風土が概して気候が温和で風光がうるわしいことをあげている。[19]湿潤な気候は、モンスーン地帯のなかでも、とくに草木を密生させ、しかもそれが人間にとって威圧的なものとはならず、むしろ人間に親和感を与えるということは多くのものが認めるところであろう。この風土においては、自然は人間に敵対するものではなく、また威圧するものでもなく、むしろ親和感をもって迎えられるものと感じられた。そこでその結果として、自然は人間にとって比較的恵み深いものと受け取られた。そこで日本人は一般に自然を嫌わないで、むしろ愛好し、また自然を恐ろしいもの、威圧的なものとも感じないで、むしろ親しいものと見なした。

「もちろん、日本人の自然に対する親しさといっても、それは決して単純なものではなく、そこには様々な感情が混在している。天や地にたいしては畏敬や畏怖を、動物や植物の多くにたいしては同胞的、仲間的な感情を、草花や小鳥のように人間よりも弱小なものにたいしては弟妹やわが子に対するような感情をもっている。すなわちそこには畏敬、畏怖、感謝、親愛、可憐、そして甘えなどの感情が入り交じっているのである。（中略）万物を生育させ、我々に恵みを与え、我々をはぐくみ育ててくれる天地自然は、我々の生命の母体であり根源であるとは、意識するとしないにかかわらず日本人の根源的感情であろう。天地有情、万物同根というのも、この心情の表われである。さらに言えば日本人は単に動物や植物にたいしてだけで

なく、普通には生命がないとされている大地や太陽や雲などにたいしても、生命的連帯感、生命的共感をもっている」[20]と喜多川は言う。したがって自然は人間に対立するものではなくむしろ人間と一体になるものと考えられた。人間と動植物を一体と見る考え方、生きとし生けるもの同根性とその共存関係が大切にされてきたのである。

そしてまたこの生きとし生けるものは本来皆同じものという意識は「草木国土悉皆成仏」という日本の仏教思想にも強く表現されている。このようにして精神を持たない自然界の物体も成仏する、神になるのである。これは自然とその力を神聖視する多神教の世界である。

日本人が自然にたいして親和的一体感をもっているのに対して、西欧人は自然を対象的存在としてみていると言われる。日本人が、自然にはぐくまれてという感情をもつのに対して、西欧人は自然と対抗してという感じをもっているというのである。

また、日本人はこの自然界をはじめ宇宙の起源というものを敢えて問いただすことは少なく、所与の存在として考えている者が多いのに対して、西欧人はこの自然界をはじめ宇宙の存在は、絶対的超越者である神による創造であると考えている者が多いとも言われる。そして、この神による創造の考え方は、主に遊牧文化の流れを汲む世界に特徴的であると言われている。鈴木秀夫[21]によれば半砂漠の土地で不規則な雨による草を追っていくような厳しい自然のなかでの生活は遊牧民をして、神は人間の思議を越えるものでありしたがって人間が神について知っているのは、人間の働きではなく、神が人間の頭をひらき示されたーーすなわち啓示がおこなわれた結果であると考えるようになったのは必然であるという。このようにして人間が唯一神に到達したことを、人間が神を創造したと表現することも可能であろうが、絶対者の神に到達すると必然的に神と人との関係は転換する。神が万物をそして人間を創造したと考える。そして絶対者による天地創造ということは、被造物を全体として相対者として把握することになる。このことを鈴木は次のような例えをひいて解説している。「天涯の孤児が、あるいは狼に育てられた子供が、生物学的

な論理を身に着けたとき、自分が生んだ親がいなければおかしいと論理的に考えて親のイメージを頭のなかにつくったからといって、それがその子によって創られた親でなく、親が子を創ったのであるのと同様、人間が生活上の必要に応じて、また論理的必然によって唯一神に達したという、いわば唯物論的な神観と、神が万物を創ったという信仰的な神観とは何ら矛盾するものではない。」[22]

しかしこの神による創造の考え方にも、聖書にあるような創造の物語を文字どおりにとって神が手ずから今のような世界を一つずつ創られたと信じる場合と、進化論的発展と神による創造とを何ら矛盾しないものとして認める立場とがある。

Rahner,K. はこの進化論的創造について次のように言っている。[23]「世界が一つのものであり、一つのものとして一つの歴史を有するとしよう。そして世界は生成の途上にあるのだから、この一つの世界内のすべてが始めから存在していたわけではないとしよう。そのように考えるとすれば、物質が生命へと、そしてさらに人間へと発展した、と理解することは、何ら理不尽ではあるまい。そう言ったからとて、物質、生命、意識、精神などがそれぞれ違ったものであることは、決して否定されない。また曖昧に付されることもない。これらを区別することは、発展を認めることと矛盾するわけではない。生成なるものがあり、その生成が能動的な本来の自己超越を意味し、自己超越なるものが少なくとも本質の自己超越をも意味しうるのであれば、これは当然である。かくして先験的に考察して、概念の上で可能と考えられるものが、自然科学によってますます明確かつ包括的に観察される諸事実を通して確証されている。」ただしこの自己超越を経て新しい本質へと新生するそういう意味での自己超越である「本質的自己超越」ということは「普通の自己超越と同様、決して内的矛盾をはらむものではないが」ただ「この出来事を絶対的存在者の原動力、つまり有限的存在者の内部に潜んでいるが、有限的存在者自体の本質から来る力ではない別の原動力において生起するものと考えねばならない。」のであると言っている。この原動力は、神による被造物の「保持」および神の被造物との「共働」と呼ばれるものである。すなわち神の天地創造を理解するにあたり、被造物が創造者に全く依存していること、ただ始めに造られたというだけでなく、常に

神の力によって存在を保持されていること、そして被造物独自の働きのなかに神がともに働いていることである。これが万物が、天も地も、物質的なものも、精神的なものも、同じ唯一の神によって創造されたものであることを信じると言っている一つの立場である。

そしてこのことは様々な異なったものが、すべて唯一の原因、すなわち無限であり、全能であるがゆえにありとあらゆる異なったものを造りうる原因に由来することを意味するだけではなく、同時にこの様々な異なったものが、一つの内的類似性と共通性とを有するということ、この多様で互いに異なったものがその起源と自己実現と規定において統一を築くということ、すなわち一つの世界を築くということを意味するのである。

このように宇宙万物の生成に意味を見る見方とは逆に、多くの現代人のなかには、宇宙万物は、原子の渦中から偶然的に発展してきた無意味な過程であって、一時的な発展を遂げたあと、再び元の混沌にもどってしまうと考える者たちもいる。彼らは、すべてはニヒルからニヒルに向かうものだと考えるのである。

さて、上述の考えのコンテクストから多少はずれるようにも思うが、日本人の自然に対する態度として、もう一点触れておきたい点がある。それを喜多川忠一の言葉を借りて述べると下記のようである。

「今日の日本人の間には、一方では自然を愛するかに見えて、他方目先の利益にかかわる場合には自然を軽視し、自然を搾取して省みないという傾向が見られる。それは国内の自然に対してだけでなく、他国の自然に対しても同じである。日本資本による南方熱帯樹林の乱伐などはその顕著な例であると言えるであろう。これは日本人の『矛盾両極』的性格の表れであろうか。あるいは自然への『甘え』というべきであろうか。それとも目先の実利主義の表れというべきであろうか。」[24]

林知己夫のドイツ人、フランス人、日本人を対象とした自然観に関する意識調査[25]の結果から導き出された心の構図を見ると、日本人の場合は森林自然に対する神秘感と自然に手を加えるということがつながっておらず、西ドイツではつながっており、フランスはこの中間に位置しているということがわかる。そしてこのあた

りが、自然を守り育てるということを考えるときの１つのポイントになろうというのが、林の調査結果からの考察である。

第２節　死後の世界

日本人が葬式で亡くなった自分の親しいものに向けて弔辞を読むとき、死に対して、特に死後の状態に対してどのような概念を持って死者に語りかけているのであろうか。

「残された奥さん、子供たちを見守ってくれ」「もすぐ行くから待っていてくれ」「安らかに眠ってくれ」などの語りかけからは、”死後まったくの無に帰してしまう”と考えている様子は伺われない。もっともまったくの無に帰すると確信している人は生前に葬式など出さないように遺言をしたりしている場合もあるが、ほとんどの者は無理をしてでも葬式を出そうとするし、死者を手厚く葬ることができないと、親不孝であると感じたり、成仏できないのではないかと申し訳なく思ったりする傾向がある。

ＮＨＫの世論調査によると、日本人で「お盆やお彼岸の墓参りは、『よくする』という人だけでも６９％。『することがある』という人とあわせると、じつに、８９％にのぼっている」(26)という。この事実も、死んだ親や先祖に対する日本人の心づかいを表明しているのであろう。

日々の生活の中でこのような現象が見られるとはいえ、一般の日本人が死後の状態をどのように思っているかを明確にすることは並大抵のことではない。当の日本人個人個人でさえも、自分が死後の世界に関してどのように思っているのかはっきりさせることができない場合が非常に多いし、いろいろ信じていてもそれらが必ずしも一つの筋の通った統合されたものではなく互いに相矛盾するようなものを同時に信じていたりするからである。誰も死後の世界に行って戻ってきた者はなく、見

たこともなければ当然のこととも言えるが、やはり死後の問題は宗教心を論じる場合、避けて通れない大きな課題であろう。

そこで以下さまざまな文献で論じられている日本人の”死後の世界観”を抜き出して、並列的に取り上げてみたいと思う。

梅原猛は日本人の心の奥に潜む「あの世観」を次のように分析している。[27]

その一つの特徴は、「あの世」はこの世とあまりにもよく似たもう一つの世界であるということである。あの世はこの世とよく似ているがこの世とあべこべの世界であり、この世で不完全なものはあの世で完全なものであり、この世で完全なものはあの世で不完全なものであると思われているという。この世では着物を左前に着ないようにしたり、死人に送る茶わんなどは必ず割る、魂を送り出す通夜は夜の初めに行うなどの習慣はその考え方を表わしている。もう一つの特徴は、日本人は人間が死ぬと、その魂はあの世へいき、神となると考えているということである。これは人間は死ぬと仏になるという考えに現れている。人間が死ぬと日本人は「御陀仏した」という。本来の仏教では人間は難行苦行を積んで悟りを開かないと仏になれないはずであるが、日本人は死ねば皆仏になると考えている。そしてあの世には、やはりご先祖が待っていて、迎えて下さり、そして何年かあるいは何十年という間、あの世で暮らす、そして時々、お正月やお盆にその魂は生きている子孫のところに帰ってくるという。しかし、この世に執着して容易にあの世に行けない魂には、残された人間がその魂を供養することによって無事あの世へ送りだすのである。第３に上げられる特徴は、前述のようにすべての人間が仏になるだけでなく、すべての生きとし生けるものが成仏する可能性を認めているということである。遠く昔にさかのぼれば貝塚の遺跡などからも明らかなように、日本人は多くの動物・魚や貝、土器の破片に至るまで魂があると考え、その魂を送ったのである。日本仏教の合言葉とも思われる「草木国土悉皆成仏」という考え方も有機物である草木ばかりでなく無機物と考えれれる国土まですべての生きとし生けるものが仏になることができる、あるいは仏であるという思想である。生きとし生けるもの特に人間が殺さなければならなかった、人間にとって大切なものの魂をあの世に送る風習は、今で

もうなぎ供養、ふぐ供養、針供養、人形供養などの儀式に残っている。また日本人は道具が壊れたとき「オシャカ」になったというのも、道具の魂もあの世へいき、また別の道具となって生き返るということを表わしているとも言える。第４の特色は、あの世からこの世へと戻ってくる道が認められるということである。歌舞伎で行われる襲名披露もそういう再生の儀式と関係があり、歌舞伎の名優市川団十郎の襲名興業であれば、それはその名とともに市川団十郎の魂がその名を名のる俳優に甦ることを披露する儀式である。浄土教でも還相廻向という考え方によって菩薩となって浄土へ行った菩薩はまたこの世に帰ってくる、生まれてくる、すなわちこの世とあの世の絶えざる往還の構造となっているのである。

日本人のなかにはこのようにあの世とこの世を行き来する、あるいはあの世に行くという、あの世を遠くの地としてとらえる考え方の他に、人間は死んで山へ行くいう考え方もあった。山はもともと死者の住処であった。

さらに、日本では古くから死んでも西方十万億土の彼方に行ったり、天にのぼったりしないで、この世に存在しているという考え方が根強くある。「生きている人間の目には見えない体」となって、目には見えないが確実に存在しているのである。いわゆる生きているというのは「現身」として「現世」にあるのだが、死んだものは「隠身」として現世にある「隠世」にあるというのである。

神道にはその教義というものに過去の思想はなく、また、未来の思想もない。ただ現在のみがある。それゆえ日本人には元来「死」という思想はない。この世に生まれた以上、永久にこの地上にいるのであって、霊魂とか来世とかいうものはないのだという説もある。世界の諸宗教がややもすると、現世を穢土とし、来世を清浄な楽土とし、永久に幸福な天国を理想としているのに、原始神道はどこまでも現世に価値を認めるものであり、「神話全体が現世に愛着を持ち、現在の世を重んじている。したがって因果応報というような形而上学的な観念も存在しなかった」[28]と中村は言う。

仏教が移入され、短期間に日本の隅々まで広まっていったが、仏教はこの日本人一般の現世主義的傾向を完全に改めることができなかった。そればかりでなく、む

しろ日本人は大陸から受容した仏教の現世超越的な側面を捨てて、仏典の一隅に付言されている現世中心的な側面のみ取り入れて、現世中心的なものに変容して行ったのである。

そもそも日本人は現世・来世とかこの世とあの世とか余り区別することはしなかったのではないだろうか。河合は日本人の特性の一つとして「外界と内界、意識界と無意識界との区別が明白でないこと」をあげそれを日本の昔話と西洋のそれとを比較しながら説明している。「そのひとつの証例として、浦島の帰還が歴史の記述の中に組み込まれているという事実がある。それは、『日本後紀』淳和天皇天長２（８２５）年の条に、『今歳浦島子帰レ郷、雄略天皇御宇入レ海、至レ今３４７年』という叙述が認めれれる。（中略）このような、外的現実と内的現実の容易な混合は、日本人の特性の一つではないだろうか。このことは浦島のすべての物語において、浦島が現世より竜宮に至る間の記述がまことに簡単であるのに対して、土居光知の紹介している『歌う人トマス』の例では『４０日と４０夜の間、彼は膝まで没し、血の海を渡った。彼は日も月も見なかったが、波音のとどろきを聞いた』などという描写があることとも対応している。あるいは、イザナギが黄泉の国を訪ねる神話においても、彼が黄泉の国に到ることは難なく行われている。そして、これと多くの点で対比しうると思われるバビロニアの神話において、女神イシュタルが地下の国にその夫を訪ねるときには、イシュタルが地下の国に下ってゆく見事な描写が存在していることも、同様の傾向を反映していると思われる。つまり日本人にとって他界と現実界との障壁は思いの他に薄いものなのであった。（中略）日本的な意識のあり方は、常に境界をあいまいにすることによって、全体を未分化のままで把握しようとする。このことが反映されていると思われる。」[29]

このように現世中心的で、現世と来世が未分化な傾向は、さまざまな形で現代の日本人の傾向としても表われている。死後の世界がこのようであろう、あのようであろうといろいろ考えを巡らし、理論的にも突き詰めていくというより、今を生きることがすべてである、今を一生懸命生きることがよいことなのだ、というような考え方、死というものは今の生活と隣り合わせのものであり、壁一つ隔てた向こう

が死後の世界、近くの山が先祖の霊が集まっている神聖な場所などという感覚は日常生活の随所に見られる。

しかし一方、そのような日本においても、因果応報的な思想もある。この世の善悪は余りにも不公平である。善をした人間が損をし、悪をした人間がはびこっている。しかし、死後善いことをしたものは極楽へ行き、悪いことをすれば地獄に行く。このようにしてこの思想は人間に善を進め、悪をやめるよう導くのである。極楽は楽しく無限の喜びに溢れた世界であり、美しい、苦悩のない世界である。仏教の世界では、泥沼から抜け出した蓮の花にこの極楽が象徴されている。そして、地獄。それは純粋に苦の世界である。地獄の恐ろしさ、苦しさの生々しい描写を日本人は小さいときから聞いてきた。嘘をつけば閻魔様に舌を抜かれるとか、悪いことをすれば地獄の火で焼かれるとか、針の山を登らされるとか、そして人は死によってすらもその苦痛から免れることは出来ず永久にその苦しみが繰り返されるのだとかいうことを多くの日本人は耳にして育った。

また、現世を穢土・不浄と見なす思想もある。現世の世界は汚濁にまみれた穢土であるからこの世界を厭い嫌い、早くこの苦しい汚い世界を逃れて楽の世界きれいな世界を願い求めよという教えである。この仏教の考え方は、地獄は我々の住む六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天）のなかにあるが、極楽はまったく別の世界であるという、我々の生を極楽よりむしろ地獄に近いものと見る見方である。それは人生を苦の相のもとに見る仏教の当然の帰結ではあり、梅原に言わせると仏教の場合、地獄、極楽という一対の言葉が、一対の言葉ではなく、地獄のほうがはるかに古くて、重い言葉であり、極楽というのは、のちに仏教に出現したはるかに新しいはるかに軽い言葉であることが分かるという。[30]しかし、前述のように日本人は現世中心的な楽天主義的傾向が強いために、この厭世思想は日本では十分に根をおろさなかったとも言われる。中村は日本人の歌のなかにもこの思想の影響を受けて、厭世的な内容が若干見られるが、それは無常・はかなさの詠嘆であって、原始仏教やジャイナ教の聖典に見られるような深刻な叫びは見られないという。日本では仏教思想を表明している歌は、数えきれぬほど多く作られたが、一部の人々

の場合以外にはそこには深刻な厭世の意識はさほど認められない。また苦・無我・空というような理法を、まともに堂々と正面きって表明しているような哲学詩にとぼしいとも言われる。

以上、日本のなかに見られるさまざまな死後のとらえ方を羅列してみたのであるが、その他に見られる傾向として、あるいは上記のいずれかと重なったようなかたちで見られる傾向として、死んだら”自然に帰る”のだというとらえ方がある。この自然に帰るという意味が人によっていろいろで何を意味するかは明確ではないし、当の本人も突き詰めて考えると分からなくなってしまう、あるいはそんなに突き詰めて考えたことはなくただ漠然と感じている場合も多いようだが、”死んだら灰となって土に戻る”という表現がよく使われる。灰となってまったくの無ではないものの意識も人格もない自然のなかの物質に戻る、あるいは大地の一部となって次の生命の土壌となる、あるいは生きとし生けるものに霊が宿っているというような感覚からある種の霊となって自然のうちに宿る等、さまざまであろう。

さらに、自然観について考察した折に触れたが、宇宙万物は原子の渦中から偶然的に発展してきた無意味な課程であって、一時的な発展を遂げたあと、ふたたび元の混沌に戻ってしまう、あるいは完全な無に帰してしまうと考えている人々も現代人のなかには増えてきているのかもしれない。

キリスト教では、キリスト教的終末論において、死者はなお生きるというが、そこでは本来何が意味され、何が意味されていないのであろうか。Rahner,K. は次のように述べている。「ここで意味されているのは次のことではない。あたかもフォイエルバッハの言うように、人間が乗っている馬を取り替えて、続けて走るかのごとく、つまり人間の時間的実存の固有な散漫さと、不確定で常に新たに規定されうるような未決着性がさらに続くかのごとく、人間の生が死後においても継続することを意味するのではない。そうではなく、この意味では、死は人間の全体に対して真に一つの終結をもたらすものである。時間が人間の死を越えて継続し、この時間のなかでいわゆる『霊魂』が生き続けるように考え、したがって時間が最終的決定

性の中に止揚されるのでなく、新しい時間が到来するかのごとく考える者は、今日において思惟の上でも、キリスト教的に真に意味されている信仰内容を実存的に遂行する上でも、超克しがたい困難に陥るのである。

しかしながら、逆に誰かが、死によってすべてが終わる、と考えるとしよう。人間の時間が真に継続するものではなく、ひとたび始まった時間はいつかは終わらねばならないと言い、また、時間が無限に継続し、絶えず古いものを無化しつつ、常に新しいものへと向かう、いわば空回りを繰り返すなどとは、とても考えられないと言い、そのような時間は地獄よりも恐るべきであるとさえ言うとしよう。そのような理由から死がすべての終わりと考える者は、先に述べたように霊魂が生き続けると考える者と同様に、やはりわれわれの経験次元での時間性の想像の図式のもとにあるのである。

真実には、永遠とは時間の中で、時間それ自身の成熟した実りとして成るものである。永遠は、そもそも経験される時間の背後に継続されるものではない。そうではなくて、時間から解き放たれることを通じて、時間を止揚するものである。時間は、ただ自由と最終的決定性が遂行されうるために、一時的に生成するものである。永遠とは見通しがきかぬほど長く持続する時間の様式ではない。そうではなく、時間のうちに完成にもたらされた精神性と自由の一つの様式なのである。それゆえにまた、精神性と自由の正しい理解からのみ把握されるものである。精神と自由の準備の場でないような時間は、永遠をも生み出さない。（中略）そして、自由に時間の中に存在する人間の実存の遂行する最終的決定性は、死の後にではなく、死を通して可能となると言うべきである。」[31]

この時間の実りとしての永遠は人間が神と対面することであるが、それは次の２つのどちらかの形においてなされると考えられている。すなわち、神に対する愛のうちに神と顔と顔を合わせるような親しさに至るか、それとも神に対して自己を最終・決定的に閉ざし、永遠に神から離れ去ってしまうかである。これは神が人間をどちらかに振り分けるようなものではない。一人一人が永遠の生命の本質である神との愛を選ぶか否を選択するのである。なぜなら愛というものは強制的に押し込ま

れるようなものではなく、愛する人にとってのみ愛は喜びであるからである。人間は神によってこの自由に選択する能力を与えられている。そして誰でも、その日常の生活が人からどのように見えようとも、一人一人神から名前を持って呼ばれており、一人一人その神との愛の喜びへ招かれていると考える。一人一人が永遠の人間であり、一人一人が時間の中に救いであり裁きともなる神の前に立つのである。そして、その永遠はその時間の中に内在しているのである。

それではこの神と親しくある死後の世界とはどのような世界であろうか。それは静寂と平和、自由と愛、暖かい父の家での憩い、神の支配の国、飽きることなく満たされる世界、死も嘆きも苦しみもなく神が人間の目の涙をことごとくぬぐい去ってくれる安らぎの世界等さまざまな象徴を持って描写されるが、結局は人間の想像をはるかに超えた神の喜びそのものの中に入るという名状し難い神秘であり、名状し難い幸せの神秘であると言う。

さらに、この未来と言うものは、一人一人が個人として神に至るということだけではない。神による創造のところで触れたように、人類全体、宇宙全体が神によるものであり、神に向かって歩み、ついには神において最終的に完成に至るものであると考えられている。

それではもう一つの選択、神に対して自己を最終・決定的に閉ざし、永遠に神から離れ去ってしまう形というのはどういうことを意味するのであろうか。

このことに関しては、すなわち「地獄」に関しては、はっきり分からない。それゆえ神の導きに最後まで抵抗して絶対的な滅びの結末を迎える人が必ずいると断言する必要はない。ただ、一つ言えることは、人間は歴史の中をなお歩み続け、自分の自由を今なお遂行し続けているものであって、最終・決定的な滅びの可能性をも、真摯に考慮に入れなければならないということである。また考え方や表現として、神の愛を最後まで拒否し続けた人を神が「地獄に落とす」というとらえは適切ではなく、その人は自分で「地獄になる」といったほうが正しいであろうとも考えられている。というのは、人間の唯一の喜びは、心を開いて神を愛し、すべてのものを愛するということだからであり、それをいつまでも拒否続ける人の心の状態は、

最も苦しい自己矛盾のそれだからであるという。

いずれにせよ、至福の天国に関する叙述とこの地獄に関する叙述とは同列に置かれる必要はなく、世界と人類全体が神の恵みを通して幸せな完成を見いだすであろうということが中心であり、この地獄の問題はその傍らに付属しているものである。

以上がキリスト教の教義であるが、このような考え方は大人になるにつれて理解が深まっていくものであろう。下記の実証研究結果も、そのことを示唆しているように思われる。

Kuhlen,R.G. と Arnold,M.は「善人のみが天国に行く」と信じる割合は、１２歳で７２％、１５歳で４５％、１８歳で３３％と下降すること、ところが「天国はある」と信じる者は１２歳で８２％、１５歳で７８％、１８歳で７４％とほぼ横ばいであることを報告している。[32]

『日米欧の価値観調査』から、死後の世界・状態に関する日本およびイギリスの被調査者の反応を拾い出して、Ｔａｂｌｅ　３・２・１「死後の世界」（次頁）に示した。日英ともに、いずれの項目に対しても、男性群より女性群の肯定率のほうが高いという結果になっている。

また同調査の「死について考えることがありますか」という問いに「しばしばある」と答えたものを、男女別、年齢別にみると、英国ではどの年齢層においても女性群の方が高い率を示しているのが特徴的で、日本の場合は女性群においては年齢が上がるにつれて率が上がっていく傾向があるのが（４０－４９歳で多少下がる）特徴的である。したがって、日本の女性群では７０歳以上の肯定率が最高となるが、日本の男性群の場合、７０歳以上の肯定率は０．０％となっている。現実にどの年齢層よりも死への可能性が多いこの年齢層における男女の反応の違いは、何を意味しているのであろうか。

Ｔａｂｌｅ　３・２・１「死後の世界」

（ＥＶＳＳＧの資料より）

数字は％

		日本	英国
死後の世界はある	男性	23.0	38.0
	女性	38.9	52.1
地獄はある	男性	11.5	23.5
	女性	17.7	29.3
天国はある	男性	14.1	50.5
	女性	25.2	63.1
生まれ変わる	男性	21.9	22.1
	女性	34.3	30.6

第３節　日本人の信仰心

１．包容性と排他性

先にあげた神に母性性を見る日本人の神観と、日本人の宗教に対する包容性とが結びつけられて論議されることが多い。日本人は母性原理の包容性により、種々の

神々、種々の宗教をどれも排除することなく受け入れる寛容性をもっているというのである。関根文之助はこのことを次のように表現している。「『神ながら言挙せぬ国』という日本の呼称が如実に示されている一つのこととしてクリスマスのことを思うのであるが、一神教の行事クリスマスが多神教の国に栄えていることは日本の神観のおおらかさを示すわけで、そこにはいささかの矛盾も感じないのである。」[34]たしかに、仏教の導入に於ても日本人は仏に帰依するために古来の神に対する信仰を捨てなければならないとは思わなかった。そして「神仏」という一つの観念が成立した。たいていの日本人は神社に参拝すると共に寺院にも参詣する。そこに何等の矛盾も感じていない。時には多く巡礼すればする程よいように思っている。神道と仏教の関係について示された日本人一般の思惟方法の特徴は、また仏教と儒教との関係においても示された。両者の間に思想上の衝突や闘争があったとはついぞ聞いたことがない。

文化庁の宗教統計では[35]、昭和６１年末現在の信者の総数は 213,554,815人で、これは総人口の１７５．５％にのぼる。信者の総数が総人口をはるかに超えているこの現象は、日本人の上記のような考え方を統計的に裏づけているといえよう。一人の同じ人間が氏子世帯の構成員であり、檀家世帯の構成員でもあり、時にそれらと合わせて神社や寺院以外の宗教の信者であることもありうることを、この数字は示している。

異なったものを思想的に接合することを合理化するロジックとしては何々即何々、あるいは「何々一如」という考え方が適用された。このような日本人の宗教に対する「無限包容性」は、あらゆる思想・宗教を－相互に原理的に矛盾するものまで－受け入れて平和共存させようとする「思想的寛容性」であり、日本における思想的雑居性を生み出す原因ともなったと言われている。

また見方によっては、種々の要素が並列して存在する雑居ではなく、ある選択意志のもとに選択が行なわれて重層的構造になっているとも言われる。仏教のいろいろな宗派が渡来しても、あるいは儒教や道教、陰陽道が入ってきても、日本に根づくものと根づかないものとが出てきたり、あるいは部分的に取り入れて自分たちの

思想に合うように解釈を加えるので、元のものとはおよそ異なるような日本的仏教が生まれたりするのであるという。結局多くの相互作用が行なわれながら、「日本宗教」という一種独特なものが形成されていく。

この選択意志の背景に実利性が付きまとっているという見方もある。すぐに役に立てようというのが日本人の外来文化摂取の過程に見られるというのである。山本七平は小室直樹との対談のなかで、日本人の諸宗教に対する態度を、ちょうどさまざまな薬に対する態度のようであると言っている。「諸宗教は全部薬だ。だから違ったものがすべて日本教となって当然なんです。仏教をこれくらい、神道をこれくらい、儒教をこれくらい、と薬にして混ぜて、自分に一番効くようにすればいいんです。だから名医というのは”一もなずまず一をも捨てず”でしょう。キリスト教も捨てちゃいけない、マルキシズムも捨てちゃいけない。全部それをうまく処方するものこそ賢者なんです。（中略）明治の初めにキリスト教がある程度保護されるわけですね。（中略）これはいい薬が来たんです。（中略）これがちょっと毒になると思うと、次に排除するわけです。」[36]これはすなわちある種の機能主義とも言えよう。

このような面を見ていくと、日本は何でも包容する母性的文化といっても、松本滋が指摘しているように「その包容性というのは外に開かれたものではなく、むしろ『内的空間』の秩序を保つためのもので、その内的空間の原理が侵されそうになるときには、かえって強烈な反発が生じ、非寛容な態度が現われる」[37]のであり、これも「武装したアマテラス」に見られるような母性性の一面であるとも言える。

このことは日本へのキリスト教受容に関して明確に見られた。中村元が言うように[38]多くの日本人にとっては、信仰としてのキリスト教そのものはどうでもよかったのであろう。ただそれが速やかに日本化すること、日本的となることを要望していたと思われる。仏教が日本化したのと同じことを、キリスト教に対しても望んでいたのである。ところが、唯一絶対の神を信じるキリスト教は、この雑居性を原理的に否定せざるをえない。キリスト教が未だに日本人に馴染みにくいといわれる

のも、そのあたりに原因があると思われる。

上記のような自然的調和を目指し宗教の混合形態を作っていこうとする日本的態度を「無限包容性」あるいは「宗教的寛容さ」と呼んで、日本人のあたたかく広い心を表わすものとして賞賛し、キリスト教の態度を日本の宗教の包容性と対比して排他性ととらえる考え方もあれば、この態度は宗教信仰の基本線すなわち宗教信仰のもつよい意味での一途さを失わせ、個人の生活に真の意味の活力を与えるようなものとはなりえず、そこからは深い神学・教学はなかなか生れてこないのではないかと危惧する立場もある。

一方、唯一絶対の神を信じる立場のなかにも、他の宗教に対する態度は一様ではない。最もラディカルな態度は、自己の信仰を絶対化して、他の宗教を悪魔のわざであるかのように見なし、最後は闘争に終わるというような態度である。これは自己の信仰に忠実であろうとするあまり、自己の信仰と対立するものを憎み、それと争い、ついにはそれを力によって絶滅させようとする態度であり、本来人間相互の憎しみや争いから人間を救い出すべきはずの宗教が、かえってますます憎しみや争いを激化させる結果になっていることもある。

もう一つの態度は、宗教の基本的性格は絶対性にあることは堅持しつつも、宗教的絶対者は、対立の地平たる相対性を底へと越えることによって、対立を絶し、対立するもの同志を底から包み支えるものであると信じ、また同時に我々人間が信じているかぎり、たとえどのように絶対性を主張しようとも、相対性を脱することはできないということをわきまえている者の態度である。この場合そこにおいて宗教と宗教との対話が可能となる。これは対立をなくすことを意味するわけではない。自己の信仰と他者の信仰とが異なること、対立することを認め、それをもって対話に入り、真の神をそしてその神への道をともに探っていこうとする態度である。

2．信仰への姿勢

ここまでは”宗教”を論じるときには、その中核となると思われる”神”のとらえ方とそこから派生する自然のとらえ方、そして死後の世界のとらえ方や宗教に対

するとらえ方を中心に考察してきたのであるが、それでは現に一般の日本人はその神を信じているのか、宗教心をもっているのか、どのように信仰しているのかについても検討する必要があろう。

国連のみならず、世界のさまざまな国際的機関の統計的調査の結果では、日本は世界で最も宗教に無関心な民族という結果が出ているといわれ、筆者自身もその統計の幾つかに接したことがあるが、これはほぼ国際的な通説といってよいと言われている。

しかし、長年にわたり「国民性研究」を実施している林知己夫は「日本人は豊かな宗教心の持ち主であることは、３０年間の調査を通して得た確固たる結論である」[39]と言い切っている。

何ゆえに、このような見解の相違が生じてくるのであるか。

前述の林は次のように分析している。「日本人に『あなたは宗教を信じているか』と聞いたとする。何割が『はい』と答えるであろうか。わずかに３割である。

やっぱり日本人は無宗教民族ではないか、と反論されそうである。しかし、次にこういう質問をしてみる。

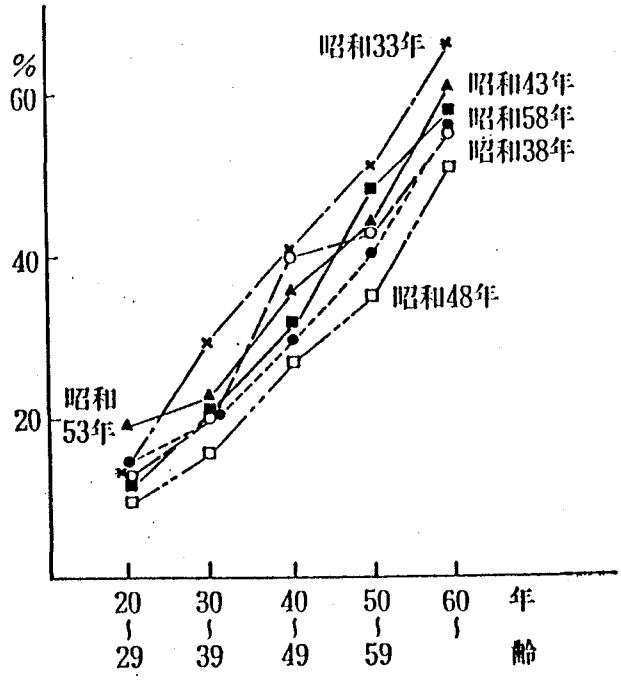
『宗教的な心は大切ですか』

かなり多くの人が『はい』と答えているのである。そして『信じている』人と、『宗教心は大切』だと思っている人を合わせると、全体の８０％を上回る。

これをどう解釈するか。

角度を変えてみよう。宗教についての態度が、年をとるにしたがってどう変化するかを調べるのである。常識的な感覚では、高齢になればなるほど宗教を信じるようになる。これは調査結果でも同じである。ところが驚いたことに、その変化のカーブはいつの時代でもほとんど同じなのである。２０歳代なら１０％が宗教を信じ、６０歳以上は６０％になるという変化曲線はほぼ同一なのである。

（Ｆｉｇ．３・３・１　「信仰とか信心をもつ比率」[40]を参照のこと）



Ｆｉｇ．３・３・１「信仰とか信心をもつ比率」

－　年齢別・時代別　－

（林知己夫著『日本人の心をはかる』より抜粋）

これに対して外国はどうか。

外国人にはこういうカーブは全く存在しない。彼らは年齢には関係なく、ひとたび宗教を信じるとずっと信じ続け、逆に、無神論者は何歳になっても無神論者であるようだ。

どうして、このような違いがあるのだろうか。宗教に対する姿勢、考え方の違いから来ているのである。

オランダでは宗教に関する社会調査をすでに６０～７０年間にわたって続けているが、それによると、現在、日本と同じく高齢になるほど宗教を信じるものが多い。しかし、同じ結果であるとはいえ、日本とオランダでは全く意味が違う。つまり、オランダの場合、時代とともに宗教教育が弱化していることを反映しているのであって、日本のように、年をとれば自然に宗教への関心を深める、つまり、宗教への回帰現象が顕在化しているのではない。

これは何を意味するか。

欧米人は教育によって、学習を通して宗教を身に着けている。したがって、彼らにとって、宗教とは信じる対象であって、心のなかにいつの間にか存在しているわけではない。

これに対して、日本人にとって宗教というのは、対象ではなく、むしろ、すでに心の内部に存在するものである。それはキリスト教や仏教のように、明確な輪郭をもっているわけではない。漠然とした宗教的な感情である。

たとえば、神社や仏閣や教会に日本人が行ったとする。すると、日本人は、神社でも教会でも、また年齢とは関係なく、一様に、心が清められ、落ち着くような気持になる。調査してみると、首都圏で８０％がそのような気持になると回答している。おそらく、全国では最も高い割合になるであろう。

一般的な日本人は、宗派とは関係なく宗教的な雰囲気に感動するのであり、これこそが、宗教的な心、宗教的な感情が豊かであることを示しているといえよう。

そして、いうまでもなく、こういう感情は学校教育とか学習を通じて植えつけられたものではない。日本社会に生まれ、日本文化の雰囲気のなかで成育していくうちに、いつの間にか備わったものであろう。

私が、日本人は豊かな宗教心をもっている民族であるというのは、この点を注目してのことである。そしてこの豊かな宗教心は、時代がどんなに進んでも一向に衰えることがないのである。また、そういう兆候も見られない。新しい日本人も、当然、この豊かな宗教感情を受け継ぐことになろう。」(41)

一方、中村元はこの同じ現象を次のように分析している。「１９７８年に内閣の統計数理研究所が行なった国民性の調査報告書によると、６０歳以上では信じる人のほうが若干多いが、全体としては信じない人が多い。２０歳代では信じる人々が２０％に満たないのに対して、信じない人々は約７０％である。なお宗教に期待はよせているが、普通言われているように、ヨーロッパ人の宗教に対する考え方とは全く違ったものが見られる。また「宗教心は大切か？」という質問に対しては『大切だ』と答える人々が、あらゆる年齢、あらゆる職業を通じて約７５％もある。ちょっと前掲の数字と矛盾するようであるが、約７０％の人々が、宗教への態度を『

あまりよく考えていない』（下線は筆者による）のである。ところで上記の統計数理研究所の行なった調査報告によると、日本人の国民性は、多くの点ではヨーロッパ諸国民の場合とほとんど異ならず、ただ宗教に対する態度だけが違うということが、ほとんど唯一の大きな差異点なのである。［これは一つには、日本人一般が、宗教は大切だと思うが、宗派に拘泥しないという態度から出てくるのであろう。］（中略）宗教的に特殊な戒律を持たぬということは、近代建設において好都合な面もある。日本では宗教による生活様式の差異が少ないため、日本人として共同行動をとるには好適であった。（中略）しかし、他面において危険の存することをも忘れてはならない。宗教の伝える人間の真理にたいして無関心となる恐れがあり、その時々の便宜主義におちいる危険がある。その実例は、我々自身がいやというほど見せつけられている。」(42)

上記のなかに含まれるさまざまな要素を拾ってみると、その一つとして、宗教というものを、”年とともにいつの間にか育ってくる漠然とした宗教的感情”ととるか、”教育などを通し論理的にも教え育てていくもの”であるととるかが上げられる。また、「信じている」者は少ないが、「宗教心は大切」と考えているものが非常に多いという現象に対して、”宗教に関してあまり考えていないということ”ととるか”宗教心は大切だと思うが、宗派にはこだわらない”ととるかというとらえ方により、日本人の宗教心の解釈も異なってくる。事実、『国民性の調査』結果では、前者も後者も妥当な解釈となりうる。

日本人が「宗教心は大切」と答えていることに関して、喜多川忠一は次のように解釈している。

「その第１は、日本人にとって祖先を尊び祖先の祀りをすることは、宗教的な心であり、それは大切なことであるという考えである。『青年調査』（第２回、昭和５２年）によれば、『先祖を尊ぶことは大切か』に対して『非常に大切』が６３％、『やや大切』が３０％となっている。日本人のカミ・ホトケの観念が祖霊祭祀と混合融和していること、また日本人の祖先崇拝が儒教の影響を強く受けていることも改めて指摘するまでもあるまい。盆や彼岸の行事は、正月の行事や、３月、５月

の節句などと並んで日本国民の生活暦の中で大きな節目となっている。第２に、日本人にとって宗教といえば神道、仏教、キリスト教などが考えられる。もちろん多くの人々はそれらの教義をよく知っているわけでもなく、ふだん神社や寺院にお参りしたり、教会に出かけたりしているのでもない。しかし、多くの日本人はつぎのように考えているのではなかろうか。自分自身は特定な宗教にたいして信仰とか信心といえるほどのものはもっていないが、そうした宗教の存在そのものはいつの時代にも人間社会の精神的支柱になっているであろう、と。第３に、おそらく大多数の日本人は、自覚すると否とにかかわらず、人間は有限相対的な存在であり、この世界には人知や人力を越えた何か大きな力がはたらいていると感知している。それをカミというかホトケというか、あるいは天というか自然というかは別として、そうした大きな力ないし存在に対して、畏敬の念、敬虔の心をもつことは、人間としてきわめて自然な心情であり、それは宗教的な心ということであろう、と。おおよそ以上のような認識と心情が入り交じって、日本人の多くの人々に『宗教的な心は大切』と答えさせているのではなかろうか。」[43]

さらに、山本七平はこの日本人の宗教的無関心という問題を、宗教の「家にかかわる概念」と「個人にかかわる概念」の観点から取り上げている。

「．．．特徴は、宗教とは元来『家にかかわる概念』で、『個人にかかわる概念ではない』という点にある。これは多くの宗教調査、たとえば『あなたの宗教は？』といった質問に対して、殆どすべての人間がやや戸惑いをおぼえる表情で、『無宗教です』とか『特に別にこれと言って．．．．』といったあいまいな返事をする点にも表われている。こういう質問の仕方をすれば、『日本人は世界で最も宗教に無関心』という統計的結論が出るであろう。しかし、もしこの質問を『お宅のご宗旨は？』に変えれば殆どすべての人が明確な返事をし、同時に多くの人が「といって、私は別になんでもないですけど．．．．』と答えるのではなかろうかと思う――いや『思う』というより、範囲は狭いのだが、私が実験した結果ではすべてこれである。（中略）それをつきつめていくと『宗教とは私という個人にかかわる概念でなく、私は個人として宗教を意識したことがないがゆえに、私個人は無宗教であ

る』という言い方になってくる。（中略）この点、日本で最も活発な宗教団体が、その信徒数を『世帯数』で把握しているのは興味深い。おそらくこういう把握の仕方自体に、『個による信仰』に絶対性を置くキリスト教と違った面があるわけで、一体この『家的』と言っては語弊があるなら『世帯的』に宗教を把握し、把握さすという行き方がどこから来たのか、が問題であろう。これはおそらく日本的体制の基盤をなす日本人の宗教性の本質的な面に関わる問題と思われる」[44]と述べている。

また、この宗教とは「個人」の問題ではなく「家」の問題であるという感覚は、反面、「家の信仰」イコール、個人の宗教意識を滅した自分の信仰ということにもなることが往往にしてある。その感覚はさらに、会社や政党などという本来組織であるものにも「家」の感覚を持ち込み、その企業の神様をその組織ぐるみで信仰するとか、さらにはその対象が絶対神ではなく企業自身となり、自らを養ってくれる企業のために身を殺すというような現象を引き起こすとも考えられる。

以上、日本人の信仰心を種々の方面から探ってみたのであるが、国際的通念となっていると言われる日本人の宗教への無関心の中身は複雑であり、ある基準からみて無関心であると切り捨ててしまえない側面があるように思われる。第３の宗教ブームとまで言われる現代日本の状況、非常な勢いで成長している新興宗教、その現象が林が言うように加齢とともに高まってくるだけでなく若者たちにも多く見られる。

昭和６１年度版の『宗教年鑑』[45]では、いくつかの世論調査報告書をもとに分析した最近の宗教意識の動向についてまとめているが、その中にこの若年層の傾向をも記している。

「ＮＨＫの世論調査」は、日本人が「この１０年間で神仏をはじめとして、宗教的なもの、神秘的なものに近づいているということ、とくに、神仏を信仰する若い年齢層が大幅にふえていることを強調している。

最近若年層が宗教的に特異な傾向を示していることは、６０年に実施された毎日新聞の調査でも指摘されている。たとえば、神・仏の存在を信じるのは２０歳代で

４６％であり、これは４０歳代と並ぶもので、２０歳前半と３０歳前半を比べると１０ポイントもの開きがあるという。また、霊魂が死後にも残ると思う人は、４０歳代の４０％前後の平均をも超え５０％の高率を示し、３０歳代の３４％と対照的である。また、『人間の力を超えた霊能力（超能力）の存在」は５３％が信じ、３０歳代の３割台、中高年層の２割台と比べて突出し、『占いを信じるかどうか』についても同様という」

先に述べた『日米欧価値観調査』[46]でも、日本の場合２９歳以下で「霊魂（たましい）がある」と思っている者は７１．８％と７０歳以上のグループを除いては他のグループより高くなっている。しかし、イギリスではその傾向は見られない。

この物質豊かな現代日本の社会にあって何か精神的なものを求めていると思われる種々の現象、この背後にある日本人の宗教性とは一体何を意味するのであろうか。河合隼雄は次のように述べている。「現代の若者文化の大きい特徴は、その背後に宗教性の問題をもつことであろう。これはまた、いつの時代でもそうだとも言えるのだが、やはり現代はそれが特に強いと言っていいだろう。ここに『宗教性』と表現したことは、ある特定の宗教に属したり、それを信じたりすることを、必ずしも意味していない。ここでは、宗教性ということを。ユングにならって、自分を越える存在の体験を慎重かつ良心的に観察すること、という意味で使用している。そして、筆者の主張しているのは、若者文化の背後に宗教性が存在しているということであり、現在の若者文化が宗教性に満ちている、と言っているのではない。」[47]

一方西欧も含めて、近代文明の発展に伴って、宗教をもつことに対する蔑視の傾向も増加したという見方もある。宗教をもつことは現実からの逃避であり、非科学的であるというような考え方である。”宗教は女、子どものもの”という言葉に表現されているような姿勢である。　松本滋が青年期の一般的特徴としてあげている「合理的な物の考え方や科学的知識が学ばれるにつれて幼い頃素朴に信じていたことが信じられなくなる。（たとえばサンタクロースや魔法使いの実在性など）（中略）神や霊魂の実在性への疑惑もこうした思考傾向の延長線上にあると言える。と

くに今日の日本のように、科学的知識の教育に重点がおかれ、一般に宗教教育の軽視されている時代環境においては、この種の懐疑、不信はかなり広範囲にわたって青年の心をとらえている」[48]と述べているような懐疑が、青年のみならず種々の年齢層の心をとらえている。

しかし、西山俊彦は、宗教とパーソナリティとの関連性を「自我確立」なる心理学的観点から究明した実証研究の結果から、「宗教は自我確立の阻害要因としてよりも促進要因として機能しており、したがって、『宗教は逃避のメカニズム』というような表現は実証的検証を欠いた憶見に過ぎず、実態を正しく表わすものではない」[49]と述べている。

３．ご利益信心

宗教に対する無限包容性のゆえに、日本人の信仰心は宗教信仰のもつ一途さに欠けることになりやすいと見ている者たちがいることは前に触れたが、これは日本人をしてあらゆる宗教を等距離において鑑賞する態度を取らせ、自分達の生活の必要に応じて役に立つ部分のみを取り入れる態度を形成することにもなるように思われる。

宗教団体に対して所属意識をもって宗教活動を行う人は多くはないが、正月ともなれば明治神宮や伊勢神宮という有名社寺をはじめ何百、何千という社寺に参詣者が押しかけ、昭和５６年のＮＨＫの調査によれば、初詣を「よくする」または「することがある」という人は、被調査者の８１％にものぼっているという。あるいは、既成の社寺たとえば伊勢神宮や西本願寺への年間の参詣者も何百万もあるという。このなかにはその宗派の宗教内容について熟知して来ている者たちももちろんあろうが、それよりは漠然とした気持で除災招福を願って神社へ行って手を合わせたり、慣例にしたがって初詣や七五三のお参りをしたり、結婚式を挙げてもらったりする。あるいは楽しいからそれぞれの神社の祭りに参加する、そういう者たちのほうが多いことだろう。だからそれがどんな宗教であっても別にたいしたかわりはない。時にはたくさんの異なる社寺にお参りに行けば、それだけ多くの祝福を得られ

るような感じすらして、いろいろ訪ねてみるということもある。その意味でまた、日々生きている日常の生活とはたいした関わりはなく、必要のないときには何とはなしに無視されてしまうことにもなる。

このような観点から、あるいは前に述べたように日本人の諸宗教の受け入れ方がまるで薬を処方するような実利主義に根ざしている等の観点から、日本人の宗教はご利益信心であると言う学者も多い。入学試験での合格を願って、安産を願って、あるいは商売繁盛を願って絵馬を奉ずる人々、病気治しを祈願してお百度をふむ人々、法外とも思える大金を寄進して現世利益と後生を願う人々などは、日々我々が目にするところである。先のＮＨＫの調査では、お守りやおふだをもらうことがある人は、国民の８割に近いという結果が出ている。[51]これらの人々の要求ーー家内安全・無病息災・身体健康・病気平癒・交通安全・商売繁盛・開運厄除・学業向上・試験合格・良縁・子宝・安産・子どもの健やかな成長などーーに応えて、そこにいわば神々の専門化も生じる。合格・安産・商売繁盛・交通安全などが専門の神々は非常に多いし、どんな病気にもよくきく”病気治しの神様”なども非常に尊ばれているという。またさらに、細かく”腫れ物の神””耳ナリの神”などはその面で苦しんでいる人々に親しまれているという。また最近のように飛行機を利用して旅行する人々が急増すると、海上交通や陸上交通の神々だけではなく、航空機による旅行の安全を守護することを専門とする神が一躍脚光を浴びるようになってきているという。

これらのご利益信心に対して、内面的救済と無縁な迷信や現世利益で凝り固まっている打算的態度とする見方もあれば、彼らの祈りはしばしば生きるための最後の手段であり、肉親や友人に対する愛の表現でもあるととる見方もある。

いずれにせよ、現代が宗教ブームの時代と形容されているように、宗教的なものへの関心が高まっていることは事実としても、その関心がどの方向を向いているのかの吟味も必要のようである。

「たとえば、お祈り、お勤めを行うことや聖書、仏書などを折にふれ読むという精神的負担を伴う自己修養的行動と祈願、お守り・お札などを身のまわりにおく、

おみくじを引く、易・占いをするといった現世利益的行動に分け、神仏を信じる人の増加が必ずしも自己修養的行動の増加とは結びつかず、むしろ現世利益的行動が増加している」[52]というＮＨＫ世論調査部の報告も１つの示唆を与えてくれる。

また、平成３年１月４日付けの毎日新聞の朝刊には、同紙の「こころと暮らし」全国世論調査の結果を発表していたが、それに対する横山真佳の記述も、同じような問題を投げかけている。

「宗教ブームだといわれる。最近、人々は霊魂や来世を語り始めた。調査でも神仏の存在を『信じる』が５４％。そして、宗教が『救いになる』と『ある程度救いになる』を合わせると６５％という結果が出た。人々の宗教回帰傾向は否めない。

しかし、今日の日本の宗教の多くは戒律や来世を語らない。現世を越えた価値を提示してきたはずの宗教までが世俗化してしまっている。回答者が、一体何を神仏と言い、宗教としているのかの吟味はなおざりにできない。

霊能力（超能力）や占いをもてはやす層もある。霊界、ＵＦＯ、背後霊、そして妖怪や死後の世界ばやりである。しかし、これは現実ではない。非現実にしか心の安息を求められなくなっている表れではないか。

またしばしば指摘されることだが、日本人の宗教を考える上でやっかいなのが『信仰』と『習俗』の関連である。今回の調査では省かれているが、具体的な宗教行動を聞くと、新年の『初詣』や『墓参り』が、常にトップを占める。私たちの個人的経験からも、それが『信仰』による行為なのか、『習俗』によるものかは区別し難いところがある。『習俗』からは新しいモラルは生まれないし、教えの内面化もない。日本の宗教の現実が呪術的な”おかげ信仰”を基礎にしていることもよく知られている。家内安全、健康、合格祈願．．．．。いわゆる身近な現世利益である。神社仏閣を巡っての祈願、先祖供養みなしかりだ。占い原初的な信仰が今に生きている。私たちの宗教関心なるものは、まだまだ立ち入って調べる必要がありそうだ。社会的意味についてはなおさらである」[53]

もちろんこの苦しいときの神頼みの傾向は、何も日本人に限ったことではないだろう。ただどこに宗教的関心の比重があるかということではないだろうか。西洋で

も、多くの人々は精神的あるいは物質的に困った状態に陥ると、思わず神の方を向くという。

Vergote,A.は、５０人のイタリア人労働者を対象に調査した結果、彼らがあげた”思わず神をおもう”８４の事例のうち、４０の事例が”物質的窮状”に陥ったとき、１３の事例が精神的困難に直面したときの神頼みの祈りであったと報告している。彼はさらに、１１歳～１８歳の１８０人の生徒を対象にした調査では、１５％が物質的困難に直面したとき、４１％が精神的困難に直面したとき、１１％が不幸なときに、そして７％が自然の美しさに感動して、神をおもうと答えていたとも報告している。[54]

Stouffer,S.A. 等は、米兵の７５％が第２次世界大戦中危険な状況において、祈りは他の何よりも助けになったことを肯定しており、これは教育や宗教的信念とは関係がなかったと報告している。[55]

（１）北森嘉蔵　１９７３　日本の心とキリスト教　読売新聞社

（２）河合隼雄　１９８２　昔話と日本人の心　岩波書店　pp.１０６－１０７

（３）関根文之助　１９８６　日本人と八百万神－「やまとごころ」と外来思想　広池学園出版部　p.２２０

（４）関根文之助　前掲書　p.１５

（５）関根文之助　前掲書　p.２５

（６）井門富二夫・吉田光邦（編）　１９７０　日本人の宗教　淡交社　p.９１

（７）井門富二夫　前掲書　p.１１６

（８）湯浅泰雄　１９８１　日本人の宗教意識－習俗と信仰の底を流れるもの－　名著刊行会　p.１１６

（９）河合隼雄　前掲書　p.６４

（１０）中村元　１９８９　東洋人の思惟方法III　日本人の思惟方法

春秋社　p.２３

（１１）中村元　前掲書　p.２２

（１２）1980 International Conference of Human Values-Secretariat Office (ed.) １９８０　Survey in 13 Countries of Human Values. IBM Japan Ltd.

（１３）The European Value Systems Study Group　１９８５　日米欧価値観調査－７ヵ国データ・ブックー　余暇開発センター

（１４）Fromm,E.　１９５６　The Art of Loving; An Enquiry into the Nature of Love.　Harper & Brothers Publishers.
フロム　E.　懸田克躬（訳）　１９５９　紀伊国屋書店

（１５）松本滋　１９８７　父性的宗教母性的宗教　東京大学出版会

（１６）Nelson,M.O.　１９７１　The Concept of God and Feelings toward Parents.　Journal of Individual Psychology, ２７, pp.４６－４９

（１７）Strunk,O.J.　１９５９　Perceived Relationships between Parental and Deity Concepts.　Psychological Newsletter, １０, pp. ２２２－２２６

（１８）Vergote,A. & Tamayo,A.　１９８０　The Parental Figures and the Representation of God.　Mouton.
（１７，１８の引用は、Brown,L.B.のThe Psychology of Religious Belief　pp.８０－８２による）

（１９）中村元　前掲書　p.３２

（２０）喜多川忠一　１９８３　日本人を考える－国民性の伝統と形成－　日本放送出版協会　p.５７

（２１）鈴木秀夫　１９７６　超越者と風土　大明堂

（２２）鈴木秀夫　前掲書　pp. ７０－７１

（２３）Rahner,K.　１９７６　Grundkurs des Glaubens. Einführung in den Begriff des Christentums.　Herder.
ラーナー　K.　百瀬文晃（訳）　１９８１　エンデルレ書店

（２４）喜多川忠一　前掲書　p.６４

（２５）林知己夫　１９８８　日本人の心をはかる　朝日新聞社
pp. １９０－１９６

（２６）ＮＨＫ世論調査部　１９８４　日本人の宗教意識　日本放送出版協会
p.７

（２７）梅原猛　１９８９　日本人の「あの世」観　中央公論

（２８）中村元　前掲書　pp.３７－３８

（２９）河合隼雄　前掲書　pp.１６７－１６８

（３０）梅原猛　１９８３　地獄の思想　中公文庫　p.１９

（３１）Rahner,K. 前掲書　pp.５７３－５７５

（３２）Kuhlen,R.G. & Arnold,M.　１９４４　Age Differences in Religious Beliefs and Problems during Adolescence.　Journal of Genetic Psychology, ６５, pp. ２９１－３００
（ここの引用は、 Brown,L.B. の The Psychology of Religious Belief, p. １９３による）

（３３）The European Value Systems Study Group　op.cit.

（３４）関根文之助　前掲書　p.６４

（３５）文化庁文化部宗務課　１９８８　宗教年鑑昭和６２年版　ぎょうせい
p.１３

（３６）山本七平　１９８５　日本教の社会学　学習研究社　pp.１０８－１０９

（３７）松本滋　前掲書　p.１０５

（３８）中村元　前掲書　p.３５６

（３９）林知己夫　前掲書　p.１４１

（４０）林知己夫　前掲書　p.９５

（４１）林知己夫　前掲書　pp.１４１－１４３

（４２）中村元　前掲書　pp.３５７－３５９

（４３）喜多川忠一　前掲書　pp.７０－７１

（４４）山本七平　１９７８　日本人の人生観　講談社　pp.１０２－１０４

（４５）文化庁文化部宗務課　１９８３　宗教年鑑昭和６１年版　ぎょうせい
pp.１４－１５

（４６）The European Value Systems Study Group　op.cit.

（４７）河合隼雄　１９８４　日本人とアイデンティティ　創元社　p.３４

（４８）松本滋　１９７９　宗教心理学　東京大学出版会　pp.９６－９７

（４９）西山俊彦　１９８５　宗教的パーソナリティの心理学的研究　大明堂
pp. ２４２－２４３

（５０）ＮＨＫ世論調査部　前掲書　pp. ６－７

（５１）ＮＨＫ世論調査部　前掲書　pp. ６－７

（５２）文化庁文化部宗務課　１９８３　宗教年鑑昭和６１年版　ぎょうせい
p.１５

（５３）毎日新聞　１９９１年1月4日（朝刊）

（５４）Vergote,A.　１９７８　Dette et Désir: Deux Axes chrétiens et
La Dérive Pathologique.　Seuil.
（ここの引用は、Brown,L.B.の　The Psychology of Religious Belief.
pp.２００－２０１による）

（５５）Stouffer,S.A. et al.　１９４９　The American Soldier Vol 2;
Combat and Its Aftermath.　Princeton University Press.

第４章　倫理的価値意識

日本民族はこの日本列島のうえに、他と比較しても驚くほどの長きにわたり単一国家を形成し、文化を初めとしてさまざまな面で非常にまとまりのある伝統を形成してきた。そしてこの「まとまり」は血縁的な色彩を帯び、小さな結合組織はもちろんのこと、大きくは国家としてのまとまりに至るまで、一言で言うならば”家族的結合””親族的結合”の様相を呈していると言われる。学門や芸術の世界の「家」とか「一門」という言葉、人間関係、社会関係での「オヤカタ・コカタ」「ウチ」「ミウチ」、そしてさらには「ムラウチ」「ナカマウチ」などという日常生活で何気なく使われている言葉の中にも、この家族的・親族的心情を規範とした結合が伺われる。また最近国際社会の中で意識されるようになってきた企業における上司と部下の関係、企業戦士などと呼ばれる企業で働く人々の会社への忠誠等も、このあたりと大いに関係があるであろうし、千数百年に及ぶ皇室の存続という事実も、このような事情と無関係でないばかりでなくむしろそのもっとも典型的な事例であると分析している学者もある。

このようなまとまりの中にあって、日本人は結合を前提とした日本人独自の国民性を築き上げてきた。それは、自然と人、人と人の関係においても如実に現れている。西洋の社会では、自然は人間に対してあり人間が征服すべきものであり、人と人との関係は隔てのあるものであることを前提にしているのに対し、日本の社会においては、人間は自然の懐に包まれ抱かれて生きるものであり、人と人の関係も隔てのない結合、すなわち”和”を前提としている。したがって、西洋の場合は個人の自立を前提とし、自他の間に一定の距離をおいたうえで、自他の共同協力関係を実現していこうとするのに対し、日本人の場合は自己を抑制する没我型の譲り合い、相手の立場を言葉に表わさなくとも察しあう精神等が尊重されそれによって対立を処理していこうとする傾向があると言われている。そしてそのような傾向からの

当然の帰結として、日本人の判断や行動の基準は「他者指向型」「集団指向型」となり、人への細かい心配りのある献身、とことんまでの忠誠心などを育み育てる土壌である反面、自主性の欠如、人の思惑への過剰な反応、なれあい・もたれあいの甘えにつながる弱点も生み出しやすい土壌ともなっているという。

このような体質の中から生み出される、生き方にかかわる価値観にも、人間として西洋の他の国々と共通のものの他に、日本独特の味わいを示すものがあるに違いない。”恩・義理・人情”等もその1つと言われ、立ち難い人間同士の絆から来るしがらみは、舞台のうえでも多く取り上げられ、いつの時代にも日本人の心を揺さぶらずにはおかないのである。

本章では、宗教的意識や心情からさらに観点を広げて、上記のように風土や歴史と関連させた生き方にかかわる価値観を、倫理的価値意識を中心として論じてみたいと思う。

第1節　善悪の判断や罪意識

一言で「罪意識」といってもその意味するところはまちまちであり、その言葉が覆うはずであると考えられる領域もその立場によって大いに異なる。例えば、道徳的な悪は罪であるのか、恥の概念も罪意識といえるのか、犯罪はどう関わってくるのか。一つ一つ吟味し、定義づけて議論していくことも可能であり、大切なことでもあろうが、本研究ではそのようなものをごっちゃにぼんやりとかかえこんでいると思われる日本人の意識を対象としているので、日常生活のなかで見られる現象を中心に幾つかの考え方を列挙してみたいと思う。

上述のように日本人は一般に、西欧のキリスト教世界の人々に比べて「罪」の意識がぼんやりしているとか薄いとか言われることが多いが、その現象を湯浅は次のように分析している。

「西欧に比較しますと、我々の祖先たちの伝統においては、多くの場合、罪の問題は直接に『意識』とか『自己』の立場からとらえることが困難であったように思

われます。その困難さは、世界観の全体的な基本構造の違いからくるものです。例えばパウロやアウグスティヌスの場合、人間としての自己の存在は、至高で完全な人格である神とのきびしい内面的緊張関係のなかで自覚され、発見されています。自己はプラトンの洞窟から立ち現われた人間のように、究極の高みから射してくる光りの下で、否応なしにおのれのひきずっている暗い影を見いださざるをえません。ところが我々の祖先たちは、多くの場合、自己の存在をこのような形では理解しなかったように思われるのです。彼らにとって自己ないし人間の存在は、さしあたっては至高なる神に対して意識されるのでなく『世界』に対して見いだされるものであったようです。そしてその『世界』は、彼らの場合、いわば薄明のなかに見いだされる渾沌とした世界なのです。世界が薄明に閉ざされているということは、この『自己』という存在もまた、手さぐりの薄くらがりの中でおぼろげに見いだされる何ものかにほかならないことを意味します。（中略）彼らにとって、人間がそれにかかわることにおいて『自己』の存在を意識し発見する場所であるところのこの『世界』には、究極的存在は明らかな形では決して姿を現わしません。それはいわば大いなる沈黙として、どこかに隠れているのです。だから世界は常に薄明に包まれているのですし、この自己という存在の輪郭も明確ではないのです。私の考えでは、彼らが罪を直接に自己あるいは意識の問題として問うことができにくかったのも、そのためなのです。」[1]

このように古代から現代に至るまで日本人は、「罪」ということに対して”そうでもなくそうでもあり”というぼんやりとした意識を持ち続けてきたと考えられる。

北森嘉蔵は、日本人の罪悪に対する融通性を論じている。[2] そしてこのことは日本人が倫理性を審美性にまで変質させることによって生じるという。古代神道においては、罪悪は「けがれ」すなわち不潔としてとらえられた。罪悪を「けがれ」としてとらえる根底には、美感がある。我々の祖先たちの罪の観念を物語る最も古い文章の一つとして、『大祓詞』がある。これは古代の宮廷で毎年６月と１２月の末日に、半年間に蓄積されたさまざまの罪の結果としての汚れをぬぐい払って、こ

の世界を清浄に戻すための儀式の言葉であり、多くの汚れは処々方々から集められて川へ投ぜられ、やがて大海の果ての渦潮の底にある根の国へ吹き送られるということであった。現在でも「汚れ」としての罪悪は「祓」によって、はらい潔められるということで「お祓」の儀式は日々の生活のなかに入り込んでいる。これが日常語化されると、「水に流す」という考え方になると言う。北森はこのことに対し、「要するに罪悪に対する融通性である」「事がらに対して『一途にならない』という性格もこの融通性から生じる」と考えているが、野崎守英は同じ儀礼に対して、別の見方をしている。「『大祓』の儀礼は、世界のうちにたまった汚れを海の彼方に流し去るという考えを根幹にして成立しています。こうした儀礼があることが、汚いものはたれ流してしまえばそれでいいという思想が、悪しきものに対する日本における対し方の基本である、と見られることになるのですが、この見方はなかば誤解だというべきです。といいますのは『大祓詞』では、こうして追い払われた汚れを受けとめるものとして、特定の神がみがいると述べられているからです。『大祓詞』のうちに神がみが登場するのは、その場面だけです。そのことは、汚れたものを受けとめる働きをする存在を配慮する意識を強くもって、古代日本人が事態に対していたことを意味します。ただたれ流せばいいというのではないのです」(3)

また司馬遼太郎とドナルド・キーンはその対談の中で異なった見地から、日本人の美意識と善悪の問題を論じている。日本人は「政治的正義よりも、美学の英雄のほうをむしろ好むところがあります」「北条歴代の執権たちはひじょうに正直に政治をやって、日本という国のために努力したのに、ちっとも人気がないのです。」「そうなんです。殺風景ないわば野蛮人の感じが後世のわれわれにもあって、人気がない。なんだか義政のような放蕩息子に愛着をおぼえたりするのは、どういうわけでしょうね。」「日本人はいまでもそうですけれど、芸術家に対してひじょうに寛大ですね。日々の生活にいろいろ欠点があっても、芸術そのものがすぐれていたならばほかのことを許す。そういう面があるんじゃないですか。そこが中国ではちょっと違うような気がします。中国人だったら、杜甫はどうしてすぐれた詩人なのかと聞けば、国のために努力したとか、野蛮人が中国に入ったときに深く悩んだと

か、そういうことばかりを言うのですが、日本人は、そういうことはまず言わない。藤原定家がどうして偉かったかと日本人に聞けば、それはやっぱり和歌がひじょうに優美だったとか、幽玄の味があったとか、そういうことを言うでしょう。しかし、藤原定家は、当時の戦争に関して、それは自分とまったく関係がない、『紅旗征戎は吾が事にあらず』（『明月記』）と言っている。中国人の考え方では、そういう態度はまったくいけないことです。いくら自分が貴族で、いくら自分が風流人だからといっても、自分の国の成敗は自分と深い関係があると、中国人なら思ったでしょうが、日本では、芸術さえよければ、そういうような無責任な態度を許すことができたのです。」[4]

また日本人は、善悪の規範を自然であるか不自然であるかに置く場合が多いという見方もある。日本人は、外的・客観的な自然界に対してそのあるがままの意義を認めようとしたのと同様に、人間の自然の性情を容認する傾向があり、人間の自然の欲望や感情をそのままに承認し、しいてそれを抑制したり、あるいはそれと戦おうとする努力をしない傾向があるというのである。天然自然の秩序がすなわち善であって、人間がそのとおりにあるのが善である。日本人は「本心」ということを大事にするが、これも内心における自然の秩序であるからである。不自然はいけないのであって、ごく自然に感じられるようにしているのが”正直”であり”善”であるという情緒規範を大切にする。山本七平は小室直樹との対談のなかで歴史上の人物に対する日本人の反応をみてもそれがわかるという。[5] 理屈を言ったら興ざめで、「人生意気に感じて．．．．」情緒規範に対してあくまでもそのとおりに反応していく「純粋人間」に圧倒的人気があるという。人間は「純粋」であれば、どんな悪いことをしても許されるというところがあり、この意味で、”純粋であること”は特殊規範のようになっているという。

上記の美意識や情緒規範からもわかるように、日本人の善悪正邪の判断は、相対的であり、根底に絶対的な神を判定者とする思想はない。その基準は、状況相対的かつ個別的な性格のものであり、それゆえに矛盾的・背反的な行為をも許容する。

このモラル的形態を浜口は「個別＝状況主義」と名づけ、「行為者が、行為での

選択にあたって、その拠点を、自己の地位・役割とか特定の対人関係から規定されてくる、個別的な事実そのものに求め、そして同時に、そうした事実関係を維持するために、自己の置かれた立場や状況に即応することに心がけるような、生活上の心理的な構えを意味している」と説明している。濱口惠俊はこの「個別＝状況主義」の対局に「普遍＝論理主義」を置き、これらの２つのタイプのエートスが、文化の違いに応じて確かに存在するかどうかを知るために、日本人とアメリカ人を対象に調査を実施している。その結果、実証的なデータについて考えてみた場合にも日本人の志向タイプの基礎を形作る「個別＝状況主義」の相対的優位性は明確であったと述べている。このように「状況」重視する日本人は事実自体のもつ論理構造や事態のもつ本質を追究したがらない傾向がある。適切な倫理的行為は一般化されず、関与する２人の個人間の個別的関係によって決まるという。(6)

Reischauer,E.O. は、"The United States and Japan" の中で、次のように述べている。

「西洋では神あるいは社会との関係において、すべての個人を等しいものとする普遍的な倫理を構築する傾向があった。極東においては、すべての関係は特殊である傾向がある。正しい倫理的行動は一般化され得ず、そこにかかわっている２人の個人間の個別の関係によって決まるのである。相手があなたの統治者であるか、父親であるか、伯父であるか、年上の従兄弟であるか、弟であるか、隣人であるか、知人であるか、見知らぬ人であるのか、それによって接し方が異なるのである。」(7)

また、この善悪の基準が状況相対的かつ個別的であると言うことは、裏返せば中村元の言う「有限にして特殊なる人間結合組織を絶対視する」と言うことを意味するのであろう。彼は「有限にして特殊なる人間結合組織を絶対視する傾向は、おのずから普遍的なる人間の理法を無視する傾向にはしりやすい。すなわち、いかなるとき、いかなる所においても人間の遵守すべき法の存することを無視して、自己の所属する人間結合組織の現在の状況にとって好適であるか不適であるかということが、そのまま善悪決定の基準となってしまうのである」(8)「この傾向をその極限

まで押しつめていくと、空間的特殊性を強調する極限においては民族中心主義ないし国家至上主義となり、時間的特殊性を強調する極限においては、与えられた特定の状況に妥協する便宜主義・機会主義となることになる。そうして万人がいかなるとき、いかなる所においても遵守すべき普遍的な法に関する反省を等閑に付する傾向に転じやすい。普遍者を無視する思惟傾向は、人類の思想のうちに伍して普遍性をもちえない。それは他の民族の間に共鳴者を見いだしがたい。他の民族をして心から日本の思想に同化させることが困難なのである」(9) と言う。中村は過去の日本の過誤がこの普遍的なものを見失っているということから来ている場合が多いとの判断から、今後われわれは特殊的な「事」を通して普遍的な「理」を見いだすということを目指さなければならないという。

しかし、多くの日本人の意見は必ずしも彼と同じではなく、原理などというややこしく質面倒臭いものに煩わされないで直感的に行動するというのが日本人の良さであるととらえているものも多い。

またこの普遍的原理を、どういうものとしてとらえるのかにもさまざまな見方がある。状況と無関係に形式的・機械的に杓子定規に割り切っていくための原理ととるのか、絶対的な神が与えた人類に普遍な原理が結局は人間を幸せなものにするという視点にたって、その原理をそれぞれの状況に照らし合わせて判断をしていくものとしてとらえるのか等、いろいろである。普遍的原理をめぐって議論されているなかには、そのあたりの共通理解がなされないままに討議が繰り返されていることも多い。

Benedict,R. が文化の類型を「罪の文化」と「恥の文化」とに分け、日本は後者の典型であるとして以来、「罪と恥」とはよく対比して論議されるようになった。日本人の行為を規制するのは、”自分を眺める他人の目である”。良心のうずきが人を行動へと駆り立てる内在的な要因に基づく内発的な行為ではなく、他者による評価をおもんぱかることが行為を動機づける、外材的な要因に頼りかつそれによって強制されている行為であるという見方である。それは「恥」を懸念する行動形態といえる。内面的基準に従う行為は人が見ていようといまいとかわりなく絶対的な

基準に照らして善悪が判断され、良心にもとる行為は他者に知られない場合でも「罪」に基づく行動となるのに対して、この「恥」に基づく行為は、自己の行為の基準を他者の側に置き、他者の期待に添った行動であったかが問題となるという。

余暇開発センターの調査[10]によると、日本人の親の子供に対するしつけの中にも、このような"恥"のしつけ、すなわち他者による評価をおもんぱかる行為の動機づけがなされているという。すなわち、「親が自分に『そんなことをすると、人から笑われるよ』とよくいってしつけた」という項目に対して、「あてはまる」と答えた者は全被調査者の６０．８％であり、さらに、女性群の結果のみを取り出して、年代別に見ていくと、２０歳代は４６．３％、３０歳代５９．５％、４０歳代６８．３％、５０歳代７５．６％、　６０歳代７５．７％となり、年代が上がるにつれて、肯定率が高くなっていると報告している。

しかしまた、この行為基準の外在性・内在性という根拠から、「恥」と「罪」とが倫理的規範の２つの対立する類型としてとらえられたり、あるいは「恥」と「罪」とがまったく無関係であるかのごとくに前提されたりすることへの反論もある。土井健郎はこのことについて次のように述べている。「このことは事実と明らかに相違する。なぜならこの２つの感情は同一人物がしばしば同時に意識するものであって、相互に極めて密接な関係があると考えられるからである。すなわち罪を犯した人間は、しばしばそのような罪を犯した自分を恥じるのではなかろうか。」[11]「罪を恥じる」という言い方は日常生活においてよく耳にするが、これは「罪」と「恥」との密接な関係を端的に表現していると言えるだろう。「西洋人は、エリクソンの言うごとく、恥を恥としてではなく罪の感覚の中に包摂して感じていると考えられる節がある」一方、日本人も日常生活の中で「罪深い」「罪作り」「罪滅ぼし」「罪のない顔」「罪なことをする」等という言葉をしばしば用いる。また、上記のような日常化したレベルよりも、さらにもっと深い意味での罪悪感・罪業感などとも無縁なわけではない。日本人が日本に仏教をとり入れたときのとり入れ方に、その現れの１つを見ることができる。湯浅は次のように述べている。「日本人はインド仏教のように人間の存在状態を理論的また分析的に『一切皆苦』として認識

するよりも、実践的情意的に内面化して、情感的自己凝視から道徳的自己反省へ、さらに宗教的自己認識へと進む方向をとった」[12]という。そしてそこにおける罪意識は自己と他者の社会的関係から生まれる罪を指すのではなく、自己の自己自身に対する関係において生じるところの、主体的な罪意識を表現しているのである。

このような意味からも日本人が「罪」の意識をもたないなどとは断言できないが、「ただ日本人の罪悪感は、自分の属する集団を裏切ることになるのではないかと言う自覚において、もっとも先鋭に現れることが特徴的」なのである。しかし「実は西洋人の罪悪感の場合であっても、その根底には裏切りの心理があると仮定することができるが、彼らはそのことをふつう意識はしない」[13]のだと土井は見ている。

さらに、この「恥」の概念自身についてもその意味するところはさまざまで、この意味からも Benedict,R.のとらえが皮相的であると言われる場合もある。「恥」と言う概念をまわりにいて自分の行動を見つめる人のことを想定して、彼の嘲笑を避けようとする態度であるととらえる見方もあるが、土井は Bonhoeffer,D.の遺著『倫理学』に中に述べられているように、「恥は人間が根元から離れていることについての口に言い尽くせない想起である。それはこの隔離に対する悲しみであり、根元との一致に戻りたいという無力の願望である。（中略）恥は自責よりもっと根元的なのである」というとらえのほうが彼がこの著書で展開している恥の分析とも一致するという。

また作田もベネディクトの「恥」のとらえかたが一面的であると批判している。「われわれが恥を感ずるのは、他人の拒否に出会った場合だけではない。拒否であろうと受容であろうと、われわれは他人の一種特別の注視のもとにおかれたとき恥じる。公開の場の嘲りに対する反応に、ベネディクトはこだわりすぎた。これは恥の１つのケース公恥（Public Shame）と呼ばれる側面に過ぎない。日本文化を＜恥の文化＞と規定する以上、賞賛される恥やその他の多様な現象形態にも適用されうる恥の概念を構成する必要がある。言い換えれば、いっそう基底的な層において、恥をとらえなければなるまい」[14]また、基準の外在性・内在性に関しても「恥に

不可欠な要素として羞恥が含まれていることを認めるなら、恥による行動の規制は外側の世間から行われるだけでなく、自我の内側からも行われるといわなければならない。罪に関しても同じことが言える。罪による制裁はいつも内面的な良心の呵責だけであるとは限らない。人間の社会が存在するところではどこでも、人は刑事上の罰や世論の非難を恐れて行動を抑制する。」(15)

以上、日本人一般の善悪の判断や罪意識としてよく取り上げられる考え方を列挙してみたが、それでは日本人は神仏等超越者が、これらの悪い行いや罪に対してどのようにふるまうと考えているのであろうか。

母性的であるがゆえに無限抱擁的であるという神概念を支持する立場の者たちは、「母は無条件の愛で何もかも包容する。善いとか悪いとか言わない」と言う。これは一切のものの現状肯定に帰着する。この見方にたいしては一歩翻ると、一切の現状を肯定放任するという考え方にも連なると懸念する見方もある。

どの程度日本人に一般的かは定かでないが「悪人正機の救い」の教えもかなり浸透しているように思えるが、この教えのとらえ方も本来は罪悪深重・煩悩熾盛という悪人の自覚の徹底こそが往生へと転じるという事であろうが、「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」の箇所を都合よく解釈してるむきもある。

さらに一般的に見られる傾向は、神からの「罰」や神や霊の「たたり」を恐れると言う態度であろう。濱口は日本人は「恥」の延長線上において「罰」を意識するという。(16)ただその場合、前者では未然的予防としてのモラルが、後者では已然的反省としてのモラルがそれぞれ作動するともみなしうるのである。「罰」は神仏等超越者が、人倫にもとる行為をした者、逸脱者をその状況において個別的に裁き、具体的に処罰するものであると考えられており、日本人は幼いときから「悪いことをすると罰があたる」と言うことを頻繁に耳にして育っており、大人になっても後ろめたいことをしたときなど「罰があたりそう」だと不安になることは、日常生活でよくあることである。

また、日本人の中には悪い行いをすると「たたり」がふりかかってくると恐れる傾向もある。神木を伐採した「たたり」であると言うような信仰は山神・海神・巨

木・獣等の生ける大自然にみなぎっている自然霊への畏怖であろうし、祖先を粗末にした「たたり」などは人間霊への畏怖であろう。さらに、多少異なる見地から「怨霊のたたり」というものがある。身に覚えのない無実の罪のために現世の人々を恨んで死んだ人々や魂、つまり自己の犯した罪に対する正当な罰という形でなく、不当な仕打ちを受けた魂が怨霊である。そしてこの怨霊のたたりは、彼に不正を加えた当の相手やその子孫ばかりでなく、無関係な第３者にも及んでいる。このような神秘を前にして、日本人は自己の個人的内省や道徳的行動を越えた目に見えない運命の諸力を感じるのであり、倫理的相対性もそのような複雑な人間模様の連なりに深く根ざしているといわれる。

一方、キリスト教の”罪”に対する考え方を、Rahner,K や Nemeshegyi,P. の著書の内容を中心にまとめると以下のようである。[17]人間の自由と責任は、人間の実存規定に属する。この自由の根本本質は、人間があれこれの物事を任意に行ったり行わなかったりする、任意な取捨選択の能力のように解釈するのではない。自由とは何よりもまず、主体が自らのあり方をゆだねられていることである。

自己を支配するという自由は、最終的決定をくだしうる自由でもあり、それは我々が「神」と名づける人間の超越の目標と源泉に対して、自由で絶対的な肯定もしくは否定をなしうる自由でもある。人間は自由の存在として自分自身を否定し、その結果また神自身に対して否定をなすことができる。ここにキリスト教がさす根元的な「罪」が存する。それは神自身に対する否定であって、ただ単に人間が造りあげた神、もしくはあどけない想像を持って考え出した神に対する否定ではない。また、そのような神に対する否定は、あたかも我々の個々の善悪の諸行為を後から決算するような、単なる道徳的な集計ではない。厳然として現存している聖なる神秘に対して、さらにまた、自らを恵みを通して与え、その絶対的な交わりに人間を導こうと意志する神秘に対しての根元的な否定である。そしてこの否定は、人間の目からは隠されている神とその人との関係であって、決して生涯の特定の時点を取り出して、確信を持って、他ならぬこの時点で神に対する真に根元的な否定がなされ

たなどということはできないものである。すなわち、一見してまったく無害な様相の元に、取るに足らない世界内のことを仲介として、神に対するこの否定的態度が取られることがある。また見た目には極悪非道の犯罪であっても、場合によってはそれはまだ人格的な発露に至る以前の状況の現象に過ぎず、神の前では何ら悪質なものを秘めていないかもしれない。しかし他方では、小市民的な善良さの装いの背後にも、ただ単に苦悩からやむなく苦りきっているというのではなく、真に主体的になされた否定が潜んでいるかもしれないのである。

以上のような根元的な神の否定ではなく、神の愛のおきてに逆らうことも「罪」と呼ばれる。

人間とは本質的に神に造られ神との永遠の愛の交わりへ召されている存在であり、また他の人々と共にいて、彼らのために生きるべき存在である。そこで、人間に特有な悪「罪」とは人間のこうした愛に根ざした本質を、考えと行動によって否定することにほかならない。すなわち、罪とは愛の欠如である。人間は他の人々とともに、他の人々のために献身的に生きるときにこそ、人間本性にふさわしい生活をし、真の人間となるのである。他の人々の存在と幸福と喜びとを望み、窮乏に同情し、心を理解することは愛の生き方であり、反対に絶えず自分自身とその利益、名誉などのことだけを考え、他の人々の独自性を認めず、彼らをただ自分の自己主張の手段とみなし、彼らがかけがえのない存在であることを考えもせず、彼らの生命権を認めようとしない態度は、愛のない生き方、すなわち罪のそれなのである。罪は他の人のいのちをみじめにするばかりでなく、愛を否定するその人自身のいのちをもみじめにしてしまう。なぜなら人間は愛するときにこそ真に生きるのであるからである。つまり、愛は自他のいのちを保ち育て、罪はそのいのちに敵対するものである。

神は善そのものであり、いのちを愛するから、人間が愛に生きることを望み、人が自分自身や他の人々の中の真のいのちを破壊する態度、すなわち愛のない態度をとることを忌み嫌っている。だから人間の罪は、他人の権限を侵すだけでなく、神の意志にも背くものなのである。

しかし、神は罪そのものは忌み嫌うが、罪を犯した人を嫌うわけではなく自分のいのちをかけるほどに愛している。それゆえ罪を犯したものが自分のいのちを破壊する罪から解放されて再び生きるようにと望み、常に働きかけている。

それゆえキリスト教における善悪の基準というものを一言で表現するならば、それは「神から受けた愛のおきて」にあるといえるのではないだろうか。

第２節　判断の基準・行動の基準

１．人と人との関係

前節で日本人の善悪の基準が状況相対的であるという意見があると述べた。この状況相対的傾向は善悪の問題に限らず、日本人の日常生活の行動一般において見られる傾向でもある。そして、日本人の原行動が状況中心的である理由の一つには、その人間観・対人関係観が起因しているともいわれている。

そこで、本節では日本人の人間観・対人関係観について一般に言われていることをまとめ、そのことと状況相対的判断とのかかわりについて考えてみたいと思う。

欧米人と日本人では、自我のあり方が異なっていると言われている。欧米人が「個」として確立された自我をもつのに対して、日本人の自我は常に自他との相互関連のなかに存在し、「個」として確立されたものではないという。このことは、日本人が”ひと”をあらわす言葉として、「人間」という語を用いていることにも示唆されていると、浜口惠俊は次のように述べている。(18)

「私たちは”ひと”を表わす言葉として、『人間』という語を用いている。それは、”にんげん”と読むかぎり『人類』の意である。しかし、字義から言えば、”人と人との間”に位置づけられる存在を意味する。だからそれは『人間（じんかん）』としての”ひと”を表わす言葉なのだ。私たち日本人は、”ひと”を、このように、対人関係と切り離すことのできない存在だと受けとめている。”ひと”を、

たんに『人』と書き表わすにとどめず、”人の間”を指す「人間」と表記するとき、”ひと”という存在は、対人関係の中に内在化されてしまう。それは決して単独に存立する一個人を意味しない。（中略）だが、西欧語では、”ひと”を表明する語に、対人関係の意を含ませることはない。man や　person は、それぞれ互いに独立した行動主体である。したがって、対人関係を表わすには、あらためてhuman relationとか interpersonal relationship といった言葉が必要となる。」日本人の人間観を端的に示すのが「人間」だとすれば、「西洋人のにんげん観は、たとえば英語で一個のひと（個人）を表わす"the inidividual"といった言葉から推測されよう。語源的に眺めると、それは、ラテン語のindividuus（分割されない・分割不可能）に由来する。つまり『個人』というのは、これ以上分割することの不可能な実体のことなのだ。社会を構成する究極単位としての”ひと”、それがにんげんだという見方である。「個人」は、そのような社会の究極単位であるとはいっても、それ自体が意志や意識をもたない単なる細胞ではない。自己自身がはっきりとした自律性と選択意志をもつ独立主体なのであり、その主体が他の主体と取り結ぶ関係の全体的ネットワークが社会だ、と見なされる。このような観点からすれば、「個人」は、社会の単位的要素というよりも、主体的な構成要員なのである。」　一方「『間人』としてのにんげんは、確立された個人的自我の連結体では決してない。それは、対人的な意味連関の中で、連関性そのものを自己自身だと意識するような、にんげんの在り方を指している（中略）他者との一体感（場合によれば対立的な感情）が先にあって、その対人感覚自体が自己の存在を確証する場合だ、とでも言おうか。あるいは、主体と人的客体との融合状況において成立するにんげんのことである、と言っても差支えない」

この自他相即的な自意識を日本人は普通「自分」と呼んでいるのであるが、木村敏も彼の著書『人と人との間』の中で、「日本語においては、そして日本的なものの見方、考え方においては、自分が誰であるのか、相手が誰であるのかは、自分と相手との間の人間関係の側から決定されてくる。個人が個人としてアイデンティファイされる前に、まず人間関係がある。人と人との間ということがある。自分が現

在の自分であるということは、けっして自分自身の『内部』において決定されることではなく、つねに自分自身の『外部』において、つまり人と人、自分と相手の『間』において決定される。自分を自分たらしめている自己の根源は、自己の内部にではなくて自己の外部にある」[19]と述べている。

このように考えていくと、自他の共有する生活空間が、非常に大きな意味を持ってくる。なぜならこの空間なしには、「間人」としての「自分」の生活はありえないからである。

このことは山本七平が日本人のエートスとして考え出した「日本教」の教義にあたるものが”空気”であるとした、その空気の概念ともかなり重なり合っていると思う。この”空気”という原則なき原則は、日本人にとって現実に規範的に絶対なものである。（”空気”は規範の特性――これは正しい／正しくない、この場合にはこうしろ／こうするななどということがはっきりしているという特性――をもっていないので規範とは言えないが、その社会学的特性――それが正当性を有し、したがってその遵守が要求され、遵守しない場合には制裁が加えられるという特質――が規範と同じであるという意味において、ここでは”規範”という語を用いている。）誰も「それが空気だ」ということになれば反対できず、それに逆らうことは、とんでもない悪いことのように思われている。日本人は”空気”には非常に弱い存在であって、どんなに対抗しても、それを変えることはむずかしい。そしてこの空気は、唯一絶対の神との契約による規範、さらに広げて考えれば、一般的規範が一義的に明示され、それが社会的状況からも人間関係からも析出されている社会など規範が存在している社会　および歴史的「時間」という考え方をもっている社会には発生せず、その両方を持たない日本のような社会にこそ生じるものである。[20]

このようなことを考え合わせると、「間人」に代表されるような人間観を持っている日本人が、人と人との間に共有している空間、今、ここの空気というものを絶対視していくメカニズムが理解される。

以上論じてきたことと多少ニュアンスを異にするが、日本人の人間観から生じて

いると思われる同じ様な傾向として、”世間”が生活の規範・行動原理となっていることが上げられる。「世間体」「世間並み」「世間の目」「世間の手まえ」「世間の噂」「世間の評判」「世間ずれ」「世間知らず」「世間離れ」「世間騒がせ」等々日常生活でよく使われる「世間」と組み合わさっている言回しを数え上げればきりがないが、その数のみならず内容をから言っても、いかにこの世間が日本人の生活や行動の基準になっているかを窺い知ることができる。「世間体」や「世間の目」を気にしながら、「世間知らずだ」「世間離れしている」と言われないように心を配り、何事も「世間並み」にするのが無難であり、少々無理があっても「世間の手まえ」しないわけにはいかないのである。「世間騒がせなこと」をしたら「世間様に申し訳なくて」「世間に顔向けができない」のである。「世間に対して恥ずかしくないよう」「世間の笑い物にならないよう」心掛けることも大切なのである。このように「世間」というものは、日本人の日常生活において、従うべき基準・生き方の基準となっているとも言えるのである。

このように自他ともに共有する生活空間、その場の空気、世間の空気のなかに存在し、そこに自己の存在の確証をみる日本人は、その目に見えず、言葉にも容易に表現できない空気を、どのようにしてそれととらえるのであろうか。そこには言葉を労しないで「察する」敏感さが要求される。自分は一個の人間としてどう考えるか、対処するかということよりは、相手や仲間や周囲の人々がどう感じ、考えているかを敏感に「察する」のである。そして、たとえ自分の意見などがあってもまわりにある空気と異なるようであれば表面には出さず、その場にあう空気に合わせるよう努めるのである。そのことは往々にして、日本人は自分の信念をもたず、その信念に従った判断や行動ができない、しないと、西欧の人々から非難されたり、不可思議に思われたりすることの一因ともなる。

また、この「察し」は、相手を傷つけまいとしたり、仲間の和を保とうとする他人への心づかい、いたわりとしても働き、「以心伝心」ということばもあるように、日本人の間では日本人が特に備えている長所のひとつとして評価もされている。しかし、これは言葉に表現できない空気を察するのであるから、はっきりと提示し

て初めて相互理解が成立する国際社会においては、通用せず、誤解を招くことも少なくない。さらに「肚の探り合い」などとも言われるように、日本人の言語習慣では言葉というのは一種の飾りのようなものであって、言葉で表現していることと、本当に思っていること・肚の中で思っていることとはおよそ異なることがあり得るということであれば、なおさらのこと国際社会で誤解を招くことになるであろう。

日本人同志であっても、ジェネレーションの違いや個人個人の感じ方・考え方の違いを度外視して自分の「察し」に頼りすぎれば、おせっかいやありがた迷惑になったり、気兼ねや遠慮にもつながってくることにもなる。しかしそれでも、若い世代といえども、この空気を察して行動しなければならないという枷からは容易に抜け出すことはできず、中学生などでも一番気にするのは友達間の空気である場合が多い。他に流されないで自分の正しいと思う道を進むというよりは、友達からはずされることを極度に恐れて、その場の空気に合わせて多少の不正をもしてしまうという現象も往々にして見られる。

ＮＨＫ世論調査部の調査結果にも、日本人がいかに”まわりに合わせて”判断し、行動しているかが現れている。「日本人は自分の意見を主張するよりも他人に合わせるほうを好む、というようなことが、よく言われる。じっさい、私たちの調査でも、そういった傾向がはっきりと出ている。調査にあたって、わたしたちは、『多少自分の考えに合わない点があっても、みんなの意見に合わせたい』という考え方を示し、それについて、『そう思う」か「そうは思わない」かをたずねた。その結果、回答者の７６％は、みんなの意見に合わせるほうを選んだ。この質問では、回答者の年齢によって結果にかなりの差があるけれども、どの年齢層でも、６割以上の人が『みんなの意見に合わせたい』と思っている。みんなに合わせる、というふるまい方は、一般に言われているとおり、大多数の日本人に見られる」[21]と報告されている。

２　恩・義理・人情

日本人が人と人との間の空気を大事にすると言われていると述べたが、そのよう

な対人関係にあっては、具体的レベルでは、相手やまわりの人々の期待を裏切らないような行動をとるべきだというモラルが生じやすい。日本人のそういうモラルとしては、古来「恩」と「義理」の観念があった。そしてこの「恩」「義理」にかかわる感情として常にともに上がってくるのが「人情」である。

木村敏も先に引用した人と人との関係から出てくるモラルとして、「義理人情」を次のように見ている。

「日本では『私』が誰であり、『汝』が誰であるかは、けっしてそれ自体で決定していることではなくて、そのつどの『私』と『汝』との間、つまり人と人との間のあり方によって、そのたびごとに改めて規定されなおされる。そして、自分が何であるか、誰であるかがそのようにして決定されるだけではなくて、自分がいかにあるべきかもまた、この人と人との間からの規定を蒙っている。ここから、人のあるべきあり方を律する一種の道徳律のごときものとしての『人情』が、またそれによる被拘束性としての一種の義務としての『義理』が生じてくるのであろうし、これに違反した場合には、独我論的に神と結びついたキリスト教的な『罪』の意識に代って、人前での対面が問題になるような『恥』の意識が発生するのであろう。」(22)

我々日本人がこれらの言葉を使うとき、たとえば「人情」というとき、単に人間の感情一般を指すのではなく、それがとくに日本人に馴染み深い感情の系列を指していることを、暗黙のうちに了解している。そして同様のことが「義理」や「恩」という概念にも言えるであろう。これらの概念は漠然としているが、日本人であれば知らず知らずのうちに弁えていると思われる日本独特な感情で、他の国の人には分かりにくいものであるとも言われている。

しかし日本人の間でも、いざその意味するところを的確につかもうとすると、同じようにとらえていると思われたその意味内容が非常に多面的で、かなりニュアンスの違いがあることにも気がつく。

このような意味から「恩」「義理」「人情」として一般の日本人が把握していることを明確に浮き彫りにすることは難しいが、他のテーマと同様に、それらについ

て論じられているいくつかの意見を列挙することにより、おおまかにその概念を把握してみたいと思う。

濱口は次のように説明している。「『恩』と『義理』とは別個の観念だとされることも多いが、『恩義』（恩返ししなければならない義理のある恩）という言葉からも知れるように、両者が密接に連関していることもまた事実である。両者はともに、対人関係における双務的な役割遂行にかかわるモラルだといえよう。（中略）私達が日常生活の会話の中で、『恩にきる』『恩にきせる』『恩返し』『恩知らず』といったときは、受恩や報恩のことを意識している。また、『（命の）恩人』『恩師』『恩恵』『恩を売る』などという語を用いる場合は、授恩、施恩の意味が込められている。このように『恩』の含意は広い。」[23] Lebra,Tは、下位者の献身的な報恩だけがもっぱら期待・要請される「恩」にかかわる対人関係は、まったく不均性なものであるとしたが[24]、濱口は　この相互作用のなかでの恩意識を、等価交換的な契約的関係になぞらえて眺める発想そのものに疑問を抱いている。「『思い遣り先行型』の交換を行なう日本人にとって、何によって、”互恵”的関係を安定化させ、『間柄』を維持して行くかが、もっぱらの関心事となる。この課題に対し、『恩』は、たとえ好意の不確定な交換であるとしても、互恵的な相互性を確保するモラル観念として、大きく寄与するのである。一方的な恩義によって、結果的に当事者間に不均斉な状況が生じようとも、彼らが『間柄』の維持を欲するかぎり、それは決して不自然でもなく、また改善されるべき問題だとも思われないであろう」[25]と述べている。

この『恩』が、互恵的相互作用を、当事者の一方の自発的好意にゆだねる形で維持しようとする社会意識であるので、それは実際上、片務的サービスの任意的交換となって現われるのに対して、サービスの交換が相互拘束的に行なわれる、すなわちいくらか強制化された形での双務的サービスとなった場合、この関係を規制するモラルが『義理』である。「それは、ある程度強要された双務的交換、すなわち、好意＝謝意、施恩＝報恩、給付＝反対給付、権利認定＝遂行義務、等の強制的対応を意味している。近代的契約と異なり、特定の他者との情義的かつセミ・フォーマ

ルな約定としての義理は、川島武宜の指摘どおり、『特定の他人との間に一定の”協同体”的な関係を維持し強化するに必要な行為の履行を要求する』ものなのである。」[26]

濱口は「義理」と「人情」の葛藤について「義理が”不本意ながら”なされることもあるタテマエとしての倫理であり、その限りにおいてホンネとしての人情と葛藤するのだ」という安田の説を支持している。

土井健郎は、「義理」とは「もともと自然発生的に人情が存する親子や同胞の間柄とちがって、いわば人為的に人情が持ち込まれた関係である」と定義している。「すなわち義理の関係といわれるものは、親戚付き合いにせよ、師弟の間にせよ、友人の付き合いにせよ、はたまた隣近所の付き合いにせよ、すべてそこで人情を経験することが公認されている場所である」。そして「人情と義理は単に対立概念ではなく、２つの間に有機的な関係が存するのであり」、「義理はいわば器で、その中身は人情である」のであり、「一見義理と人情の板ばさみと見られる状況はすべて、厳密にいえば、義理と義理の板ばさみであって、いいかえれば人情自体に内在する葛藤と考えねばならないのである」という。

「恩」というのは「『一宿一飯の恩』というように、ひとから情け（人情）を受けることを意味するが、してみると恩は義理が成立する契機となるものである。いいかえれば恩という場合は恩恵を受けることによって一種の心理的負債が生ずることを言うのであり、義理という場合は恩を契機として相互扶助の関係が成立することをいうのである」[27]という。

源了円は『徳川時代の文学に現われた義理と人情』と題する著書のなかで義理の観念をめぐって展開していく過程を追っているが、「義理」ということの本来の意味は「信頼しあう人間同志の魂の呼応」であると述べている。「それは対世間的道徳というより、パーソナルな信頼しあっている人間同志の間に成立する情的紐帯、魂の呼応」であり、「規範的なものというより、むしろ情的なものであり」「不本意なものではなく、自発的なものであった。」現代の我々世界においても上記のような義理の観念がないわけではないが、やはり我々に親しい義理の観念は、この生

々しい情のつながりが希薄になって、我々を束縛する一種の社会規範となったものであろう。このような義理の観念の成立過程を源はつぎのように述べている。

「他者からの自己に対する眼というものを、自己の意識から切断して、自己のうちなる良心において、神との対話を試みるキリスト教徒のばあいとちがって、義理はあくまで『名誉と恥』の価値体系の上で、世間の眼の中での魂の呼応であった点に、義理の特徴がある。

義理の成立する領域は、良心と普遍的道徳規範との中間地帯であった。それは良心のように内面化もせず、普遍的道徳規範のように客観的妥当性ももたず、あくまでも人と人とのあいだのモラルであった。孤立的個人の場合でも、自己の行為を見ている他者の目があった。他者の眼がなくても、他者の眼を感ずる自己の意識があった。この他者が我にたいする信頼者としての汝から、自己の所属する集団へと拡がることは容易である。このばあい、信頼によってつながる人間関係を切断して、自己を見る世間の眼だけが意識される。このとき、われわれが今日ふつうにいうところの義理が成立するのである。」[28]「近松のばあい、義理の内容が情的性格をおび、他者に対する共感、呼応というような一面をもっていたので、義理と人情が対立するばあい、登場人物は自己の心の内部において精神的葛藤を生じ、自分の存在が引き裂かれるような苦悶をおぼえたが、それ以後では義理は自己の外にあって、自己にそれに従うことを強制する社会的拘束力という性格をおびることになった。したがって、義理と人情の対立はあっても、近松のような葛藤はなかった。」[29]

さらに、源は従来の義理についての研究が、あまりにも義理を日本特有のものとして取り扱っているのではないかとの懸念を示している。義理は、hierarchy に規定されている要素以外の点では、一定の社会的条件をもつ他の民族にも存在しうるのではないかというのである。義理を、「信頼しあう人間同志の魂の呼応と考えるとき、それはけっして日本だけに特有でない、人間にとって普遍的な精神現象なのである。この信頼、――時には好意という形をとるが――にたいして、なんらかのかたちでこたえようとするのは、人間にとって自然な感情である」[30]と述べている

。これは Benedict,R.の「義理は、人類学者が世界の文化のうちに見出す、あらゆる風変わりな道徳義務の範疇のなかでも、もっとも珍らしいものの一つである。それは特に日本的なものである」[31]という見解とは明らかに異なる見方である。

一方、南博の義理のとらえは次のようである。「『義理』ということばは、日本語で、いろいろな意味をもっているが、一番ひろくいえば、『義』とは、各人が、自分の『あるべきやう』をわきまえて行動することであり、『義理』とは義の道理にほかならない。だから、義理とか義というのは、社会生活のなかで自分が他人に対して、どのような関係にたっており、したがってどのようにふるまうべきであるかについての約束である。そうして、その約束は、義務とはちがって、権利の裏づけをもっていない。義理は、むしろ、自分をとりまく多くの人間のひとりひとりに対して、とるべき態度や行動の約束である。そうして、それが一般的にひろくなれば、『世間』に対する義理としての『世間体』がでてくるのである。義理は、親子、夫婦、同胞、親類、友人、目上、目下の間で、いろいろな形をとってあらわれるが、いずれにしても、むかしからきめられた約束として、理屈ぬきにそのまま、『あるべきやう』にふるまうことが要求される。」[32]義理に対する反抗の一般的な形は、「『人情』ということばであらわされている、人間性の要求である。古くから『義理人情』とひとくちにいって、義理人情を、なにか一つにむすびつけて考えるのが、ならわしになっているけれども、じつは、義理の約束でおさえられているのが人情であって、むしろ、『義理と人情の対立、板ばさみ』が、日本人の心理に特有な影をつけているのである。」[33]と解釈している。そして「日本名物義理人情」といった表現があるくらい、今日でも日本人の間に義理の心持ちは、根強く残っているという。

林知己夫も、現代の日本人が、いかにこの義理人情に動かされているかを、次のように述べている。

「義理人情・浪花節という非近代的で口にするのは恥ずかしいという人たちでも行動をみていると義理人情の筋で考えたり、浪花節好みの行動をしたり、ドライな行動をしても義理人情的な手当てをするというのを、よく見かける。いわゆるタテ

マエとホンネの美しい関係がここにも顔をのぞかせている。

なぜ恥ずかしがり、なぜホンネが出るのだろうか。義理人情に立ち迷いつつ行動することは合理的ではない（論理的ではない）、合理的でないことをすることは恥ずかしいことだと思う。だから義理人情など口にするのは面はゆい。だが、日本人の社会を円滑にするために、また心情にぴったりするためには、義理や人情に立ち迷わなければならない。ホンネをくすぐられ、渋面を見せながらも、そっと義理人情を楽しむプライバシーを保持できる社会がある、というのがかなりの日本人の安住の境かもしれない。」(34)

長年国民性の調査を継続している林は、この義理人情が時代をおいても変化しない、そして大多数の意見（全体ではもとより、どの年齢層でも、どの学歴層でも、男でも女でもその３分の２以上のものに支持される意見）であるということを、いくつかの例をあげて説明している。

「『２人課長がいる。一人は規則をまげてまで無理な仕事をさせないが、仕事以外では人の面倒をみない課長、もう一人は、時には規則をまげて無理な仕事をさせることがあるが、仕事以外でも人の面倒をよく見る課長である。そのどちらを好むか』という質問に対して、後者の人情課長タイプが大変好まれ、８５、７７、８２、８４、８１、８７％とＵターンとも見えるが、まずほとんど変化のない高率で、一方の非人情タイプの課長は１０％を少し上回る程度の支持しかない。両課長のイメージを尋ねてみたが、それは全くはっきりしていて出題者の意図そのものであった。」「『自分が社長だったら入社試験で２番の親戚より１番を採用する』というタテマエの意見も、７２％で大多数意見。」ではあったが、「－－－一つの社会への義理－－親戚でなく恩人の子供であった場合は回答が半々に分かれて大多数意見でなくなる」「日本人の義理人情好みは変化してないし、その考え方の構造も変化していないことが、分析の結果明らかにされるのである」「義理人情に関係する質問群から、その程度を測る尺度をつくってみたところ、この１５年間ほとんど変化のないことが分かった。絵に描いたような義理人情型はほとんどいないし、、全くその傾向を示さない人もごく少数である」(35)

余暇開発センターの調査項目の中にも[36]、上記の林の”人情課長”に類似したものがある。すなわち、上役として「仕事以外のことでもいろいろ頼れる人」を好むのか、「仕事以外の私的つき合いはしない人」を好むのかを尋ねているもので、前者に対する支持率は６１．５％であるのに対し、後者への支持率はわずか１７．３％であった。

しかし、これまで見てきた日本人の「恩」「義理」「人情」「恥」「察し」等の細やかな心遣いや気づかいが、何の分け隔てもなく、すべての人間に対して向けられているのかというとそうでもない。日本人の人間関係、社会関係を見る時、そこに「ウチ」と「ソト」に対する態度の違いが歴然としていると言われ、それを日本人の特性と見る識者も多い。

土居健郎に言わせると、「日本人にとって内と外の生活空間は、厳密に言えば３つの同心円からなり」、「甘えが自然に発生する親子の間柄は人情の世界、甘えを持ち込むことが許される関係は義理の世界、人情も義理も及ばない無縁の世界は他人の住むところ」で、「この一番外側の見知らぬ他人に対しては一般に無視ないし無遠慮の態度が取られる」ということである。[37]

相手の立場やまわりの人々の空気に非常に気を使う、心をかける、あるいは思惑を気にするという敏感さがあると見られる反面、他人に対して極めて無関心あるいは鈍感であるとも見られるこの日本人の二面性は、「ウチ」と「ソト」に対する使い分けから来ていると考えられる。自分の身内の者の幸せには驚くほど心を使うが、「ウチ」の輪（「ウチワ」と言う言葉が存在する）の一歩外のこととなれば無関心になりがちで、見ず知らずの人は「アカの他人」となって自分とは無関係な人として扱われることになる。

この「ウチ」「ソト」の意識・感覚が尖鋭化してくると、中根千枝が言うように「まるで『ウチ』の者以外は人間ではなくなってしまうと思われるほどの極端な人間関係のコントラストが、同じ社会に見られるようになり、知らない人だったら、つきとばして席を獲得したその同じ人が、親しい知人（特に職場で自分より上の）

に対しては、自分がどんなに疲れていても席を譲るといった滑稽な姿がみられる」[38]ことになる。「旅の恥は掻き捨て」などという言い回しがあること自体、日本人の「ソト」に対する感覚を如実に示している。現在、日本では外国旅行がブームになっているようだが、日本人の海外での態度は目に余るものがあり、多分に上述の傾向が見られ、国際人としてのセンスを疑われることも多い。

それでは具体的に「ウチ」とか「ソト」とはどの範囲を意味するのであろうか。以下、喜多川忠一の文を部分的に引用してその意味をとらえてみたいと思う。[39]

「『ウチ』は言うまでもなく『内』であり『家』である。（中略）日本の『イエ』は同化構造と序列構造という相補的な構造によって、まとまりと秩序を保っている。同化構造とは家族の成員が『和』すなわち『へだてなき結合』を理想とし目標として、できるだけ自己主張や我を張ることを抑え、お互いに『察し合い』『いたわり合い』をもって、『ウチ』としてのまとまりを保持していこうとすることである。ところで家族間の察しやいたわりは、他人関係のそれと違って、自然発生的な恩愛の情を基盤とするものであり、それだけにきわめて情緒的なもので」あるので「そこには察しやいたわりだけでなく『甘え』や『甘やかし』が生まれてくる」「『ウチ』に対するのは『ソト』ないし『ヨソ』であるが、『ソト』は一応、疎遠なもの、関わりのないものということである。したがって『ヨソ』のことは見て見ぬふりをしたほうがよいし」「なるべくかかわり合いを持たないほうがよいということになる」

こうした心理および論理は、単に「イエ」の内外にとどまるものではなく、濃淡の差こそあれ、日本人の人間関係、社会関係の隅々にまで浸透している。『ミウチ』『クミウチ』『ムラウチ』『ナカマウチ』、『ウチの学校』『ヨソの学校』、『ウチの村』『ヨソの村』、『ウチの会社』『ヨソの会社』等々。

欧米人にも「ウチ」「ソト」に似た区別があるが、欧米人にとって重要なのは「私」と「公」の区別である。これに対して日本人の場合は「私」と「公」の関係よりも、「ウチ」と「ソト」のほうが、より大きな意味をもっている。「ウチ」と「私」とはほとんど同じか同質であるが、「ソト」は他人的人間関係であって、「公

」という意味ではない。実際に、日本の「公」は必ずしもパブリックではない。歴史を振り返ってみても分かるように、政治を司るものは「公」であると同時に「私」的な性格を持っていたし、学問や商売の世界においても、家元、家学、老舗など「公」と「家」とが直結している場合が多く、「公私」の別があいまいであった。また同じものでも、そのとらえ方によって「ウチ」になったり、「ソト」になったりした。例えば、自分の家族を「ウチ」と見れば自分の勤めている会社の人でも「ソト」になるが、「ヨソの会社」との関係で見れば自分が勤めている会社は「ウチ」となる。日本人が往々にして公私混同していると言われたり、また日本人の職場では上司や仲間の間に家族的暖かさや親密さがあると言われたりするのも、このあたりの事情がかかわっているのであろう。そして林知己夫が、国民性の調査結果から分析しているように、日本では現代においても、職場において、いわゆるビジネス型の課長よりも「人情課長」のほうが好まれているのである。また、いろいろな難点を指摘されながらも依然として年功序列、終身雇用制度が採用され、それなりの成果を上げているのであり、基本的には「公」の場である職場も「ウチ」的人間関係を基盤としていると言える。

第３節　人生で大切なもの

これまで日本人の倫理的価値意識について、善悪の判断や罪意識の問題、判断行動の基準の問題等から考察してきたが、本節ではより広く生き方にかかわる価値観を眺めてみて、日本人は結局、人間としてどういう生き方にかかわる価値を大切にしているのかを考えてみたいと思う。

生き方にかかわる価値観を見ると言うとき、これにはさまざまな見方があり、それぞれに特色があり、長所短所もあろうが、ここでは筆者がこれまでも多くの示唆を得たSpranger,Eの価値領域を基本視点として用いることとする。

まず、Sprangerの価値領域について簡単に説明しておこう。[40]

彼は、文化はそれぞれの内容の固有の意義によって６つの価値領域、すなわち理論的、経済的、美的、社会的、権力的、宗教的な種類に分かれ、各々の価値領域はそれぞれ固有な意義と法則に支配され、それらの法則は客観的文化を支配すると同時に、主観の体験や行動も支配するという。もちろんいかなる精神現象の中にも各種の価値や活動全体が何らかの形で内在しているのであって、一つの価値活動のみが支配し、その他の作用は全く欠如しているということはありえない。

上述の前提のもとに、６つの基礎類型の特徴を概観すると下記のようである。

理論的類型：　認識の意義を対象性（客観性）に置く価値様式をさす。ここでは同一化と差別化、一般化と個別化、結合と分離、根拠づけと体系化という見地が支配的方向となり、真理か誤謬かという対象の客観的本質だけが問題となる。

経済的類型：　すべての生活関係において効用性を第一とする価値様式である。すべてのものは生命維持、自然的生存競争、快適な生活形式の手段となる。資源、エネルギー、空間、時間等を節約するが、それはそれらから最大量の効果のあがる働きを収めるためである。行為の価値は行動そのものの中にあるのではなく、そこから結果する効果の中にある。

美的類型：　これは美的発作ではなく、個々の生命の断片のすべてに心全体が形成的な力として、すなわち色彩、気分、リズムを付与する力として存在する。しかしこの美的類型の中にも３つの現象形態、すなわち（イ）生活の表面的「印象」を享楽的に味わおうとする生活の印象主義形態、（ロ）すべての印象に先行して、まず自らの所有の中からその対象に主観的色彩を与える生活の表現主義形態、（ハ）これら２つの存在の要素が具体的な平衡を保っている内的形式である。

社会的類型：　他人への献身の衝動が支配的な生命衝動として現れてくるというのがこの類型の特質である。そしてこの本質が最高の発展を見た場合の社会的・精神的方向は愛である。愛とは――究極的に定式化しえないものを無理に概念的に分析すれば――他の人間の中に可能な価値の担い手一般を見、それを援助することの中に自分自身の生命の究極的価値を見いだすことである。

権力的類型：　Sprangerは権力を「自己の価値方向を他人の中に永続的あるいは一時的なモチーフとして設定する能力であり、また（少なくとも）意志である」と定義づけ、支配関係の基礎となる精神現象に対して権力という一般名称を選んだと言っている。一方この権力には、宗教的色彩を伴った生活感情ーーたとえば自分の本質の自己肯定、すべての個々の活動に先立つ生命力・存在エネルギー等ーーが存在する。他方この権力は「自由」と呼ばれるものをも意味する。この自由には（イ）物理的強制からの自由、（ロ）他人による決定からの自由、（ハ）低次の自己決定からの自由がある。第３番目の自由の意義ーー最高の価値に服従しうる能力ーーすなわち同一の人間が支配する主観と支配される客観とに分裂している中で、客観的により高い価値を意欲する内面的自由こそ、すべての真の外的権力関係の源泉である。

宗教的類型：　宗教的類型では、その全体の精神構造が、永続的に最高の余すところなく満足な価値体験の生産に向けられている。宗教的人間はすべての個々の決定を彼の生活全体に関係させ、たとえ低次の生活全体を捨て去り、否定しなければならないとしても、彼にとって最高の価値をもつものに合致するように行動する。そして人間がその全存在を最高価値の支配下に置く場合、彼の中には至福の充実した状態があり、一度でもこの体験をした人間は、常にこの至福の充実を目指して努力してやまないのである。

筆者が１０歳代から５０歳代の日本人１１００人程を対象に「人生のなかで大切である」と思っている価値について尋ね、調査結果を Spranger,E.の価値類型に則り分析したところ[41]、女性の場合どの年齢群でも抜きんでて高く支持された価値は「社会的価値」であり、これは主に”おもいやり・やさしさ・愛”という表現で回答されていた。特に”おもいやり”という日本語独特のニュアンスをもつと思われる言葉が、どの群でも頻繁に使用されていたのが印象的であった。次に高い支持を得ていたのが「権力的価値」である。しかしこの価値の中で大切にされている部分は、”自己の価値方向を他人のなかに設定する能力”というのではなく（男性の場合はこの面もかなり高く支持されていた）”自分の本質の自己肯定”、”すべて

の個々の活動に先立つ生命力、存在エネルギー”、あるいは”高次の自由を意味する自己陶冶”と言った類の能力である。ただし、この自分に対しての権力的価値の細かい意味内容は各年齢層によって異なり、青年期においては自我同一性の確立の過程と大きく関わるような内容のものが多く、成人は４０歳を越えると、人生の折り返し地点にたってあらためて自己を見直すような内容が多くなってくる。第３番目に大切な価値としてあがってきたものは「宗教的価値」である。この価値は林知己夫が言っている傾向と近似していて[42]、他の群に比べ成人群――そのなかでも特に年齢が高い成人群――に高い支持がみられた。一方これと関連して見られた傾向として、高校生群は成人群に比べて宗教的価値にはそれほど関心を示さないものの、”人生の目的・生きがい・希望”に関しては非常に高い支持を表明しているということである。この高校生から成人にかけての”人生の目的”への探究から”宗教”の受容への移行を、どのように見るかは他の調査とも関連して分析すべきであろうが、年を経るにつれて人生の目的や生きがい感を、宗教のうちに見いだすようになる、あるいは見いだそうとしていくためではないかとも考えられる。その他この過程において見られた興味深い傾向としてあげられることは、Sprangerの価値類型にはそれとして明確には含まれていないが、解釈によっては経済的価値のなかに含まれると思われる”健康”に対する関心の高さが上げられる。特に成人群、そのなかでもより年齢が高い者たちの間では、「人生のなかで大切なもの」として”健康”がはっきりと意識されていることが顕著に見られた。以前、このSprangerの６価値を土台にして作成された質問紙を日本人向けに手直ししたものを入手したことがあった。そこでは、日本人には「宗教的価値類型」より「身体に関する価値類型」が大切であるとされて、この２つの価値が入れ替えられていた。このように単に２つの価値を入れ替えることは、Sprangerの価値類型に関する考えの流れからいって妥当とは思えないが、日本人の”健康”に対する関心の高さがそのような質問紙を作成させることになったということは興味深い。

なお、上記の同じ調査で得た男性群の結果も女性群と同様「社会的価値」「権力的価値」に高い関心が集中していたが、成人の場合は同列、中学生の場合は「権力

的価値」のほうが高くなっていた。「社会的価値」のなかの”思いやり・やさしさ・愛”の項目が中学生以外４０％以上の高い支持を得ている点も女性群と類似しているが、「権力的価値」の内容はかなり異なっている。女性群で多かった”自己を見つめる”内容よりは”人生に成功する””他人に自慢できるものをつくる”等のいわゆる権力的な面や、”政治の改善””世の中の発展に尽くす”また”勇気・根性・意志力”等の内容が多く見られた。

なお、この調査結果からは日本古来から尊ばれていたという”まごころ”とか”まこと”という表現はあまり出て来なかった。道徳的判断のなかに是非善悪ということのほかに、美しい行為か汚い行為かという美的判断が伴ってくるといわれる日本人にとって、この悪い心”黒き汚き心”に対する善い心”明かき清き直きまことの心”というのは、長い間受け継がれてきた素朴な価値感覚であった。[43]しかし、この結果を見るかぎりひところに比べあまり人気がなくなったかに見える。町を歩いていてもかつてはよく目にした「誠実屋」といった類の看板もほとんど目にしなくなった。

さて、日本に於ける他の類似した先行研究として、ここでは鳥山（１９８０）のものを取り上げたい。[44]鳥山は、高校１年生男子にまた教養課程の大学生対象に、作文や自由記述形式で調査を行ない、その結果を Spranger の価値類型の当初の１０範疇に整理し、それぞれの分布割合を検討している。それによると高校生・大学生ともに”生の価値の追求”を主張するものが全体の約３割を占め、次に多いのは社会的共感・誠意・連帯の価値であったと報告している。前者は、「まだ具体的な将来の構想を抱くまでには至っていないが、とにかく自己への価値づけが強く、何らかの形で自己の業績を積み上げ、名誉と希望を得たいと期する自我の発揚の志向を唱えていること」であり、後者は「広くは人類愛・同胞愛・肉親愛などによって、人間全体および自己の平和と安寧と発展を願い、そのために自己の能力と特技を活かそうと志す生き方」であると位置付けている。

カルフォルニア大学の、De Vogler,K.L.とEbersole,P.（１９８０[45]，１９８１ａ[46]，１９８１ｂ[47]，１９８３[48]）および Ebersole,P. と Sacco,J.

（１９８３）[49]とは、人生の意味内容をカテゴリー化するためのスケールの開発を試みているが、その一連の研究を通して、下記のような結果を得ている。

平均年齢１８歳～１９歳の男女大学生１０６人を対象として得た調査では、「人生のなかで最も意味を見いだすものとして、第１位に”人間関係”があげられ３６％と群を抜いて高い支持率があった。以下は、第２位奉仕、３位成長、４位信仰・信念・主義、５位実存的快楽、６位獲得、７位表現、８位知識理解の順となり、その他は５％程度であった。信仰に関しては、人生のなかで最も意味あるものを３つ書くように指示された段階では１２％にすぎなかったが、最も大事な人生のなかでの意味を書くように指示された場合には２９％にものぼっていることから、宗教に対しては強く感じるか全然気にかけないかのいずれかであろうと推測している。また、”人間関係”のカテゴリーが第１位に来ていることは、Erikson の発達の理論と一致するが、”奉仕”に関しては１４％しかないところを見ると、一般に近い人間関係へと向きがちであって、自分たちがよく知らない人々へは向きにくい傾向があると考察している。さらに、De Vogler,K.L.ら（１９８１ａ、１９８３）はより広範な年齢を対象とすることにより、年齢の要因が意味のカテゴリー分けに、どの程度影響を及ぼすかを調査するために、まずは成人（３０歳～８０歳）９６名を対象に、次に青年前期にある者（１３歳～１４歳）１１６名を対象にして調査を行なっている。

成人群には予備調査の結果から、大学生のカテゴリーに加えて２つの領域、すなわち”健康”と”仕事”の領域が必要となった。調査結果は、第１位が人間関係で４６％と半数近くを占め、２位の信仰１７％を大きく引き離している。以下、３位成長、４位仕事、５位健康、６位奉仕、７位理解、８位獲得という順で続き、快楽・表現は０％、その他は８％であった。

成人の結果を前述の学生たちの結果と重ねあわせてみると、成人群に２つの新しいカテゴリーが追加されはしたが、”人間関係”が第１位であること、また物質主義・快楽主義には重きを置いていないことなどの共通点が見られる。

青年前期を対象とした調査では、予備調査の結果から”活動（レクリエーション

・スポーツ・趣味など）””学校””体裁・容姿”の３つの新領域が付加された。本調査ではやはり人間関係が４６％とほぼ半数を占め、以下いずれも１０％以下で、活動、健康、獲得、学校、容姿、信仰、成長、奉仕、楽しみと続いており、その他が８％であった。

以上３群の調査結果から、各年齢群にははっきりした独自性は見られず、むしろ互いに重なりあっている傾向が見られたこと、どの年齢群にも人間関係に対する強い関心があることなどの示唆が得られたと報告している。

この De vogler等の考察と、前述の山縣や鳥山の調査結果および他の種々の文献と重ね合わせてみると、洋の東西を問わず、年齢を問わず、女性として人生のなかで大切にしている価値は、Sprangerの価値類型で言えば「社会的価値」に属するものであるといえよう。そしてさらに細かく見ると、”自分の成長・自己確立”への望みとか、”信仰”に対する態度とか、成人における”健康”への関心等いくつかの類似した意識も見いだすことができる。しかしまた同時に「社会的価値」を”思いやり”といった日本語独特のニュアンスをもって表現した日本人の回答には、他の国の人々と共通のようで共通でない微妙な違いも見られることであろう。

第４節　生きがい感

ここまで、日本人の宗教的意識や倫理的価値意識をキリスト教世界のそれと多少比較しながら、列挙してきたのであるが、それでは果たしてこのような宗教意識・価値意識をもつ日本人は、今生きている自分の生活において、生きがいを感じているのであろうかどうかということが気になってくる。

定年退職後の男性、中年の女性、あるいは大学生等に見られるという”退屈・無感動・無気力・空虚感・アパシー”さらには中高生や小学生をもむしばんでいるといわれる”しらけのムード”がマスコミで騒がれ、教育者の間で問題にされるよう

になって久しい。現代人は、高度に技術化され情報化された社会の中にあってその恩恵に浴しながらも、同時にその複雑さ目まぐるしさに振り回されて不安を感じ、自己を見失いがちである。そして意識的であれ、無意識的にであれ、人間にとっての本質的課題、すなわち”自分の生きている意味”について問わざるをえなくなってきていることが多い。この状態は何も日本に限ったことではなく、類似した状況にある世界のさまざまなところで問題にされていることであろう。 Frankl,V.E.[50]も、この空虚感の拡大していく社会を憂い、人間の一次的関心事は”意味への意志”であり、人間が生きる意味を見いだせないとき”実存的空虚”を経験するという。長年種々の教育現場とかかわりを持ってきた筆者にとって、このFranklの主張は切実な叫びとなって響いてくる。多くの物質に恵まれた不自由のない生活が人生の充足感を保証するものではないこと、今、ここに通用する多くの知識の詰め込みが、変動する社会において充実した将来を約束するものではないことを余りにも多くの事例が証明している。反対に多くのものが欠けている環境にありながらも、そこに自分の人生の意味を見いだして真の意味での充実した人生を送っている者たちも少なくない。そしてFrankl自身が体験したアウシュビッツはその不自由な苦しい状況を極限まで押しすすめた世界であったに違いない。その意味で、この極限の体験に裏打ちされた”意味への意志”には、生命を賭けた重みがある。

それではこのFranklがいう”意味への意志”とは何なのか。この大きな問いかけが筆者をして、生き方にかかわる価値観を追求するようになさしめ、せきたてている要因である。この問いかけが本研究の背後にある。あるいは土台にある。

そこで理論編の最後に、Franklが主張するこの”意味への意志”の概要を、彼自身の文を引用しながらまとめておこうと思う。

この理論は、Franklがウィーン大学卒業後、当時なおこの街で活躍しFrankl自身もその教えを受けたFreud,S.の精神分析や、Adler,A.の個人心理学と相対立するものとしてではなく、相補うものかつそれらを越えるものとして提唱された。Franklは、精神分析が主張する「快楽原理」、あるいは個人心理学の主張する「地位」への動因や「権力」への意志は、人間の一次的関心から派生した二次的なものであっ

て、人間の一次的な関心とは「意味への意志」であると主張する立場をとるのである。

Frankl は、精神分析と個人心理学との対立および補充性を、そしてさらにそれらを補いかつ越える段階を、次のように説明している。

①人間学的視点から

精神分析においては『抑圧』の概念に中心的な意義が帰せしめられている。「しかもそれは無意識的エスによる意識的な自我の制限という意味においてである。したがって精神分析は神経症的な症候の中に、意識としての自我の弱体化を見るのであり、その結果、分析的治療は抑圧された体験内容を無意識から奪って意識に帰し、自我の強力化に成功するように努めるのである。」(51)

一方、「個人心理学においては『妥協』の概念が主役を演じている。妥協において神経症は自らを現実から除外しようとするのである。したがってこの場合は、あるものを無意識化しようという試みがなされるのではなくて、自ら自身を責任なきものにしようという試みがなされるのである。（中略）したがって個人心理学的治療は神経症的人間を彼の症候に対して責任をもたせ、症候を個人的な責任圏にひき入れ、自我圏を責任性の増加によって拡大しようという意図をもっているのである。」(52)

前者はもっぱら人間の意識性へ、後者はもっぱら人間の責任性へと学的視野を狭めているが、これは両者とも人間存在の各々一面のみを見て判断している過ちを犯しているのであり、この両面が集まったときに初めて人間の真の姿が明らかになる。したがって両者のこの人間学的出発点の各々の根本的態度は対立し合うものというよりは、むしろ互いに補充しあうものである。

②精神病理学的観点から

精神分析が心的現実を一方的に性欲に限定したのに対し、個人心理学は、たとえば妥協とか疾患正当化とかのような、目的に対する単なる手段のみを常に認めるのである。しかし現実には、神経症的兆候には性的な心的欲求のほかに他の内容も原因しているのであり、またそれは、目的に対する手段であるばかりでなく、極めて

多様な心的欲求の直接の表現を示しているのであるから、やはりここでも両者の契機が一緒になって初めて心的事象の完全な姿が生じるのである。

精神分析が心的現実を因果性のカテゴリーのもとに見るのに対し、個人心理学では、目的性のカテゴリーのもとで見る。目的性は何らかの形で因果性よりより高いカテゴリーを示しているという点で、ここに心理療法のより高い発展、その歴史における一つの進歩が見られるが、Franklはなお一層高い段階として、この必然（因果性からの）と意欲（心的目的性に従っての）とに、さらに当為という新しいカテゴリーが加わるべきではないかという。換言すれば「”Causae”の胎たる過去と”Fines ”の国たる未来とに対して、本質的に無関係な、超歴史的な価値の世界が付け加わるべきではないか」[53]というのである。

③心理療法の究極目的に関する観点から

精神分析の目的は、無意識の諸要求と現実の諸要請との間に妥協をさせる点に存在するのに対して、個人心理学の目的は、単なる適応ということを越えて患者に勇気を現実を形成することを要求するという点でここでも一種の発展がある。

しかし我々が身体的・心理的・精神的な全き「人間」の真の現実像に達しようと思い、患者をこの彼の本来の現実に導こうとするならば、「適応」と「形成」のカテゴリーの他に第３のカテゴリーすなわち「充足」のカテゴリーが付け加えられなければならないのではないだろうか。

身体的な症候の背後に心理的な原因を見ることができて心理療法が誕生したのであるが、今やさらに一歩進めて心因的なものの背後に、人間をその精神的な困難において観察し、そこから助けることが必要となってきているのではないだろうか。

以上のような理論の展開のうちに、そして日々の患者との触れ合いのうちに、精神的なものからの心理療法として狭義の心理療法を補充する使命をもつロゴセラピー（Logotherapy ）が誕生するのである。

心理療法がその精神分析として細かい技法においては、心理的なものの意識化に努めるのに対して、ロゴセラピーは実存分析としてのその細かな技法において、精神的なものの意識化に努める。特に責任性を、人間の実存の本質的根拠とし人間に

意識させることによって、人間の実存の増強をはかるのである。なぜならFrankl は、患者を彼らの生命の最高の活動ができるように助けようとするならば、彼等に価値実現の可能性に対する責任性存在として自らの存在を体験せしめるようにしなければならないばかりでなく、また彼らがそれを果たす責任をもつ使命が常に特殊な使命であることを示してやる必要があると考えるからである。　この使命の特殊性は、二重の意味において言える。すなわち各人の独自性に基づいて各人ごとに異なるばかりでなく、各状況の一回性に相応じて各時間ごとに変わるからである。この機会がないがしろにされるならば、それは失われて二度と戻らず、この価値は永遠に実現化されないままでとどまる。すなわち人間はそれを喪失したことになる。このようにして「一回性」と「独自性」という二つの契機が人間の実存の契機としてその意味性に対していかに決定的であるかが理解できるのである。独自的かつ一回的なものとして人間の実存は、独自的かつ一回的な可能性を実現化せよという訴えを含んでいる。そしてここに各自の特殊な使命とそれを果す責任性が連関し、人間の生命の意味にとって決定的な意味をなすのである、別の言葉で言えば、個々の人間の人格の前におかれ、与えられ、課せられた価値可能性の実現化が人生においては重要で、これが前述の第３のカテゴリー「充足」のカテゴリーなのである。

さて、価値には３つの主要な価値群があって１つの価値群の現実化に際して停滞したならば、他の価値群に転換するほどに弾力的であることが要求される。

その価値群の１つは「創造価値」と呼ばれるべき価値で、創造ないし活動の中に実現化されるような価値であり、他の１つは「体験価値」と呼ばれ体験の中に実現されるような価値である。しかしまた、たとえこのように創造的に実り豊かでもなく、体験においても豊かでなくとも、根本的にまだなお有意味でありうる。なぜなら人間が彼の生命の制限に対していかなる態度をとるかということのなかに実現されるような第３の重要な価値群、すなわち「態度価値」と呼びうるような価値群があるからである。そしてこの第３の価値群を「可能な価値のカテゴリーの領域の中へひき入れると、人間の実存は本来決して現実に無意味になりえないことが明らかになるのである。すなわち人間の生命はその意味を『極限まで』保持しているので

ある。したがって人間が息をしているかぎり、また彼が意識をもっているかぎり、人間の価値に対して、少なくとも態度価値に対して、責任を担っているのである。人間は意識存在をもっているかぎり、責任性存在をもっているのである。価値を実現化するという彼の義務は人間をその存在の最後の瞬間まで離さないのである。」[54]

そしてこの価値の世界は、客観的な対象の超越的な世界である。なぜなら価値はそれを指向する行為にたいして必然的に超越的であるからである。そしてその絶対的な客観的な価値は具体的な義務になり、日々の要請と個人的な使命のなかに現われてくる。人間であるということは、この実現すべき価値と充足すべき意味とに面して存在することを意味し、現実と現実化すべき理想の間につくり出された両極的な緊張の場に生きることを意味している。

このような見地は、人間をあたかも閉ざされた体系のように描き出し、人間が基本的にかかわるのは内的均衡を維持し、回復し、その結果緊張を解消することであるとするホメオステイシス原理とは深く対立する。快楽は目標であるというよりもむしろ意味充足の効果であり、権力は目標への手段である。両者はFranklが「意味と目的を発見し充足するという人間の基本的努力」[55]として定義づけているところの「意味への意志」の派生物にすぎないのである。ホメオステイシス原理とは反対に、この充足すべき意味への意志決定におけるような健全な量の緊張は、無条件に避けるべきものではなく人間に本来備わったものであり、精神的幸福に欠くことのできないものである。

しかし現代はこの充足すべき意味を見いだすことができず、したがってその要請から来る緊張からも極度に解放されて、無意味感と空虚感に苦しむ人たち、Franklが実存的空虚と名づけている感情に捕らわれている人々が増加してきている。この現状をFranklは、次のように分析する。

「実存的空虚の原因は、次のような諸事実の結果であるように私には思われる。第1に、動物と対照的に、何をなさねばならないかを人間に告げる衝動や本能はない。第2に、以前の時代と対照的に、何をなすべきかを人間に告げる習慣・伝統およ

び価値がない。そしてまた人間は、自分が基本的に何をしたいのかを知らないことさえしばしばある。」(56)

このようにして、実存的フラストレションの主な表現－退屈と無感動－－は、精神医学に対するのと同じように、教育に対する挑戦にもなってきているのである。

ところが教育はしばしば実存的空虚を減少させるどころか、増大させているとFranklは憂えている。

科学上の諸発見が示した方法、すなわち還元主義的方法によって、学生の空虚感と無意味感は強化されている。学生たちは、人間機械論プラス相対主義的人生哲学の線に沿った教え込みにさらされている。人間に対する還元主義的接近方法は人間を具象化する傾向、人間をあたかも単なる物であるかのように扱う傾向がある。もし学生が、人間はイド・自我および超自我というような人格諸側面の主張が衝突しあう戦場に過ぎないと教えられれば、彼はどのようにして主導的になれるであろうか。また、もし理想と価値が反動形成や防衛規制に過ぎないと説かれれば、理想や価値にたいして興味をもち、それらを求めることができるであろうか。還元主義は、青年の自然な熱情を害し侵すだけである。

また一方教育は、いまだホメオステイシス原理に基礎づけられていて、若い人々にできるだけ要請を課すべきではないという原理に導かれていて・実存的空虚を増大している。Freud の言う性やAdler のいう権力をも含めてすべてのものを意のままに手に入れることができたにもかかわらず、なお退屈を訴えている人々がどれほど多いことか。若い人々に過度な要請を課すべきではないというのは確かであろう。しかし我々は今日にこの豊かな社会の時代に、多くの人々が多すぎる要請どころか、要請の少なすぎるのに苦しんでいるのだという事実も考えてみなければならない。

実存的空虚の時代にあって、教育は自らがその時代の潮流に流されて意味を喪失するのではなく、また今迄多く見られたように伝統と知識の伝達に自らを限定したり、そこで自己満足に陥ってはならず、「普遍的価値の崩壊によっても犯されないような、独自の意味を見いだす人間能力を修練しなければならない。独自の状況に

潜んでいる意味を見いだす人間の能力は、良心である、だから教育は、意味を見いだす手段を養っていかなければならない」[57]のである。

上記の Frankl の理論を踏まえて作成された調査票に、アメリカの Crumbaugh, J.C.と Maholick,L.T.[58] が考案した「実存心理検査（Purpose in Life Test）」（以下ＰＩＬと略記）がある。Crumbaugh,J.C. [59] は、ＰＩＬの妥当性・信頼性・他のテスト－－Franklの質問紙、ＭＭＰＩ、アノミーのスケール等－－との関連を検討し、ＰＩＬはFranklの人生の目的・意味の概念を測定するものとして妥当で信頼性のある道具であるといっており、また、Frankl[60]自身もこのCrumbaughの調査結果や考察を引用したり、その他の著書[61]でも彼らの実証研究を取り上げて、自らの理論の裏付けとしている。

佐藤文子[62]は、高校生・大学生・成人を対象にこのＰＩＬを用いて調査を行った結果、ＰＩＬ得点は成人群、大学生群、高校生群（大学生群と高校生群の差は有意ではない）の順に低下しており、低年齢層で実存的空虚の状態が広まっていることが示唆されたと報告している。また、１９６６年の高校生群・大学生群、定時制大学生群と、１９７２年～１９７３年の同じ学校の学生群を比較すると、いずれの群においても得点は低下する。すなわち時代がくだるにつれて実存的空虚感が広がってきているという結果も報告している。

筆者もこのＰＩＬを用いて、小学生・中学生・高校生・大学生・３０歳代～５０歳代の成人、計６２６名を対象に調査を行ったが[63]、その結果「退屈・空虚感」の割合は他の群と比較して大学生群・高校生群がわずかながら高かったものの、問題になるほどのものではなかった。しかし、そのような結果の中でも”目的・意味・使命感”の高い者は”活気・充実感”も高く、”目的・意味・使命感”の低い者は、”退屈・空虚感”を感じているということが有為差で検定され、Franklのいう”意味”と”充足感”の関係が示唆された。

Hardcastle,B. [64]は、３５～５５歳の目立たない職種（例－守衛・コック・庭師・刑務所の看守等）の人々を対象に、上記のＰＩＬや Rosenberg,M.の”Self-

Esteem Scale”等を組み合わせながらインフォーマルなインタヴューをしているが、その報告の中で全体として健康的な楽観主義が見られ、今日は昨日よりよく、そして明日は今日よりよくなるであろうという前向きの生き方がつかみ取れたと述べている。また、被検者の主観的な人生に対する解釈として、人生における最も重大な出来事は、女性にとっては人間関係に関することであり、男性にとっては公的な（転職・入隊等）および私的な（知的または精神的な発見等）自らの体験であること、人生の中で苦痛の果す役割があること、個人個人はそれぞれの人生に責任があることなどが上げられていたと報告している。

この他に『１３ヵ国価値観調査』[65]の中にも、生きがい感にかかわる質問項目がある。

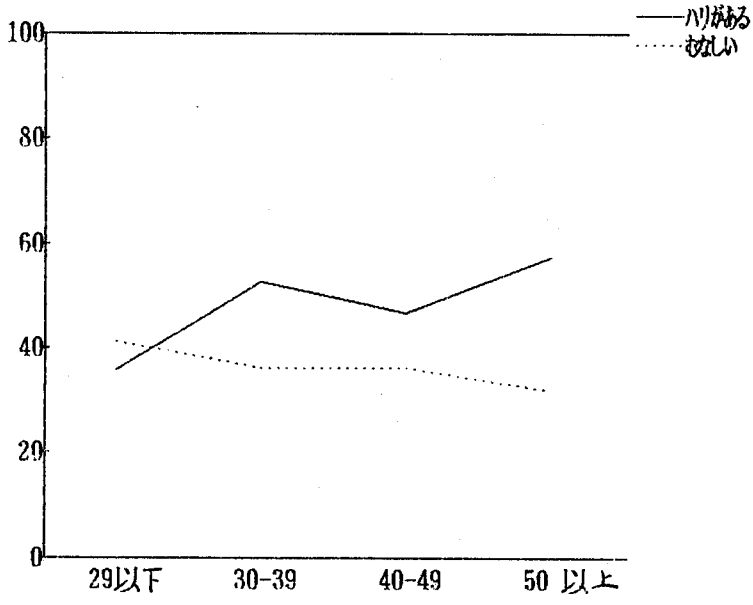
「あなたは今の生活にハリ（fulfilled ）を感じますか。それとも感じませんか」という問いに対して「とてもハリがある、かなりハリがある」と回答したものは、日本５０．９％、イギリス８３．７％、韓国６３．５％、アメリカ８３．２％となっていて、日本が４ヵ国中もっとも低い結果となっている。しかし、「あなたは世の中の無意味さ、むなしさ、はかなさ（lack of meaning,emptiness,vanity）をどの程度感じますか」という問いに対しても、「とても感じる、かなり感じる」と答えた者が、日本は３５．０％、イギリスは６５．０％、韓国は７１．２％、アメリカは５０．４％であって、日本がもっとも低い。これは何を意味するのであろうか。この質問は「日々の生活にハリを感じるか、世の中のむなしさを感じるか」の程度を問うものであり、その内容には触れていない。彼らが感じている生活のハリ、およびむなしさ・無意味感・はかなさが何を意味するのか吟味する必要があろう。

さらに女性の回答のみに注目して、年代別肯定率をグラフに表したのがＦｉｇ．４・４・１ａ～４・４・１ｄ「人生のハリとむなしさ」である。ここに示した割合は、”生活にとてもハリがある”と”かなりある”とを合計したパーセンテージ、および”世の中の無意味さをとても感じる”と”かなり感じる”とを合計したパーセンテージである。

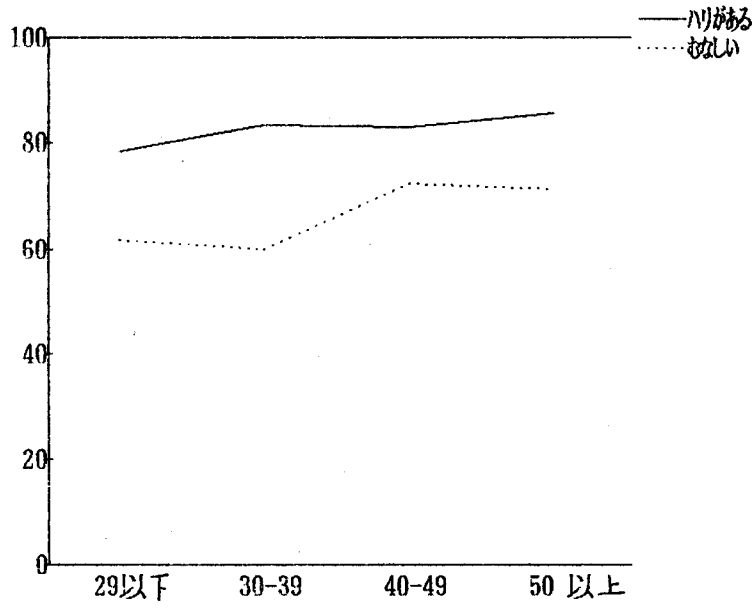
これらの結果からは、日本の場合多少その傾向は見られるものの、一般に年齢が下がるにつれて空虚感が増すという傾向はみられない。

また、『日米欧の価値観調査』[66]においては、日本の場合もイギリスの場合も、年齢と無意味感の顕著な関係は見られない。さらに同調査には、「人生の意味や目的について考えることがどのくらいありますか」という質問もあるが、日本の場合もイギリスの場合も、６９歳まではどの年齢層でも、６０～７０％前後の者が”しばしばある”あるいは”ときどきある”と回答しているが、７０歳以上になるとイギリスではそのまま６４．９％と横ばいであるのに対して、日本の場合は８．９％と極端に下がるという結果も出ている。熟考に値するように思われる。

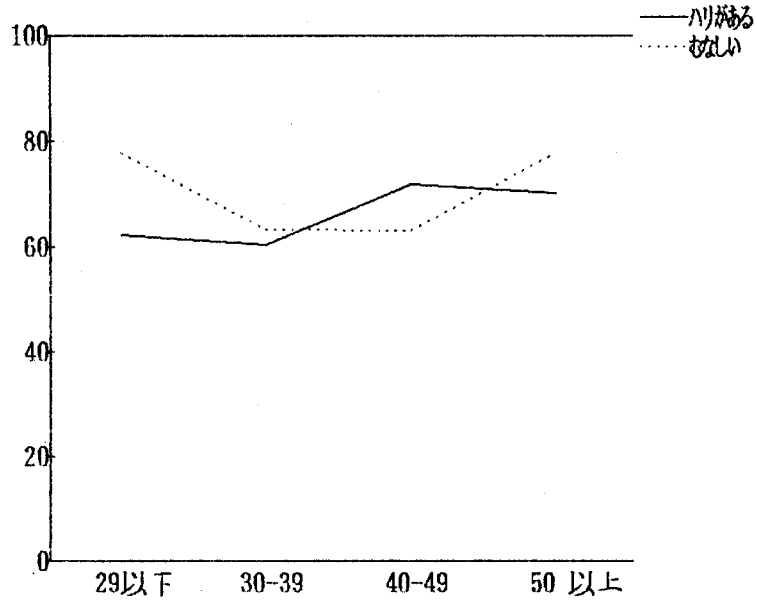
（余暇開発センター資料より）



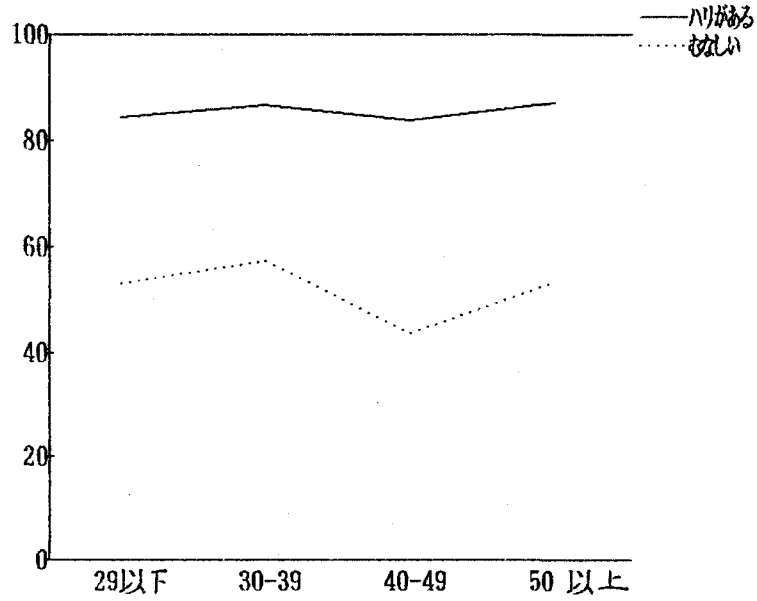
Ｆｉｇ．４・４・１ａ「人生のハリとむなしさ」
－　日本　－



Ｆｉｇ．４・４・１ｂ「人生のハリとむなしさ」
－　イギリス　－



Ｆｉｇ．４・４・１ｃ「人生のハリとむなしさ」
－　韓国　－



Ｆｉｇ．４・４・１ｄ「人生のハリとむなしさ」
－　アメリカ　－

（１）湯浅泰雄　１９８１　日本人の宗教意識－習俗と信仰の底を流れるもの－
名著刊行会　p.９０－９１

（２）北森嘉蔵　１９７３　日本の心とキリスト教　読売新聞社　p.９

（３）野崎守英　１９８４　「まこと」と「まごころ」－古学の精神－
井上英治・中村友太郎（編）　宗教のこころ－日本の宗教とキリスト教
みくに書房　p.１７４

（４）司馬遼太郎・キーン D.　１９８４　日本人と日本文化　中央公論社
pp.　１６１－１６２

（５）山本七平　１９８５　日本教の社会学　学習研究社　pp.１５４－１５５

（６）濱口惠俊　１９７７　「日本らしさ」の再発見　日本経済新聞社

（７）Reischauer,E.O. １９６５　The United States and Japan.
Harvard University Press.　p. １３６

（８）中村元　１９８９　東洋人の思惟方法III　日本人の思惟方法　春秋社
p.９２

（９）中村元　前掲書　pp.１００－１０１

（１０）余暇開発センター　１９７８　人間と社会に関する総合研究IV
－現代日本社会研究－　p.５４

（１１）土居健郎　１９７１　「甘え」の構造　弘文堂　pp.４８－４９

（１２）湯浅泰雄　前掲書　p.１３３

（１３）土居健郎　前掲書　p.４９

（１４）作田啓一　１９６７　恥の文化再考　筑摩書房　p.１０

（１５）作田啓一　前掲書　p.２３

（１６）濱口惠俊　前掲書　p.９１

（１７）ａ）Rahner,K. １９７６　Grundkurs des Glaubens - Einführung in den
Begriff des Christentums.　Herder.
ラーナー K.　百瀬文晃（訳）　１９８１　キリスト教とは何か
エンデルレ書店
ｂ）Nemeshegyi,P. １９８０　キリスト教入門　南窓社

（１８）濱口惠俊　前掲書

（１９）木村敏　１９７２　人と人との間－精神病理学的日本論－　弘文堂
p.１４２

（２０）山本七平　前掲書

（２１）ＮＨＫ世論調査部　１９８４　日本人の宗教意識　日本放送出版協会
p.２８

（２２）木村敏　１９７２　前掲書　p.１４６

（２３）濱口惠俊　前掲書　pp.１４９－１５０

（２４）Lebra,T.S.　１９７４　Reciprocity and the Asymmetric Principle:
An Analytical Reappraisal of the Japanese Concept of On.
Lebra,T.S. & Lebra,W.P.(Eds.)　Japanese Culture and Behavior.
An East-West Center Book. pp. １９２－２０７

（２５）濱口惠俊　前掲書　p.１５６

（２６）濱口惠俊　前掲書　p.１５８

（２７）土居健郎　前掲書　p.３０

（２８）源了円　１９６８　徳川時代の文学に現われた義理と人情
高坂正顕（編）　近世日本の人間尊重思想　上　福村出版　p.１３３

（２９）源了円　前掲書　p.１８４

（３０）源了円　前掲書　p.１０９

（３１）Benedict,R. １９６７　The Chrysanthemum and the Sword
Houghton Mifflin Co.
ベネディクト R.　長谷川松治（訳）１９７２　菊と刀－日本文化の型－
社会思想社　p.１５５

（３２）南博　１９５３　日本人の心理　岩波書店　pp.１８７－１８８

（３３）南博　前掲書　p.１９９

（３４）林知己夫　１９８８　日本人の心をはかる　朝日新聞社　p.５０

（３５）林知己夫　前掲書　pp. ６０－６８

（３６）余暇開発センター　１９７８　人間と社会に関する総合研究IV
－現代日本社会研究－　p.１３９

（３７）土居健郎　前掲書

（３８）中根千枝　１９６７　タテ社会の人間関係－単一社会の理論－　講談社
p.４７

（３９）喜多川忠一　１９８３　日本人を考える－国民性の伝統と形成
日本放送出版協会

（４０）Spranger,E. １９２２ Lebensformen
シュプランガー E. 伊勢田耀子（訳） １９６１ 世界教育学選集１８
文化と性格の諸類型 １・２ 明治図書出版
（４１）山縣喜代 １９８７ 生きる意味の意識と価値観に関する研究
－自己教育力の心理学的基礎をめぐって－ 大阪大学修士論文
（未公刊）
（４２）林知己夫 前掲書 p.１４２
（４３）喜多川忠一 前掲書 p.１０９
（４４）鳥山平三 １９８０ 青年の価値意識
園原太郎（編） 認知の発達 培風館 pp.３９１－３９５
（４５）De Vogler,K.L. & Ebersole,P. １９８０ Categorization of College
Students' Meaning of Life. Psychological Reports,４６,
pp. ３８７－３９０
（４６）De Vogler,K.L. & Ebersole,P. １９８１ａ Adults' Meaning in Life.
Psychological Reports ４９, pp.８７－９０
（４７）Ebersole,P. & De Vogler,K.L. １９８１ｂ Meaning in Life :
Category Self-Ratings. The Journal of Psychology,１０７,
pp. ２８９－２９３
（４８）De Vogler,K.L. & Ebersole,P. １９８３ Young Adolescents' Meaning
in Life. Psychological Reports,５２, pp.４２７－４３１
（４９）Ebersole,P. & Sacco,J. １９８３ Depth of Meaning in Life :
A Preliminary Study. Psychological Reports,５３, p. ８９０
（５０）Frankl,V.E. １９７０ The Will to Meaning -Foundations and
Applications of Logotherapy. New American Library.
（５１）Frankl,V.E. １９５２ Aerztliche Seelsorge Franz Deuticke
フランクル V.E. 霜山徳爾（訳） １９８４ フランクル著作集２
死と愛 みすず書房 p.４

（５２）Frankl,V.E. 前掲書　pp. ４－５

（５３）Frankl.V.E. 前掲書　p.１１

（５４）Frankl,V.E. 前掲書　p.５４

（５５）Frankl,V.E. op.cit., p. ３５

（５６）Frankl,V.E. op.cit., p. ８３

（５７）Frankl,V.E. op.cit., p. ８５

（５８）Crumbaugh,J.C. & Maholick,L.T.　１９６４　An Experimental Study in Existentialism; The Psychometric Approach to Frankl's concept of Noogenic Neurosis. Journal of Clinical Psychology,２０, pp. ２００－２０７

（５９）Crumbaugh,J.C.　１９６８　Cross-Validation of Purpose-in-Life Test based on Frankl's Concepts. Journal of Individual Psychology,２４ pp. ７４－８１

（６０）Frankl,V.E. op.cit., p. ８９

（６１）Frankl,V.E. １９７８　The Unheard Cry for Meaning -Psychotherapy and Humanism. Washington Square Press. p. ２７, p. ３３

（６２）佐藤文子　１９７５　実存心理検査－ＰＩＬ－
岡堂哲雄（編）　心理検査学－心理アセスメントの基本－　垣内出版
pp. ３２３－３４３

（６３）山縣喜代　１９９０　女性の充足感－カトリック学校における実存心理検査の分析を通じて－　カトリック教育研究　７, pp.４３－５２

（６４）Hardcastle,B. １９８５　Midlife Themes of Invisible Citizens : An Exploration into How Ordinary People Make Sense of Their Lives. Journal of Humanistic Psychology, ２５（２）, pp.４５－６３

（６５）1980 International Conference of Human Values-Secretariat Office (ed.) １９８０　Survey in 13 Countries of Human Values. IBM Japan Ltd.

（６６）The European Value Systems Study Group　１９８５　日米欧価値観調査
－７ヵ国データ・ブック－　余暇開発センター

第II部　実証編

第５章　調査方法

第１節　質問紙法

本研究では、質問紙法による調査を実施することとした。宗教心や価値観は、その本質的なところにおいて高度に内面的、主体的な現象であるので、広く質問紙を配布して回答を集めても、非常に浅い部分しか聞き出せないであろうという懸念はある。また個人個人の意識された回答であるので、どれほどの現状把握となるのかという問題もある。しかし、本研究の意図するところは、日本人の宗教心や価値観の奥深くに迫るというよりは、日本人の宗教心や価値観に関する”一般的”特性を知ること、またそれらと教育や年齢等の関係を知ることにあるので、事例研究等で少数のデータを集め、それを深く掘り下げるより、広く大勢の人に出来るだけ同じ条件で聞いて回答を得ることのほうがより適切であると思われる。このような意図のもとでの情報収集であれば、質問紙もかなり効果的な測定用具となりうるであろう。また、収集されたデータを、細かく年齢別、教育別、文化圏別等に分けて分析していけば、人々のもつ意見の諸相がきめ細かく析出され、他の方法ではつかみにくい情報も入手できるかもしれないと思っている。深みのある、内面的主体的現象に食い込むのは、これらの包括的な調査で全体像を把握したあとの、次の段階の作業であろう。また、現状把握のためにはふだん現に行なっている行動や判断の傾向、あるいは本音等を収集することも大切であるが、意識的に時には建前的にでも、日本人が考えていることを聞くこともまた、本音に劣らず大切なことであると思っている。さまざまな状況のなかで、日本人の考え方や振る舞い方が、現実にどのように表れているにしろ、日本人は本当は何が大切であると思っているのか、どうあるべきだと思っているのかを知ることは、日本人の宗教心や価値観を知るためには欠かせない手続であると思っている。

さて、使用する質問紙であるが、既成のもので筆者が意図するものを測定できるものは見当たらない。日本のものは一般的に信仰についてどう思うか、あるいは宗教的な行事に参加しているかといった類のものが殆どであり、西洋のものはあまりにもキリスト教の内容に立ち入ったものが多く使用には適さない。また、序章でも述べたように、東洋のメンタリティーで作成された質問紙を使用したいという当初からの強い望みもある。そこで筆者自身がさまざまな文献や先行研究を参考にしながら、作成することにした。その手順や留意点を以下に述べる。

第１の作業は、種々の文献を集め、日本人の宗教心や価値観について研究し、そのなかから種々の要素を取り出すことであった。この文献研究と並行してフィールドワークとしては、関西や東京を中心に種々の寺社を訪ねたり、行事に出向いたりして、そこでの庶民の姿を観察し、考察をめぐらした。また、テーマにかかわる内容をその道の専門家に尋ねたり、さまざまな年齢層の人々にそのテーマを投げかけて、意見を聞いたりもした。

上記の手続きを経て出てきた要素を分類して、項目カードを作成し、そのうち調査可能と思われるものを拾いだして、質問文を作成した。

ヨーロッパでも調査を実施し、日本人の結果と比較検討しようという企画から、日本人の宗教心や価値観であると思われるものばかりでなく、キリスト教的宗教心や価値観を示していると思われる項目も取り入れた。この際、林知己夫のいう連鎖的な比較方法の考え方をも導入した。林はこの方法について次のように説明している。

「連鎖的に対象を比較していく方法の重要性に気が付いた。比較の根本は似ているところと異なっているところを知ることによって、立ち入った新しい情報をとり出すことにあるので（全く異なったもの同士の比較では双方が違うということしかわからない）、対象も似ていると思われるところと異なると思われるところのあるものを順次鎖の和のようにつなげて比較することが妥当であることに思いを致した。」[1] またこのことは、質問についても同じである。すなわち、「互いに似ているところを測る質問群、異なる（固有の発想による）ところを測る質問群を用いる

のである。つまり相互に共通な発想（アイデア）で作りうる質問群と、それぞれに固有な発想（アイデア）に基づく質問群をつくる」と、それぞれの固有な発想に基づく質問群が、「共通質問群を媒介として、すべての質問の関連する姿をそれぞれ理解しうることになる」[2]

上述のような手続きを経て作成された質問紙は、予備調査にかけられて、加筆、訂正され、本調査にむけての質問紙となった。これが、日本人の高校生群、大学生群、壮年者群に使用された一般用調査票である。

しかし、この調査票は量的にも質的にも、高齢の人々には負担がありすぎるということから、老年者のためには、質問内容をできるだけ変えないように留意しながら、多少手直した。まず、今回調査に応じてくださったM会の会長とスタッフの方々から、難解なあるいは分かりにくい内容の指摘と、示唆に富むサジェスチョンを頂き、その提案に基づいて手直しした。出来上がった老年者用調査票と一般用調査票の一致を確認するためには、心理学専攻の女性の援助を受けた。この老年者用調査票は、上記のような理由から、一般用調査票と多少言いまわしが異なるだけでなく、２回に分けた作業を可能にするために、２部に分けてある。

また、ヨーロッパの被調査者のためには、英文の調査票を作成した。手順としては、まず筆者が原文にできるだけ忠実に英訳した。次に、英語が達者で西洋的メンタリティにも精通している日本人２人と、日本に住んでいる西洋人とに、原文と英訳したものを渡し、単に英文を訂正するだけでなく、互いに内容に関しても議論しながら、加筆・訂正をしてもらった。さらに、別の英訳の名人であり、心理学にも造詣が深い日本人に、バック　トランスレーションを依頼して、一致を確認した。

老年者用調査票作成の場合でも、英文の調査票作成の場合でも、原文に忠実であることにより、比較が可能なように留意したことは言うまでもないが、それはできるだけ直訳するということを意味しているわけではない。たとえば、英訳の場合、日本独特の風習をそのまま直訳しても否定の答えがかえってくるのは当然のことであろう。それは作者の意図するところではない。その文で言わんとしていること

が忠実に伝わり、それに対する反応が知りたいのである。また、老年者を対象とした調査の場合、他の一般用の調査票を使用すれば同じ尺度で測るという意味においては完全であろうが、内容が難解であったり、集中力が持続しうる限界を越えるようなものであれば、正確な回答は期待しにくいであろう。

以上のような意味で、日本語・英語両方の言語に堪能で、両方のメンタリティに通じている人々、日々老年者と接しその実情やその考え方を把握している人々、心理学に造詣が深い人々に、この調査票自身を前にして、多くの議論を重ねてもらえたことは、本当に意義深いことであった。

第２節　被調査者の構成

被調査者の内訳は、Ｔａｂｌｅ　５・２・１「被調査者」に示したとおりである。

日本人のサンプルとしては、宗教教育を実施していない一般校の高校生・大学生、キリスト教教育を行っている学校の高校生・大学生、３０歳代～５０歳代の壮年者、そして６０歳代～８０歳代の老年者で、地域としてはいずれも関東と関西が中心になっている。ヨーロッパの学校としては、アイルランドと英国の高校生・大学生に依頼した。

以下、上記のグループをそれぞれ、一般高校生群・キリスト教高校生群・ヨーロッパ高校生群・一般大学生群・キリスト教大学生群・ヨーロッパ大学生群・壮年者群・老年者群と呼んで、分析を進めていく。ただし、キリスト教高校生群・大学生群に属する者たちは、キリスト教教育をしている学校の在学生であるという意味であり、必ずしも本人がキリスト教信者であるというわけではない。

Ｔａｂｌｅ　５・２・１「被調査者」

グループ名	……年…齢……			人数
	年齢の幅	平均	ＳＤ	
一般高校生群	１６～１７	１６．６	０．４	２０７
キリスト教高校生群	１６～１７	１６．２	０．４	１２５
ヨーロッパ高校生群	１５～１７	１６．４	０．５	４９
一般大学生群	２０～２６	２０．６	１．０	７２
キリスト教大学生群	２０～２２	２０．８	０．７	１１６
ヨーロッパ大学生群	２０～２６	２１．９	１．２	４３
壮年者群	３０～５９	４２．９	７．０	１２３
老年者群	６０～８９	７２．８	５．８	１７６
総　　計				９１１

なお、大学生は、高校生との年齢差をできるだけ大きくするために、いずれのグループの場合でも、２０歳以上に限定した。また、キリスト教教育の影響力を測るために、キリスト教の大学では、その対象を中学・高校でもキリスト教教育を受け

ていた者、すなわち少なくとも８年以上は学校でキリスト教教育を受けている者たちに限定した。キリスト教高校生群およびキリスト教大学生群は、連鎖的比較のための大切な役目も負っている。ヨーロッパの生徒・学生たちの場合は、学校教育と言う要素から見るのではなく、キリスト教の伝統の中、すなわちキリスト教文化圏に住む者たちとして見ているので、被調査者が通っている学校はキリスト教系のものもあれば、国立のものもある。

ただし先に少し触れ、また実証編で詳述するが、日本の場合、キリスト教の学校で教育を受けている者たちのほとんどはキリスト教信者ではなく、ヨーロッパの被調査者のほとんどはキリスト教信者である。

第３節　調査期日および手続き

調査時期は、１９８９年１月～１２月までのまる１年をかけた。多くの方々の尽力により、内容的にもまた人数のばらつきはあるものの量的にも、ほぼ予定していたものが回収できた。ヨーロッパの場合は一つ一つの学校の生徒数が非常に少ないので、多くの方々の協力にもかかわらずサンプル数は少ないが、個人の研究としてはやむを得ないと思っている。

調査にあたっては、学校の場合はキリスト教の大学を除いて、依頼した先生方が授業時間を使って実施したり、個別に手渡して回収して下さった。キリスト教校の大学生たちの場合は２０歳以上で８年間以上キリスト教教育を受けている者と限定したので一般には配布せず、該当者にダイレクトメールで依頼した。老年者群の場合も、同様である。壮年者群に関しては、多くの方々の好意により種々さまざまな方法で回収した。

（１）林知己夫　１９８８　日本人の心をはかる　朝日新聞社　p.４０

（２）林知己夫　前掲書　pp.１６０－１６１

第６章　宗教的意識や心情
―結果と考察―

第６章・第７章の結果と考察においては、「宗教的意識や心情」「倫理的価値意識」の中のそれぞれの便宜上の区分にそって、結果の分析や考察をすすめる。小テーマによる区分を越えた包括的なまとめや考察、文化、教育、ライフサイクル・世代の視点にたった総合的なまとめや考察はすべて総括編で行う。

第１節　各群の特徴

まず、「宗教的意識や心情」のアンケート調査の属性別集計結果から、強い反応が見られた項目を取り出し、その内容を吟味することにより、各グループの宗教的意識の特徴の概要をとらえたい。

ａ）一般高校生群

高い支持を得た項目の上位５位までに、習俗的な信心３項目が含まれている。すなわち、「４　葬式のあとには塩で清める」８６．０％、「５８　初詣をしたりさまざまな神社のまえで参拝したりする」７０．０％、「１７　合格、安産などそれぞれに力ある神々をお参りする」６６．２％である。

自然に対する反応としては、「１９　人間、動物、草木は皆同じ仲間」「３４　高い山、深い木立の中で心が清められる」への支持が高く、それぞれ７１．５％、５５．１％となっている。

神や信仰に対しては、「５５　皆が同じ神を拝む必要はない」７０．５％、「７　理論的追求よりも素直に生きることで十分」６２．８％、「４９　自分が拝んでいる神についてよく知らない」５９．４％で、以下３項目が５０％以上で続く。

霊魂に関しても「１０　魂は永遠に生きる」６５．７％、「４４　この世とあの世を死んだ霊は行き来する」６５．２％、「５　生物にも無生物にも命や霊魂がある」５９．４％等がかなり高い支持を得ている。

強く否定された項目の上位５位までがすべて”死後のみじめさ”に関するもので、「３５　死後の世界は汚れの世界」６７．６％、「２１　自殺は苦しむものを自然に返し楽にする」６３．８％、「４３　死後の世界は暗く寂しく惨め」６１．４％、「２０　あの世はないと思う」５５．１％、「３３　死後の世界は恐ろしい地獄の世界」５１．２％となっている。

「どちらとも言えない」という選択肢に対して反応が多かった内容は、上位１０位までの９項目までが、信仰することの是非や意義を問うものである。すなわち、「３２　信仰をもつことはよいこと」６６．２％、「６　神の存在や教えの理性的追求は大切」５８．５％、「５２　宗教は生活に意味を与える」５７．５％、「４７　若いうちから神を信じる必要はない」５６．５％、「２４　人間は帰属感をもとめて宗教に入る」５６．５％、「５７　神を信じることは現実からの逃避」５３．１％、「２５　神に生かされ答えるのが真の信仰」５２．２％、「５３　神を信じることはどの時代にも大切」５１．２％である。

以上の結果をまとめてみると、次のようになろう。

1　初詣をしたり、さまざまな祈願をする、葬式の後は塩で清める等、習俗に近い信心を行なっている者が多い。

2　果たして信仰をもつこと、宗教に入ることはよいことなのか、意味あることなのか定かではない。

3　自然に対しては仲間としての親しみと同時に、畏敬の念を抱いている。

4　死後の世界は、暗く、寂しく、恐ろしく、汚れた世界ではない。

5　霊や魂の存在を認めている。

b）キリスト教高校生群

高い割合で支持されている項目内容を見ると、第１に自然に関するもの、第２に

神や信仰に関するもの、第３に習俗に近い信心となっている。

自然に対しては、「１９人間・動物・草木はみな同じ仲間」が７６．０％で第１位、「３４　高い山深い木立のなかで心が清められる」が７２．０％で第４位の支持があり、自然に対する仲間としての親しみと、畏敬の念が表れている。

神や信仰に関しては、７２．８％の者が「５５　皆が同じ神を拝む必要はない」、「５３　神を信じることはどの時代にも大切」であると思っている。その他、「４６　神は日常生活のなかで語りかけている」７０．４％、「４５　神は偉大で何ものにも置き換えられない」６７．２％、「２８　神は見えないが実際に存在する」６３．２％、「３２　信仰をもつことはよいこと」５７．６％で、以下３項目が５０％以上で続く。

一方、６５．６％の者が「５８　初詣をしたり、さまざまな神社のまえで参拝したり」し、６１．１％が「４　葬式のあとには塩で清める」等、習俗に近い信心を行っている。

また霊に関しては、［１０　魂は永遠に生きる」は６１．６％、「４４　この世とあの世を死んだ霊は行き来する」は５２．０％、「５　生物にも無生物にも命や霊魂がある」が５０．４％の支持を受けている。

不支持率の高いものは、「３５　死後の世界は汚れの世界」８４．０％、「４３　死後の世界は暗く寂しく惨め」８１．６％、「３３　死後の世界は恐ろしい地獄の世界」７１．２％等、死後の世界の暗さ、惨めさ、恐ろしさ、汚れに対するものと、「５９　苦しいときにも神に助けを求めない」７６．８％、「４７　若いうちから神を信じる必要はない」６９．６％、「１　神を信じることは科学や理性に矛盾する」６５．６％等々、信仰を否定する内容のものである。

「どちらとも言えない」という選択肢に対して５０％以上の反応があったものは、「３　あの世は喜びに溢れた幸せなもの」６１．６％のみである。

以上の結果から見られる特徴の概略は、次のようである。

１　自然に対しては仲間としての親しさと同時に畏敬の念を抱いている。

２　神は存在しており、神を信じることはよいことで、どの時代どの年齢層にも大

切なことである。

3　習俗に近い信心も行っている。

4　死後の世界は暗く、寂しく、恐ろしく、汚れたものではないが、果たして喜びに溢れた幸せな世界であるかはわからない。

c）ヨーロッパ高校生群

高い支持率の項目のうち、自然に関する項目では、「１９　人間、動物、草木はみな同じ仲間」が８３．７％で第１位、「６０　人間や自然は神によって造られた」が６９．４％で第４位である。ここには、神に造られたものとしての自然に対する仲間意識が見られる。

神や信仰に関しては、５０％以上の支持を得ている項目が多い。例えば「４５　神は偉大で何ものにも置き換えられない」７３．５％、「５３　神を信じることはどの時代にも大切」６７．３％、「２８　神は見えないが実際に存在する」６５．３％、「４６　神は日常生活のなかで語りかけている」６３．３％、「３６　神は唯一で絶対的なものである」５５．１％等々である。

死後に関しては、「１０　魂は永遠に生きる」７３．５％、「１２　死後の世界で神に会える」６９．４％、「３９　大切な人の死は悲しいがまた会えると思うと慰められる」５７．１％、「３　あの世は喜びに溢れた幸せなもの」５７．１％である。

不支持率の高い項目群の内容には、主として自然界の延長線上にあるような八百万の神々の存在と、死後の世界の暗さ、惨めさ、恐ろしさ、汚さ等が見られる。

前者に含まれる項目として、「５４　神々のなかには狐などの動物もいる」９８．０％、「２９　自然のなかには太陽や月などいろいろな神々がいる」８１．６％、「９　善い神もあるが悪神悪霊もある」７９．６％、「１４　神は人間がつくりあげたもの」７３．５％、「８　人間は死後神になる」６９．４％　等がある。

後者は、「４３　死後の世界は暗く寂しく惨め」８７．８％、「３３　死後の世界は恐ろしい地獄」７５．５％、「３５　死後の世界は汚れの世界」７５．５％等

々である。

また、日本的感触のある習俗的信心はあまり行われていない。

「どちらとも言えない」という選択肢に対して５０％以上の反応があった項目は、一つもない。

以上の結果からの特徴をまとめると、次のようになる。

1　神は実際に存在し、神を信じることはよいことであり、どの時代にも大切なことである。

2　神は唯一絶対的なもので、何ものにも置き換えられない。したがって、人間が死後神になるということはなく、まして狐等の動物や太陽や月等の自然が神であることもない。

3　人間、動物、草木はみな同じ仲間であるが、それらはみな神によって造られたものである。

4　死後の世界は暗く、寂しく、恐ろしく、汚れた世界ではなく、喜びに溢れた幸せな世界である。そこで、人は、神に出会い、大切な人々と再会し、永遠に生きる。

5　初詣に類するような、日本的感触のある習俗的信心は、あまり行われていない。

d）一般大学生群

高い支持を得ている項目内容のうち、習俗に近い信心に関しては、「５８　初詣をしたり、さまざまな神社のまえで参拝したりする」が８８．４％で、６０項目中第１位となっている。そのほかに、「１７　合格、安産などそれぞれに力ある神々をお参りする」６８．１％、「４　葬式のあとには塩で清める」６２．３％がある。

神や信仰に関しては、「５５　みなが同じ神を拝む必要はない」８７．０％、「２７　苦しいときに神を思い出すがふだんはあまり考えない」６９．６％、「１１　神に生活の全てをかける必要はない」６３．８％、「７　理論的追求よりも素直

に生きることで十分」５５．１％に、以下２項目が５０％以上で続く。

自然に対しては、「１９　人間、動物、草木はみな同じ仲間」７６．８％が全項目中第３位、「３４　高い山、深い木立のなかで心が清められる」７１．０％は、第４位と高い支持を得ている。

不支持率が高い項目は、死後のみじめさに関する項目と、徹底的な信仰についてである。

死後の世界に関しては、「３５　死後の世界は汚れの世界」７５．４％、「４３　死後の世界は暗く寂しく惨め」７２．５％、「３３　死後の世界は恐ろしい地獄の世界」６５．２％となっている。

信仰の仕方に関しては、「３１　命がけでも神に応えることが大切」６９．６％、「５９　苦しいときにも神に助けを求めない」６５．２％等となっている。

「どちらとも言えない」という選択肢に対する反応が高かった項目は、「３２　信仰をもつことはよいこと」６２．３％、「４７　若いうちから神を信じる必要はない」５６．５％、「６　神の存在や教えの理性的追求は大切」５０．７％と、信仰の是非を問う内容のものである。

以上の結果を、まとめると次のようになろう。

1　初詣をしたり、さまざまな祈願をしたり、葬式の後塩で清めるなどの習俗的信心を行っている。

2　苦しいときに神を思い出し、助けを求めることは多いが、果たして信仰をもつことはよいことであると言い切れるものなのかは定かではなく、まして神に生活のすべてをかける必要はない。

3　自然に対しては、仲間としての親しみと同時に畏敬の念も抱いている。

4　死後の世界は暗く、寂しく、恐ろしく、汚れた世界ではない。

e）キリスト教大学生群

高い支持を得ている項目の内容は、第１に神と信仰について、第２に自然について、第３に習俗的信心への参加についてである。

信仰に関しては、「５３　神を信じることはどの時代にも大切」８６．１％、「４６　神は日常生活のなかで語りかけている」８３．５％、「２８　神は見えないが実際に存在する」８２．６％、「４５　神は偉大で何ものにも置き換えられない」７７．４％以下多数である。

自然に関しては、「１９　人間、動物、草木はみな同じ仲間」７６．５％、「３４　高い山、深い木立のなかで心が清められる」７３．０となっており、自然への仲間意識と、畏敬の念が見られる。

また、習俗的信心への参加については、「５８　初詣をしたり、さまざまな神社の前で参拝したりする」６９．６％、「４　葬式のあとには塩で清める」６６．１％となっている。

不支持率の高かったものは、死後のみじめさに関する項目群と、信仰への否定に関する項目群である。

「３５　死後の世界は汚れの世界」９９．１％、「４３　死後の世界は暗く寂しく惨め」９２．２％、「３３　死後の世界は恐ろしい地獄の世界」８７．８％は、全項目中上位４位以内に納まっている。

信仰への否定の項目としては、「１　神を信じることは科学や理性に矛盾する」９０．４％、「５９　苦しいときにも神に助けを求めない」８７．８％、「４７　若いうちから神を信じる必要はない」８１．７％、「１８　自信があれば信じる必要はない」８０．９％、「５７　神を信じることは現実からの逃避」７１．３％以下多数である。

一方、「どちらとも言えない」という選択肢に対しては、「３　あの世は喜びに溢れた幸せなもの」という項目のみが、５０％以上の支持を得ている。

以下に、キリスト教大学生群の結果をまとめてみよう。

1　神は存在しており、どの時代でも、どの年齢層においても、神を信じることはよいことである。

2　自然に対しては、仲間としての親しさと同時に畏敬の念も抱いている。

3　習俗に近い信心業を行なっている者たちもかなりいる。

4　死後の世界は暗く、寂しく、恐ろしく、汚れたものではないが、果たして喜びに溢れた幸せな世界であるかはわからない。

f）ヨーロッパ大学生群

高い支持を得ている項目内容のうち、神および信仰に関する項目としては、「45　神は偉大で何ものにも置き換えられない」90．7％、「53　神を信じることはどの時代にも大切」88．4％、「46　神は日常生活のなかで語りかけている」81．4％、「28　神は見えないが実際に存在する」79．1％，「25　神に生かされ応えるのが真の信仰」76．7％、「26　神は無条件に救われるわけではない」72．1％、「6　神の存在や教えの理性的追求は大切」67．4％、「36　神は唯一で絶対的なもの」67．4％、以下肯定的な内容のものが続く。

自然観に関しては、「60　人間や自然は神によって造られた」79．1％、「19　人間、動物、草木はみな同じ仲間」72．1％となっており、神によって造られたものとしての自然に対する仲間意識がある。

死後に関しては、「10　魂は永遠に生きる」88．4％、「12　死後の世界で神に会える」72．1％、「3　あの世は喜びに溢れた幸せなもの」69．8％、「15　この世での生き方により死後の状態は異なる」62．8％、「39　大切な人の死は悲しいが、また会えると思って慰められる」53．5％である。

不支持率の高いものは、自然の延長線上にある八百万の神々の存在と、暗く寂しく恐ろしい死後の世界である。

神々に対する否定の項目は、「54　神々のなかには狐などの動物もいる」95．3％、「14　神は人間が造りあげたもの」93．0％、「59　苦しいときにも神に助けを求めない」90．7％、「9　善い神もあるが、悪神悪霊もある」88．4％、「47　若いうちから神を信じる必要はない」88．4％、「16　神は厳しく怖いという印象がある」86．0％、「17　合格、安産等それぞれに力ある神々にお参りする」76．7％等々である。

死後の世界に関しては、「３５　死後の世界は汚れの世界」９０．７％、「３３　死後の世界は恐ろしい地獄の世界」９０．７％、「死後の世界は暗く寂しく惨め」８８．４％という結果が出ている。

また、日本的感触のある習俗的信心も、ほとんど行われていない。

「どちらとも言えない」への選択肢に５０％以上の反応があったのは、「２４　人間は帰属感を求めて宗教に入る」５３．５％のみである。

以上をまとめると、次のようになろう。

1　果たして人間は帰属感を求めて宗教に入っているのか否かは定かではないが、神を信じることはよいことであり、どの時代でも大切である。

2　上記の神は、唯一絶対な偉大な神であり、何ものにも置き換えることはできない。したがって、動物や、太陽等の自然のものが神であることはありえない。

3　人間、動物、草木などの自然は皆同じ仲間であるが、それらは皆神によって造られたものである。

4　死後の世界は暗く、寂しく、恐ろしく、汚れたものではなく、喜びに溢れた幸せな世界である。そこで人は神に出会い、大切な人々と再会し、永遠に生きるのである。

ｇ）壮年者群

高い支持を得ている内容は、信仰・信心に関するものと自然に関するものである。

信仰に関しては、「５５　皆が同じ神を信じる必要はない」８０．０％、「４９　自分の拝んでいる神についてよく知らない」７０．８％、「５３　神を信じることはどの時代にも大切」６７．５％、「３８　人格でなく意志のような存在として神を認めている」６５．８％、「２８　神は見えないが実際に存在する」６０．８％、以下多数の項目がある。

習俗に近い信心を行っている者は非常に多く、「５８　初詣をしたり、さまざまな神社のまえで参拝したりする」７８．３％、「４　葬式のあとには塩で清める」

７６．７％、「１７　合格、安産などそれぞれに力ある神々をお参りする」５６．７％となっている。

自然に関しては「１９　人間、動物、草木はみな同じ仲間」７５．０％、「高い山、深い木立のなかで心が清められる」６２．５％で、仲間としての親しさと同時に畏敬の念を抱いている。

一方、不支持率が高い項目の上位３位までが、死後の世界の暗さ、恐ろしさ等に関するものである。「３５　死後の世界は汚れの世界」８４．２％、「３３　死後の世界は恐ろしい地獄の世界」８２．５％、「４３　死後の世界は暗く寂しく惨め」７７．５％である。

死後の世界のマイナスのイメージに続いて強い否定のあった内容は、神や信仰に対するマイナスのイメージへの否定である。「１　神を信じることは科学や理性に矛盾する」６８．３％、「５９　苦しいときにも神に助けを求めない」６３．３％、「１６　神は厳しく怖いという印象がある」５９．２％、「４７　若いうちから神を信じる必要はない」５７．５％、「１８　自信があれば信じる必要はない」５５．０％となっている。

「どちらとも言えない」という選択肢に半数以上のものが反応したのは「３　あの世は喜びに溢れた幸せなもの」という項目である。

以上、壮年者群の反応の特徴をまとめてみると次のようになる。

1　自分が拝んでいる神についてよく知らないが、神は実際に存在し、神を信じることはよいことで、どの時代でも大切なことである。

2　習俗に近い信心業もよく行っている。

3　自然に対しては仲間である親しさと同時に畏敬の念も抱いている。

4　死後の世界は、決して暗く、寂しく、恐ろしく、汚れた世界ではないが、果たして喜びに溢れた幸せなものであるか否かは定かではない。

h）老年者群

高い支持を受けている項目内容は、信心・信仰に関するものと、自然に関するも

のとである。

習俗的信心としては「５８　初詣をしたり、さまざまな神社の前で参拝したりする」８３．３％、「４　葬式の後には塩で清める」６４．９％、　「１７　合格、安産などそれぞれに力ある神々をお参りする」６２．６％となっている。

神、信仰に対する考えとしては、「４９　自分の拝んでいる神についてよく知らない」８１．６％、「５５　皆が同じ神を拝む必要はない」７５．３％、「５３　神を信じることはどの時代にも大切」７４．７％、「７　理論的追求より素直に生きることで十分」７３．０％、「３８　人格でなく意志のような存在として神を認めている」６６．１％、「３２　信仰を持つことはよいこと」６５．５％等々以下多数である。

自然に対しては、「１９　人間、動物、草木は皆同じ仲間」が８１．６％で第２位、「３４　高い山、深い木立の中で心が清められる」が７５．９％で第４位という非常に高い支持を受けており、自然に対する仲間意識と畏敬の念が表明されている。

不支持率が高いものは、死後の世界の暗さ惨めさ恐ろしさ等に関するものと、神の厳しさ怖さに関する内容のみである。すなわち「３５　死後の世界は汚れの世界」６５．５％、「３３　死後の世界は恐ろしい地獄の世界」６３．８％、「４３　死後の世界は暗く寂しく惨め」５４．０％、および「１６　神は厳しく怖いという印象がある」５６．９％の４項目である。

「どちらとも言えない」という選択肢に５０％以上の反応があったのは「３　あの世は喜びに溢れた幸せなもの」という１項目だけである。

以上をまとめると、次のように考えられよう。

1　自分が拝んでいる神についてよく知らないが、神を信じることはよいことであり、どの時代にも大切なことである。

2　習俗に近い信心業も行っている。

3　自然に対しての強い仲間意識と同時に畏敬の念をもっている。

4　死後の世界は、暗く、寂しく、恐ろしく、汚れたものではないが、果たして喜

びに溢れた幸せなものかはわからない。

以上、多数の者が反応した項目に注目して各グループの特徴を概観すると、日本における一般校の高校生と大学生、日本のキリスト教校の高校生と大学生、そしてヨーロッパにおける高校生と大学生というように、文化的あるいは教育的背景の似ている高校生群と大学生群が、居住地域が異なる（日本の中では一般校とキリスト教校の大学生群と高校生群の地域がクロスしている）にもかかわらず、ほとんど同じ特徴を示していることがわかる。これは、文化や教育の背景が色濃く影響しているものと思われる。

さらに、日本のキリスト教校における高校生群・大学生群の特徴と、日本における成人群、老人群の特徴とが、近似しているという結果も、熟考に値するように思う。

なお、それぞれのグループの特徴を表に表したものが、Ｔａｂｌｅ　６・１・１「各群の宗教的意識の特徴」（次頁）である。

Ｔａｂｌｅ　６・１・１「各群の宗教的意識の特徴」

			老年者群			
			壮年者群			
グループ 内　容	日本一般校群		キリスト教校群		ヨーロッパ校群	
	高校生	大学生	高校生	大学生	高校生	大学生
信仰することの是非	果たしてよいこと、意味あることか		よいことであり、どの時代にも大切			
神と神々					自然界の延長線上にある八百万の神々を否定	
習俗的信心	非常に大勢の者が実施（キリスト教校の場合人数は減る）				ほとんど実施していない	
自然のとらえ方	仲間としての親しさと同時に、畏敬の念を抱いている				神に造られたものとしての仲間意識が見られる	
死後の世界のとらえ方	暗く、寂しく、恐ろしく、汚れた、惨めな世界ではない					
			果たして喜びに溢れた幸せな世界であるかどうかはわからない		喜びに溢れた幸せな世界で、そこで人は神に出会い、大切な人々に再会し、永遠に生きる	

第２節　神の概念

前節で各群の宗教的意識の特徴の概略をつかんだが、以下の節でさまざまなテーマにそって、さらに詳しく吟味することとする。

1　唯一絶対の神と八百万の神々

Ｔａｂｌｅ　６・２・１ａ　から　Ｔａｂｌｅ　６・２・１ｈまでに示したものが、「唯一絶対の神と八百万の神々」に関係があると思われる項目に対する各群の反応である。以下、それぞれのＴａｂｌｅにそって内容を吟味していく。

ａ）一般高校生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・１ａ「唯一の神／八百万の神々」

－一般高校生群－　　数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
36	神は唯一で絶対的なもの	15.5	50.2	34.3
45	神は偉大で何ものにも置き換えられない	31.9	49.8	17.9
8	人間は死後神になる	32.4	49.8	17.9
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	52.2	29.5	18.4
54	神々の中にはきつねなどの動物もいる	30.9	48.8	19.8
9	善い神もあるが悪神悪霊もある	25.6	47.8	26.6
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	70.0	18.8	10.6
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	66.2	19.3	14.5
55	皆が同じ神を拝む必要はない	70.5	23.2	5.3

一般高校生群の場合、具体的に死後の人間が、太陽が、動物が神であるか否かは定かではないが、どちらかといえばそれらの神々の存在を否定はしていないという姿が浮上している。また、神の概念の中に”悪い”神・霊というものの存在の可能性が入りうるものなのかどうかも明確ではない。これら神の概念がはっきりしないままに、初詣をしたり、さまざまな祈願をそれぞれに力あると思われている神々にしている者たちはかなりいる。神は偉大で、唯一絶対的なものであるとは考えられていず、人それぞれに、自分が好む神々を拝めばよいという考えをもっていると思われる。

b）キリスト教高校生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・１ｂ「唯一の神／八百万の神々」

－キリスト教高校生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
36	神は唯一で絶対的なもの	37.6	33.6	28.8
45	神は偉大で何ものにも置き換えられない	67.2	20.0	12.8
8	人間は死後神になる	18.4	34.4	47.2
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	20.8	32.0	47.2
54	神々の中にはきつねなどの動物もいる	13.6	44.0	41.6
9	善い神もあるが悪神悪霊もある	12.8	31.2	56.0
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	65.6	15.2	19.2
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	43.2	18.4	38.4
55	皆が同じ神を拝む必要はない	72.8	22.4	4.8

キリスト教高校生群の場合、神は唯一絶対かと言うと意見は分かれるが、全般的に言って一般校よりは、神の偉大さをより強く肯定している。しかし、果たして自然の延長線上のもの、すなわち死後の人間、太陽や月、動物等も神々になりうるかということになると明確な判断は得られず、肯定はしていないもののきっぱりと否定しているわけでもない。初詣や、種々の祈願等”さまざまな”神々への参拝もかなりある。皆が同じ神を拝む必要はないという考えも強い。

c）ヨーロッパ高校生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・１ｃ「唯一の神／八百万の神々」

－ヨーロッパ高校生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
36	神は唯一で絶対的なもの	55.1	30.6	14.3
45	神は偉大で何ものにも置き換えられない	73.5	18.4	8.2
8	人間は死後神になる	10.2	20.4	69.4
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	8.2	10.2	81.6
54	神々の中にはきつねなどの動物もいる	0.0	2.0	98.0
9	善い神もあるが悪神悪霊もある	6.1	14.3	79.6
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	18.4	24.5	57.1
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	20.4	30.6	49.0
55	皆が同じ神を拝む必要はない	44.9	26.5	28.6

ヨーロッパ高校生群の場合は、神の唯一絶対性にもかなりつながってくると思わ

れる何ものにも置き換えられない神の偉大さの肯定が、明確に表現されている。それは、太陽や月、動物、死後の人間等の”種々”の神々に対するきっぱりとした否定につながり、考えとして一貫している。

しかし、これらの判断は、他の人々がそれぞれの信じる神々を拝むことを必ずしも否定するものではないことは、「皆が同じ神を拝む必要はない」肯定４４．９％、「どちらとも言えない」２６．５％に表れている。

ｄ）一般大学生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・１ｄ「唯一の神／八百万の神々」

－一般大学生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
36	神は唯一で絶対的なもの	13.0	23.2	63.8
45	神は偉大で何ものにも置き換えられない	29.0	42.0	29.0
8	人間は死後神になる	15.9	36.2	47.8
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	29.0	47.8	23.2
54	神々の中にはきつねなどの動物もいる	11.6	49.3	39.1
9	善い神もあるが悪神悪霊もある	17.4	44.9	37.7
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	88.4	2.9	8.7
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	68.1	14.5	17.4
55	皆が同じ神を拝む必要はない	87.0	13.0	0.0

一般大学生群の場合は、具体的なもの、すなわち死後の人間、太陽、動物等に神

性をはっきりと認めるものは少ないが、初詣や祈願のために種々の神々を参拝するものは非常に多い。神の唯一性・絶対性への否定は強く、「皆が同じ神を拝む必要はない」という項目への否定は０％であった。これらのことを考え合わせると、一般校の大学生たちは、これと明確なかたちでは把握できないものの、さまざまなかたちの神々の存在を肯定しているものと思われる。

ｅ）キリスト教大学生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・１ｅ「唯一の神／八百万の神々」

－キリスト教大学生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
36	神は唯一で絶対的なもの	50.4	29.6	19.1
45	神は偉大で何ものにも置き換えられない	77.4	20.0	2.6
8	人間は死後神になる	27.0	43.5	29.6
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	23.5	22.6	53.9
54	神々の中にはきつねなどの動物もいる	13.9	36.5	49.6
9	善い神もあるが悪神悪霊もある	13.9	38.3	47.8
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	69.6	8.7	21.7
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	41.7	26.1	32.2
55	皆が同じ神を拝む必要はない	73.0	23.5	2.6

キリスト教大学生群の場合は、神の何ものにも置き換えられない偉大さを強く肯定しているものの、自然界の延長線上の神々の存在をきっぱりと否定しているわけ

でもない。一般高校生群や大学生群ほどではないが、初詣や祈願等のために”種々の”神々への参拝もかなり行っている。皆が同じ神を拝む必要はないという意識も高い。

f）ヨーロッパ大学生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・１ｆ「唯一の神／八百万の神々」

－ヨーロッパ大学生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
36	神は唯一で絶対的なもの	67.4	9.3	20.9
45	神は偉大で何ものにも置き換えられない	90.7	7.0	2.3
8	人間は死後神になる	4.7	25.6	69.8
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	2.3	7.0	90.7
54	神々の中にはきつねなどの動物もいる	0.0	4.7	95.3
9	善い神もあるが悪神悪霊もある	0.0	11.6	88.4
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	23.3	20.9	55.8
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	7.0	16.3	76.7
55	皆が同じ神を拝む必要はない	44.2	27.9	27.9

ヨーロッパ大学生群の場合は、神の唯一絶対性を肯定するかたちでの、神の偉大さの表明が明確になされ、自然界の延長線上にあるような種々の神々の存在の可能性をきっぱりと否定している。ただしこの判断は、それぞれの人がそれぞれの信じるところの神々を拝むことまでをもはっきりと否定するものではない。

g）壮年者群

Ｔａｂｌｅ　６・２・１ｇ「唯一の神／八百万の神々」

－壮年者群－

数字は％

No	項目内容	はい	どちらとも	いいえ
36	神は唯一で絶対的なもの	20.0	36.7	43.3
45	神は偉大で何ものにも置き換えられない	54.2	33.3	12.5
8	人間は死後神になる	47.5	35.0	17.5
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	31.7	38.3	30.0
54	神々の中にはきつねなどの動物もいる	16.7	44.2	39.2
9	善い神もあるが悪神悪霊もある	18.3	40.8	38.3
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	78.3	13.3	8.3
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	56.7	20.0	23.3
55	皆が同じ神を拝む必要はない	80.0	14.2	5.8

壮年者群の場合、自然の延長線上にある神々のうち、動物の神々や悪神の存在などはどちらかといえば否定しているが、太陽や月などの神々に対しては意見は３つに分かれ、死後の人間を神としてとらえる考え方には、かなり肯定的傾きが見られる。種々の祈願のための参拝は半数強であるが、初詣等の神社への参拝は８０％近くの者が行っている。神の唯一絶対性に対しては否定に傾き、神の何ものにも置き換えられない偉大さに関しては肯定に傾いている。また、皆が同じ神を拝む必要はないと言う考えをもっているものは８０％であり、それを否定する者はわずかである。

h）老年者群

Ｔａｂｌｅ　６・２・１ｈ「唯一の神／八百万の神々」

－老年者群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
36	神は唯一で絶対的なもの	30.5	35.1	23.6
45	神は偉大で何ものにも置き換えられない	62.1	25.3	3.4
8	人間は死後神になる	60.3	29.3	4.6
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	44.3	32.8	14.9
54	神々の中にはきつねなどの動物もいる	12.6	41.4	36.8
9	善い神もあるが悪神悪霊もある	13.2	40.8	38.5
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	83.3	4.6	4.6
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	62.6	10.9	17.2
55	皆が同じ神を拝む必要はない	75.3	12.1	4.0

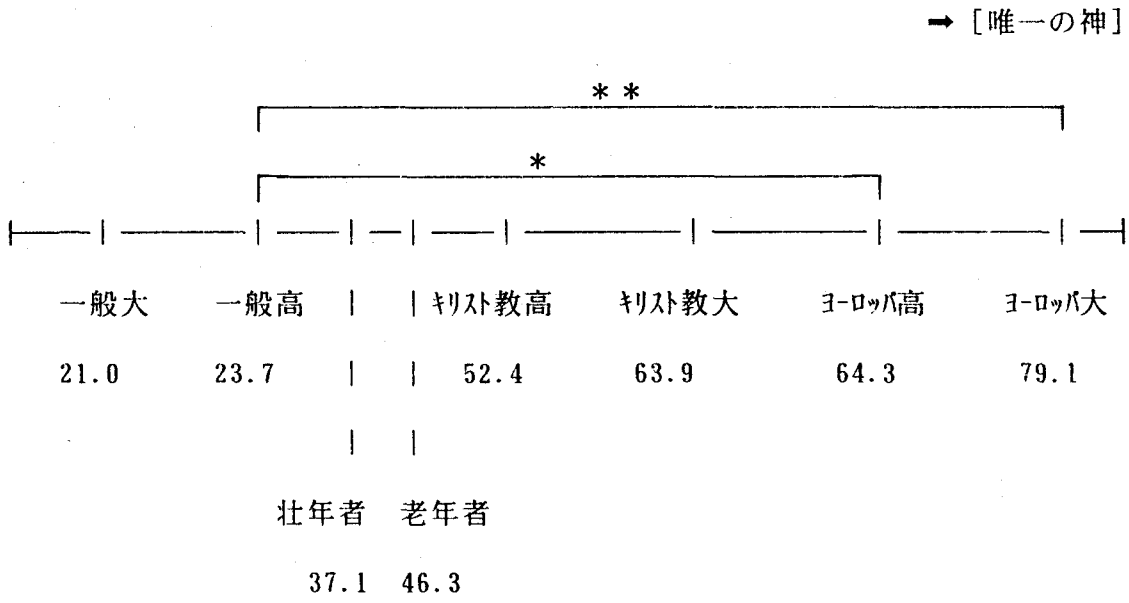
老年者群では、動物の神々や悪神などはどちらかといえば否定されているが、自然界の太陽や月などの神々の存在に関しては肯定のほうへ傾き、死後の人間が神になるということに関しては６０．３％の者が肯定しわずか４．６％の者が否定している。非常に多くの者が初詣や祈願等で種々の神々を参拝しており、「みなが同じ神を拝む必要はない」という考えも強く、反対する者はわずか４％である。また、神は偉大であるとのとらえはあるが、決して唯一絶対的な意味で言われているわけではない。

以上、各群毎に内容を分析してみたが、すべての群を一覧するとどのような傾向

が見られるのであろうか。

Ｆｉｇ．６・２・１は、「３６　神は唯一で絶対的なもの」と「４５　神は偉大で何ものにも置き換えられない」の２項目に対する肯定率の平均値を昇順に並べたものである。

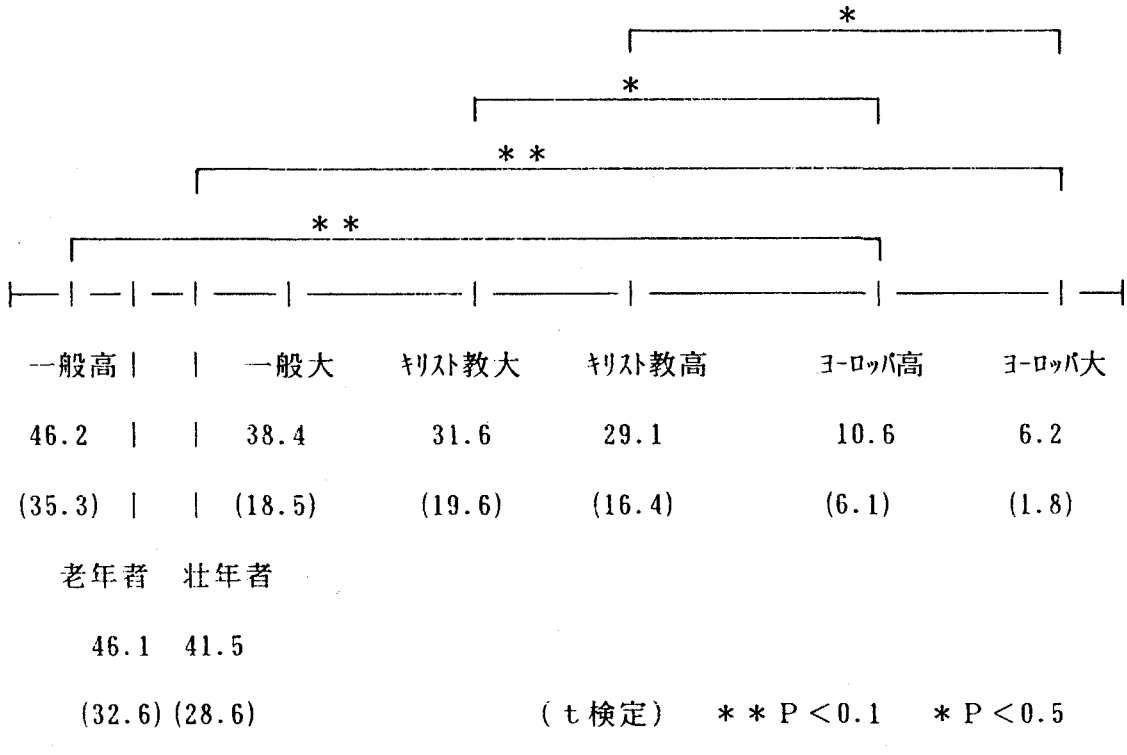
また、Ｆｉｇ．６・２・２は、Ｔａｂｌｅ６・２・１の項目８、２９、５４、９、５８、１７の６項目に対する肯定率の平均値を降順に並べたものである。なお、項目５８と１７の初詣や種々の祈願に関するものは、英文の調査票ではヨーロッパ風に訳したとはいえ、日本的メンタリティがその背後に強くある可能性もあるので、念のためにその２項目を省いたものを（　）内に記入した。しかし、結果的には差はなかった。



（ｔ検定）　＊＊Ｐ＜．01　＊Ｐ＜．05

Ｆｉｇ．６・２・１「唯一の神」

［八百万の神々を肯定］←



Ｆｉｇ．６・２・２「八百万の神々」

どちらの図からも順位的に見ると、一般高校生群と一般大学生群のグループ、キリスト教高校生群とキリスト教大学生群のグループ、ヨーロッパ高校生群とヨーロッパ大学生群のグループの順となっているが、ｔ検定の結果Ｆｉｇ．６・２・１では、一般高校生群と大学生群がヨーロッパ高校生群と５％水準で、またヨーロッパ大学生群とは１％水準で有意差があり、Ｆｉｇ．６・２・２では日本のすべてのグループがヨーロッパ大学生群と１～５％水準で、そしてヨーロッパ高校生群とはキリスト教の２群と一般大学生群が６％水準である以外は、１～５％水準で有意差が見られた。

日本のキリスト教校の場合、神の一般的概念としての唯一絶対性に関しては非常

にヨーロッパに近いものがあるが、ひとたび具体的な神の姿となると日本の多神教的なとらえになっていることがわかる。これは理屈で分かっていることと、実際に理解していることの違いであろうか。

また、老年者・壮年者も、キリスト教的影響をあまり受けていない一般の高校生・大学生のように、八百万の神々を拝んでいるという姿が浮上してきている。

2　神の母性性と父性性

一般に農耕文化に根ざしていた日本人は神に母性性を見、キリスト教文化圏の人々は神に父性性を見ると言われていることはすでに述べたが、本調査における被調査者からもそれを実証することができるのであろうか。

以下、調査結果から得られたデータをもとに、各群のこのテーマに関する考えを探ってみることとする。各群の反応は、Ｔａｂｌｅ　６・２・２ａ　から　６・２・２ｈに示した。

a）一般高校生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・２ａ「神の母性性・父性性」

－一般高校生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
2	神に母性性を感じる	11.1	45.4	43.5
40	神に包み込むような暖かさを感じる	17.4	48.8	33.8
42	神に父性性を感じる	10.6	50.2	38.6
16	神に厳しく怖いという印象がある	11.1	43.5	45.4
50	神は偉く畏れ多い方という印象がある	18.4	50.7	30.4
38	人格ではなく意志のような存在として神を認めている	33.3	50.7	15.9

一般高校生群の場合、神の母性性または父性性、そしてそれらに付随しているように一般に言われている属性としての暖かさ、厳しさあるいは畏れ多い偉大さに対しては、「どちらとも言えない」と「いいえ」という２つの選択肢の間を、３０％～５０％の者たちが揺れ動いている。

また、神を人格神とはみなさず、意志的存在としてとらえる考え方に対しても、明確な反応は得られないが、３０％～５０％の者たちの揺れ方が、「どちらとも言えない」と「はい」という選択肢の間に移っているという違いはある。

いずれにしても、このテーマに関する一般校の高校生のイメージは、ぼんやりとしたものであることは間違いないようであるが、日本人は神に母性性を見るという多くの識者の見解もまた肯定しえない結果となっている。

b）キリスト教高校生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・２ｂ［神の母性性・父性性」

－キリスト教高校生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
2	神に母性性を感じる	36.0	36.8	27.2
40	神に包み込むような暖かさを感じる	49.6	36.8	13.6
42	神に父性性を感じる	43.2	37.6	19.2
16	神に厳しく怖いという印象がある	12.8	28.8	58.4
50	神は偉く畏れ多い方という印象がある	25.6	28.8	44.8
38	人格ではなく意志のような存在として神を認めている	56.0	34.4	9.6

キリスト教高校生群の場合、神に母性性を感じるのか、父性性を感じるのかは定かでなく、多少父性性に傾いてはいるものの、どちらかといえば「人格ではなく意志のような存在」としての神のイメージを描いているようである。しかしこの意志のような存在である神は、厳しく怖いものではなく、むしろ暖かさのある存在である。

ここでの高校生の、母性性・父性性のとらえは、従来から言われているようなものとは変わってきている可能性がある。神は厳しく怖いものではなくむしろ暖かさを感じるものであるということと、神は母性的であるということとは結びついていないからである。

c）ヨーロッパ高校生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・２ｃ「神の母性性・父性性」

－ヨーロッパ高校生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
2	神に母性性を感じる	12.2	36.7	49.0
40	神に包み込むような暖かさを感じる	30.6	34.7	32.7
42	神に父性性を感じる	44.9	32.7	20.4
16	神に厳しく怖いという印象がある	6.1	22.4	69.4
50	神は偉く畏れ多い方という印象がある	49.0	32.7	18.4
38	人格ではなく意志のような存在として神を認めている	30.6	26.5	42.9

ヨーロッパ高校生群においても、神に母性性を感じるのか父性性を感じるのかに対する明確な反応は得られないが、どちらかといえば母性性を否定し、父性性を肯定している者が多い。しかし、その神に”厳しく、怖い印象”をもっているものは、わずか６％に過ぎない。さりとて神に包み込むような暖かさを感じているかといえば必ずしもそうでもなく、意見は３つに分かれる。むしろ”偉く畏れ多い神”という印象が強いのであろうか。この項目に対しては４９％の支持と、３３％に近い迷いとが見られる。

d）一般大学生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・２ｄ「神の母性性・父性性」

－一般大学生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
2	神に母性性を感じる	26.1	29.0	44.9
40	神に包み込むような暖かさを感じる	18.8	36.2	44.9
42	神に父性性を感じる	17.4	37.7	43.5
16	神に厳しく怖いという印象がある	21.7	24.6	53.6
50	神は偉く畏れ多い方という印象がある	24.6	36.2	39.1
38	人格ではなく意志のような存在として神を認めている	55.1	29.0	15.9

一般大学生群の場合、神の母性性・父性性に関しての意見は分かれ、なんら顕著な反応は見られない。そもそもこのグループでは、神を人格的なものとしてとらえているように扱うこと自体が妥当ではないのかもしれない。むしろ「人格ではなく意志のような存在として神を認めている」という項目に５５．１％の肯定と２９％の「どちらとも言えない」という反応があることに注目したほうがよいのであろう。また、この意志のような存在としての神は暖かい神でもないが、厳しく怖い神でもない。

e）キリスト教大学生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・２ｅ「神の母性性・父性性」

－キリスト教大学生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
2	神に母性性を感じる	37.4	38.3	24.3
40	神に包み込むような暖かさを感じる	67.0	23.5	9.6
42	神に父性性を感じる	52.2	33.9	13.9
16	神に厳しく怖いという印象がある	8.7	24.3	67.0
50	神は偉く畏れ多い方という印象がある	34.8	33.9	31.3
38	人格ではなく意志のような存在として神を認めている	53.9	27.0	19.1

キリスト教大学生群の場合、神に父性性を感じているものの、その神は厳しく怖いものではない。ここでは厳しく怖い神のイメージ、暖かくない神のイメージは、はっきりと否定されている。しかし、この父性的なイメージの神も人格神としてよりもむしろ偉大な意志というとらえのようでもある。「人格ではなく意志のような存在として神を認めている」に対し、肯定５３．９％，［どちらとも言えない］２７％となっている。

f）ヨーロッパ大学生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・２ｆ「神の母性性・父性性」

－ヨーロッパ大学生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
2	神に母性性を感じる	23.3	37.2	37.2
40	神に包み込むような暖かさを感じる	41.9	44.2	9.3
42	神に父性性を感じる	41.9	27.9	30.2
16	神に厳しく怖いという印象がある	0.0	14.0	86.0
50	神は偉く畏れ多い方という印象がある	51.2	32.6	16.3
38	人格ではなく意志のような存在として神を認めている	25.6	30.2	41.9

ヨーロッパ大学生群は、神の厳しさ怖さに対してはっきりと否定している。神が包み込むような暖かさをもっているのか否かに関しては、「はい」と「どちらとも言えない」の間で迷うところであるが、決して否定しているわけでもない。むしろ”偉く畏れ多い方”というのが一番近いイメージなのであろうことが、読み取れる。

また、上記の神の属性は、彼らが神に母性性を感じるのか父性性を感じるのかということとなんら関係がない。彼らは、神の母性性・父性性に関して、何ら特徴的な反応を示していないからである。

g）壮年者群

Ｔａｂｌｅ　６・２・２ｇ「神の母性性・父性性」

－壮年者群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
2	神に母性性を感じる	27.5	32.5	38.3
40	神に包み込むような暖かさを感じる	34.2	37.5	28.3
42	神に父性性を感じる	19.2	39.2	40.0
16	神に厳しく怖いという印象がある	10.0	29.2	59.2
50	神は偉く畏れ多い方という印象がある	25.0	35.8	37.5
38	人格ではなく意志のような存在として神を認めている	65.8	20.8	12.5

壮年者群では、「３８　人格としてではなく意志のような存在として神を認める」という項目に関して６６％の者が支持している。神の母性性・父性性に関しては意見が分かれ、なんら特徴的な傾向が見られないということも、人格としてよりも意志的存在として神をとらえていることと呼応しているのであろう。その神が果たして暖かい神なのか、畏れ多い神なのかは明確ではないが、厳しく怖い神ではないという反応は強い。

h）老年者群

Ｔａｂｌｅ　６・２・２ｈ「神の母性性・父性性」

－老年者群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
2	神に母性性を感じる	36.8	31.6	22.4
40	神に包み込むような暖かさを感じる	44.3	37.4	8.6
42	神に父性性を感じる	29.9	35.1	23.0
16	神に厳しく怖いという印象がある	16.1	17.8	56.9
50	神は偉く畏れ多い方という印象がある	41.4	32.8	15.5
38	人格ではなく意志のような存在として神を認めている	66.1	19.0	5.7

老年者群においても、「人格としてではなく意志のような存在として神を認める」という項目に関して６６％の者が支持しており、神の母性性、父性性ということに関しては意見が分かれている。しかし、神の厳しく怖い姿や温かみがない姿というものは、はっきりと否定されている。神が畏れ多いものであるという印象を否定するものは少なく、肯定するものは４１．１％である。この数字は率として高いものではないが、日本人のグループの中では最も高く、被検者全体からみれば、ヨーロッパの大学生、高校生についで第３位である。

以上、神の母性性と父性性をめぐる各群の意識を分析してみたのであるが、全体的に見て、いくつかのポイントが浮上してきたように思われる。

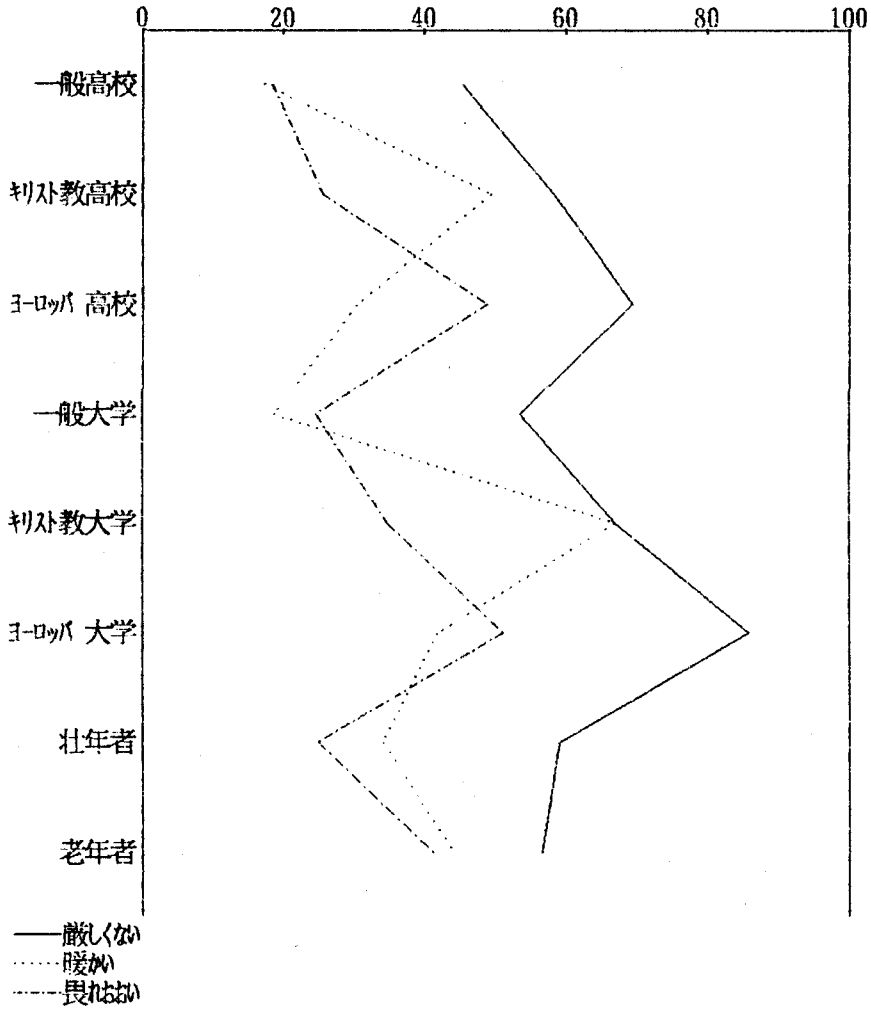
その一つは、どのグループも神を母性性、あるいは父性性という観点と結びつけて見てはいないということである。後述するごとく、神の”厳しさ”や”暖かさ”に関しては、かなりはっきりした意見も得られたが、そのことと神の母性性、父性性とは、特に関連はなかった。父親の特性は”厳しさ”母親の特性は”暖かさ・優しさ”というとらえ方自身が変化してきているのかもしれない。

一般高校生群の場合は、このテーマのいずれの項目に対しても反応がぼんやりしていて特徴がつかめなかったが、この高校生を除いてすべての日本人のグループでは５０％以上の者が「人格ではなく意志のような存在として神を認めている」。これに対し、ヨーロッパの高校生、大学生の「人格ではなく意志のような存在としての神」に対する支持は２０～３０％と低い。日本人は一般に、人格神として神をみているのではなく、何か目に見えない大きな意志として、神をとらえているものと思われる。

さて、神の偉大さ、厳しさ、暖かさ等についての被調査者の意識を、Ｆｉｇ．６・２・３「神の偉大さ・厳しさ・暖かさ」に示した。

一般校の高校生を除いて、どのグループも５０％以上の者が「神が厳しく怖い」という印象を否定している。特に、厳しい父性的な神を信仰していると言われているヨーロッパの高校生や大学生が、それぞれ６９．４％、８６．０％という高い率でこの神の厳しさ・怖さを否定し、大学生の場合肯定しているものは皆無である。

この厳しく怖い神の否定のうえにたって、ヨーロッパの高校生・大学生には、神の偉大さに対する畏敬の念が見られ、日本のキリスト教校の高校生・大学生には、神の包み込むような暖かさへの信頼が見られる。



Ｆｉｇ．６・２・３「神の偉大さ・厳しさ・暖かさ」

３　自然と神

日本人の中には自然の延長線上にある八百万の神々を拝んでいる場合が多いことは、すでに見た。それでは、日本人は”自然”というものをどのようにとらえているのであろうか。ここでは、この自然観に焦点を当てて分析を試みることとする。

自然に関する各群の反応は、Ｔａｂｌｅ　６・２・３ａ　から　Ｔａｂｌｅ　６・２・３ｈに示した。

ａ）一般高校生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・３ａ「自然観」

－一般高校生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
60	人間や自然は神によって造られた	38.2	39.6	21.7
22	大自然はひとりでに出来上がった	32.9	33.3	33.8
19	人間、動物、草木はみな同じ仲間	71.5	23.7	4.8
34	高い山、深い木立のなかで心が清められる	55.1	27.5	17.4
5	生物にも無生物にも命や霊魂がある	59.4	31.4	8.7
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	52.2	29.5	18.4
54	神々の中にはきつね等の動物もいる	30.9	48.8	19.8

一般高校生群の場合、自然が神によって造られたものなのか、ひとりでに出来上がったものなのかははっきりせず、３つの選択肢に反応は等分されている。一方、「人間、動物、草木はみな同じ仲間」「高い山、深い木立のなかで心が清められる」「生物にも無生物にも命や霊魂がある」「自然のなかには太陽や月等いろいろな神々がいる」という項目に対して高い支持があり、否定するものは少ない。特に、人間と動植物との仲間意識や、生物・無生物に宿る霊魂の存在に対して否定するものは非常に少ない。この群の自然観は、アニミズム的であるといえよう。

b）キリスト教高校生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・３ｂ「自然観」

－キリスト教高校生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
60	人間や自然は神によって造られた	45.6	36.0	18.4
22	大自然はひとりでに出来上がった	16.8	31.2	52.0
19	人間、動物、草木はみな同じ仲間	76.0	20.8	3.2
34	高い山、深い木立のなかで心が清められる	72.0	12.0	16.0
5	生物にも無生物にも命や霊魂がある	50.4	28.8	20.8
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	20.8	32.0	47.2
54	神々の中にはきつね等の動物もいる	13.6	44.0	41.6

キリスト教高校生群の場合、自然が神によって造られたのか否かははっきりしていないが、ひとりでに出来上がったものではないだろうという程度の判断が見られる。しかし、生きとし生けるものみな兄弟で、高い山や深い木立のなかで心が清められる思いがするということに対しての支持は非常に高いことから、自然の中にある種の神聖さを感じているものと思われる。

また、生物にも無生物にも霊魂が宿っていることに関しては５０％程度の支持がある。

c）ヨーロッパ高校生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・３ｃ「自然観」

－ヨーロッパ高校生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
60	人間や自然は神によって造られた	69.4	24.5	6.1
22	大自然はひとりでに出来上がった	32.7	32.7	34.7
19	人間、動物、草木はみな同じ仲間	83.7	14.3	2.0
34	高い山、深い木立のなかで心が清められる	10.2	32.7	57.1
5	生物にも無生物にも命や霊魂がある	18.4	32.7	49.0
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	8.2	10.2	81.6
54	神々の中にはきつね等の動物もいる	0.0	2.0	98.0

ヨーロッパ高校生群は、項目２２の「大自然はひとりでに出来上がった」という項目以外には、かなり明確な意思表示をしている。筆者は項目２２を、”"I think nature around us was there from the beginning coming into being on its own"と訳し、項目６０と対比するものとして考えたが、とりようによってはいろいろに解釈できる可能性があるようにも思う。いずれにせよ、項目２２に対しては意見が３つに分かれているものの、項目６０の「人間や自然は神によって造られた」に対しては７０％の者が肯定し、わずか６％の者が否定しているところから見ると、自然界は神によって創造されたと思っていると考えてよいであろう。

一方、人間、動物、草木はみな同じ仲間であることには８４％近くの者が肯定し、否定する者はわずかに２％であるが、その他の項目「高い山深い木立のなかで心

が清められる」「生物にも無生物にも命や霊魂がある」「自然のなかには太陽や月等いろいろな神々がいる」「神々のなかにはきつね等の動物もいる」に対しては明確な否定の反応が現れている。

これらの結果を考え合わせると、ヨーロパ高校生群は、自然を神性視することはせず、人間・動物・草木を神に造られた仲間として意識しているように思われる。

d）一般大学生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・３ｄ「自然観」

－一般大学生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
60	人間や自然は神によって造られた	14.5	40.6	44.9
22	大自然はひとりでに出来上がった	30.4	33.3	36.2
19	人間、動物、草木はみな同じ仲間	76.8	20.3	2.9
34	高い山、深い木立のなかで心が清められる	71.0	17.4	11.6
5	生物にも無生物にも命や霊魂がある	40.6	47.8	11.6
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	29.0	47.8	23.2
54	神々の中にはきつね等の動物もいる	11.6	49.3	39.1

一般大学生群の場合、人間や自然が神によって造られたのか否かということに関しては明確ではないものの、どちらかといえば否定していると言えるであろう。人間と動植物との仲間意識は強く、高い山や深い木立のなかでは心が清められる思いがする者たちも非常に多い。生物・無生物のなかに霊魂が宿っているのかは定かで

はないが、肯定と迷いを合わせて８８％程で肯定に傾いている。また、自然のなかの太陽や動物を神々としてみることにも、迷いが強く明確な反応は見られない。

以上を考え合わせると、ぼんやりとした反応ではあるが、どちらかといえば自然を神聖視する傾向が見られると言ってよいであろう。

ｅ）キリスト教大学生群

Ｔａｂｌｅ　６・２・３ｅ「自然観」

－キリスト教大学生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
60	人間や自然は神によって造られた	64.3	25.2	10.4
22	大自然はひとりでに出来上がった	20.0	18.3	61.7
19	人間、動物、草木はみな同じ仲間	76.5	20.9	2.6
34	高い山、深い木立のなかで心が清められる	73.0	18.3	8.7
5	生物にも無生物にも命や霊魂がある	37.4	30.4	32.2
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	23.5	22.6	53.9
54	神々の中にはきつね等の動物もいる	13.9	36.5	49.6

キリスト教大学生群の場合、人間や自然が神によって造られたものであるという意識はかなりはっきりしている。生物・無生物のなかに霊魂が宿っているのかどうかは、意見の分かれるところであるが、自然のものを神と見る神観はどちらかと言えば否定されている。これらのことを考え合わせると、キリスト教大学の学生たち

は、自然は神から造られたものであり、自然自身が神であるとは見ていないが、生きとし生けるものみな兄弟という意識と、偉大な自然のなかに”神聖さ”を感じるということは肯定しているようである。

f）ヨーロッパ大学生群

Table 6・2・3f「自然観」

－ヨーロッパ大学生群－

数字は％

No	項目内容	はい	どちらとも	いいえ
60	人間や自然は神によって造られた	79.1	16.3	4.7
22	大自然はひとりでに出来上がった	23.3	25.6	44.2
19	人間、動物、草木はみな同じ仲間	72.1	25.6	2.3
34	高い山、深い木立のなかで心が清められる	18.6	30.2	51.2
5	生物にも無生物にも命や霊魂がある	9.3	30.2	58.1
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	2.3	7.0	90.7
54	神々の中にはきつね等の動物もいる	0.0	4.7	95.3

ヨーロッパ大学生群の意識は明確に表明されている。人間や自然は神から造られたものであり、したがって自然に対して神から造られたものとしての仲間意識をもっているが、それらに霊魂が宿っているわけでもなく、ましてそれら自身が神であるわけでは決してないということである。

g）壮年者群

Table 6・2・3g「自然観」

－壮年者群－

数字は％

No	項目内容	はい	どちらとも	いいえ
60	人間や自然は神によって造られた	35.8	39.2	25.0
22	大自然はひとりでに出来上がった	30.0	26.7	42.5
19	人間、動物、草木はみな同じ仲間	75.0	17.5	7.5
34	高い山、深い木立のなかで心が清められる	62.5	20.8	16.7
5	生物にも無生物にも命や霊魂がある	50.0	31.7	17.5
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	31.7	38.3	30.0
54	神々の中にはきつね等の動物もいる	16.7	44.2	39.2

壮年者群の場合、人間や自然が神によって造られたものか否かは定かではない。人間や動物、植物はみな同じ仲間であるとの意識は高い。また、高い山、深い木立の中では心が清められる思いがし、生物にも無生物にも霊魂があるのだろうという考えもある等、アニミズム的自然観をもっていると思われる。

h）老年者群

老年者群の場合、どちらかといえば人間や自然は神によって造られたという意見に傾くが、定かではない。人間、動物、草木はみな仲間であるという意識、高い山深い木立等のなかで心が清められるという心情は非常に高く、また生物・無生物にも命や霊魂が宿っていると考えている。アニミズム的自然観であると言えよう。

Ｔａｂｌｅ　６・２・３ｈ「自然観」

－老年者群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
60	人間や自然は神によって造られた	48.9	29.3	12.6
22	大自然はひとりでに出来上がった	37.4	24.7	27.6
19	人間、動物、草木はみな同じ仲間	81.6	8.6	2.3
34	高い山、深い木立のなかで心が清められる	75.9	11.5	5.7
5	生物にも無生物にも命や霊魂がある	59.2	30.5	4.0
29	自然の中には太陽や月等いろいろな神々がいる	44.3	32.8	14.9
54	神々の中にはきつね等の動物もいる	12.6	41.4	36.8

以上、各グループを別個に分析してみた結果、文化、教育、年齢の違いに関係なく、どのグループでも大多数の者たちが、「人間、動物、草木はみな同じ仲間」であると思っていることが分かった。しかし、他の項目との関係を見ていくと、同じ表現を使いながらその意味する内容は、グループによってかなり異なっているのではないかと思われる。

このことを確かめるために整理したのが、Ｔａｂｌｅ　６・２・４「自然と神」である。（　）内の数字は、宗教的意識や心情を問う全項目中支持率が高かった項目を順に並べたときの、上からの順位である。

Ｔａｂｌｅ　６・２・４「自然と神」

数字は％

	人間、動物、草木みな仲間	神による自然の創造	深い木立に心清められる	生物、無生物にも霊魂
一般高校	71.5(2位)	38.2	55.1	59.4
ｷﾘｽﾄ教高校	76.0(1位)	45.6	72.0	50.4
ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校	83.7(1位)	69.4(4位)	10.2	18.4
一般大学	76.8(3位)	14.5	71.0	40.6
ｷﾘｽﾄ教大学	76.5(5位)	64.3	73.0	37.4
ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学	72.1(8位)	79.1(5位)	18.6	9.3
壮年	75.0(4位)	35.8	62.5	50.0
老年	81.6(2位)	48.9	75.9	59.2

一見して分かるように、動植物との仲間意識は全グループにおいて例外なく上位１０以内に入っている。

しかしこのように仲間として意識している自然を、ヨーロッパの生徒や学生は、

ともに神に造られた仲間として意識しているのに対し、日本人はその中に神的なものを感じているのではないかと思われる。ただし日本人の中でもキリスト教大学生群の場合多少ニュアンスが異なり、両者の中間に位置しているような意識が見られる。

以下に、Ｔａｂｌｅ「自然と神」に示された数字を手掛かりに細かく見ていくと、「神による創造」に対して格段に肯定的であったのはヨーロッパの高校生群・大学生群、そして日本のキリスト教大学生群であるが、全項目中上位１０位以内となると、ヨーロッパの２校のみとなる。

またこれらの３群ではーーここではヨーロッパの２群と日本のキリスト教大学生群との落差が大きいがーー生物無生物に魂や霊魂が宿っているというとらえ方、すなわちアニミズム的考え方を肯定する者は非常に少ない。

ところが、高い山や深い木立ちのなかで心が清められるという項目に対してはーーこの項目は偉大な自然のなかにあって”神的”なものを感じるということを意味しているのであろうがーー日本人全員が非常に高い支持を示しており、キリスト教大学生群も７３％の支持を表明しているのに対し、ヨーロッパの高校生群や大学生群は非常に低い支持率となっている。このような偉大な自然のなかに、”神聖さ”を感じるという心情は、非常に日本的なものなのであろうか。

以上見てきたようなそれぞれの群の”自然観”の特徴は、先に扱った”神の数”や”神の絶対性”、また”神への畏敬の念の強さ”などの意識と呼応しているように思われる。

第３節　死後の世界

死後の世界に関しては、被調査者の意識や心情を分析するべく、関係あると思われる項目を並べたのが、Ｔａｂｌｅ　６・３・１「死後の世界・状態」である。

Table 6・3・1「死後の世界・状態」

数字は%

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
33	死後の世界は恐ろしい地獄の世界	一般高校生	5.3	43.5	51.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	3.2	25.6	71.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	2.0	22.4	75.5
		一般大学生	10.1	24.6	65.2
		ｷﾘｽﾄ教大学生	0.9	11.3	87.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	0.0	9.3	90.7
		壮年者	2.5	15.0	82.5
		老年者	0.6	28.7	63.8
35	死後の世界は汚れの世界	一般高校生	1.4	30.9	67.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	0.8	15.2	84.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	8.2	12.2	75.5
		一般大学生	1.4	23.2	75.4
		ｷﾘｽﾄ教大学生	0.0	0.9	99.1
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	0.0	9.3	90.7
		壮年者	0.8	15.0	84.2
		老年者	0.6	25.9	65.5
43	死後の世界は暗く寂しく惨め	一般高校生	5.3	33.3	61.4
		ｷﾘｽﾄ教高校生	0.0	18.4	81.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	2.0	10.2	87.8
		一般大学生	2.9	24.6	72.5
		ｷﾘｽﾄ教大学生	0.0	7.8	92.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	2.3	9.3	88.4
		壮年者	0.0	22.5	77.5
		老年者	2.9	35.1	54.0
3	あの世は喜びに溢れた幸せなもの	一般高校生	21.3	55.6	23.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	25.6	61.6	12.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	57.1	34.7	8.2
		一般大学生	11.6	37.7	50.7
		ｷﾘｽﾄ教大学生	25.2	54.8	20.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	69.8	18.6	11.6
		壮年者	15.8	67.5	16.7
		老年者	21.3	55.2	18.4

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
12	死後の世界で神に会える	一般高校生	29.0	44.9	26.1
		ｷﾘｽﾄ教高校生	36.8	32.8	30.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	69.4	10.2	20.4
		一般大学生	13.0	31.9	55.1
		ｷﾘｽﾄ教大学生	41.7	34.8	23.5
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	72.1	23.3	2.3
		壮年者	16.7	45.8	36.7
		老年者	20.1	45.4	26.4
39	大切な人の死は悲しいがまた会えると思うと慰められる	一般高校生	30.0	27.5	42.0
		ｷﾘｽﾄ教高校生	36.8	23.2	40.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	57.1	18.4	24.5
		一般大学生	21.7	15.9	62.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	35.7	25.2	38.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	53.5	37.2	9.3
		壮年者	24.2	27.5	47.5
		老年者	34.5	39.1	19.5
8	人間は死後神になる	一般高校生	32.4	49.8	17.9
		ｷﾘｽﾄ教高校生	18.4	34.4	47.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	10.2	20.4	69.4
		一般大学生	15.9	36.2	47.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	27.0	43.5	29.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	4.7	25.6	69.8
		壮年者	47.5	35.0	17.5
		老年者	60.3	29.3	4.6
10	魂は永遠に生きる	一般高校生	65.7	22.2	11.1
		ｷﾘｽﾄ教高校生	61.6	29.6	8.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	73.5	18.4	8.2
		一般大学生	39.1	39.1	21.7
		ｷﾘｽﾄ教大学生	73.9	20.9	5.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	88.4	7.0	4.7
		壮年者	50.0	35.0	14.2
		老年者	50.0	36.8	8.6
44	この世とあの世を死んだ霊は行き来する	一般高校生	65.2	29.0	5.8
		ｷﾘｽﾄ教高校生	52.0	28.8	19.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	16.3	36.7	46.9
		一般大学生	39.1	42.0	18.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	46.1	36.5	17.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	16.3	48.8	34.9
		壮年者	40.0	45.0	15.0
		老年者	38.5	44.3	10.9

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
23	人間は繰り返し生きる	一般高校生	57.5	29.0	13.5
		ｷﾘｽﾄ教高校生	31.2	38.4	29.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	12.2	14.3	73.5
		一般大学生	34.8	39.1	26.1
		ｷﾘｽﾄ教大学生	27.0	39.1	33.9
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	4.7	23.3	72.1
		壮年者	22.5	29.2	48.3
		老年者	13.2	35.6	42.5
37	死んだら灰となって自然にかえるだけである	一般高校生	15.9	44.4	39.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	24.8	30.4	44.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	10.2	38.8	51.0
		一般大学生	39.1	40.6	20.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	18.3	36.5	45.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	9.3	25.6	65.1
		壮年者	37.5	35.0	27.5
		老年者	56.3	24.1	13.8
51	死後の世界は真空のような状態である	一般高校生	21.3	43.0	35.3
		ｷﾘｽﾄ教高校生	27.2	22.4	50.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	16.3	24.5	59.2
		一般大学生	42.0	42.0	15.9
		ｷﾘｽﾄ教大学生	11.3	33.0	54.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	2.3	18.6	76.7
		壮年者	36.7	38.3	24.2
		老年者	37.4	38.5	14.9
30	人間は死んだら全くの無に帰する	一般高校生	21.7	38.6	39.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	16.8	26.4	56.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	8.2	22.4	69.4
		一般大学生	31.9	39.1	29.0
		ｷﾘｽﾄ教大学生	9.6	28.7	61.7
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	7.0	16.3	76.7
		壮年者	35.0	35.0	30.0
		老年者	43.7	32.8	17.2
20	あの世はないと思う	一般高校生	10.6	34.3	55.1
		ｷﾘｽﾄ教高校生	8.0	31.2	60.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	18.4	16.3	65.3
		一般大学生	14.5	39.1	46.4
		ｷﾘｽﾄ教大学生	3.5	13.9	82.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	4.7	14.0	81.4
		壮年者	16.7	36.7	46.7
		老年者	23.0	44.8	24.7

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
15	この世での生き方により死後の状態は異なる	一般高校生	52.7	30.9	15.5
		ｷﾘｽﾄ教高校生	52.0	22.4	25.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	34.7	42.9	22.4
		一般大学生	33.3	33.3	33.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	43.5	30.4	25.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	62.8	27.9	7.0
		壮年者	34.2	39.2	26.7
		老年者	47.7	27.6	15.5
56	どのような生き方をしても死後は同じようになる	一般高校生	20.8	43.5	34.8
		ｷﾘｽﾄ教高校生	14.4	40.0	45.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	30.6	36.7	32.7
		一般大学生	23.2	49.3	27.5
		ｷﾘｽﾄ教大学生	13.9	40.9	45.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	4.7	34.9	60.5
		壮年者	21.7	38.3	40.0
		老年者	33.3	32.8	24.7
48	神はどんな生き方をした人でも救う	一般高校生	20.8	50.2	28.5
		ｷﾘｽﾄ教高校生	38.4	28.8	32.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	46.9	42.9	10.2
		一般大学生	18.8	43.5	37.7
		ｷﾘｽﾄ教大学生	49.6	33.9	16.5
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	32.6	37.2	27.9
		壮年者	21.7	40.8	37.5
		老年者	35.6	27.6	27.0
26	神は無条件に救われるわけではない	一般高校生	32.4	44.4	23.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	31.2	31.2	37.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	51.0	30.6	18.4
		一般大学生	30.4	44.9	24.6
		ｷﾘｽﾄ教大学生	33.0	27.0	40.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	72.1	23.3	4.7
		壮年者	40.8	37.5	21.7
		老年者	61.5	20.7	9.2
21	自殺は苦しむ者を自然にかえし楽にする	一般高校生	6.8	29.5	63.8
		ｷﾘｽﾄ教高校生	7.2	32.8	60.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	16.3	49.0	34.7
		一般大学生	10.1	26.1	63.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	4.3	24.3	71.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	27.9	34.9	34.9
		壮年者	10.8	30.0	58.3
		老年者	13.8	37.9	38.5

死後の世界は天国や極楽という言葉で表現されるような明るく喜びに溢れたイメージであるのか、それとも地獄が代表するような暗く恐ろしいイメージなのであろうか。それらのイメージを最も直接的に尋ねているのが、表の初めの４項目であろう。

５０％以上の支持を得ている選択肢を中心に検討すると、非常に明確に浮上してくる事実は、地域、文化、教育、年齢の違いを越えて、どのグループでも、死後の世界を”恐ろしい地獄の世界”とも、”汚れの世界”とも、”暗く寂しく惨めな世界”ともとらえていないということである。

しかし、それではその恐ろしくもなく、汚れてもいず、暗く寂しく惨めでもない死後の世界は、”喜びに溢れた幸せな世界”であるかというと、意見はグループにより異なる。一般大学生群以外の日本のグループはいずれも「どちらとも言えない」と答えている。一般大学生群の場合、この喜びに溢れた死後の世界をはっきりと否定している者たちが半数ほどで、あとの４０％近くは「どちらとも言えない」と答えている。一方、ヨーロッパでは、高校生、大学生ともに死後の世界が喜びに溢れたものであることを肯定している。

上記の意識は、次に続く「１２　死後の世界で神に会える」と「３９　大切な人の死は悲しいが、また会えると思うと慰められる」に対する反応と符合している。すなわち、５０％以上の支持のある選択肢に注目すると、ヨーロッパの学校では高校生、大学生ともに、この２つの項目の内容へ５０％以上の者が肯定を表明しているのに対し、日本の一般大学生群はこの両項目に対して否定の反応を示しており、さらに、他の日本人グループの反応は明確ではないということである。

ところでそれぞれのグループは、人間は死んだあとどのようであると考えているのであろうか。

神の数のところでも触れたが、「人間が死後神になる」ということに関してはヨーロパの場合両群とも否定しており、壮年者はどちらかといえば肯定に傾き、老年者は肯定しているという傾向が見られる。

「魂は永遠に生きる」という項目に対しては、一般大学生群以外はすべて、半数

以上が肯定しているが、壮年者および老年者はそれほど高い割合ではない。

「死んだ霊がこの世とあの世を行き来する」という考え方に対しては、日本人は伝統的に、あの世とこの世の境界線がはっきりしておらず、それゆえ簡単にあの世とこの世を行き来すると考えがちであるという意見があるので、さぞかし高い支持が得られるであろうと思っていたが、本調査でとらえられる限りにおいては、そのような結果は得られなかった。現代の日本の高校生の２群に、教育の違いに関係なく、その傾向が見られるぐらいのものである。

また、「人間は繰り返し生きる」という考え方もある。これに対しては、日本の一般高校生群の６０％近くが肯定し、ヨーロッパの高校生、大学生群はともに７０％以上のものが否定している。

一方、死後の世界そのものを、否定する考えもあり得る。

その否定の仕方もさまざまであろうが、日本でよく耳にするのは「死んだら灰となって、自然にかえるだけである」という考え方である。これに対しては、老年者群は肯定し、あとの一般の日本人はどちらともはっきりせず、日本のキリスト教校の高校生、大学生群はどちらかといえば否定に傾き、ヨーロッパの高校生、大学生群は否定している。

「死後の状態は、真空のような状態である」と考える者たち、また「人間は死んだらまったくの無に帰する」と考える者たちが５０％以上を占めるグループはなく、ヨーロッパの高校生・大学生、および日本のキリスト教校の高校生・大学生は否定している。

上記の結果は、「あの世はない」ということに対して、一般校の大学生、日本の壮年者、そして特に老年者に迷いがあるものの、全体的に見て　”ないとは思わない”という事実と呼応する。

さて、この世での生き方と死後の状態の関係について、被調査者はどのように考えているのだろうか。

「この世での生き方により、死後の状態は異なる」と表明し、なおかつ「どのような生き方をしても、死後は同じようになる」ということを否定したのは、ヨーロ

ッパの大学生たちだけである。これに日本のキリスト教校の高校生群が続くが、「この世での生き方により、死後の状態は異なる」に対しては肯定が５０％以上であるのに対して、「どのような生き方をしても死後は同じようになる」は否定が、４５．６％となっている。

さて、神の救いは人のこの世での生き方ととどのように関係してくるのであろうか。

「神はどんな生き方をした人でも救う」という項目に対しては、どのグループからも明確な反応は得られないが、「神は無条件に救われるわけではない」という項目に関してはヨーロッパの高校生・大学生、および日本の老年者群が肯定している。「自殺は苦しむ者を自然にかえし楽にする」という項目に関しては、一般校およびキリスト教校の高校生・大学生そして壮年者群に否定が見られるが、ヨーロッパの両校にははっきりとした反応は見られない。この項目以外の反応から類推すると、不思議な気がするが、この項目の文章が、ヨーロッパの生徒や学生たちにどのように写ったのかをまずチェックする必要があろう。

以上さまざまな角度から、被調査者の”人間の死後”についての考えを吟味してみたが、種々の要素が交錯し、時には理論的には両立しえないと考えられることが、意識の中では同居しているように見受けられる面もある。しかし、いまだ誰も見た者はいない、見て帰ってきた者がいない死後の世界、死後の状態のことであれば、そのような一見矛盾しているように見えるようなことが、ぼんやりと同居していることは十分に考えられることである。

Ｔａｂｌｅ　６・３・２「死後の世界・状態のまとめ」は、Ｔａｂｌｅ　６・３・１「死後の世界・状態」から５０％以上の支持があったものを拾い出し、まとめたものである。

Ｔａｂｌｅ　６・３・２「死後の世界・状態のまとめ」

		はい	どちらとも言えない	いいえ
死後の世界の様子	恐ろしい、汚れた、 暗い、寂しい、惨めな			全グループ
	喜びに溢れた 幸せな	ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生 ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	一般高校生 ｷﾘｽﾄ教高校生 ｷﾘｽﾄ教大学生 壮年者 老年者	一般大学生
	神に会える 親しい人に再会できる	ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生 ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生		一般大学生
死後の人間	神になる	老年者		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生 ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生
	魂は永遠	一般大学生を 除く 全グループ		
	この世とあの世を 死んだ霊は行き来する	一般高校生 ｷﾘｽﾄ教高校生		
	人間は繰り返し 生きる	一般高校生		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生 ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生

		はい	どちらとも言えない	いいえ
死後の世界そのものの否定	死んだら灰となって自然にかえるだけ	老年者		ヨーロッパ 高校生 ヨーロッパ 大学生
	死後の状態は真空のような状態			キリスト教高校生 キリスト教大学生 ヨーロッパ 高校生 ヨーロッパ 大学生
	死んだらまったくの無に帰する			キリスト教高校生 キリスト教大学生 ヨーロッパ 高校生 ヨーロッパ 大学生
	あの世はない			一般高校生 キリスト教高校生 キリスト教大学生 ヨーロッパ 高校生 ヨーロッパ 大学生
自殺観	自殺は苦しむものを自然にかえし楽にする			一般高校生 一般大学生 キリスト教高校生 キリスト教大学生 壮年者

		はい	どちらとも言えない	いいえ
この世での生き方との関係	この世での生き方により死後の状態は異なる	一般高校生 ｷﾘｽﾄ教高校生 ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生		
	どのような生き方をしても死後は同じ			ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生
	神はどんな生き方をした人でも救う		一般高校生	
	神は無条件に救われるわけではない	ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生 ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生 老年者		

この表から特に顕著に浮上してきた傾向をまとめると、下記のようになる。

＜ヨーロッパ高校生群・大学生群＞

－魂は永遠であるが、それは人間が繰り返し生きることを意味するのではない。

－死後の世界は確かに存在し、喜びに溢れた幸せなものである。そこで人は神に出会うが、死後の人間自身が神々になるのではない。また、この喜びの死後の世界においては、死のために別れ別れになっていた親しい人々との再会がある。

－上記のことは、次のことを意味する。すなわち、人間は死後灰になって自然にかえるだけでも、まったくの無に帰してしまうわけでも、真空のような状態になってしまうわけでもないということである。

－ただし、これらの死後についてのとらえ方は、「神は無条件に人間を救われるわけではない」という考え方を否定するものではなく、むしろ肯定している。
さらに大学生群では、このことに加えて、この世での生き方により、死後の状態は異なると考えている者たちが多い。

＜キリスト教高校生群・大学生群＞

－死後の世界は確かに存在し、魂は永遠に生きるのであり、人間は死んだら真空のような状態になるわけでも、まったくの無に帰するわけでもない。

－その死後の世界は、恐ろしい、汚れた、暗い世界ではないが、果たして喜びに溢れた幸せなものであるかどうかは定かではない。

－以上に加えて高校生群では、「この世での生き方により死後の状態は異なる」ということ、また「この世とあの世を死んだ霊は行き来する」という考えを表明している。

＜一般大学生群＞

－死後の世界は、恐ろしい、汚れた、暗い世界ではないが、喜びに溢れた幸せな世界でもない。そこで人間は、神に出会えるわけでも、死によって別れていた親しい人々と再会できるわけでもない。そもそも魂が永遠に生きるものであるのかどうかも定かではない。

＜一般高校生群＞

－死後の世界は、恐ろしい、汚れた、暗い世界ではないが、喜びに溢れた幸せなものであるか否かは定かではない。

－魂は永遠であり、人間は繰り返し生きる。あの世は存在し、死んだ霊はこの世とあの世を行き来する。

－この世での生き方により死後の状態は異なるが、果たして神がどんな生き方をした人でも救うのかどうかは定かではない。

－以上の結果を考えあわせると、一般校の高校生達は輪廻の思想に近い考え方をしているように思われる。

＜壮年者群＞

－死後の世界は恐ろしい、汚れた、暗い世界ではないが、果たして喜びに溢れた幸せなものであるか否かははっきりしない。

－魂は永遠に生きる。

＜老年者群＞

－死後の世界は恐ろしい、汚れた、暗い世界ではないが、果たして喜びに溢れた幸せなものであるか否かははっきりしない。

－死後に関する次の３項目、すなわち「魂は永遠に生きる」「人間は死後神になる」「死んだら灰となって自然にかえるだけである」は、いずれも５０％以上の支持を受けている。これを矛盾と見る見方もあろうが、自然に宿る霊を神としてとらえる高齢の日本人の神観、自然観と考え合わせると、一つの筋の通った考え方も浮かび上がってくる。

－「神は無条件に救われるわけではない」という項目も５０％以上の支持を受けている。

第４節　信仰心

１．神と人間

Ｔａｂｌｅ　６・４・１「神の存在と人間のかかわり」には、各群の、神の存在の認否、神と人間とのかかわりに類する項目に対する反応がまとめてある。

Ｔａｂｌｅ　６・４・１「神の存在と人間のかかわり」

数字は％

問　　い	グループ名	認めている	（不明）	認めていない
＊　神の存在を認めているか	一般高校生	58.0	(3.9)	38.2
	ｷﾘｽﾄ教高校生	81.6	(0.0)	18.4
	ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	87.8	(2.0)	10.2
	一般大学生	55.1	(4.3)	40.6
	ｷﾘｽﾄ教大学生	93.0	(0.0)	7.0
	ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	95.3	(2.3)	2.3
	壮年者	70.8	(1.7)	27.5
	老年者	65.5	(21.3)	13.2

No	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
28	神は見えないが実際に存在する	一般高校生	58.0	30.4	11.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	63.2	30.4	6.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	65.3	24.5	10.2
		一般大学生	42.0	34.8	23.2
		ｷﾘｽﾄ教大学生	82.6	13.9	3.5
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	79.1	14.0	4.7
		壮年者	60.8	31.7	6.7
		老年者	51.7	31.6	9.8
14	神は人間がつくりあげたもの	一般高校生	37.2	35.3	27.5
		ｷﾘｽﾄ教高校生	29.6	32.8	37.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	4.1	22.4	73.5
		一般大学生	47.8	37.7	14.5
		ｷﾘｽﾄ教大学生	7.0	26.1	67.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	2.3	4.7	93.0
		壮年者	44.2	27.5	28.3
		老年者	51.1	21.8	19.0
41	神は全能でかげりのない善そのもの	一般高校生	31.9	43.0	25.1
		ｷﾘｽﾄ教高校生	30.4	36.8	32.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	49.0	40.8	10.2
		一般大学生	17.4	33.3	49.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	47.8	34.8	17.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	55.8	27.9	14.0
		壮年者	35.0	41.7	23.3
		老年者	42.5	40.2	8.6

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
9	善い神もあるが悪神悪霊もある	一般高校生	25.6	47.8	26.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	12.8	31.2	56.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	6.1	14.3	79.6
		一般大学生	17.4	44.9	37.7
		ｷﾘｽﾄ教大学生	13.9	38.3	47.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	0.0	11.6	88.4
		壮年者	18.3	40.8	38.3
		老年者	13.2	40.8	38.5
46	神は日常生活のなかで語りかけている	一般高校生	46.4	39.1	14.0
		ｷﾘｽﾄ教高校生	70.4	21.6	7.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	63.3	24.5	12.2
		一般大学生	33.3	33.3	33.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	83.5	13.9	2.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	81.4	16.3	2.3
		壮年者	57.5	30.8	11.7
		老年者	63.2	25.3	4.6
13	神のほうから意思表示することはない	一般高校生	25.1	36.7	38.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	12.0	27.2	60.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	55.1	34.7	10.2
		一般大学生	33.3	39.1	27.5
		ｷﾘｽﾄ教大学生	5.2	26.1	68.7
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	55.8	23.3	20.9
		壮年者	32.5	37.5	30.0
		老年者	50.6	28.2	13.8
49	自分の拝んでいる神についてよく知らない	一般高校生	59.4	29.0	11.1
		ｷﾘｽﾄ教高校生	42.4	39.2	17.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	18.4	46.9	34.7
		一般大学生	42.0	26.1	31.9
		ｷﾘｽﾄ教大学生	60.9	26.1	13.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	20.9	46.5	27.9
		壮年者	70.8	20.0	9.2
		老年者	81.6	8.0	2.3

「被検者自身が神の存在を認めているか」という問い（これはＹｅｓ／Ｎｏ形式で尋ねた問いである）に関しては、非常に高い肯定の反応が全グループに見られた。しかし、それでは客観的にいって「神は見えないが実際に存在するのか」という

ことになると、一般大学生群以外は５０％以上の肯定を表明してはいるものの、その割合は前者に比べて大幅に減少する。

ところで、その神は人間とかかわりなくそれ自体で存在しているものなのか、それとも”人間がつくりあげたもの”なのかという点では、”人間がつくりあげた”という意見に対して、ヨーロッパの高校生群・大学生群がそれぞれ７３．５％、９３．０％という高率で否定し、日本ではキリスト教大学生群の７０％近くが否定している。他の群には積極的な否定の表明は見られず、老年者群ではむしろ肯定している。この結果は、「神の唯一絶対性」のところで考察した日本人の神を絶対視しないとらえ方と近似した意識の表明であるように思われる。

しかし、神は人間がつくりあげたものではないとするグループの中でも、その神が「悪神」である可能性はなく、全能でかげりのない善そのものであるとする神の絶対的な”善”を主張するのは、ヨーロッパの大学生のみである。

さて、その神と人間とのコミュニケーションの問題であるが、「私は、神は日常生活のなかでいろろな方法を通して、人間に語りかけておられるように思う」に対しては、一般の高校生・大学生以外はどのグループも肯定しているが、「私は、人間の側から神に祈ったり願ったりすることはあっても、神のほうからいろいろなことがらを通して意思表示することはないと思う」に関しては、日本のキリスト教校の高校生・大学生のみが反対し、ヨーロッパの高校生・大学生および日本の老人は肯定している。筆者は、被調査者がそれぞれ信じている神を人格神ととらえているかそうでないかにより、この２項目に対する反応が異なるであろうと考えていたが、人格神とその神とのコミュニケーションの問題は必ずしも筆者が考えているようなメカニズムで働くものではないようである。この見えない神とのコミュニケーションというものを、各グループがどのようにとらえているのか吟味し直す必要がある。

結局、「自分の拝んでいる神についてよく知らない」という意見もある。一般校の高校生、キリスト教校の大学生、成人・老人にその反応が見られるが、特に年齢が高くなるほどその傾向が強い。

２．信仰することの是非

信仰することの是非に関する各群の反応の一覧を、Ｔａｂｌｅ　６・４・２「信仰の是非」に示した。また、Ｆｉｇ．６・４・１「信仰の肯定」は、それぞれの群で信仰に関して”肯定的な反応”を示した項目を重ねて、図に表したものである。

「信仰をもつことはよいこと」「神を信じることはどの時代にも大切」という信仰すること自体の是非を問う項目に対しては、一般高校生群・大学生群を除いて全グループが５０％以上の肯定率となっている。一般校の２群も積極的に肯定はしていないものの決して積極的に反対しているわけではなく、どちらとも言えず迷っているという結果が表れている。

さて、一般に信仰についてよく言われている種々の側面、すなわち信仰は弱い者のためであるとか、非科学的なものであるといった考え方について、各群はどのように考えているのであろうか。

「神を信じることは科学や理性に矛盾する」という信仰の非科学性や非合理性に対しては、一般の高校生群と老年者群には迷いがあるが、他はすべてはっきりと否定している。

信仰は弱い者、力無い者のためであるというような考え方に関しては、「自信があれば信じる必要はない」「若いうちから神を信じる必要はない」「神を信じることは現実からの逃避」の３項目に注目してみたが、ヨーロッパの高校生・大学生群、そして日本のキリスト教大学生群は３項目とも否定し、キリスト教高校生群と壮年者群がそれに続く低い支持となっている。

以上の結果をまとめてみると、一般高校生群・大学生群以外は全般的に信仰することはよいことであると認めているといえる。しかし老年者群では基本的に信仰することの大切さを認めてはいるものの、細かな側面を問われると戸惑っている様子が見受けられる。

Ｔａｂｌｅ　６・４・２「信仰の是非」

数字は％

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
32	信仰をもつことはよいこと	一般高校生	17.9	66.2	15.9
		ｷﾘｽﾄ教高校生	57.6	34.4	8.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	53.1	24.5	22.4
		一般大学生	21.7	62.3	15.9
		ｷﾘｽﾄ教大学生	69.6	26.1	4.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	62.8	25.6	9.3
		壮年者	51.7	37.5	10.8
		老年者	65.5	23.6	5.2
53	神を信じることはどの時代にも大切	一般高校生	41.1	51.2	7.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	72.8	24.8	2.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	67.3	22.4	10.2
		一般大学生	31.9	49.3	18.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	86.1	13.0	0.9
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	88.4	7.0	4.7
		壮年者	67.5	27.5	4.2
		老年者	74.7	14.9	1.7
1	神を信じることは科学や理性に矛盾する	一般高校生	12.6	45.4	41.1
		ｷﾘｽﾄ教高校生	8.8	25.6	65.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	14.3	24.5	59.2
		一般大学生	7.2	29.0	63.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	4.3	5.2	90.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	9.3	23.3	67.4
		壮年者	8.3	23.3	68.3
		老年者	13.2	33.9	46.0
18	自信があれば信じる必要はない	一般高校生	28.5	40.1	30.9
		ｷﾘｽﾄ教高校生	12.8	28.0	59.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	18.4	18.4	63.3
		一般大学生	34.8	39.1	26.1
		ｷﾘｽﾄ教大学生	4.3	14.8	80.9
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	9.3	18.6	69.8
		壮年者	13.3	31.7	55.0
		老年者	19.5	27.0	46.0

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
47	若いうちから神を信じる必要はない	一般高校生	14.0	56.5	29.0
		ｷﾘｽﾄ教高校生	8.8	21.6	69.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	14.3	20.4	65.3
		一般大学生	11.6	56.5	31.9
		ｷﾘｽﾄ教大学生	1.7	16.5	81.7
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	2.3	9.3	88.4
		壮年者	7.5	35.0	57.5
		老年者	22.4	30.5	37.9
57	神を信じることは現実からの逃避	一般高校生	19.8	53.1	26.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	11.2	41.6	47.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	16.3	20.4	63.3
		一般大学生	29.0	43.5	27.5
		ｷﾘｽﾄ教大学生	6.1	22.6	71.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	0.0	25.6	74.4
		壮年者	15.8	35.0	48.3
		老年者	28.7	23.0	39.1

Ｆｉｇ．６・４・１「信仰の肯定」

数字は項目番号

一般高	ｷﾘｽﾄ教高	ﾖｰﾛｯﾊﾟ高	一般大	ｷﾘｽﾄ教大	ﾖｰﾛｯﾊﾟ大	壮年	老年
	３２	３２		３２	３２	３２	３２
	５３	５３		５３	５３	５３	５３
	1	1	1	1	1	1	
	１８	１８		１８	１８	１８	
	４７	４７		４７	４７	４７	
		５７		５７	５７		

３．特定の宗教をもつこと

”信仰する”ということへの肯定は、日本においてもキリスト教校の生徒・学生のみならず壮年者群にも、老年者群にもみられたが、日本人の場合、神を信じることが即１つの宗教団体に所属することにはならない場合が多いように思う。信仰に対する考え方と宗教団体に属するということとは分けて考えてみる必要があるように思う。

Ｔａｂｌｅ　６・４・３「宗教への所属」は３件法で尋ねた結果と、別の形で信仰および宗教について尋ねた結果とをまとめたものである。

神の存在を認めるか否かに関しては、被調査者の全グループが５０％以上の肯定の反応を示しているが、実際に何らかの宗教に所属しているか否かということになると、ヨーロッパの２群ではほぼ全員が宗教に所属しているのに対し、日本人群の場合は所属していないものが圧倒的に多い。（老年者群には不明回答が多く、判断を下しにくいが、それでも日本人の中で最も高い。）

「宗教は生活に意味を与えるか否か」に関してはキリスト教校の大学生およびヨーロッパの大学生、そして老年者群が肯定し、「人間は帰属感を求めて宗教に入る」という意見に対しては日本の一般校の大学生が肯定している。

４．信仰の仕方

前述の結果から、日本人の場合信仰することへの肯定率は高いが、そのことが即自分自身が１つの宗教にかかわることを意味するわけではないという結果を得たが、被調査者は信仰が生活のなかで占める位置、信じ方等に関して、どのように考えているのだろうか。

Ｔａｂｌｅ　６・４・４ａ　から　Ｔａｂｌｅ　６・４・４ｈに、各群の反応を示した。

Ｔａｂｌｅ　６・４・３「宗教への所属」

数字は％

A

	一般高	ｷﾘｽﾄ教高	ﾖｰﾛｯﾊﾟ高	一般大	ｷﾘｽﾄ教大	ﾖｰﾛｯﾊﾟ大	壮年	老年
神の存在を認めている	58.0	81.6	87.8	55.1	93.0	95.3	70.8	65.5
宗教に所属している	17.2	35.0	97.7	5.0	35.5	97.6	25.3	45.7
――――――――――――	――	――	――	――	――	――	――	＊―
宗教に所属していない	75.8	64.1	2.3	90.0	64.5	0.0	72.4	28.5
宗教に所属してよかった	46.9	75.0	72.1	0.0	89.5	64.3	66.7	54.6

＊　不明 21.3

B

神の存在を認めていない	38.2	18.4	10.2	40.6	7.0	2.3	27.5	13.2
神を信じたい	12.8	26.1	40.0	12.9	25.0	0.0	14.3	16.7
宗教に所属したい	5.3	33.3	100	0.0	0.0	-	0.0	3.1

C

52　宗教は生活に意味を与える	12.6	42.4	34.7	15.9	55.7	60.5	35.0	55.7
24　人間は帰属感を求めて宗教に入る	31.4	23.2	32.7	52.2	27.8	30.2	30.8	36.8

「注」Ａ，Ｂに関しては、それぞれ前段階の質問に肯定を示した者のみが、次の質問に答えるという形式をとっている。

a）一般高校生群

Table 6・4・4a［信じ方］

－一般高校生群－

数字は％

No	項目内容	はい	どちらとも	いいえ
11	神に生活のすべてをかける必要はない	45.5	40.6	14.0
31	命がけでも神に応えることが大切	7.2	49.8	42.5
25	神に生かされ応えるのが真の信仰	10.6	52.2	37.2
6	神の存在や教えの理性的追求は大切	18.8	58.5	22.7
7	理性的追求より素直に生きることで十分	62.8	23.7	13.5
59	苦しい時にも神に助けを求めない	11.1	38.2	50.2
27	苦しい時神を思い出すが普段はあまり考えない	54.1	28.0	17.9
4	葬式のあとには塩で清める	86.0	7.2	6.3
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	70.0	18.8	10.6
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	66.2	19.3	14.5

一般高校生群の場合は、苦しいときには神を頼りにもするが、ふだんの生活と神との関係はあまりない。葬式のあとの清め、初詣等の参拝、合格・安産の祈願等、習俗に近い、ご利益を願うような信心には参加しているが、生活自身が神に生かされ応えることが真の信仰であるのか、生活のすべてを神にかける必要があるのか、命がけでも神に応えることが大切なのかは定かではない。神の存在や教えを理性的にも追求するというよりは、素直に生きることで十分であると思っている。

b）キリスト教高校生群

Ｔａｂｌｅ　６・４・４ｂ「信じ方」

－キリスト教高校生群－

数字は％

No	項目内容	はい	どちらとも	いいえ
11	神に生活のすべてをかける必要はない	25.6	39.2	35.2
31	命がけでも神に応えることが大切	28.0	40.8	31.2
25	神に生かされ応えるのが真の信仰	40.8	32.0	27.2
6	神の存在や教えの理性的追求は大切	33.6	48.8	17.6
7	理性的追求より素直に生きることで十分	54.4	21.6	24.0
59	苦しい時にも神に助けを求めない	8.0	14.4	76.8
27	苦しい時神を思い出すが普段はあまり考えない	53.6	24.8	21.6
4	葬式のあとには塩で清める	61.6	7.2	31.2
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	65.6	15.2	19.2
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	43.2	18.4	38.4

キリスト教高校生群の場合、苦しいときの神だのみ的な傾向がある。神に生活のすべてをかけたり、命がけで神に応えたり、神の存在や教えを理性的にも突き詰めて考えたりすることが大切なのかどうかは定かではない。むしろ自分が感じるままに素直に生きることで十分であると思っている。葬式のあとの清めや、初詣等の習俗に近い信心業にもある程度参加している。しかし、祈願のために種々の神社等に参拝に行くことはあまり行っていない。

c）ヨーロッパ高校生群

Ｔａｂｌｅ　６・４・４ｃ「信じ方」

－ヨーロッパ高校生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
11	神に生活のすべてをかける必要はない	51.0	22.4	26.5
31	命がけでも神に応えることが大切	22.4	40.8	36.7
25	神に生かされ応えるのが真の信仰	49.0	32.7	14.3
6	神の存在や教えの理性的追求は大切	46.9	24.5	28.6
7	理性的追求より素直に生きることで十分	32.7	34.7	32.7
59	苦しい時にも神に助けを求めない	10.2	16.3	73.5
27	苦しい時神を思い出すが普段はあまり考えない	34.7	32.7	32.7
4	葬式のあとには塩で清める	0.0	6.1	93.9
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	18.4	24.5	57.1
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	20.4	30.6	49.0

ヨーロッパ高校生群の場合、苦しいときの神頼みだけではなく、ふだんの生活とも神は関わっているが、神に生活のすべてをかける必要はないと思っている。命がけでも神に応えることが大切なのか、神の存在や教えの理性的追求が大切なのか、あるいは理性的追求より素直に生きることで十分なのか等は定かではない。日本で一般的に見られるような習俗に近い信心業はなされていない。

d）一般大学生群

Ｔａｂｌｅ　６・４・４ｄ「信じ方」

－一般大学生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
11	神に生活のすべてをかける必要はない	63.8	30.4	5.8
31	命がけでも神に応えることが大切	4.3	26.1	69.6
25	神に生かされ応えるのが真の信仰	8.7	42.0	49.3
6	神の存在や教えの理性的追求は大切	14.5	50.7	34.8
7	理性的追求より素直に生きることで十分	55.1	29.0	15.9
59	苦しい時にも神に助けを求めない	14.5	20.3	65.2
27	苦しい時神を思い出すが普段はあまり考えない	69.6	18.8	11.6
4	葬式のあとには塩で清める	62.3	7.2	30.4
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	88.4	2.9	8.7
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	68.1	14.5	17.4

一般大学生群の場合、苦しいときには神を頼みにもするが、ふだんの生活とはかかわりがない。習俗的な信心業やご利益を願うような信心は行っているが、神に生活のすべてをかける必要はないと思っており、まして命がけで神に応えることが大切であるとは全く思っていない。神の存在や教えを理性的に追求するよりも、自分が感じるままに素直に生きることで十分であると考えている。

e）キリスト教大学生群

Ｔａｂｌｅ　６・４・４ｅ「信じ方」

－キリスト教大学生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
11	神に生活のすべてをかける必要はない	27.0	36.5	36.5
31	命がけでも神に応えることが大切	37.4	37.4	25.2
25	神に生かされ応えるのが真の信仰	41.7	43.5	14.8
6	神の存在や教えの理性的追求は大切	40.0	40.9	19.1
7	理性的追求より素直に生きることで十分	39.1	25.2	35.7
59	苦しい時にも神に助けを求めない	3.5	8.7	87.8
27	苦しい時神を思い出すが普段はあまり考えない	37.4	27.0	35.7
4	葬式のあとには塩で清める	66.1	7.0	27.0
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	69.6	8.7	21.7
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	41.7	26.1	32.2

キリスト教大学生群の場合、必ずしも苦しいときにのみ神を思い出すわけではないが、日々の生活が神に生かされ応えていることが大切なのか、神に生活のすべてをかけたり、命がけで神に応えたりするのが大切で必要なことなのかは定かではない。また、神の存在や教えの理性的追求が大切なのか、あるいは理性的追求よりも素直に生きることで十分なのかもよく分からない。葬式のあとの清めや、初詣等の習俗的信心業にはある程度参加しているが、祈願のために種々の神社等に参拝に行くものは多くない。

f）ヨーロッパ大学生群

Ｔａｂｌｅ　６・４・４ｆ「信じ方」

－ヨーロッパ大学生群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
11	神に生活のすべてをかける必要はない	27.9	27.9	44.2
31	命がけでも神に応えることが大切	37.2	34.9	27.9
25	神に生かされ応えるのが真の信仰	76.7	18.6	2.3
6	神の存在や教えの理性的追求は大切	67.4	25.6	7.0
7	理性的追求より素直に生きることで十分	16.3	34.9	48.8
59	苦しい時にも神に助けを求めない	2.3	7.0	90.7
27	苦しい時神を思い出すが普段はあまり考えない	18.6	34.9	46.5
4	葬式のあとには塩で清める	0.0	11.6	88.4
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	23.3	20.9	55.8
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	7.0	16.3	76.7

ヨーロッパ大学生群の場合、苦しいときにも神を思い出すが、それは単に苦しいときの神頼みというわけではない。神に生活のすべてをかける必要があるのか、命がけでも神に応えることが大切なのかはわからないが、日々の生活が神に生かされていて自分もそれに応えるのが真の信仰であると思っている。また、神の存在や人生の意味等を理性的に極めるよりも自分が感じるままに素直に生きることで十分であるとは思っておらず、それらの理性的追求も大切であると思っている。日本で一般に見られるような習俗に近い信心業に似た信心は行っていない。

g）壮年者群

Table 6・4・4g「信じ方」

－壮年者群－

数字は％

No	項目内容	はい	どちらとも	いいえ
11	神に生活のすべてをかける必要はない	49.2	31.7	19.2
31	命がけでも神に応えることが大切	13.3	44.2	42.5
25	神に生かされ応えるのが真の信仰	29.2	36.7	33.3
6	神の存在や教えの理性的追求は大切	31.7	40.0	26.7
7	理性的追求より素直に生きることで十分	56.7	24.2	19.2
59	苦しい時にも神に助けを求めない	14.2	22.5	63.3
27	苦しい時神を思い出すが普段はあまり考えない	51.7	18.3	29.2
4	葬式のあとには塩で清める	76.7	5.8	17.5
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	78.3	13.3	8.3
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	56.7	20.0	23.3

壮年者群の場合、苦しいときの神頼みに近い神との関わりである。葬式のあとの清め、初詣等の参拝、合格・安産等の祈願など習俗に近い信心業や、ご利益を祈願するような信心はなされているが、神に生活のすべてをかける必要性があるのか、日々の生活が神に生かされ応えるものであることが真の信仰なのか、命がけでも神に応えることが大切なのかは定かではない。神の存在や教えの理性的追求よりも、自分が感じるままに素直に生きることで十分であると思っている。

h）老年者群

Ｔａｂｌｅ　６・４・４ｈ「信じ方」

－老年者群－

数字は％

No	項　目　内　容	はい	どちらとも	いいえ
11	神に生活のすべてをかける必要はない	58.0	22.4	15.5
31	命がけでも神に応えることが大切	27.0	47.1	16.7
25	神に生かされ応えるのが真の信仰	46.0	33.3	10.9
6	神の存在や教えの理性的追求は大切	59.8	29.9	5.7
7	理性的追求より素直に生きることで十分	73.0	10.9	9.8
59	苦しい時にも神に助けを求めない	15.5	26.4	49.4
27	苦しい時神を思い出すが普段はあまり考えない	43.1	16.7	32.2
4	葬式のあとには塩で清める	64.9	8.0	23.6
58	初詣をしたり様々な神社の前で参拝したりする	83.3	4.6	4.6
17	合格安産等それぞれに力ある神々をお参りする	62.6	10.9	17.2

老年者群の場合、神に生活のすべてをかける必要はないと思っており、神との関わりの多くは一般に習俗となっている信心業を通して、あるいはご利益を願う祈願を通してのようである。神に生かされ応えるのが真の信仰なのか、命がけでも神に応えることが大切なのかなどはわからない。神の存在や教えの理性的追求も大切だが、それよりも自分の感じるままに素直に生きることが大事だと思っている。

以上、苦しいときの神頼み的傾向が強いグループが多いが、ヨーロッパの高校生や大学生そしてキリスト教校の大学生や老年者は、必ずしも苦しいときばかりでなく、ふだんの生活の中にも神とのかかわりがある。特に、ヨーロッパの大学生にはその傾向が強く、ふだんの生活が神に生かされそれに応えるのが真の信仰であるととらえている。

日本の一般の高校生群や大学生群、および壮年者群や老年者群には、習俗に近いような信心あるいはご利益を願う信心が強い。日本のキリスト教校に学ぶ者たちは種々の祈願等のために参拝に行くことは多くないが、初詣や、葬式のあとの清めなどは行っている。ヨーロッパの２群には、それに類する信心業は見られない。

一般に日本では神の教えの理性的追求より素直に生きることで十分であるというとらえが強く、キリスト教校の大学生以外はみなそれを肯定している。ヨーロッパではその傾向は見られず、特に大学生ははっきりと理性的追求の大切さを強調している。

第５節　宗教的意識や心情の因子構造

各群の宗教的意識や心情の因子構造をとらえるべく、因子分析を実施した。以下に述べるのが、その結果である。因子分析ではバリマックス回転を行い、固有値の変動状況を考慮に入れて、各群の因子を抽出した。それぞれの群の因子数や、累積寄与率、因子負荷量等については、各群の解釈のところでそのつど述べることとするが、いずれの群においても、因子負荷量の絶対値が　．３５以上の項目を取り上げて解釈をすすめ、それぞれの因子に命名する。

ａ）一般高校生群

一般高校生群の因子分析では４因子が抽出され、その累積寄与率は３０．７％である。因子負荷量はＴａｂｌｅ　６・５・１ａ「宗教的意識や心情－因子負荷量－」に示した。

第１因子－－『霊的世界の認否』の因子

ここで取り上げている霊的世界とは、主に、”神””霊・魂””死後の世界”であるが、これらの存在を認めているか否かを問題にしているのがこの因子である。すなわちこの因子には、「あの世はないと思う」「人間は死んだらまったくの無に帰する」「死んだら灰となって自然にかえるだけ」また「神を信じることは現実からの逃避」等の項目群が一方にあり、これに対して「神は見えないが実際に存在する」「自然のなかには太陽や月等いろいろな神々がいる」「生物にも無生物にも命や霊魂がある」「魂は永遠に生きる」等の項目群がもう一方にある。

第２因子－－『信仰の肯定／否定』の因子

この因子には一方に「若いうちから神を信じる必要はない」「自信があれば信じる必要はない」「神は人間がつくりあげたもの」等の信仰を否定する項目があり、他方に「信仰をもつことはよいこと」「神を信じることはどの時代にも大切」等の信仰を肯定する項目がある。

第３因子－－『”神”への信仰』の因子

この因子は神がどんなものであるか、その性質や働きを描写している内容のものと、その神への信仰を表現しているものとの２０項目で構成されている。例えば、「神に包み込むような暖かさを感じる」「神は唯一で絶対的なもの」「神は全能でかげりのない善そのもの」「神々のなかには狐などの動物もいる」「人間や自然は神によって造られた」「神は日常生活のなかで語りかけている」等の項目に、「神

を信じることはどの時代にも大切」「命がけでも神に応えることが大切」「合格・安産等それぞれに力る神々をお参りする」等の項目が加わっている。

この因子の項目内容からも分かるように、このグループで信仰の対象となっている神は、唯一絶対の神も八百万の神々もともに含まれている。

第４因子－－『死後の世界は極楽／地獄』の因子

死後の世界は暗く、寂しく、惨めで、汚れている、恐ろしい地獄の世界であるのか、それとも喜びに溢れた幸せな世界であるのかを問う因子である。

Table 6・5・1a「宗教的意識や心情－因子負荷量－」
<一般高校生群>

項目	因子1	因子2	因子3	因子4
20. あの世はないと思う	.73	.17	.10	.05
28. 神は見えないが実際に存在する	-.64	-.24	-.39	-.03
30. 人間は死んだらまったくの無に帰する	.55	.17	-.00	-.25
56. どのような生き方をしても死後は同じようになる	.54	.01	-.05	-.01
15 この世での生き方により死後の状態は異なる	-.54	.10	-.03	.24
44. この世とあの世を死んだ霊は行き来する	-.53	.08	-.30	.01
29. 自然の中には太陽や月などいろいろな神々がいる	-.53	.00	-.49	-.05
5. 生物にも無生物にも命や霊魂がある	-.52	.20	-.19	-.04
51. 死後の世界は真空のような状態	.49	.12	-.17	.17
10. 魂は永遠に生きる	-.49	.00	-.16	.12
23. 人間は繰り返し生きる	-.47	.03	-.10	.15
37. 死んだら灰となって自然にかえるだけ	.42	.07	-.15	-.05
13. 神のほうから意思表示することはない	.42	.30	-.00	.15
57. 神を信じることは現実からの逃避	.41	.36	.05	.16
21. 自殺は苦しむものを自然にかえし楽にする	.39	.09	-.02	.00
11. 神に生活のすべてをかける必要はない	.12	.64	.17	-.01
47. 若いうちから神を信じる必要はない	.21	.61	.13	.17
7. 理論的追求より素直に生きることで十分	.02	.57	.00	.00
18. 自信があれば信じる必要はない	.28	.55	.17	.11
27. 苦しいときは神を思い出すがふだんはあまり考えない	.11	.54	.20	.07
14. 神は人間がつくりあげたもの	.46	.48	.12	.07
55. 皆が同じ神を拝む必要はない	-.16	.45	.16	-.09
32. 信仰をもつことはよいこと	.18	-.44	-.11	-.06
60. 人間や自然は神によって造られた	-.33	-.13	-.55	.08
40. 神に包み込むような暖かさを感じる	-.15	-.31	-.53	-.16
42. 神に父性性を感じる	-.05	-.10	-.53	-.05
2. 神に母性性を感じる	-.05	-.04	-.52	-.06
36. 神は唯一で絶対的なもの	-.00	-.31	-.51	.17
45. 神は偉大で何ものにも置き換えられない	-.17	-.11	-.50	.14
46. 神は日常生活の中で語りかけている	-.39	-.26	-.49	-.12
25. 神に生かされ応えるのが真の信仰	.21	-.22	-.48	.07
50. 神は偉く畏れ多い方という印象	-.06	-.09	-.48	.27
41. 神は全能でかぎりのない善そのもの	-.06	-.22	-.46	-.07
49. 自分の拝んでいる神についてよく知らない	-.22	.02	-.45	-.03
53. 神を信じることはどの時代にも大切	-.29	-.35	-.44	-.08
31. 命がけでも神に応えることが大切	.04	-.21	-.43	.17
54. 神々のなかにはきつねなどの動物もいる	-.30	.12	-.42	.11
58. 初詣をしたりさまざまな神社の前で参拝したりする	-.13	.33	-.42	-.23
12. 死後の世界で神に会える	-.34	.05	-.41	-.13
6. 神の存在や教えの理性的追求は大切	-.12	-.08	-.41	-.08
17. 合格・安産などそれぞれに力ある神々をお参りする	-.10	.32	-.38	.07
33. 死後の世界は恐ろしい地獄の世界	-.08	.01	-.03	.78
43. 死後の世界は暗く寂しく惨め	.00	.14	.03	.69
35. 死後の世界は汚れの世界	.08	.11	.01	.62
3. あの世は喜びに溢れた幸せなもの	-.14	.07	-.18	-.47
16. 神は厳しく怖いという印象がある	-.10	.03	-.22	.42
1. 神を信じることは科学や理性に矛盾する	.26	.25	-.08	.22
4. 葬式のあとには塩で清める	-.04	.08	-.24	.19
8. 人間は死後神になる	-.31	.05	-.24	-.00
9. 善い神もあるが悪神悪霊もある	-.14	.10	-.26	-.04
19. 人間・動物・草木はみな同じ仲間	-.19	.15	-.18	-.11
22. 大自然はひとりでにでき上がった	.08	.19	.13	-.22
24. 人間は帰属感を求めて宗教に入る	.08	.11	-.15	-.05
26. 神は無条件に救われるわけではない	-.18	.23	.08	.01
34. 高い山・深い木立の中で心が清められる	.06	.18	-.10	-.21
38. 人格でなく意志のような存在として神を認めている	-.20	.25	-.12	.08
39. 大切な人の死は悲しいがまた会えると思うと慰められる	-.06	.15	-.24	-.24
48. 神はどんな生き方をした人でも救う	.10	-.08	-.30	-.06
52. 宗教は生活に意味を与える	.08	-.34	-.23	.24
59 苦しいときにも神に助けを求めない	.15	.27	.10	.22

ｂ）キリスト教高校生群

キリスト教高校生群の場合、５因子が抽出され、累積寄与率は３６．７％であった。因子負荷量はＴａｂｌｅ　６・５・１ｂ「宗教的意識や心情－因子負荷量－」に示した。

第１因子－－『”神”への信仰』の因子

この因子は、”特定の本質や、属性をもつ神”への信仰という因子である。「神は唯一で絶対的なもの」「神は全能でかげりのない善そのもの」「神は偉大で何ものにも置き換えられない」「命がけでも神に応えることが大切」「神に生かされ応えるのが真の信仰」等１７項目が含まれる。

第２因子－－『八百万の神々』の因子

「初詣をしたりさまざまな神社のまえで参拝したりする」「合格・安産などそれぞれに力ある神々をお参りする」「神々のなかには狐などの動物がいる」「自然のなかには太陽や月などいろいろな神々がいる」「人間は死後神になる」等、自然界の延長線上にあるような種々の神々の因子である。

第３因子－－『この世での生き方とあの世の関係』の因子

一方に、死後の世界が恐ろしく・暗く・寂しく・惨めで・汚れた世界であることを表現している３項目と、神の厳しさを述べている項目、さらに「神は無条件に救われるわけではない」「この世での生き方により死後の状態は異なる」という要素を含む項目群があり、もう一方に、「あの世は喜び溢れた幸せなもの」「神はどんな生き方をした人でも救う」という項目からなる群とがある。

第４因子－－『霊的世界の認否』の因子

霊の世界のものとして”神”の存在、”霊・魂”の存在、”死後の世界”の存在

等が問われているが、そのなかでも特に死後の世界にかかわる項目が多い。「あの世はないと思う」「人間は死んだらまったくの無に帰する」「死後の世界は真空のような状態」等の内容に対して、「魂は永遠に生きる」「死後の世界で神に会える」などがある。また、神に関しては「神は見えないが実際に存在する」「人間や自然は神によって造られた」に対して「神は人間がつくりあげたもの」「大自然はひとりでに出来上がった」等の項目群がある。

第５因子－－『弱い者のための信仰』の因子

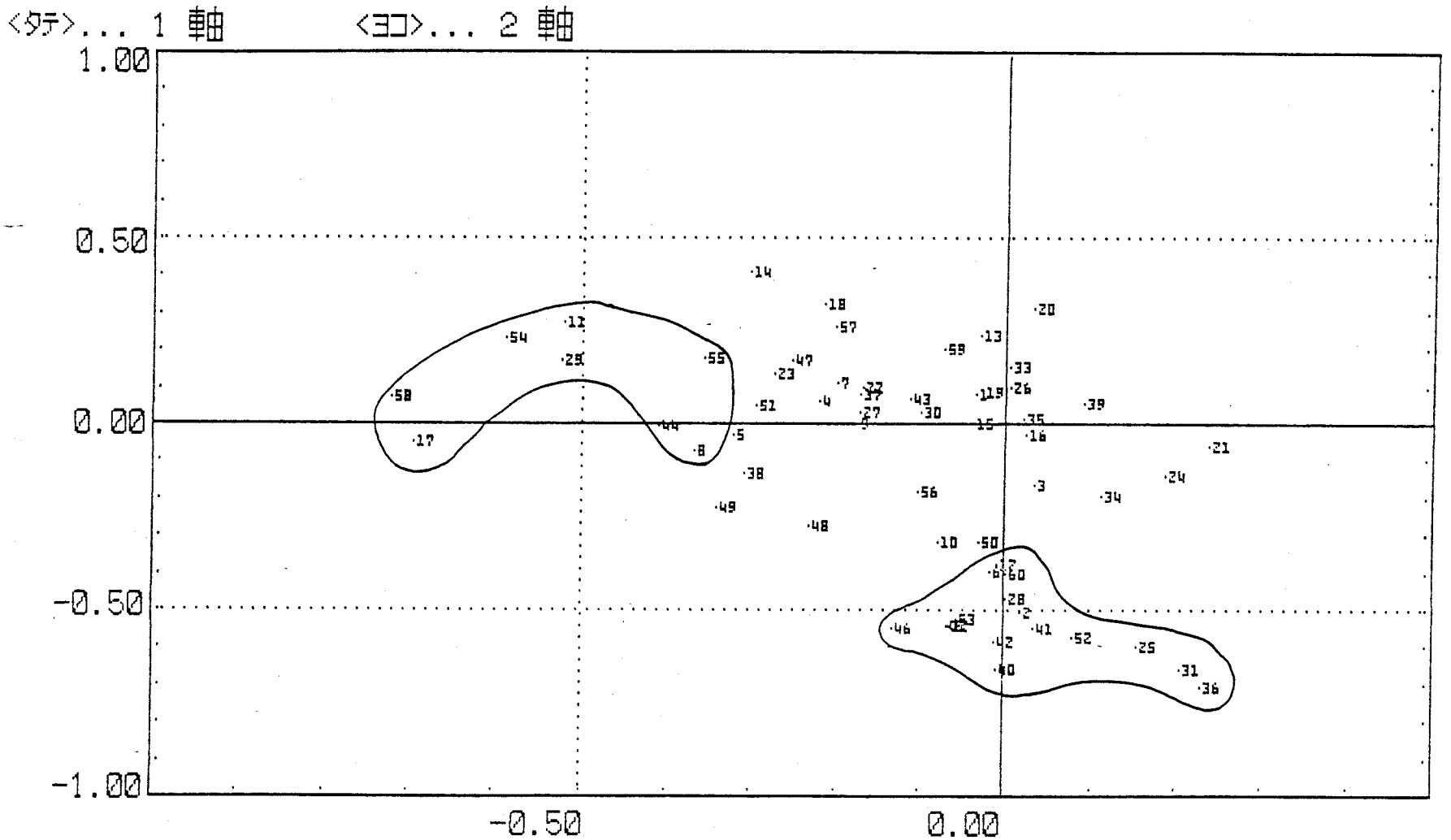
信仰は力ないもの、弱い者のためであるという内容の因子で、「若いうちから神を信じる必要はない」「神を信じることは現実からの逃避」「自信があれば信じる必要はない」「苦しいときにも神に助けを求めない」「人間は帰属感を求めて宗教に入る」等の項目で構成されている。

Ｆｉｇ．６・５・１「第１因子と第２因子によるグラフ」は、第１因子を縦軸に、第２因子を横軸にとった２次元空間に、それぞれの項目を布置したものである。図上における縦軸のプラスの方向が神を信じない傾向、マイナスの方向が神を信じる傾向を示している。また、横軸のマイナス方向は八百万の神々の存在を認める立場を示している。

これによると、第１因子で信仰の対象となっている”神”は、第２因子の”神々”とは異なったものであることが分かる。キリスト教校の高校生群が、神への信仰ということを考える場合の意識には、八百万の神々への信仰は含まれていないことになる。

Table 6・5・1b「宗教的意識や心情－因子負荷量－」
<キリスト教高校生群>

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
36. 神は唯一で絶対的なもの	-.70	.23	-.02	-.09	-.02
40. 神に包み込むような暖かさを感じる	-.66	-.00	-.19	-.20	.05
31. 命懸けでも神に応えることが大切	-.66	.20	-.18	-.05	.05
25. 神に生かされ応えるのが真の信仰	-.60	.15	-.00	-.06	.05
42 神に父性性を感じる	-.58	-.00	.04	-.14	-.01
52. 宗教は生活に意味を与える	-.57	.07	-.07	.10	.21
41. 神は全能でかげりのない善そのもの	-.55	.03	-.03	-.25	-.03
46. 神は日常生活のなかで語りかけている	-.54	-.13	-.05	-.33	.32
32. 信仰をもつことはよいこと	-.54	-.06	-.08	-.04	.21
45. 神は偉大で何ものにも置き換えられない	-.54	-.06	.07	-.19	.18
53. 神を信じることはどの時代にも大切	-.52	-.05	-.07	-.10	.50
2. 神に母性性を感じる	-.51	.01	-.11	.14	-.02
6. 神の存在や教えの理性的追求は大切	-.40	-.01	.22	.04	.19
58. 初詣をしたりさまざまな神社のまえで参拝したりする	.07	-.71	.00	.18	.02
17. 合格・安産などそれぞれに力ある神々をお参りする	-.05	-.69	-.01	.07	-.12
54. 神々のなかには狐などの動物がいる	.23	-.58	-.04	-.17	-.09
29. 自然のなかには太陽や月などいろいろな神々がいる	.16	-.52	.08	-.23	-.17
11. 神に生活のすべてをかける必要はない	.27	-.51	.17	.15	-.23
44. この世とあの世を死んだ霊は行き来する	-.00	-.40	.32	-.30	.14
8. 人間は死後神になる	-.07	-.36	.03	-.23	-.00
55. 皆が同じ神を拝む必要はない	.17	-.35	-.16	.14	.05
33. 死後の世界は恐ろしい地獄の世界	.14	.00	.76	.05	-.18
43. 死後の世界は暗く寂しく惨め	.06	-.11	.73	.00	-.10
35. 死後の世界は汚れの世界	.00	.02	.62	-.05	-.02
16. 神は厳しく怖いという印象がある	-.03	.02	.59	-.06	-.12
3. あの世は喜びに溢れた幸せなもの	-.16	.03	-.46	-.28	-.23
26. 神は無条件に救われるわけではない	.09	.00	.44	.10	.19
48. 神はどんな生き方をした人でも救う	-.27	-.23	-.37	-.17	-.18
10. 魂は永遠に生きる	-.32	-.07	-.08	-.64	.08
20. あの世はないと思う	.30	.03	-.10	.64	-.08
60. 人間や自然は神によって造られた	-.40	.00	-.06	-.56	.16
30. 人間は死んだら全くの無に帰する	.02	-.09	.12	.53	-.26
51. 死後の世界は真空のような状態	.04	-.29	.27	.53	-.02
12. 死後の世界で神に会える	-.38	-.00	-.01	-.51	-.12
56. どんな生き方をしても死後は同じようになる	-.18	-.10	-.19	.48	-.29
28. 神は見えないが実際に存在する	-.47	.00	.06	-.47	.11
5. 生物にも無生物にも命や霊魂がある	-.03	-.32	-.01	-.47	-.19
22. 大自然はひとりでに出来上がった	.09	-.16	.00	.42	-.15
39. 大切な人の死は悲しいがまた会えると思うと慰められる	.05	.09	-.11	-.41	-.38
15. この世での生き方により死後の状態は異なる	-.00	-.03	.36	-.41	.10
14. 神は人間がつくりあげたもの	.40	-.30	.12	.40	-.24
27. 苦しいときに神を思い出すがふだんはあまり考えない	.02	-.17	-.00	.38	-.28
47. 若いうちから神を信じる必要はない	.16	-.25	.21	.12	-.62
57. 神を信じることは現実からの逃避	.26	-.20	.23	.09	-.50
18. 自信があれば信じる必要はない	.32	-.21	.23	.17	-.48
13. 神のほうから意思表示することはない	.23	-.02	.00	.16	-.47
37. 死んだら灰となって自然に帰るだけ	.07	-.17	.02	.37	-.41
59. 苦しいときにも神に助けを求めない	.20	-.07	.28	.22	-.40
19. 人間、動物、草木はみな同じ仲間	.08	-.02	-.19	-.28	-.38
21. 自殺は苦しむものを自然にかえし楽にする	-.06	.23	-.14	.09	-.37
24. 人間は帰属感を求めて宗教に入る	-.14	.18	.12	.16	-.36
1. 神を信じることは科学や理性に矛盾する	.07	-.03	.15	.11	-.17
4. 葬式のあとには塩で清める	.05	-.21	.18	-.29	.08
7. 理論的追求より素直に生きることで十分	.10	-.19	-.25	.15	-.13
9. 善い神もあるが悪神悪霊もある	-.00	-.17	.21	.02	.13
23. 人間は繰り返し生きる	.12	-.27	.20	-.30	-.13
34. 高い山、深い木立のなかで心が清められる	-.19	.11	.11	-.01	-.18
38. 人格でなく意志のような存在として神を認めている	-.13	-.30	.02	.28	-.03
49. 自分の拝んでいる神についてよく知らない	-.22	-.33	-.18	-.20	.15
50 神は偉く畏れ多い方という印象	-.31	-.03	.22	-.06	-.12



Ｆｉｇ．６・５・１「第１因子と第２因子によるグラフ」
－キリスト教高校生群－

ｃ）ヨーロッパ高校生群

ヨーロッパ高校生群の場合は、因子分析の結果３因子が抽出された。その累積寄与率は３８．４％である。因子負荷量はＴａｂｌｅ　６・５・１ｃ「宗教的意識や心情－因子負荷量－」に示した。

第１因子－－『八百万の神々』の因子

「合格・安産などそれぞれに力ある神々を礼拝する」「自分の拝んでいる神についてよく知らない」「人間は死後神になる」「自然の中には太陽や月などいろいろな神々がいる」「人間・動物・草木は皆同じ仲間」という自然の延長線上にあるような神々について述べている項目が集まっている。

第２因子－－『”神”への信仰の肯定／否定』の因子

この因子には全項目の６０％以上が含まれており、神は存在し、善いものであり、その神を信じることも善いことであるという信仰への肯定の項目群と、その反対にそれらを否定する信仰への否定の項目群とから構成されている。

肯定の項目としては、「神は唯一で絶対的なもの」「神は偉大で何ものにも置き換えられない」「人間や自然は神によって造られた」「神は全能でかげりのない善そのもの」「神に包み込むような暖かさを感じる」「あの世は喜びに溢れた幸せなもの」「信仰をもつことはよいこと」「神を信じることはどの時代にも大切」「命がけでも神に応えることが大切」等がある。

反対の項目としては、「神は人間がつくりあげたもの」「善い神もあるが悪神悪霊もある」「あの世はないと思う」「苦しいときにも神に助けを求めない」「神に生活のすべてをかける必要はない」「自信があれば信じる必要はない」「神を信じることは現実からの逃避」等である。

第３因子－－『合理的な考え方／漠とした不安』の因子

この因子には、一方に「神を信じることは科学や理性に矛盾する」「皆が同じ神を信じる必要はない」という項目に加えて、第２因子に、より高い負荷量をもつ「自信があれば信じる必要はない」等の項目があり、もう一方に「神は厳しく怖いという印象がある」「神は無条件に救われるわけではない」「この世とあの世を死んだ霊は行き来する」「死後の世界は恐ろしい地獄」「死後の世界は暗く寂しく惨め」等がある。死後を気づかって不安に思っている心情が基調をなしているように思われる。

Table 6・5・1c「宗教的意識や心情－因子負荷量－」
<ヨーロッパ高校生群>

項目	因子1	因子2	因子3
17. 合格・安産などそれぞれに力ある神々を礼拝する	-.73	.18	.10
49. 自分の拝んでいる神についてよく知らない	-.72	.26	.08
19. 人間・動物・草木はみな同じ仲間	-.61	-.08	.13
8. 人間は死後神になる	-.49	.10	.00
29. 自然のなかには太陽や月などいろいろな神々がいる	-.38	-.33	.30
53. 神を信じることはどの時代にも大切	-.13	.87	-.03
46. 神は日常生活のなかで語りかけている	-.13	.83	-.04
40. 神に包み込むような暖かさを感じる	.17	.83	.03
45. 神は偉大で何ものにも置き換えられない	-.08	.82	-.13
60. 人間や自然は神によって造られた	-.18	.75	.04
14. 神は人間がつくりあげたもの	-.23	-.68	-.01
59. 苦しいときにも神に助けを求めない	.17	-.66	.19
41. 神は全能でかげりのない善そのもの	-.08	.65	-.01
36. 神は唯一で絶対的なもの	-.22	.63	.22
11. 神に生活のすべてをかける必要はない	-.48	-.62	.03
20. あの世はないと思う	.07	-.62	-.12
18. 自信があれば信じる必要はない	-.08	-.62	-.48
28. 神は見えないが実際に存在する	-.32	.61	.11
48. 神はどんな生き方をした人でも救う	-.16	.60	-.25
31. 命がけでも神に応えることは大切	.14	.59	.20
25. 神に生かされ応えるのが真の信仰	-.05	.59	-.10
42. 神に父性性を感じる	-.11	.57	-.17
52. 宗教は生活に意味を与える	-.06	.57	.27
32. 信仰をもつことはよいこと	-.40	.56	.49
37. 死んだら灰となって自然にかえるだけである	-.32	-.56	-.04
51. 死後の世界は真空のような状態	-.31	-.55	.27
57. 神を信じることは現実からの逃避	.01	-.53	.17
6. 神の存在や教えの理性的追求は大切	-.32	.53	.12
15. この世での生きかたにより死後の状態は異なる	-.41	.52	.24
50. 神は偉く畏れ多い方という印象がある	-.42	.51	-.23
39. 大切な人の死は悲しいがまた会えると思うと慰められる	-.29	.51	.14
47. 若いうちから神を信じる必要ない	-.18	-.49	.01
30. 人間は死んだらまったくの無に帰する	-.03	-.48	-.11
10. 魂は永遠に生きる	-.10	.47	-.24
3. あの世は喜びに溢れた幸せなもの	-.04	.46	-.39
9. 善い神もあるが悪神悪霊もある	-.32	-.46	-.32
7. 理論的追求よりも素直に生きることで十分	-.25	-.45	.13
38. 人格でなく意志のような存在として神を認めている	-.06	-.41	.25
24. 人間は帰属感を求めて宗教に入る	-.20	-.40	-.16
27. 苦しいときに神を思い出すがふだんはあまり考えない	-.13	-.40	.04
23. 人間は繰り返し生きる	-.03	-.39	.29
16. 神は厳しく怖いという印象がある	-.24	-.04	.76
1. 神を信じることは科学や理性に矛盾する	-.21	-.25	-.58
44. この世とあの世を死んだ霊は行き来する	-.22	-.38	.52
33. 死後の世界は恐ろしい地獄の世界	-.18	-.19	.52
55. 皆が同じ神を拝む必要はない	-.02	-.33	-.51
26. 神は無条件に救われるわけではない	-.35	.13	.45
43. 死後の世界は暗く寂しく惨め	.27	-.30	.45
21. 自殺は苦しむものを自然にかえし楽にする	-.19	-.07	.42
2. 神に母性性を感じる	.04	.08	-.14
4. 葬式のあとには塩で清める	-.12	.17	-.10
5. 生物にも無生物にも命や霊魂がある	-.18	-.14	.26
12. 死後の世界で神に会える	-.25	.23	.09
13. 神のほうから意思表示することはない	-.16	-.29	.07
22. 大自然はひとりでに出来上がった	-.21	-.34	.10
34. 高い山・深い木立のなかで心が清められる	-.14	.27	.17
35. 死後の世界は汚れの世界	.30	-.03	.22
54. 神々のなかにはきつねなどの動物もいる	-.00	-.00	-.00
56. どのような生き方をしても死後は同じようになる	-.16	-.29	.27
58 初詣をしたりさまざまな神社のまえで参拝したりする	-.24	.20	.23

d）一般大学生群

一般大学生群の場合の因子分析結果では、４因子が抽出された。この累積寄与率は３４．３％である。因子負荷量はＴａｂｌｅ　６・５・１ｄ「宗教的意識や心情－因子負荷量－」に示したとおりである。

第１因子――『信仰の肯定／否定』の因子

この因子は、「神を信じることはどの時代にも大切」「宗教は生活に意味を与える」「神は偉大で何ものにも置き換えられない」「命がけでも神に応えることが大切」「信仰をもつことはよいこと」等信仰することを”是”とする１０項目と、これとは反対に「若いうちから神を信じる必要はない」「神に生活のすべてをかける必要はない」「神を信じることは現実からの逃避」等の信仰を”非”とする７項目とから成っている。

第２因子――『霊的世界の認否』の因子

この因子のなかには、霊的世界のもの――”神””魂や霊””死後の世界”――の存在を、認めるか否かを問う２０項目から成っている。

すなわち、「人間は死後神になる」「自然のなかには太陽や月などのいろいろな神々がいる」「神は見えないが実際に存在する」とそれに対する「神は人間がつくりあげたもの」等神の存在に関するもの、また「この世とあの世を死んだ霊は行き来する」「魂は永遠に生きる」等霊に関するもの、そして「死後の世界で神に会える」「大切な人の死は悲しいがまた会えると思うと慰められる」「あの世は喜びに溢れた幸せなもの」とそれに対する「あの世はないと思う」「死後の世界は真空のような状態」等死後の世界の存在に関するものである。

第３因子――『偉大な神の手中にある恐ろしい死後の世界』の因子

この因子は、死後の世界の恐ろしさ・暗さ・惨めさ・汚さを述べている項目群と

、神の全能・全善・絶対的な偉大さ・畏れ多さ・厳しさ・怖さ・力等を表現している項目群とから成っている。

第４因子、『人間の生き方と神の救い』の因子

この因子は寄与率も小さく一般性をもつ因子とは断定しにくいが、「神は無条件に救われるわけではない」「神はどんな生き方をした人でも救う」等、人間の生き方と神の救いに関わる項目が含まれている。

Ｔａｂｌｅ　６・５・１ｄ「宗教的意識や心情－因子負荷量－」
＜一般大学生群＞

項目	因子１	因子２	因子３	因子４
53. 神を信じることはどの時代にも大切	-.60	-.32	-.17	-.08
52. 宗教は生活に意味を与える	-.60	.07	-.13	.05
47. 若いうちから神を信じる必要はない	.58	-.01	.03	.14
45. 神は偉大で何ものにも置き換えられない	-.58	-.32	-.21	-.08
46. 神は日常生活のなかで語りかけている	-.54	-.39	-.24	-.11
11. 神に生活のすべてをかける必要はない	.54	-.06	-.11	-.00
7. 理論的追求より素直に生きることで十分	.53	.06	.08	-.16
31. 命がけでも神に応えることが大切	-.51	-.11	-.16	.03
57. 神を信じることは現実からの逃避	.50	.19	-.05	.05
32. 信仰をもつことはよいこと	-.49	-.07	-.11	.13
40. 神に包み込むような暖かさを感じる	-.48	-.28	-.03	-.07
6. 神の存在や教えの理性的追求は大切	-.47	-.18	.03	.35
13 神のほうから意思表示することはない	.45	.30	-.19	-.12
38. 人格ではなく意志のような存在として神を認めている	-.45	-.13	.24	-.01
27. 苦しいときに神を思い出すがふだんはあまり考えない	.40	.00	-.27	-.33
8. 人間は死後神になる	.24	-.71	-.04	.04
29. 自然のなかには太陽や月などいろいろな神々がいる	-.06	-.70	.07	.34
20. あの世はないと思う	.31	.68	.06	.12
44. この世とあの世を死んだ霊は行き来する	-.00	-.68	-.05	-.19
12. 死後の世界で神に会える	-.28	-.67	-.01	.00
15. この世での生き方により死後の状態は異なる	-.12	-.66	-.34	-.01
10. 魂は永遠に生きる	-.25	-.62	.11	-.22
39. 大切な人の死は悲しいがまた会えると思うと慰められる	.00	-.60	.11	.07
56. どのような生き方をしても死後は同じようになる	.24	.59	-.05	.33
28. 神は見えないが実際に存在する	-.40	-.58	.01	.13
23. 人間は繰り返し生きる	-.03	-.53	-.02	.06
54. 神々のなかには狐などの動物もいる	-.07	-.51	-.00	.02
14. 神は人間がつくりあげたもの	.42	.46	.27	-.06
59. 苦しいときにも神に助けを求めない	.16	.45	.15	-.20
49. 自分の拝んでいる神に付いてよく知らない	.05	-.41	-.39	-.21
3. あの世は喜びに溢れた幸せなもの	-.12	-.40	.27	-.15
51. 死後の世界は真空のような状態	-.07	.36	.01	.22
9. 善い神もあるが悪神悪霊もある	.26	-.36	-.20	-.02
33. 死後の世界は恐ろしい地獄の世界	-.06	-.01	-.76	.17
43. 死後の世界は暗く寂しく惨め	-.05	.13	-.72	-.02
35. 死後の世界は汚れの世界	-.03	.08	-.64	.08
41. 神は全能でかげりのない善そのもの	-.20	-.34	-.51	-.26
16. 神は厳しく怖いという印象がある	.07	-.33	-.44	.17
50. 神は偉く畏れ多いという印象がある	-.25	-.18	-.42	-.36
60. 人間や自然は神によって造られた	-.24	-.36	-.42	-.09
36. 神は唯一で絶対的なもの	-.27	-.20	-.37	-.10
26. 神は無条件に救われるわけではない	-.11	-.18	.02	-.74
22. 大自然はひとりでに出来上がった	.17	.09	.06	-.71
48. 神はどんな生き方をした人でも救う	-.01	-.17	-.21	.42
1. 神を信じることは科学や理性に矛盾する	.29	.19	.03	-.01
2. 神に母性性を感じる	-.20	.07	.11	-.24
4. 葬式のあとでは塩で清める	.14	-.26	-.15	-.00
5. 生物にも無生物にも命や霊魂がある	-.30	-.28	.01	.26
17. 合格・安産などそれぞれに力ある神々をお参りする	.26	-.17	-.33	.24
18. 自信があれば信じる必要はない	.28	.30	.08	-.04
19. 人間・動物・草木はみな同じ仲間	-.15	-.18	.00	.10
21. 自殺は苦しむものを自然にかえし楽にする	-.02	-.09	-.19	.17
24. 人間は帰属感を求めて宗教に入る	.25	.03	.01	.00
25. 神に生かされて応えるのが真の信仰	-.17	-.32	-.25	-.00
30. 人間は死んだら全くの無に帰する	.26	.34	-.22	.28
34. 高い山、深い木立の中で心が清められる	-.14	.11	.10	-.05
37. 死んだら灰となって自然に帰るだけ	.17	.20	-.14	.20
42. 神に父性性を感じる	-.11	-.31	-.26	-.01
55. 皆が同じ神を拝む必要はない	-.03	.07	.17	.11
58. 初詣をしたりさまざまな神社のまえで参拝したりする	.04	-.15	-.24	.01

e）キリスト教大学生群

キリスト教大学生群の場合の宗教的意識や心情の因子構造は、一般校の高校生や大学生群のそれと比較するとより複雑で、６因子が抽出された。その累積寄与率は３９．７％である。因子負荷量はＴａｂｌｅ　６・５・１ｅ「宗教的意識や心情－因子負荷量－」に示した。

第１因子－－『”神”への信仰の肯定／否定』の因子

この因子は単に神の存在を信じるか信じないかというだけでなく、神の本質や属性・働きをも信じるか否かを問題にしているところがある。例えば「神は見えないが実際に存在する」「命がけでも神に応えることが大切」というような項目のほかに、「人間や自然は神によって造られた」「神は唯一で絶対的なもの」「神は全能でかげりのない善そのもの」「神は偉大で何ものにも置き換えられない」、そしてこれらと反対の内容の「神は人間がつくりあげたもの」「自信があれば信じる必要はない」「大自然はひとりでに出来あがった」等が含まれている。

第２因子－－『八百万の神々』の因子

これは、「初詣をしたり、さまざまな神社のまえで参拝したりする」「合格安産などそれぞれに力ある神々をお参りする」「自然のなかには太陽や月などいろいろな神々がいる」「善い神もあるが悪神悪霊もある」「神々の中には狐などの動物もいる」「人間は死後神になる」というような、種々の神々が表現されている項目で構成されている因子である。

第３因子－－『死後の世界は自然のふところ／暗く寂しい』の因子

一方に「死後の世界は暗く寂しく惨め」「死後の世界は真空のような状態」「死後の世界は恐ろしい地獄の世界」という項目群があり、もう一方に「大切な人の死は悲しいがまた会えると思うと慰められる」「あの世は喜びに溢れた幸せなもの」

という幸せな死後の世界を描写する項目群がある。後者にはさらに「人間・動物・草木はみな同じ仲間」「高い山・深い木立のなかで心が清められる」「神に母性性を感じる」等が加わっており、この死後の世界の暖かさは自然や大地のぬくもりを示唆しているように思われる。

第４因子－－『この世での生き方と死後』の因子

この因子は「どのような生き方をしても死後は同じ」「神はどんな生き方をした人でも救う」「人間は死んだらまったくの無に帰する」「死んだら灰となって自然にかえるだけ」という項目群と、「この世での生き方により死後の状態は異なる」「魂は永遠に生きる」の項目群とで構成されている。

第５因子－－『恐れや不安から来る入信』の因子

この因子には２つの要素が含まれている。すなわち「神は厳しく怖いという印象がある」「神は偉く畏れ多い方という印象がある」「死後の世界は恐ろしい地獄の世界」という自分を越えた力の存在に対する恐れという要素と、「神を信じることは現実からの逃避」「人間は帰属感を求めて宗教に入る」「若いうちから神を信じる必要はない」という自信のなさ、不安から来る入信という要素である。

第６因子－－『信仰と生活の関係－その濃淡－』の因子

この因子は、信仰にかける一途さの密度、信仰が生活に占める濃度を問題にしていると思われる。すなわち、一方の項目群は「神に生かされ応えるのが真の信仰」「神の存在や教えの理性的追求は大切」「宗教は生活に意味を与える」「命がけでも神に応えることが大切」等の内容を含み、他方の項目群は「理論的追求より素直に生きることで十分」「皆が同じ神を拝む必要はない」となっている。

Ｆｉｇ．６・５・２「第１因子と第２因子によるグラフ」は、第１因子を縦軸に

、第２因子を横軸にとった２次元の空間に項目を布置したものであり、Ｆｉｇ．６・５・３「第３因子と第４因子によるグラフ」は、第３因子を縦軸に第４因子を横軸にとった２次元グラフである。

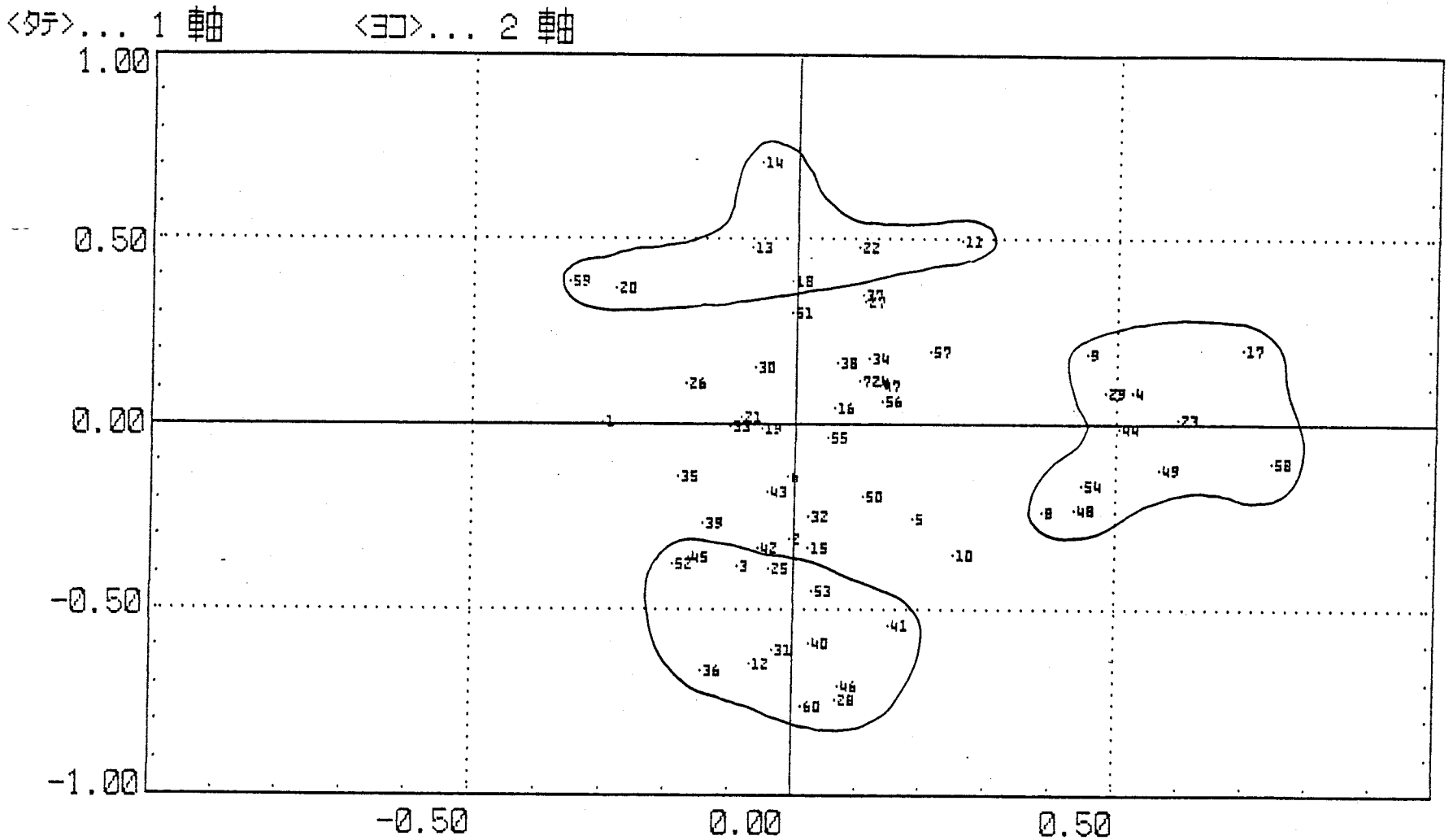
Ｆｉｇ．６・５・２によると、図の縦軸のプラスの方向が神を信じないという傾向、マイナス方向が神を信じるという傾向であり、横軸のプラス方向が八百万の神々の存在を認めるという考え方である。これによると縦軸の神を信じる信じないということを問題にした項目群と八百万の神々の存在の項目群とは離れていることがわかる。このことからキリスト教大学生群が、神を信じる・信じないということを問題にする場合、それは第１因子のなかで表現された神であって、第２因子で表現されているような八百万の神々ではないと考えられる。この意識は、キリスト教高校生群と近似しており、一般校の高校生や大学生群とは異なるところである。

第３因子と第４因子を縦横に組み合わせたＦｉｇ．６・５・３は、上部のプラス方向が死後の世界の暖かさ・喜ばしさであり、下部が死後の世界の暗さ・恐ろしさである。また横軸のプラス方向は死後の状態は誰でもみな同じであるという考え方、マイナス方向は死後の状態は生き方によって異なるという考え方である。

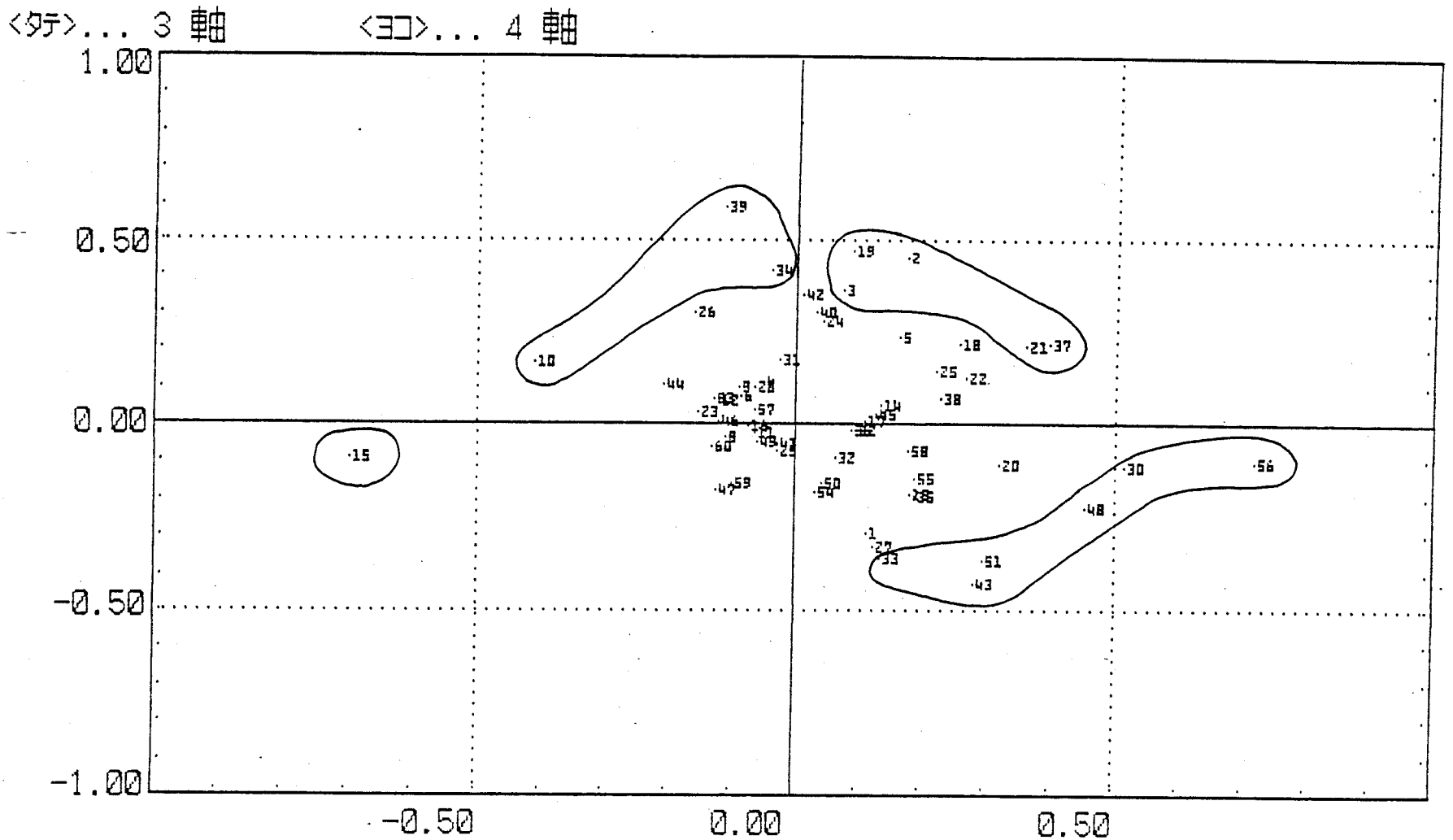
ここでは項目が、４つの象限に分かれ４つの考え方があることを示している。すなわち、死後は誰でもが暖かい自然のふところのような世界に行くのだとする考え方、他の１つは誰でもみな死後は暗く恐ろしい世界にいく、あるいは無に帰してしまうのだという考え方、そしてさらにこの世での生き方により死後永遠の暖かい喜ばしい世界に行くか、それとも暗く・恐ろしく・惨めな世界に行くのだとする考え方の４通りである。

Ｔａｂｌｅ　６・５・１ｅ「宗教的意識や心情－因子負荷量－」
＜キリスト教大学生群＞

項目	因子１	因子２	因子３	因子４	因子５	因子６
60. 人間や自然は神によって造られた	-.76	.01	-.06	-.12	.02	-.00
28. 神は見えないが実際に存在する	-.74	.06	.09	-.06	-.10	.17
46. 神は日常生活のなかで語りかけている	-.71	.07	.00	-.11	-.18	.19
14. 神は人間がつくりあげたもの	.70	-.05	.04	.13	.20	.12
36. 神は唯一で絶対的なもの	-.66	-.14	-.02	.09	.03	-.19
12. 死後の世界で神に会える	-.65	-.06	.05	-.12	.30	-.05
31. 命がけでも神に応えることが大切	-.61	-.02	.17	-.02	.17	-.35
40. 神に包み込むような暖かさを感じる	-.59	.02	.29	.03	-.02	-.25
41. 神は全能でかげりない善そのもの	-.54	.15	-.05	-.02	-.00	-.39
11. 神に生活のすべてをかける必要はない	.49	.26	-.02	-.06	.00	.34
22. 大自然はひとりでに出来上がった	.47	.09	.11	.26	-.10	-.19
13. 神のほうから意思表示することはない	.47	-.06	-.18	.18	.03	.00
53. 神を信じることはどの時代にも大切	-.45	.03	.06	-.12	-.36	-.17
3. あの世は喜びにあふれた幸せなもの	-.38	-.08	.35	.07	-.27	-.10
59. 苦しいときにも神に助けを求めない	.38	-.35	-.16	-.09	.30	-.00
18. 自信があれば信じる必要はない	.37	-.00	.21	.26	.06	.12
45. 神は偉大で何ものにも置き換えられない	-.36	-.16	.01	.12	-.05	-.25
20. あの世はないと思う	.36	-.27	-.11	.32	.14	.17
58. 初詣をしたりさまざまな神社のまえで参拝したりする	-.10	.74	-.07	.17	-.11	-.12
17. 合格、安産などそれぞれに力ある神々をお参りする	.19	.69	.00	.11	.17	.02
23. 人間は繰り返し生きる	.00	.59	.02	-.15	.10	.31
49. 自分の拝んでいる神についてよく知らない	-.12	.56	-.05	-.05	.08	-.17
4. 葬式の後には塩で清める	.08	.52	.10	-.04	-.10	-.02
44. この世とあの世を死んだ霊は行き来する	-.01	.50	.09	-.20	.09	.24
29. 自然のなかには太陽や月などいろいろな神々がいる	.08	.48	-.07	-.02	.34	.34
9. 善い神もあるが悪神悪霊もある	.18	.45	.09	-.08	.31	.20
54. 神々のなかには狐などの動物もいる	-.16	.44	-.18	.03	-.03	.34
8. 人間は死後神になる	-.23	.38	-.04	-.10	.17	.33
39. 大切な人の死は悲しいがまた会えると思うと慰められる	-.27	-.14	.58	-.11	-.07	.07
19. 人間、動物、草木はみな同じ仲間	-.01	-.05	.46	.08	-.02	.10
2. 神に母性性を感じる	-.31	-.00	.44	.17	.16	-.04
43. 死後の世界は暗く寂しく惨め	-.18	-.04	-.43	.28	.16	.22
34. 高い山・深い木立のなかで心が清められる	.17	.11	.41	-.03	.11	.01
51. 死後の世界は真空のような状態	.29	-.00	-.37	.29	.20	.13
56. どのような生き方をしても死後は同じようになる	.05	.13	-.10	.71	.00	-.02
15. この世での生き方により死後の状態は異なる	-.33	.02	-.09	-.69	.21	-.04
30. 人間は死んだら全くの無に帰する	.14	-.06	-.11	.51	.33	-.10
48. 神はどんな生き方をした人でも救う	-.23	.43	-.22	.45	-.02	-.01
10. 魂は永遠に生きる	-.35	.25	.16	-.40	-.15	.10
37. 死んだら灰になって自然にかえるだけである	.34	.10	.20	.39	.21	.11
21. 自殺は苦しむものを自然にかえし楽にする	.01	-.08	.20	.36	.22	.20
16. 神は厳しく怖いという印象がある	.04	.06	-.01	-.07	.58	-.13
57. 神を信じることは現実からの逃避	.18	.21	.03	-.06	.53	.32
50. 神は偉く畏れ多い方という印象がある	-.19	.10	-.16	.04	.52	-.26
24. 人間は帰属感を求めて宗教に入る	.10	.11	.27	.04	.48	-.07
33. 死後の世界は恐ろしい地獄の世界	-.01	-.10	-.36	.13	.47	.06
47. 若いうちから神を信じる必要はない	.10	.13	-.18	-.12	.37	.22
32. 信仰をもつことはよいこと	-.25	.02	-.09	.06	-.04	-.55
55. 皆が同じ神を拝む必要はない	-.03	.05	-.15	.19	-.05	.51
7. 理論的追求より素直に生きることで十分	.11	.10	.01	.12	-.05	.50
25. 神に生かされ応えるのが真の信仰	-.39	-.03	.13	.22	-.04	-.41
52. 宗教は生活に意味を与える	-.37	-.18	-.01	.09	.11	-.39
6. 神の存在や教えの理性的追求は大切	-.14	-.00	.07	-.08	.20	-.36
1. 神を信じることは科学や理性に矛盾する	.00	-.29	-.29	.11	.10	.32
5. 生物にも無生物にも命や霊魂がある	-.25	.18	.22	.16	.27	.33
26. 神は無条件に救われるわけではない	.10	-.16	.29	-.15	.13	-.12
27. 苦しいときに神を思い出すがふだんはあまり考えない	.32	.10	-.33	.12	.20	.19
35. 死後の世界は汚れの世界	-.14	-.17	-.20	.19	.05	.05
38. 人格ではなく意志のような存在として神を認めている	.15	.06	.06	.22	.13	.22
42. 神に父性性を感じている	-.33	-.05	.34	.01	-.04	.03



Ｆｉｇ．６・５・２「第１因子と第２因子によるグラフ」
－キリスト教大学生群－



Ｆｉｇ．６・５・３「第３因子と第４因子によるグラフ」
－キリスト教大学生群－

ｆ）ヨーロッパ大学生群

ヨーロッパ大学生群の場合は、３因子が抽出され、累積寄与率は３６．２％であった。因子負荷量は、Ｔａｂｌｅ　６・５・１ｆ「宗教的意識や心情－因子負荷量－」に示した。

第１因子－－『”神”への信仰の肯定／否定』の因子

この因子は、一方では「神は見えないが実際に存在する」「神は全能でかげりのない善そのもの」「神は唯一で絶対的なもの」「神は日常生活の中で語りかけている」と善いものである神の存在を肯定し、「死後の世界で神に会える」「あの世は喜びに溢れた幸せなもの」と死後への明るい希望を持ち、そしてその「神を信じることはどの時代にも大切」「神の存在や教えの理性的追求は大切」「信仰をもつことはよいこと」という信じることへの肯定を表現している。

そしてもう一方では、「神は人間がつくり上げたもの」「神は厳しく怖いという印象がある」と神の存在を否定し、その神が善いもの好ましいものであることをも否定し、「人間は死んだらまったくの無に帰する」「あの世はない」等の死後への虚無的な考え方、そしてその神を信じることへの否定、すなわち「神を信じることは科学や理性に矛盾する」「自信があれば信じる必要はない」等の内容を表現している。

第２因子－－『漠然とした信仰心』

この因子は「人格ではなく意志のような存在として神を認めている」「自然の中には太陽や月などいろいろな神々がいる」「人間は死後神になる」「人間は繰り返し生きる」「人間は死んだら灰となって自然にかえるだけである」「神に生活のすべてをかける必要はない」等の項目から構成されている。この他に　．３５以上の負荷量があったにもかかわらず、他の項目への負荷量がより高かったために、他の因子にまわった項目の内容としては、上記の項目群に相対するような「神は唯一で

絶対的なもの」「神は全能でかげりのない善そのもの」「命がけでも神に応えることが大切」等の内容がある。これら他の因子にまわった項目群を背景にこの因子を解釈すると、この因子は”漠然とした””相対的な””ほどほどの”という言葉で表現されるような因子像が浮上してくる。

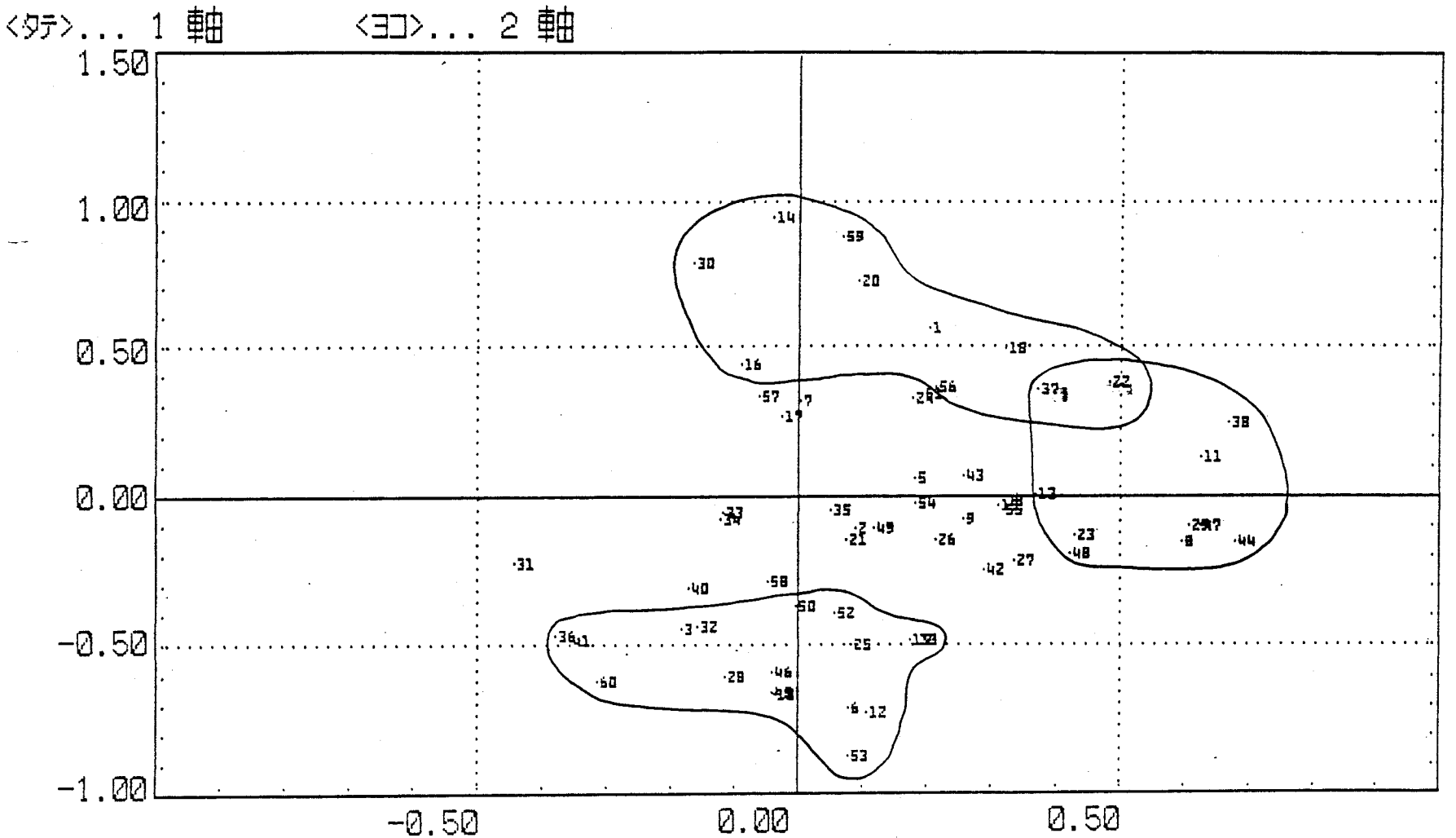
第３因子－－『神とのかかわりあい－その濃淡－』の因子

この因子には「神に母性性を感じる」「神に包み込むような暖かさを感じる」「神に父性性を感じる」「命がけでも神に応えることが大切」等の項目群に対して、「神のほうから意思表示することはない」「苦しいときに神を思い出すがふだんはあまり神を思い出さない」「理論的追求より素直に生きることで十分」等の項目群がある。

Ｆｉｇ．６・５・４「第１因子と第２因子によるグラフ」は、縦軸に第１因子、横軸に第２因子を配したものである。縦軸の上方が、信仰の否定の傾向、下方が信仰の肯定となっている。第２因子のプラス方向は漠然とした信仰心である。第２因子は信仰の肯定否定とは関係なく縦軸のゼロの付近を上下しており、どちらかといえば信仰の否定の方向にある。このことから、ヨーロッパの大学生にとって第２因子に表現されているような信仰心は、彼らのとらえている信仰の範疇には入らないものといえよう。

Ｔａｂｌｅ　６・５・１ｆ「宗教的意識や心情－因子負荷量－」
＜ヨーロッパ大学生群＞

項目	因子１	因子２	因子３
14. 神は人間がつくりあげたもの	.94	-.03	-.00
53. 神を信じることはどの時代にも大切	-.87	.07	.15
59. 苦しいときにも神に助けを求めない	.87	.06	-.10
30. 人間は死んだらまったくの無に帰する	.78	-.16	-.01
12. 死後の世界で神に会える	-.72	.11	.02
20. あの世はないと思う	.72	.09	-.03
6. 神の存在や教えの理性的追求は大切	-.71	.08	.07
10. 魂は永遠に生きる	-.66	-.03	.32
45. 神は偉大で何ものにも置き換えられない	-.66	-.03	.28
60. 人間や自然は神によって造られた	-.62	-.31	.07
28. 神は見えないが実際に存在する	-.61	-.11	-.18
46. 神は日常生活の中で語りかけている	-.59	-.03	.32
1. 神を信じることは科学や理性に矛盾する	.56	.20	-.06
25. 神に生かされ応えるのが真の信仰	-.49	.08	.31
18. 自信があれば信じる必要はない	.49	.32	.03
39. 大切な人の死は悲しいがまた会えると思うと慰められる	-.48	.18	.27
41. 神は全能でかげりのない善そのもの	-.48	-.35	.31
15. この世での生き方により死後の状態は異なる	-.48	.17	.03
36. 神は唯一で絶対的なもの	-.46	-.37	-.08
3. あの世は喜びに溢れた幸せなもの	-.44	-.18	-.23
32. 信仰をもつことはよいこと	-.43	-.15	.32
16. 神は厳しく怖いという印象がある	.43	-.08	-.12
50. 神は偉く畏れ多い方という印象がある	-.36	-.00	.09
56. どのような生き方をしても死後は同じようになる	.36	.21	.10
44. この世とあの世を死んだ霊は行き来する	-.15	.68	.12
38. 人格ではなく意志のような存在として神を認めている	.24	.66	-.25
47. 若いうちから神を信じる必要はない	-.10	.62	-.03
11. 神に生活のすべてをかける必要はない	.12	.62	-.16
29. 自然の中には太陽や月などいろいろな神々がいる	-.10	.60	.16
8. 人間は死後神になる	-.16	.59	.20
22. 大自然はひとりでに出来上がった	.37	.48	-.39
23. 人間は繰り返し生きる	-.13	.43	-.30
48. 神はどんな生き方をした人でも救う	-.19	.42	.03
37. 死んだら灰となって自然にかえるだけである	.35	.37	-.32
2. 神に母性性を感じる	-.11	.09	.66
40. 神に包み込むような暖かさを感じる	-.30	-.16	.66
42. 神に父性性を感じる	-.25	.29	.61
31. 命がけでも神に応えることが大切	-.22	-.43	.60
13. 神のほうから意思表示することはない	.00	.37	-.60
49. 自分の拝んでいる神についてよく知らない	-.11	.11	.60
52. 宗教は生活に意味を与える	-.39	.05	.54
33. 死後の世界は恐ろしい地獄の世界	-.05	-.11	-.54
58. 初詣をしたりさまざまな神社の前で参拝したりする	-.28	-.04	.47
27. 苦しいときに神を思い出すがふだんはあまり考えない	-.21	.33	-.43
34. 高い山・深い木立のなかで心が清められる	-.08	-.11	.38
7. 理論的追求より素直に生きることで十分	.31	.00	-.35
4. 葬式のあとには塩で清める	-.01	.33	.32
5. 生物にも無生物にも命や霊魂がある	.05	.18	.33
9. 善い神もあるが悪神悪霊もある	-.08	.25	-.24
17. 合格・安産などそれぞれに力ある神々をお参りする	.26	-.02	.24
19. 人間・動物・草木はみな同じ仲間	-.03	.31	-.03
21. 自殺は苦しむものを自然にかえし楽にする	-.15	.07	-.27
24. 人間は帰属感を求めて宗教に入る	.32	.18	.03
26. 神は無条件に救われるわけではない	-.14	.21	.00
35. 死後の世界は汚れの世界	-.04	.05	-.09
43. 死後の世界は暗く寂しく惨め	.06	.25	-.05
51. 死後の世界は真空のような状態	.34	.19	-.24
54. 神々のなかにはきつねなどの動物もいる	-.02	.18	.22
55. 皆が同じ神を拝む必要はない	-.05	.32	-.34
57 神を信じることは現実からの逃避	.32	-.05	-.23



Ｆｉｇ．６・５・４「第１因子と第２因子によるグラフ」
－ヨーロッパ大学生群－

g）壮年者群

壮年者群の因子分析結果では、５因子が抽出された。この累積寄与率は３１．１％である。因子負荷量はＴａｂｌｅ　６・５・１ｇ「宗教的意識や心情－因子負荷量－」に示した通りである。

第１因子－－『霊的世界の認否』の因子

この因子は主に、霊的なもの、すなわち”神””霊・魂””死後の世界”の存在の認否にかかわるような内容２０項目からなっている。

神にかかわるものとしては、「自然の中には太陽や月などいろいろな神々がいる」「神は見えないが実際に存在する」「人間は死後神になる」「善い神もあるが悪神悪霊もある」「神々の中にはきつねなどの動物もいる」等であり、霊・魂に関するものとしては、「あの世とこの世を死んだ霊は行き来する」「魂は永遠に生きる」「生物にも無生物にも命や霊魂がある」等が含まれ、死後の世界に関しては「あの世はない」「人間は死んだらまったくの無に帰する」「あの世は喜びに溢れた幸せなもの」「死後の世界は真空のような状態」等がある。

第２因子－『現世御利益的信心』の因子

初詣をしたり、さまざまな神社の前で参拝したり、合格・安産等それぞれに力ある神々をお参りしたりすることを肯定する一方、「神に生活のすべてをかける必要はない」「理論的追求より素直に生きることで十分」「皆が同じ神を拝む必要はない」そしてさらに「死んだら灰となって自然にかえるだけ」「自殺は苦しむものを自然にかえし楽にする」等の項目とも繋っていることから、上記のように命名した。

第３因子－－『”神”への信仰』の因子

神の暖かさ、偉大さ、全能全善、神の働き等を肯定し、その神を信じて生かされ

て生き、命がけでも応えるのがよいことであるとする内容の１８項目がこの因子を構成している。

第４因子－－『恐ろしい死後の世界』の因子

汚れた、恐ろしい、暗く寂しく惨めな死後の世界を表現している項目群と、「神は偉く畏れ多い方という印象がある」という項目で構成されている因子である。

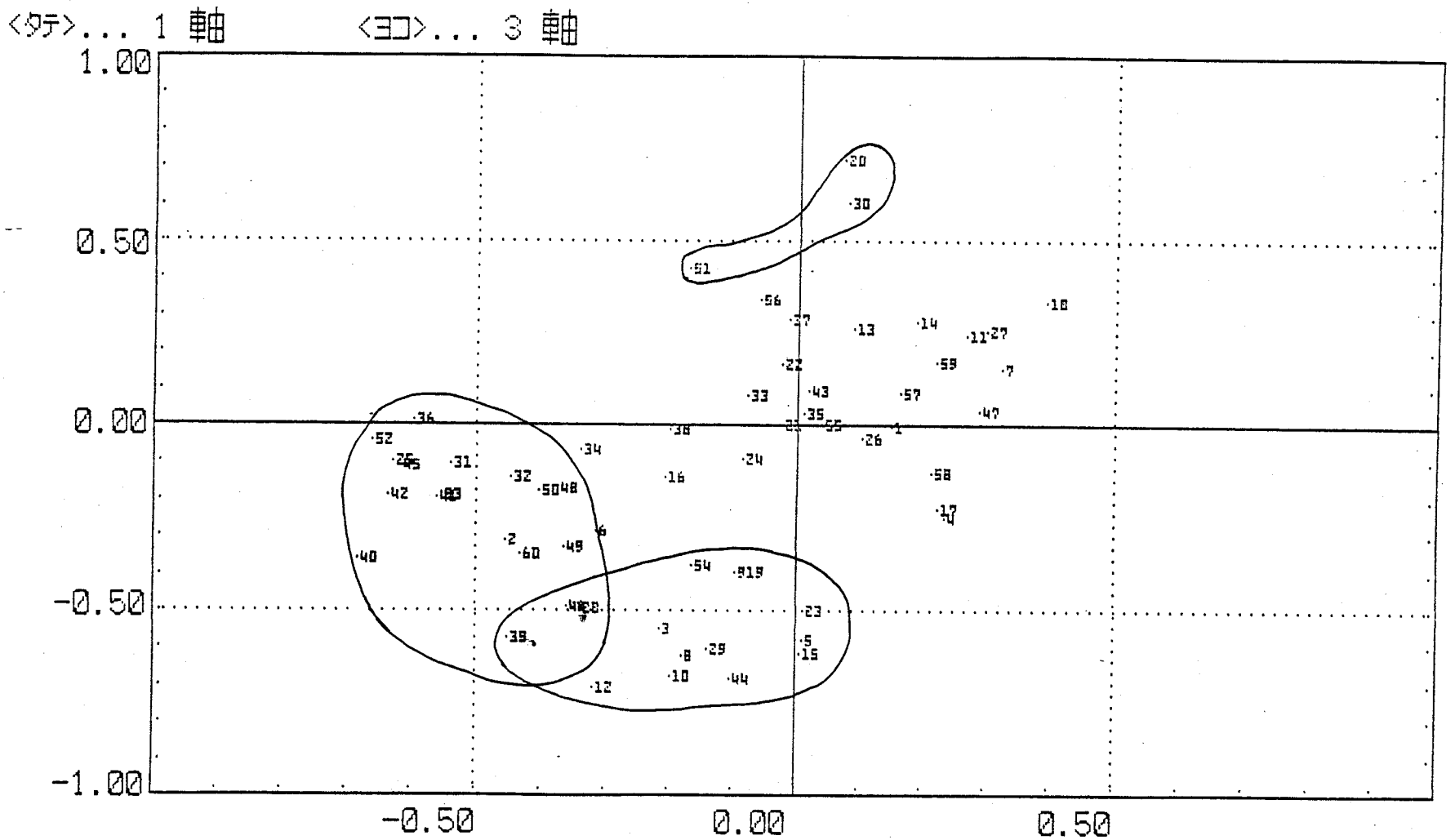
第５因子－－『弱い者のための信仰』の因子

「神を信じることは現実からの逃避」「人間は帰属感を求めて宗教に入る」「若いうちから神を信じる必要はない」「苦しいときにも神に助けを求めない」「自信があれば信じる必要はない」等、信仰は弱い者のためであるという内容の項目から成っている。さらに、この因子のなかには、「神を信じることは科学や理性に矛盾する」「神は人間がつくりあげたもの」等の神を否定する項目も含まれており、信仰への否定の意識が根底に流れている因子である。

Ｆｉｇ．６・５・５「第１因子と第３因子によるグラフ」は、第１因子と第３因子の２次元グラフである。縦軸のプラス方向は霊的世界を認めない傾向であり、マイナス方向はそれらを認める傾向である。横軸ではマイナス方向が”神”への信仰を肯定する傾向である。このグラフから第３因子で壮年者群が意識している”神”は第１因子に含まれている自然界の延長線上にある神々と非常に近い関係にある神であり、内容によってはそれらを含んでいる神であることが分かる。

Table 6・5・1g「宗教的意識や心情－因子負荷量－」
<壮年者群>

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
20. あの世はないと思う	.71	.08	.07	.19	.17
12. 死後の世界で神に会える	-.70	-.07	-.31	-.14	-.08
44. この世とあの世を死んだ霊は行き来する	-.68	.09	-.10	-.03	-.07
10. 魂は永遠に生きる	-.67	-.19	-.19	.14	.03
8. 人間は死後神になる	-.62	.04	-.17	.14	.07
15. この世での生き方により死後の状態は異なる	-.61	.05	.00	.09	-.29
29. 自然のなかには太陽や月などいろいろな神々がいる	-.60	.18	-.13	.01	.08
30. 人間は死んだら全くの無に帰する	.59	.40	.08	.12	.20
5. 生物にも無生物にも命や霊魂がある	-.58	.05	.01	.25	.01
39. 大切な人の死は悲しいがまた会えると思うと慰められる	-.57	-.06	-.44	.00	.00
3. あの世は喜びにあふれた幸せなもの	-.55	-.14	-.21	-.30	.17
23. 人間は繰り返し生きる	-.50	-.14	.01	.19	-.04
28. 神は見えないが実際に存在する	-.49	-.06	-.33	-.10	-.24
46. 神は日常生活のなかで語りかけている	-.49	-.07	-.36	.09	-.36
51. 死後の世界は真空のような状態	.42	.40	-.17	.17	.08
19. 人間、動物、草木はみな同じ仲間	-.39	.05	-.08	.02	-.13
9. 善い神もあるが悪神悪霊もある	-.39	-.07	-.09	.11	.22
54. 神々のなかにはきつねなどの動物もいる	-.38	.14	-.16	.20	.14
58 初詣をしたりさまざまな神社の前で参拝したりする	-.12	.64	.21	.02	.06
11. 神に生活のすべてをかける必要はない	.24	.58	.26	-.14	.19
38. 人格でなく意志のような存在として神を認めている	-.01	.54	-.19	-.21	-.24
7. 理論的追求より素直に生きることで十分	.15	.51	.32	-.02	.25
13. 神のほうから意思表示することはない	.26	.50	.09	-.19	.33
55. 皆が同じ神を拝む必要はない	-.00	.47	.03	.07	.19
17. 合格、安産などそれぞれに力ある神々をお参りする	-.22	.43	.22	.16	-.10
37. 死んだら灰となって自然にかえるだけである	.28	.42	-.01	.37	.07
21. 自殺は苦しむものを自然にかえし楽にする	-.00	.36	-.02	-.00	.36
40. 神に包み込むような暖かさを感じる	-.36	.01	-.67	-.11	-.19
52. 宗教は生活に意味を与える	-.04	-.19	-.65	-.05	-.13
42. 神に父性性を感じる	-.18	-.16	-.63	.06	-.12
25. 神に生かされ応えるのが真の信仰	-.10	-.19	-.62	.05	-.05
45. 神は偉大で何ものにも置き換えられない	-.11	.20	-.61	.04	-.18
36. 神は唯一で絶対的なもの	.00	-.36	-.59	.10	.04
41. 神は全能でかげりのない善そのもの	-.19	-.03	-.55	-.07	.03
53. 神を信じることはどの時代にも大切	-.19	.02	-.55	-.12	-.26
31. 命がけでも神に応えることが大切	-.10	-.11	-.53	.28	.02
2. 神に母性性を感じる	-.31	-.07	-.45	-.18	.02
32. 信仰をもつことはよいこと	-.14	-.12	-.44	-.04	-.09
60. 人間や自然は神によって造られた	-.35	-.14	-.43	.27	-.27
48. 神はどんな生き方をした人でも救う	-.17	-.06	-.37	.02	.04
49. 自分の拝んでいる神についてよく知らない	-.32	.28	-.36	.10	-.14
35. 死後の世界は汚れの世界	.02	-.04	.01	.74	-.03
33. 死後の世界は恐ろしい地獄の世界	.07	-.05	-.07	.67	.23
43. 死後の世界は暗く寂しくみじめ	.08	-.12	.02	.59	.09
4. 葬式の後には塩で清める	-.25	.31	.23	.41	-.03
50. 神は偉く畏れ多い方という印象	-.17	.03	-.40	.41	-.14
1. 神を信じることは科学や理性に矛盾する	-.00	.07	.15	.13	.71
57. 神を信じることは現実からの逃避	.08	.25	.16	.01	.66
24. 人間は帰属感を求めて宗教に入る	-.09	-.04	-.08	-.14	.58
47. 若いうちから神を信じる必要はない	.03	.03	.29	.29	.56
59. 苦しいときにも神に助けを求めない	.16	-.14	.22	.05	.53
14. 神は人間がつくりあげたもの	.27	.46	.18	-.02	.48
22. 大自然はひとりでに出来上がった	.16	.17	-.02	.05	.45
18. 自信があれば信じる必要はない	.33	.10	.39	.00	.42
56. どのような生き方をしても死後は同じようになる	.33	.20	-.05	.11	.39
27. 苦しいときに神を思い出すがふだんはあまり考えない	.25	.30	.30	-.20	.36
6. 神の存在や教えの理性的追求は大切	-.28	-.33	-.31	.02	-.11
16. 神は厳しく怖いという印象がある	-.14	.18	-.20	.28	.21
26. 神は無条件に救われるわけではない	-.03	.17	.10	-.14	.04
34. 高い山、深い木立のなかで心が清められる	-.06	.18	-.33	.01	-.30



Ｆｉｇ．６・５・５「第１因子と第３因子によるグラフ」
－壮年者群－

h）老年者群

老年者群の因子分析では５因子が抽出され、その累積寄与率は４１．０％であった。因子負荷量は、Ｔａｂｌｅ　６・５・１ｈ「宗教的意識や心情－因子負荷量－」に示した。

第１因子－－『信仰の肯定／否定』の因子

神の存在とその神を信じることを肯定する項目群と、それを信じることを否定する項目群とから構成されている。すなわち「神は見えないが実際に存在する」「あの世は喜びに溢れた幸せなもの」「信仰をもつことはよいこと」等のグループと、「神は人間がつくりあげたもの」「神を信じることは現実からの逃避」「自信があれば信じる必要はない」「神を信じることは科学や理性に矛盾する」等のグループである。

第２因子－－『”神”への信仰』の因子

神の性質や働き、そしてその神を信じることをさまざまな形で表現しているのがこの因子である。「神は唯一で絶対的なもの」「神は全能でかげりのない善そのもの」「神は偉大で何ものにも置き換えられない」「神は偉く畏れ多い方という印象」「人間や自然は神によって造られた」「命がけでも神に応えることが大切」「神に生かされ応えるのが真の信仰」「神の存在や教えの理性的追求は大切」「神を信じることはどの時代にも大切」等の内容がこの因子の基調である。

第３因子－－『この世での生き方と死後』の因子

この因子には、「どのような生き方をしても死後は同じようになる」「死んだら灰となって自然にかえるだけである」「人間は死んだらまったくの無に帰する」「人間は繰り返し生きる」「魂は永遠に生きる」「死後の世界で神に会える」等、人間のこの世での生き方と死んだ後のさまざまな状態を描写する項目が集まっている

。

第４因子－－『暗いイメージの死後の世界』の因子

「死後の世界は恐ろしい地獄の世界」「死後の世界は汚れの世界」「死後の世界は暗く寂しく惨め」と項目数は少ないが、暗く否定的なイメージの死後の世界を、明確に表現している項目で構成されている。

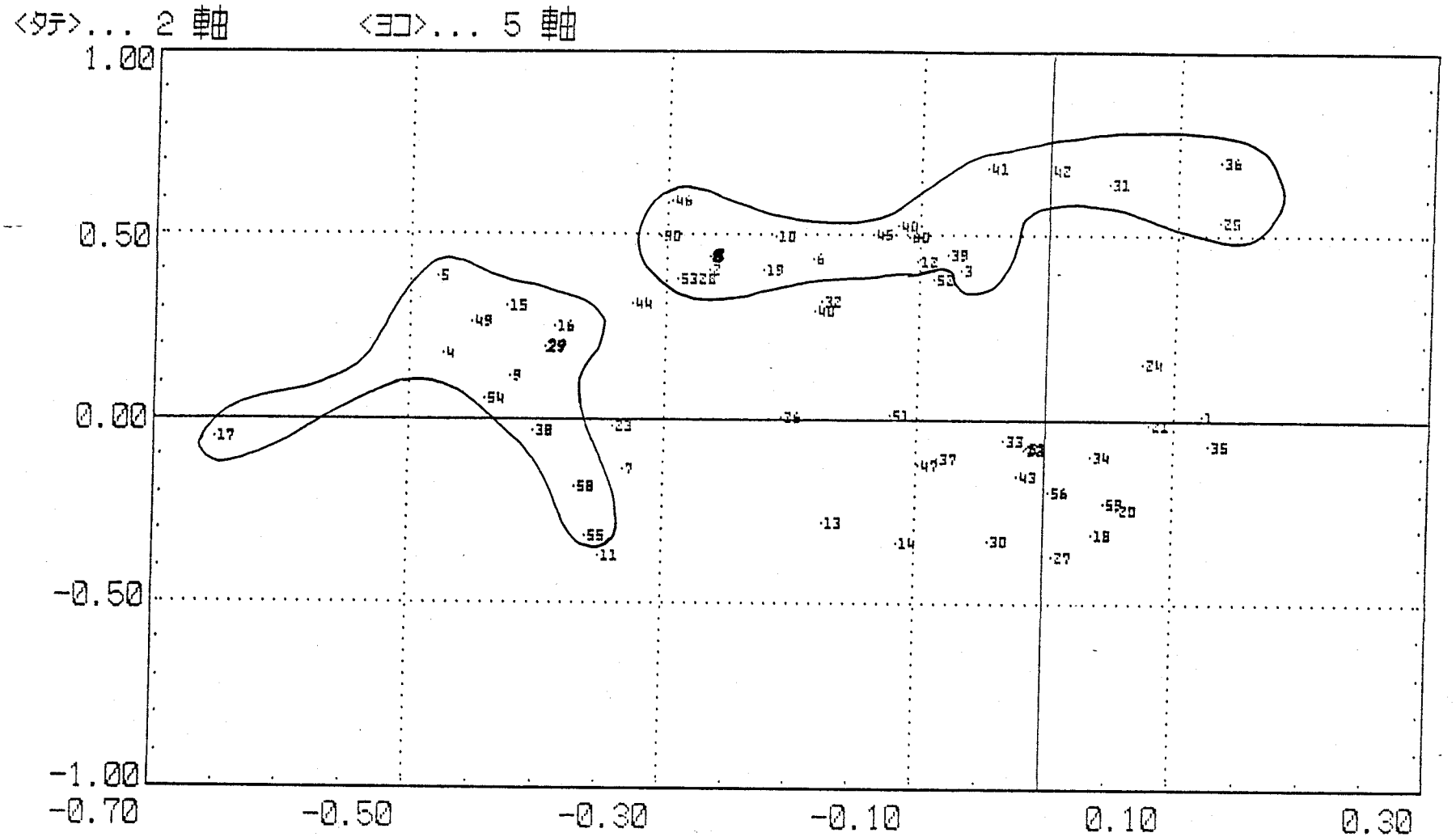
第５因子－－『八百万の神々』の因子

この因子は、「合格・安産などそれぞれに力ある神々をお参りする」「神々の中にはきつねなどの動物もいる」「善い神もあるが悪神悪霊もある」「自然の中には太陽や月などいろいろな神々がいる」「初詣をしたりさまざまな神社の前で参拝したりする」「皆が同じ神を拝む必要はない」等、種々の神々の存在を肯定する項目群となっている。

Ｆｉｇ．６・５・６「第２因子と第５因子によるグラフ」は、第２因子と第５因子の２元グラフである。第２因子で表現されている神は唯一絶対的な傾向が強いが、その中にも「人間は死後神になる」というような項目も含まれている。そしてこの２元グラフからもこの第２因子でとらえられている神が、必ずしも”八百万の神々”と隔絶した概念ではないことが読み取れる。特に、第２因子の「人間は死後神になる」という項目は、第５因子の「自然の中には太陽や月などいろいろな神々がいる」というような項目とかなり接近した位置にある。

Table 6・5・1h「宗教的意識や心情－因子負荷量－」
<老年者群>

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
47. 若いうちから神を信じる必要はない	.78	-.12	.05	.13	-.09
28. 神は見えないが実際に存在する	-.60	.37	-.21	-.03	-.27
27. 苦しいときに神を思い出すがふだんはあまり考えない	.60	-.37	.04	-.01	.00
57. 神を信じることは現実からの逃避	.60	-.07	.24	.07	-.01
18. 自信があれば信じる必要はない	.59	-.31	.25	.23	.03
14. 神は人間がつくりあげたもの	.54	-.33	.37	-.04	-.11
2. 神に母性性を感じる	-.54	.39	-.11	-.15	-.26
13. 神のほうから意思表示することはない	.52	-.28	.11	-.11	-.17
24. 人間は帰属感を求めて宗教に入る	.52	.15	.05	-.08	.07
11. 神に生活のすべてをかける必要はない	.47	-.37	.32	.02	-.34
1. 神を信じることは科学や理性に矛盾する	.41	.00	.28	.13	.12
3. あの世は喜びにあふれた幸せなもの	-.40	.39	-.28	-.20	-.06
32. 信仰をもつことはよいこと	-.39	.31	-.25	-.02	-.17
7. 理論的追求より素直に生きることで十分	.36	-.13	.19	-.28	-.33
36. 神は唯一で絶対的なもの	-.08	.70	-.16	-.10	.13
41. 神は全能でかげりのない善そのもの	-.26	.68	-.01	.05	-.04
42. 神に父性性を感じる	-.18	.67	-.22	-.04	.00
31. 命がけでも神に応えることが大切	-.21	.63	-.02	.06	.04
46. 神は日常生活の中で語りかけている	-.30	.59	-.05	-.09	-.29
25. 神に生かされ応えるのが真の信仰	-.17	.53	.03	.07	.13
40. 神に包み込むような暖かさを感じる	-.29	.52	-.21	-.11	-.11
45. 神は偉大で何ものにも置き換えられない	-.07	.49	-.09	-.20	-.13
10. 魂は永遠に生きる	-.16	.49	-.48	.10	-.21
50. 神は偉く畏れ多い方という印象	-.16	.49	-.24	-.14	-.30
60. 人間や自然は神によって造られた	-.38	.48	-.10	-.00	-.10
39. 大切な人の死は悲しいがまた会えると思うと慰められる	-.23	.44	-.27	-.14	-.07
8. 人間は死後神になる	-.23	.43	-.13	-.12	-.26
6. 神の存在や教えの理性的追求は大切	-.05	.42	-.10	-.01	-.18
19. 人間、動物、草木はみな同じ仲間	-.05	.39	.26	-.08	-.22
52. 宗教は生活に意味を与える	-.13	.37	-.25	-.16	-.08
53. 神を信じることはどの時代にも大切	-.09	.37	-.16	-.26	-.29
56. どのような生き方をしても死後は同じようになる	.33	-.19	.65	-.01	.00
21. 自殺は苦しむものを自然にかえし楽にする	.02	-.01	.59	.13	.08
37. 死んだら灰となって自然にかえるだけである	.27	-.10	.58	-.04	-.08
12. 死後の世界で神に会える	-.17	.42	-.53	-.07	-.10
30. 人間は死んだら全くの無に帰する	.32	-.33	.51	-.14	-.04
20. あの世はないと思う	.48	-.24	.50	-.01	.05
23. 人間は繰り返し生きる	-.16	-.02	-.48	.23	-.33
51. 死後の世界は真空のような状態	.34	.00	.42	.21	-.12
44. この世とあの世を死んだ霊は行き来する	-.01	.30	-.39	-.08	-.32
22. 大自然はひとりでに出来上がった	.09	-.08	.39	-.19	-.01
48. 神はどんな生き方をした人でも救う	-.33	.29	.36	.00	-.18
33. 死後の世界は恐ろしい地獄の世界	.05	-.05	-.00	.73	-.03
35. 死後の世界は汚れの世界	.04	-.07	-.15	.67	.12
43. 死後の世界は暗く寂しくみじめ	.24	-.15	.10	.62	-.01
17. 合格・安産などそれぞれに力ある神々をお参りする	.04	-.05	-.17	-.15	-.65
5. 生物にも無生物にも命や霊魂がある	-.16	.38	.12	-.04	-.47
4. 葬式の後には塩で清める	-.07	.17	-.02	.26	-.47
49. 自分の拝んでいる神についてよく知らない	.08	.25	-.05	-.26	-.45
54. 神々のなかにはきつねなどの動物もいる	-.35	.04	-.03	.26	-.43
15. この世での生き方により死後の状態は異なる	.00	.30	-.37	.08	-.42
9. 善い神もあるが悪神悪霊もある	.28	.11	-.06	.35	-.41
38. 人格でなく意志のような存在として神を認めている	.23	-.03	.31	-.12	-.40
29. 自然のなかには太陽や月などいろいろな神々がいる	-.36	.19	.10	.12	-.39
16. 神は厳しく怖いという印象がある	.09	.24	-.11	.24	-.38
58. 初詣をしたりさまざまな神社の前で参拝したりする	-.17	-.18	.10	-.08	-.36
55. 皆が同じ神を拝む必要はない	.01	-.32	.13	-.09	-.36
26. 神は無条件に救われるわけではない	.20	.00	-.09	-.21	-.20
34. 高い山、深い木立のなかで心が清められる	-.03	-.10	-.19	-.26	.03
59. 苦しいときにも神に助けを求めない	.28	-.22	.09	.18	.04



Ｆｉｇ．６・５・６「第２因子と第５因子によるグラフ」
－老年者群－

以上が各群の因子構造であるが、因子数から見ると、一般高校生群・大学生群がそれぞれ４因子、ヨーロッパ高校生群・大学生群がそれぞれ３因子となっている。キリスト教高校生群・大学生群および老年者群・壮年者群は、５～６因子と、より複雑な構造となっている。

各群の因子名を、一覧したものが、Ｔａｂｌｅ　６・５・２「宗教的意識や心情の因子構造一覧」である。

Ｔａｂｌｅ　６・５・２「宗教的意識や心情の因子構造一覧」

	一般高校	ｷﾘｽﾄ教高校	ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校	一般大学	ｷﾘｽﾄ教大学	ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学	壮年者	老年者
信仰・神の概念	信仰の肯定／否定			信仰の肯定／否定				信仰の肯定／否定
			”神”への信仰の肯定／否定		”神”への信仰の肯定／否定	”神”への信仰の肯定／否定		
	”神”への信仰	”神”への信仰					”神”への信仰	”神”への信仰
		弱い者の為の信仰					弱い者の為の信仰	
					恐れや不安から来る入信			
			合理的な考え方／漠とした不安					
		八百万の神々	八百万の神々		八百万の神々			八百万の神々
信じ方						漠然とした信仰心		
					信仰と生活の関係－その濃淡－			
						神とのかかわりあい－その濃淡－		
							現世ご利益的信心	
霊的世界	霊的世界の認否	霊的世界の認否		霊的世界の認否			霊的世界の認否	

	一般高校	ｷﾘｽﾄ教高校	ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校	一般大学	ｷﾘｽﾄ教大学	ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学	壮年者	老年者
死後	死後の世界は極楽／地獄							
					死後の世界は自然のふところ／暗く寂しい			
				偉大な神の手中にある恐ろしい死後の世界				
							恐ろしい死後の世界	
								暗いイメージの死後の世界
		この世での生き方とあの世の関係						
					この世での生き方と死後の関係			
								この世での生き方と死後
				人間の生き方と神の救い				

第７章　倫理的価値意識
―結果と考察―

第１節　善悪の判断や罪意識

日本人の判断は状況相対的で、有限な人間の結合組織を絶対化する傾向があり、普遍的な原理に照らし合わせるというような考え方は、敬遠されがちであると言われていることは理論編で述べた。そこから罪と恥の問題等も起こってくる。日本人の罪意識はぼんやりしているとも言われるが、自分が犯した罪の報いに関してはかなり敏感な面もある。

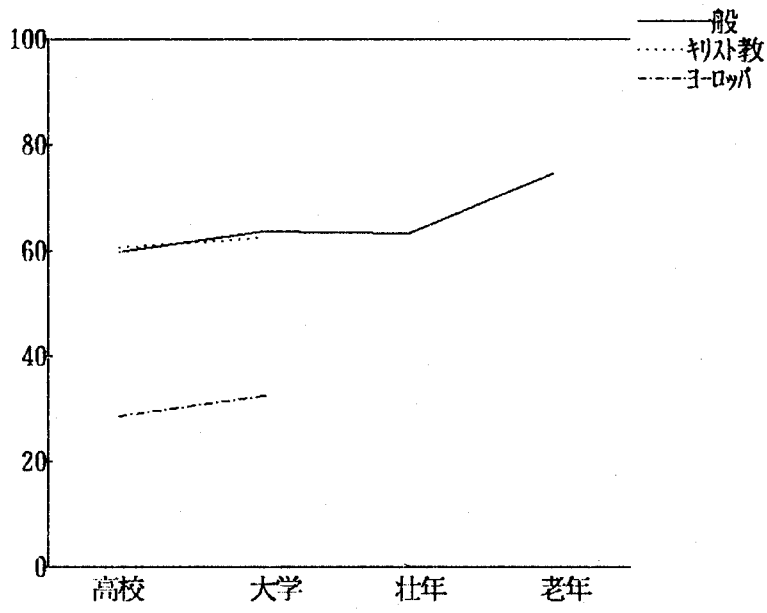
以下、本調査で得られたデータから日本人の善悪の判断や罪意識に関しても、分析、解釈を試みたい。なお、このテーマに関する項目に対しての全被調査者の反応は、Ｔａｂｌｅ　７・１・１［善悪の判断や罪意識」（本節末尾）に示した。

１．悪い行いから来る報いについて

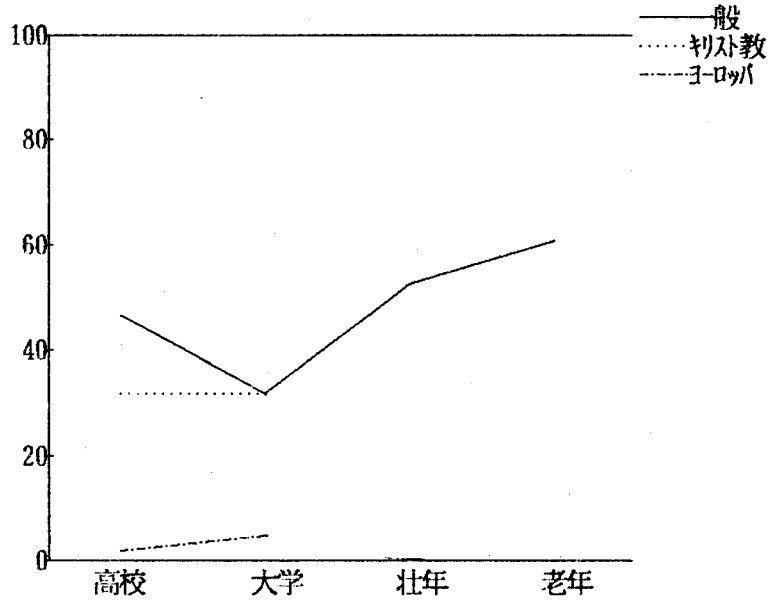
嘘やいじめその他さまざまな自分が犯した悪い行いが招くであろう報い、すなわち”罰””たたり””恥””捕まること”に対する被調査者の肯定の度合いを、Ｆｉｇ．７・１・１ａ　から　７・１・１ｄに表した。

”罰”に関しては、日本人の全グループで５０％以上の者が肯定しており、その中でも老年者群は最も高い。ヨーロッパの学生たちは２群とも特に否定しているわけではないが、肯定する者も少ない。

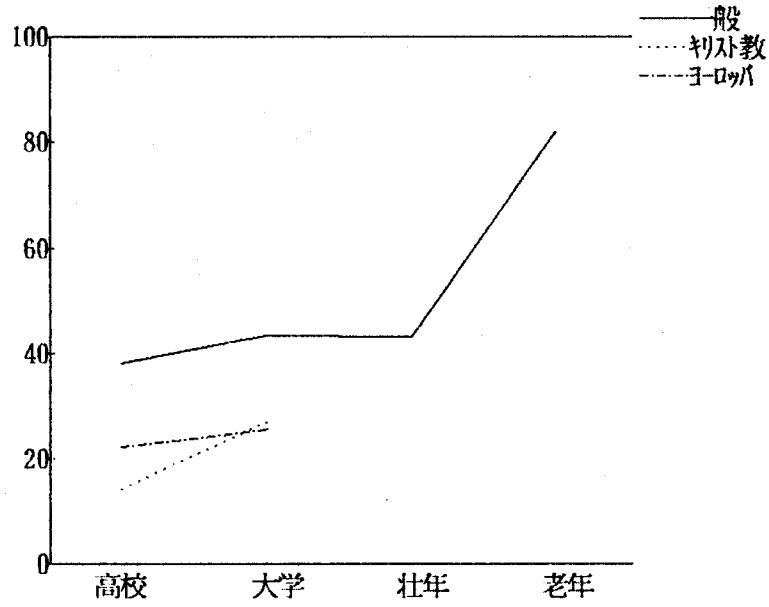
”たたり”に関しては、日本の壮年者群、老年者群が５０％以上の肯定率を示し、ヨーロッパの２群は、肯定している者はわずかで８０％以上が否定している。



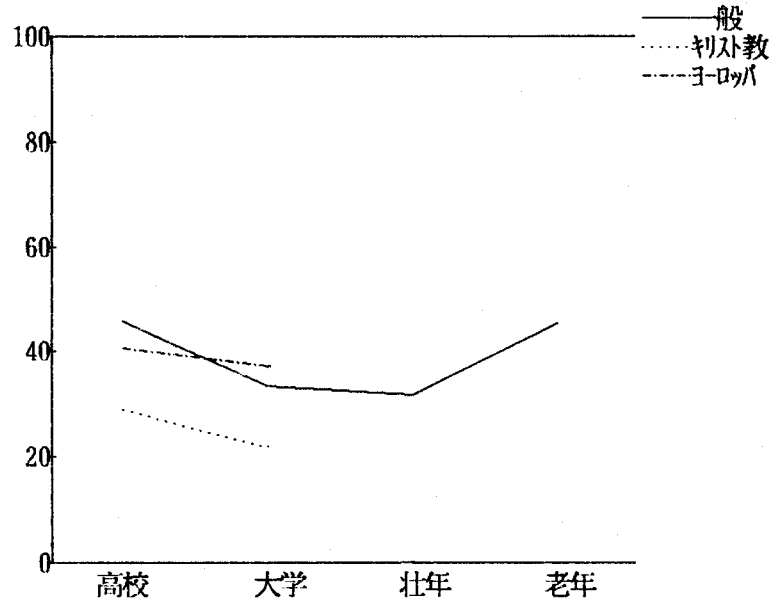
Ｆｉｇ．７・１・１ａ「罰」



Ｆｉｇ．７・１・１ｂ「たたり」



Ｆｉｇ．７・１・１ｃ「恥」



Ｆｉｇ．７・１・１ｄ「捕まる」

”捕まる怖さ”に関しては、どの群からも明確な反応は得られない。

”恥”に関しては、老年者群に高い肯定が見られ、他の群での反応はぼんやりとしている。

以上のことから、日本においては、年齢や受けている教育とは関係なく、”罰”に対する意識は高く、”たたり”や”恥”に関しては、年齢が上がるほどその意識が高くなる傾向があることがわかる。

ヨーロッパの生徒、学生たちにはそのような悪い行いに対する報いのような意識はあまりなく、特に”たたり”に対しては強く否定している。

２．恥・罪について

さらに、”恥”という概念をもう少し掘り下げてみよう。

前述のように「悪い行いがばれると恥をかくのでしないほうがよい」という項目に対して高い肯定を示したのは老年者群のみであったが、次の「後悔するときの多くは恥をかいたとき」に対しても５０％以上の支持があるのは老年者群のみである。

一方、「嘘をついたり不正をすると自分が恥ずかしくなる」とか「親しい人を裏切る行為は恥ずべき行為」というような、自分の悪業に対する外からの報いとしてではなく、悪い行いをした自分自身を恥じるということ、あるいはその行い自身が恥ずべきものであるというとらえに対しては、文化、年齢、地域、受けている教育と関係なく、すべての群が高い支持を示している。そしてこの場合も、壮年者・老年者の２群の割合は特に高い。

以上の反応を考えると、”恥”という概念は、決して日本人特有のものというわけではない。しかし、”人の目を意識した恥”に対する意識は高年齢層にはかなり根強く残っている特徴であるといえよう。

また、「親しい人を裏切る行為は恥ずべき行為」という項目に高い支持を表明した被調査者の全グループは、同時に「もっとも罪意識をもつのは親しい人を裏切ったようなとき」という項目にも肯定の反応を示している。文化、年齢、地域、教育

のいかんにかかわらず”恥”の意識と”罪”の意識とは重なり合うものでありうることを示唆しているように思われる。

また、東西を問わず”裏切る”という行為が、罪の意識の中で占める重さにも、注目すべきであろう。

その他の”罪”にかかわる項目に対する反応をみると、はっきりと「自分は罪深いものだと思っている」グループはなく、「人間は神によって救われなければならないもの」だと思っているのはヨーロッパの大学生のみである。日本の一般校の大学生は、「人間は神に救われなければならないもの」という点も、また「悪い行いは神を悲しませるようでつらい」という点もともに否定している。「神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落とされる」については、一般高校生群と老年者群とを除いてどのグループも多数が否定しており、罪というものが簡単に”洗い流される”ようなものではないという意識を表明していると思われる。

３．善悪の基準について

「善いこと悪いことは状況によるのに基準があると思う人はぎごちなくて好きではない」に対して日本人のほとんどのグループは５０％以上の肯定を示し（壮年者群だけは４９．２％でわずかに半数を下回るが、否定するものも９．２％と低い）、ヨーロッパの２群も肯定はしていないものの否定しているわけでもない。

しかし、次の「物事の筋を通すより、まるくおさめるのに心を使う人のほうが好き」ということになるとヨーロッパの２群は多数が否定し、多数が肯定しているのは老年者群のみである。

以上の結果を見ると、ヨーロッパの生徒・学生たちも、状況により善悪の判断の仕方に違いがあり得ることを認めないわけではないが、日本人全般より、より筋を通すことを主張しているように思われる。老年者群は日本人の中でも一段と筋を通すことより物ごとをまるくおさめることに心を使っているのであろう。前述のように他者の目を気にした”恥”を意識する老年者群の傾向と相通じるところがあるように思われる。

さらに、さまざまな具体的状況のもとにおける善悪の判断となると、意見は一層複雑に分かれていく。

「人生の中には本当のことばかり言っていられないことが多い」には、ヨーロッパの大学生以外のすべてのグループが肯定、「この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない」にはヨーロッパの高校生のみが肯定、「親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの」にはどのグループからもなんら顕著な反応が見られない。

また、ＮＯ．３２，２２に表現されている善業に関する建前と本音に類する項目に関しては、「たいていの人はわざわざ人を助けることなど好んでいない」に日本のキリスト教校の高校生・大学生と一般校の大学生の多数が否定し、「自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない」にはヨーロッパの高校生・大学生の大多数が、そして日本のキリスト教校の多数の大学生が否定している。

最後の「私は道徳や善悪の問題をまじめに考える」に関しては、きれいな反応が出ているわけではないが、年齢が高くなるにつれて一層まじめに考える傾向にあるようである。

Table 7・1・1「善悪の判断や罪意識」

数字は%

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
14	嘘などをつくと罰があたりそうで怖い	一般高校生	59.9	35.7	4.3
		キリスト教高校生	60.8	20.0	19.2
		ヨーロッパ 高校生	28.6	40.8	30.6
		一般大学生	63.8	21.7	13.0
		キリスト教大学生	62.6	24.3	13.0
		ヨーロッパ 大学生	32.6	32.6	32.6
		壮年者	63.3	21.7	12.5
		老年者	74.7	12.1	4.0
49	人や動物をいじめるとたたりがあるようで怖い	一般高校生	46.9	43.5	8.2
		キリスト教高校生	32.0	34.4	33.6
		ヨーロッパ 高校生	2.0	14.3	83.7
		一般大学生	31.9	42.0	23.2
		キリスト教大学生	32.2	31.3	33.0
		ヨーロッパ 大学生	4.7	7.0	86.0
		壮年者	52.5	30.0	15.8
		老年者	60.9	20.1	10.3
16	たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない	一般高校生	45.9	37.7	16.4
		キリスト教高校生	28.8	29.6	41.6
		ヨーロッパ 高校生	40.8	32.7	26.5
		一般大学生	33.3	23.2	42.0
		キリスト教大学生	21.7	31.3	47.0
		ヨーロッパ 大学生	37.2	34.9	25.6
		壮年者	31.7	30.8	36.7
		老年者	45.4	25.9	17.2
12	悪い行ないがばれると恥をかくのでしないほうがよい	一般高校生	38.2	46.4	15.5
		キリスト教高校生	14.4	38.4	47.2
		ヨーロッパ 高校生	22.4	38.8	38.8
		一般大学生	43.5	30.4	24.6
		キリスト教大学生	27.0	33.9	39.1
		ヨーロッパ 大学生	25.6	30.2	41.9
		壮年者	43.3	26.7	26.7
		老年者	82.2	8.6	3.4
50	後悔するときの多くは恥をかいたとき	一般高校生	42.0	39.6	16.9
		キリスト教高校生	40.0	24.0	36.0
		ヨーロッパ 高校生	32.7	38.8	28.6
		一般大学生	31.9	24.6	40.6
		キリスト教大学生	28.7	32.2	35.7
		ヨーロッパ 大学生	16.3	44.2	37.2
		壮年者	25.8	36.7	37.5
		老年者	54.6	25.3	12.6

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
30	嘘をついたり不正をすると自分が恥ずかしくなる。	一般高校生	66.2	30.9	2.4
		ｷﾘｽﾄ教高校生	80.0	18.4	1.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	53.1	36.7	8.2
		一般大学生	78.3	15.9	4.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	78.3	19.1	2.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	65.1	25.6	4.7
		壮年者	86.7	8.3	3.3
		老年者	87.4	2.3	0.0
40	親しい人を裏切る行為は恥ずべき行為	一般高校生	80.7	16.9	1.0
		ｷﾘｽﾄ教高校生	68.8	27.2	4.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	71.4	18.4	8.2
		一般大学生	78.3	14.5	4.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	83.5	13.0	0.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	62.8	27.9	7.0
		壮年者	86.7	12.5	0.8
		老年者	88.5	4.6	0.6
4	最も罪意識をもつのは親しい人を裏切ったようなとき	一般高校生	78.3	18.4	3.4
		ｷﾘｽﾄ教高校生	71.2	21.6	7.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	71.4	20.4	6.1
		一般大学生	71.0	20.3	7.2
		ｷﾘｽﾄ教大学生	73.9	19.1	7.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	72.1	18.6	4.7
		壮年者	66.7	20.8	10.8
		老年者	64.4	20.7	6.9
27	自分は罪深いものだと思っている	一般高校生	20.8	47.8	30.4
		ｷﾘｽﾄ教高校生	48.0	37.6	13.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	14.3	42.9	38.8
		一般大学生	37.7	33.3	26.1
		ｷﾘｽﾄ教大学生	48.7	30.4	20.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	27.9	34.9	34.9
		壮年者	25.0	27.5	45.8
		老年者	21.8	32.8	33.3
42	人間は神によって救われなければならないもの	一般高校生	7.2	52.2	39.1
		ｷﾘｽﾄ教高校生	17.6	40.0	42.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	44.9	34.7	16.3
		一般大学生	2.9	27.5	66.7
		ｷﾘｽﾄ教大学生	35.7	39.1	21.7
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	53.5	32.6	11.6
		壮年者	16.7	49.2	34.2
		老年者	42.5	33.9	16.7

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
57	悪い行ないは神を悲しませるようでつらい	一般高校生	15.5	56.5	25.6
		キリスト教高校生	43.2	36.8	19.2
		ヨーロッパ 高校生	20.4	40.8	38.8
		一般大学生	11.6	23.2	62.3
		キリスト教大学生	46.1	27.0	23.5
		ヨーロッパ 大学生	32.6	30.2	34.9
		壮年者	27.5	42.5	28.3
		老年者	46.6	27.0	10.3
43	神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落とされる	一般高校生	18.8	46.9	32.9
		キリスト教高校生	8.8	25.6	65.6
		ヨーロッパ 高校生	6.1	28.6	65.3
		一般大学生	2.9	26.1	68.1
		キリスト教大学生	11.3	29.6	55.7
		ヨーロッパ 大学生	0.0	16.3	79.1
		壮年者	12.5	30.0	57.5
		老年者	26.4	32.2	34.5
38	善いこと悪いことは状況によるのに基準があると思う人はぎごちなくて好きではない	一般高校生	51.2	45.4	1.9
		キリスト教高校生	72.8	21.6	5.6
		ヨーロッパ 高校生	40.8	40.8	18.4
		一般大学生	59.4	29.0	8.7
		キリスト教大学生	62.6	27.0	7.0
		ヨーロッパ 大学生	48.8	27.9	18.6
		壮年者	49.2	41.7	9.2
		老年者	64.9	24.1	2.3
55	物事の筋を通すより、まるくおさめるのに心をつかう人のほうが好き	一般高校生	37.2	42.0	18.8
		キリスト教高校生	22.4	35.2	42.4
		ヨーロッパ 高校生	10.2	32.7	55.1
		一般大学生	23.2	49.3	24.6
		キリスト教大学生	26.1	53.9	16.5
		ヨーロッパ 大学生	2.3	16.3	76.7
		壮年者	38.3	47.5	14.2
		老年者	64.4	16.7	6.3
41	人生のなかには本当のことばかり言っていられないことが多い	一般高校生	77.3	19.8	1.4
		キリスト教高校生	83.2	16.0	0.8
		ヨーロッパ 高校生	63.3	22.4	14.3
		一般大学生	79.7	17.4	0.0
		キリスト教大学生	71.3	22.6	2.6
		ヨーロッパ 大学生	46.5	39.5	11.6
		壮年者	67.5	22.5	9.2
		老年者	70.7	19.0	2.9

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
51	この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない	一般高校生	35.7	50.2	12.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	36.0	45.6	18.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	59.2	30.6	10.2
		一般大学生	30.4	47.8	18.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	21.7	50.4	24.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	39.5	37.2	20.9
		壮年者	17.5	37.5	45.0
		老年者	20.1	28.7	36.8
36	親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの	一般高校生	30.9	49.8	17.9
		ｷﾘｽﾄ教高校生	31.2	37.6	31.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	28.6	40.8	30.6
		一般大学生	34.8	40.6	21.7
		ｷﾘｽﾄ教大学生	40.9	37.4	18.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	34.9	41.9	20.9
		壮年者	25.0	38.3	36.7
		老年者	19.0	44.3	28.7
32	たいていの人はわざわざ人を助けることなど好んでいない	一般高校生	19.3	54.6	25.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	9.6	33.6	56.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	24.5	42.9	32.7
		一般大学生	11.6	33.3	53.6
		ｷﾘｽﾄ教大学生	10.4	28.7	60.9
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	16.3	44.2	37.2
		壮年者	10.0	44.2	45.0
		老年者	12.1	43.7	31.6
22	自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない	一般高校生	9.2	53.1	37.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	11.2	47.2	41.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	0.0	24.5	75.5
		一般大学生	17.4	46.4	34.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	7.8	39.1	53.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	0.0	11.6	86.0
		壮年者	8.3	50.8	39.2
		老年者	14.4	47.1	27.0
60	私は道徳や善悪の問題を真面目に考える	一般高校生	29.5	58.5	9.7
		ｷﾘｽﾄ教高校生	52.0	36.8	11.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	32.7	32.7	32.7
		一般大学生	43.5	36.2	17.4
		ｷﾘｽﾄ教大学生	59.1	33.0	4.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	58.1	34.9	4.7
		壮年者	73.3	24.2	2.5
		老年者	78.2	7.5	1.1

第２節　判断の基準・行動の基準

前節で述べた善悪の判断の基準と同様、日本人は一般的な日常の判断や行動の基準も、とかくまわりの人との関係におくと言われている。この点についても分析を試みるべく、このテーマに関する全群の反応を拾いだしてまとめたものが、Ｔａｂｌｅ７・２・１「判断・行動の基準」である。

各群で５０％以上の反応が見られる項目に注目して解釈すると、下記のようになる。

１．まわりの状況による判断・行動

ａ）一般高校生群

「行動するときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい」のか否かには迷いがあり、「行動する前に人がどう思うか考えてみたほうがよい」と考えている。

常に率直であることがよいことなのかどうかはわからない。

ｂ）キリスト教高校生群

判断し、行動するとき、神の望みを念頭に置いたり、まわりに合わせたりするより、自分で判断してするのがよい。おおかたの人がどのように考えるかでことを決めるのではないが、行動するまえには人がどう思うか考えてみたほうがよいとも思っている。現実には自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとしている。

ｃ）ヨーロッパ高校生群

「自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる」、「物事の筋を通すよりまるくおさめることに心を使う人のほうが好き」であるという２項目に関しては多数が否定し、「行動するときまわりに合わせるより、自分で判断する

のがよい」と思っている。

しかし、現実生活においては、考えほどには明確な態度をとっているわけではないようで、「他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い」「私はまわりの人の気持や考えに最も神経を使っている」という項目に対しては「どちらとも言えない」という答えが多い。

d）一般大学生群

判断し、行動するとき、神の望みを念頭に置く必要はないが、人がどう思うか考えてみたほうがよいと思っている。現に自分の態度を決める前に他人が考えていることを知ろうとしているが、人の思惑を気にせず、思うとおりすることも多い。

e）キリスト教大学生群

「行動するときまわりに合わせるより、自分で判断してするのがよい」と思っているが「行動するまえに人がどう思うか考えてみたほうがよい」とも思っている。

「物事の筋を通すより、まるくおさめるのに心を使う人のほうが好き」かどうかには、迷いがある。

f）ヨーロッパ大学生群

物事を判断したり、行動するとき、神の望みを念頭に置くのがよいと思っている。「自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる」「物事の筋を通すより、まるくおさめるのに心を使う人のほうが好き」というような事なかれ主義に対しては大多数が否定し、「おおかたの人がどのように考えるかでことを決めるのがよい」ということも否定している。しかし現実には、考えほどに明確な態度をとっているわけではないようで、「他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い」「自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとする」「まわりの人の気持や考えに最も神経を使っている」に関しては「どちらとも言えない」という答えが多い。

g）壮年者群

「自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる」「おおかたの人がどのように考えるかでことを決めるのがよい」という点に関しては迷いがあるものの、「行動するまえには人がどう思うか考えてみたほうがよい」と思っている。

h）老年者群

「行動するときまわりに合わせるより自分で判断するのがよい」「率直であることは常によいこと」と言う考えに肯定を示し、また「行動するまえに人がどう思うか考えてみたほうがよい」とも考えている。現実には「物事の筋を通すより、まるくおさめるのに心を使う人のほうが好き」であり、「まわりの人の気持や考えに最も神経を使っている」。

さまざまな要素が入り組んでいて、種々の状況が設定されうる上記のような内容は、被調査者本人がどのような意味で答えているかを明確にすることは難しく、したがってその反応も解釈しにくいが、それでも下記のようないくつかの特徴は示唆されたように思う。

すなわち、ヨーロッパの生徒・学生たちも、現実の生活にはおいてまわりの状況が判断や行動の基準になりうることもあると考えており、このことが即日本人の特性とはならないが、考え方としては”自分で判断して行動するのがよい”あるいは”おおかたの人の意見で事を決めるのはよくないと思っている。また、”物事の筋を通すこと””正しいと思うことは通すこと”に関してはきっぱりと支持を表明している。

キリスト教の学校における日本人の生徒・学生も、現実の生活ではまわりの状況に左右されうるが、考えとしては”自分で判断して行動すること”がよいと思っている。しかし”物事の筋を通すこと””正しいと思うことは通すこと”に関しては

ヨーロッパの生徒・学生たちのような明確な反応を得られない。

日本の一般校の生徒・学生たちは、”自分で判断して行動する”ということに関しても、”正しいと思うことは通す”ということに関しても、何等強い反応を示していない。

壮年者群・老年者群では、多くの迷いのなかに、まわりの状況が彼らの生活のなかでかなりの比重を占めている様子が伺われる。

Ｔａｂｌｅ　７・２・１「判断・行動の基準」

数字は％

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
3	他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い	一般高校生	29.5	47.8	22.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	31.2	36.0	32.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	6.1	69.4	24.5
		一般大学生	47.8	21.7	29.0
		ｷﾘｽﾄ教大学生	29.6	35.7	34.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	14.0	58.1	25.6
		壮年者	10.0	44.2	45.0
		老年者	14.4	40.8	41.4
24	自分の態度を決める前に他人が考えていることを知ろうとする	一般高校生	48.8	36.2	14.5
		ｷﾘｽﾄ教高校生	54.4	20.8	24.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	28.6	49.0	22.4
		一般大学生	55.1	20.3	23.2
		ｷﾘｽﾄ教大学生	48.7	26.1	25.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	18.6	53.5	23.3
		壮年者	30.0	41.7	27.5
		老年者	42.0	25.9	19.0
28	自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる	一般高校生	16.4	45.9	37.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	15.2	42.4	42.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	2.0	32.7	65.3
		一般大学生	21.7	42.0	34.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	13.9	48.7	37.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	2.3	23.3	72.1
		壮年者	15.8	55.0	28.3
		老年者	28.2	37.9	24.7
48	私はまわりの人の気持ちや考えにもっとも神経を使っている	一般高校生	37.7	42.0	18.8
		ｷﾘｽﾄ教高校生	45.6	34.4	20.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	22.4	55.1	22.4
		一般大学生	39.1	26.1	31.9
		ｷﾘｽﾄ教大学生	43.5	41.7	11.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	20.9	60.5	16.3
		壮年者	40.0	48.3	10.8
		老年者	59.8	27.6	4.6
20	おおかたの人がどのように考えるかでことを決めるのがよい	一般高校生	30.9	45.4	23.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	12.0	36.0	50.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	24.5	28.6	46.9
		一般大学生	21.7	31.9	44.9
		ｷﾘｽﾄ教大学生	13.9	36.5	49.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	7.0	37.2	53.5
		壮年者	18.3	54.2	25.8
		老年者	49.4	26.4	13.2

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
7	行動する前に人がどう思うか考えてみたほうがよい	一般高校生	69.6	23.2	7.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	54.4	31.2	13.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	49.0	46.9	4.1
		一般大学生	56.5	27.5	14.5
		ｷﾘｽﾄ教大学生	58.3	28.7	13.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	44.2	37.2	16.3
		壮年者	57.5	29.2	12.5
		老年者	71.3	16.7	6.3
55	物事の筋を通すより、まるくおさめるのに心を使う人のほうが好き	一般高校生	37.2	42.0	18.8
		ｷﾘｽﾄ教高校生	22.4	35.2	42.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	10.2	32.7	55.1
		一般大学生	23.2	49.3	24.6
		ｷﾘｽﾄ教大学生	26.1	53.9	16.5
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	2.3	16.3	76.7
		壮年者	38.3	47.5	14.2
		老年者	64.4	16.7	6.3
6	人の思惑を気にせず、思うとおりすることが多い	一般高校生	27.1	46.4	26.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	32.0	34.4	33.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	24.5	44.9	30.6
		一般大学生	55.1	18.8	24.6
		ｷﾘｽﾄ教大学生	39.1	33.0	27.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	18.6	34.9	44.2
		壮年者	31.7	35.0	32.5
		老年者	42.0	27.6	26.4
46	行動するときまわりに合わせるより、自分で判断してするのがよい	一般高校生	42.0	51.7	4.8
		ｷﾘｽﾄ教高校生	54.4	41.6	4.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	71.4	26.5	2.0
		一般大学生	44.9	42.0	10.1
		ｷﾘｽﾄ教大学生	52.2	39.1	4.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	46.5	48.8	2.3
		壮年者	42.5	49.2	8.3
		老年者	51.1	33.3	8.0
53	神の望みを念頭に置いて判断し、行動するのがよい	一般高校生	5.3	43.5	49.8
		ｷﾘｽﾄ教高校生	19.2	28.8	52.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	38.8	40.8	20.4
		一般大学生	1.4	11.6	84.1
		ｷﾘｽﾄ教大学生	29.6	37.4	29.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	55.8	34.9	7.0
		壮年者	12.5	43.3	44.2
		老年者	33.3	35.6	16.1

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
34	率直であることは常によいこと	一般高校生	38.2	53.6	7.7
		ｷﾘｽﾄ教高校生	28.0	48.0	24.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	30.6	40.8	28.6
		一般大学生	23.2	44.9	30.4
		ｷﾘｽﾄ教大学生	34.8	43.5	21.7
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	18.6	60.5	18.6
		壮年者	45.8	46.7	5.8
		老年者	65.5	28.7	0.0

＜付録＞

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
29	あいまいな言葉をやめたら私たちの考えはもっとよくなる	一般高校生	48.3	44.4	6.8
		ｷﾘｽﾄ教高校生	47.2	30.4	22.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	20.4	24.5	53.1
		一般大学生	23.2	34.8	40.6
		ｷﾘｽﾄ教大学生	25.2	38.3	36.5
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	16.3	34.9	46.5
		壮年者	24.2	50.8	23.3
		老年者	52.9	28.7	6.9
10	はっきりした態度をとらない人の話には腹が立つ	一般高校生	64.7	28.5	6.8
		ｷﾘｽﾄ教高校生	73.6	21.6	4.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	26.5	59.2	14.3
		一般大学生	58.0	23.2	17.4
		ｷﾘｽﾄ教大学生	69.6	18.3	12.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	25.6	48.8	23.3
		壮年者	54.2	37.5	6.7
		老年者	75.3	16.1	2.9
44	性格のしっかりした人は感情をおもてに表わさない	一般高校生	30.4	45.9	22.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	18.4	37.6	44.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	10.2	38.8	49.0
		一般大学生	15.9	37.7	43.5
		ｷﾘｽﾄ教大学生	13.9	37.4	45.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	4.7	18.6	74.4
		壮年者	24.2	50.0	25.8
		老年者	59.2	30.5	2.3

２．恩・義理・人情

前述のように人と人との間により自分のあり方が変わってくるような社会の中から生まれるといわれる、一種の道徳律である”恩・義理・人情”にも焦点をあててみよう。Ｔａｂｌｅ　７・２・２「恩・義理・人情」にはこのテーマにかかわりがあると思われる項目を並べ、それらに対する各群の反応を記入した。さらに、この表の末尾には”内と外”に多少関連すると思われる２項目を付加した。

全体を概観し、それぞれの項目に対する反応が５０％以上であったものおよび10％以下であったものに注目すると、一つの特徴が浮上してくる。すなわち、日本人のすべてのグループは似た反応を示し、またヨーロッパの高校生・大学生の２群は日本人の反応とは異なっていて互いに似通っている反応を示しているということである。

”恩””義理”が中心テーマになっている最初の３項目に関して言えば、「試験で１番の者より、２番の恩人の子を採用する」に対して、ヨーロッパ群は否定し、日本人群はどちらとも言えず迷っている。「親切には人一倍の心遣いをもって恩をかえすべき」に対しては、日本のすべての群で大多数の人々が支持を表明しており、ヨーロッパ群には迷いが見られる。「自分にあった仕事が見つかっても世話になってついた仕事はやめにくい」に対しては、ヨーロッパ群の肯定は少なく日本人群は全般にどちらともはっきりしないという結果がでている。

以上のことからヨーロッパ人が、恩・義理に関する心情を持ち合わせないというわけではないが、やはり日本人は全般的に”より”恩・義理に重きをおいており、時にはそれによって縛られているということがわかる。

次に”人情”が中心テーマとなっている項目についてみると、「無理な仕事もさせるが、仕事以外でも世話をみるような課長がよい」に関しては、日本人の全グループが肯定したのに対し、ヨーロッパの両群には迷いが見られ、「無理な仕事はさせないが、仕事以外では世話もしない課長を好む」に関しては、被検者のすべての

グループがはっきりと否定している。

日本人の場合、上司に仕事の場を越えた心配りを期待するのに対し、そこまでは要求しないヨーロッパの２群であるが、仕事の場を越えた心配りを否定している割り切った考え方をしているわけではない。

人情が絡むため当然のなすべき行為が縛られてしまうといった内容に関しては、日本人、ヨーロッパ人の区別なく、いずれにおいても戸惑いや迷いが強い。　すなわち「親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの」にはどのグループからも何等顕著な反応はなく、「先生に聞かれても親友の悪い行ないを言わないのが思いやり」に対しては、迷いの反応がおおかたで、「注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい」に関しては５０％前後の肯定を表明しているグループが殆どである。

一般に日本人は上記のような心遣いがこまやかであるが、それはあくまでも自分の”内”に対してであり、”外”に関しては「旅の恥はかきすて」といった類の利己的な面があるようにも言われている。それが果たして事実であるのかを測るためには、種々の現場での行為を多く集め比較検討しなければならないであろうが、現実はどうであれ少なくとも被調査者の”意識”はどうであるのか、２、３の問いを付け加えて尋ねてみた。

「近い人の幸せには気を使うが、その他にはあまり関心がない」には老人群に多少肯定に傾く気配は見られるものの実際に肯定したグループはなく、否定したのはヨーロッパの２群と日本のキリスト教校の大学生であり、これにキリスト教校の高校生群が続く。この結果は、この問題に関するかぎり、日本人性を云々する問題というより、キリスト教の精神とかかわっている問題といえるかもしれない。

「見知らぬ土地ではふだんしないことまでしてしまいがち」に対しては、キリスト教校の大学生と壮年・老年群に否定の反応があった。

以上の種々の結果を考え合わせると、”恩・義理・人情”の意識や心情は、年齢や受けている教育に関係なく、日本人群全般にヨーロッパの２群にくらべて、より

強くより広範囲に支持されているものの、日本人のみに特徴的なものとはいえない。ヨーロッパの２群にも”恩・義理・人情”の心情やそれにまつわる戸惑いがあることが、調査結果からも示唆された。

Ｔａｂｌｅ　７・２・２「恩・義理・人情」

数字は％

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
5	試験で一番の者より、２番の恩人の子を採用する	一般高校生	25.6	43.5	30.4
		ｷﾘｽﾄ教高校生	27.2	35.2	36.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	2.0	16.3	81.6
		一般大学生	20.3	34.8	43.5
		ｷﾘｽﾄ教大学生	29.6	45.2	25.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	9.3	34.9	53.5
		壮年者	30.0	35.8	33.3
		老年者	28.2	39.1	27.6
9	親切には人一倍の心遣いをもって恩を返すべき	一般高校生	79.2	16.9	3.9
		ｷﾘｽﾄ教高校生	78.4	19.2	2.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	20.4	42.9	36.7
		一般大学生	81.2	13.0	4.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	87.0	9.6	3.5
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	20.9	48.8	27.9
		壮年者	84.2	15.0	0.0
		老年者	90.8	5.2	0.6
37	自分にあった仕事が見付かっても世話になってついた仕事は止めにくい	一般高校生	29.0	47.3	22.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	31.2	33.6	35.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	6.1	51.0	42.9
		一般大学生	27.5	37.7	31.9
		ｷﾘｽﾄ教大学生	33.0	31.3	32.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	9.3	44.2	44.2
		壮年者	33.3	45.0	20.0
		老年者	46.6	35.1	7.5
15	無理な仕事もさせるが、仕事以外でも世話を見るような課長がよい	一般高校生	53.1	39.6	7.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	59.2	24.8	16.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	24.5	34.7	40.8
		一般大学生	58.0	29.0	11.6
		ｷﾘｽﾄ教大学生	64.3	21.7	13.9
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	27.9	27.9	37.2
		壮年者	58.3	34.2	5.8
		老年者	54.6	22.4	8.6
35	無理な仕事はさせないが、仕事以外では世話もしない課長を好む	一般高校生	5.3	43.0	50.7
		ｷﾘｽﾄ教高校生	7.2	26.4	66.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	10.2	20.4	65.3
		一般大学生	4.3	39.1	55.1
		ｷﾘｽﾄ教大学生	7.8	35.7	56.5
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	4.7	20.9	69.8
		壮年者	5.8	33.3	59.2
		老年者	8.0	27.0	51.1

NO.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
36	親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの	一般高校生	30.9	49.8	17.9
		ｷﾘｽﾄ教高校生	31.2	37.6	31.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	28.6	40.8	30.6
		一般大学生	34.8	40.6	21.7
		ｷﾘｽﾄ教大学生	40.9	37.4	18.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	34.9	41.9	20.9
		壮年者	25.0	38.3	36.7
		老年者	19.0	44.3	28.7
21	先生に聞かれても親友の悪い行ないを言わないのが思いやり	一般高校生	5.8	56.5	37.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	6.4	52.8	40.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	34.7	55.1	10.2
		一般大学生	10.1	47.8	40.6
		ｷﾘｽﾄ教大学生	11.3	53.9	34.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	46.5	39.5	11.6
		壮年者	10.8	55.8	32.5
		老年者	25.9	45.4	17.2
13	注意すべきことがあっても世話になっているといいにくい	一般高校生	39.1	39.6	21.3
		ｷﾘｽﾄ教高校生	52.8	25.6	21.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	53.1	28.6	18.4
		一般大学生	55.1	27.5	15.9
		ｷﾘｽﾄ教大学生	49.6	30.4	20.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	51.2	30.2	16.3
		壮年者	41.7	41.7	14.2
		老年者	50.6	31.0	14.4

39	近い人のしあわせには気を使うがその他にはあまり関心がない	一般高校生	20.3	52.7	25.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	18.4	33.6	48.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	12.2	26.5	61.2
		一般大学生	30.4	33.3	33.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	14.8	28.7	53.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	7.0	16.3	74.4
		壮年者	19.2	40.8	40.0
		老年者	47.7	31.6	14.4
33	見知らぬ土地ではふだんしないことまでしてしまいがち	一般高校生	18.4	40.6	40.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	30.4	23.2	46.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	32.7	40.8	26.5
		一般大学生	20.3	29.0	49.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	21.7	21.7	56.5
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	39.5	20.9	37.2
		壮年者	8.3	23.3	67.5
		老年者	11.5	20.1	60.9

第３節　人生で大切なもの

人と人との間の空気により善悪や物事の判断をする傾向にある日本人であるが、個別の状況を離れて、あらたまって自分の考えとして思いをめぐらした場合、人生でどのような価値が大切であると思っているのであろうか。

「人生で大切なのは．．．」という出だしで始まる１１項目を取り上げ、それに対する各群の反応をＴａｂｌｅ　７・３・１「人生で大切なもの」にまとめてみた。さらに各群ごとに、支持の高かった価値から順に並べてみたものが、Ｔａｂｌｅ７・３・２「人生で大切な価値の順位」である。ここにかかげた価値群は、理論編で述べた Spranger の価値類型が基盤となっているが、以前筆者が Spranger の価値類型にそって調査した際に示唆を得た考えに則って、他の価値項目を付加した。

年齢、教育、文化を問わず、どのグループにおいても上位３位以内の支持を得た価値は”思いやり”であり、どのグループでも上位４位以内の支持を得たのは”愛”である。この２つは非常に似通った概念であるが、老年者群は別として、日本人は全般的に”思いやり”を最も支持し、ヨーロッパの高校生、大学生の両群は”愛”を最も支持しているところが多少異なっている。

”愛”についてみるとキリスト教の土壌の強さに比例して順位が高くなっていることが分かる。すなわち高校、大学ともに一般校、日本のキリスト教校、ヨーロッパの学校の順に徐々に順位が上がっているということである。

このことから、”思いやり””愛”のような価値は、洋の東西、年齢、教育等を問わず、人間である以上共通に大切にしている価値であるといえるが、”思いやり”という概念はどちらかといえば日本人に親しみやすく、”愛”という概念はキリスト教の土壌でとらえやすいものであるといえよう。

”まごころ”も全般的に高い支持を得、ヨーロッパの高校生群以外全群が５０％以上の支持を示し、上位３～４位以内にある。老年者群では支持が特に高く、いずれの価値にも勝って第１位で９２．５％が肯定している。筆者は同様の調査を男性

の老年者群に実施した結果[1]も得ているが、やはり”まごころ”がトップで９４．２％の支持率であった。”まごころ”という価値も、人間として全般的に大切にされている価値ではあるが、日本人の高年齢層には特に親しみのある価値であるのかもしれない。

”健康”に関しても高い支持があり、ヨーロッパの大学生群以外は５０％以上の支持を表明している。特にキリスト教と直接関係がない一般校の高校生・大学生群および壮年者・老年者群の場合は、第２位という高い順位となっている。

以上が全般的に上位に属する価値群であるが、反対に非常に低い支持しか得られない、あるいはむしろ否定されているものを吟味すると、次のようである。

先ず、低い支持のトップにあげられるのが”権力”である。この権力的価値はどのグループにおいても最下位で、どのグループからも強く否定されている。

全般的にみて、権力的価値に続いて低い支持率のものは”経済的”価値であり、それに”美”への追求が続く。両者ともに下位２～４位以内にある。前者に対しては、ヨーロッパの生徒・学生の両群と日本のキリスト教校の大学生群とが否定しており、後者に対してはヨーロッパの２群が否定している。

その他の価値に関しては、特に顕著な傾向は見られない。

”自己の確立”に関しては、ヨーロッパの大学生群が上位第８位となっているほかは、全般的に４～６位の間にある。

”人様に迷惑をかけないこと”に関しては、日本のキリスト教校の生徒、学生群が上位８位となっているほかは、全体に５～６位に位置している。

”真理”の追求についてはどのグループも上位６～７位にあるが、その支持率は１６．９％～５１．３％と幅が広い。

”神を信じて生きること”という項目に関しては、ヨーロッパの大学生群が上位４位につけているほかは、全体的に下位５位以内に入っている。特に、一般校の大学生の支持率はわずか４．３％で、否定率が６９．６％もあり、権力的価値に続く低い支持となっている。

この結果は、神を信じることに関して肯定的であった多くの者たちも”人生で大

切なのは神を信じて生きること”と言い切るほどに大切であるとは思っていないことを示しているように思われる。しかし、第６章でその反応が顕著であったヨーロッパ大学生群の肯定の姿勢、および日本の一般大学生群の否定の姿勢は、この結果と符合する。

以上の結果をみると、種々の価値に関して、被調査者が、人生でどの程度大切であると思っているかは、文化や受けている教育、年齢によって多少のニュアンスの違いが見られるものの、反応が顕著であった価値に関しては、それらの差異を越えて、人間としての意識や心情によって共通であるといえよう。

Table 7・3・1「人生で大切なもの」

数字は%

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
1	人生で大切なのは愛すること	一般高校生	61.8	31.4	6.8
		ｷﾘｽﾄ教高校生	81.6	17.6	0.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	83.7	12.2	4.1
		一般大学生	81.2	13.0	4.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	93.9	5.2	0.9
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	86.0	11.6	0.0
		壮年者	85.0	13.3	0.8
		老年者	86.8	7.5	0.0
31	人生で大切なのは思いやり	一般高校生	83.1	15.0	1.0
		ｷﾘｽﾄ教高校生	89.6	8.0	1.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	63.3	34.7	2.0
		一般大学生	87.0	11.6	0.0
		ｷﾘｽﾄ教大学生	94.8	3.5	1.7
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	79.1	14.0	4.7
		壮年者	92.5	5.0	1.7
		老年者	87.4	2.9	0.0
47	人生で大切なのはまごころ	一般高校生	67.1	26.6	4.8
		ｷﾘｽﾄ教高校生	76.0	21.6	2.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	40.8	42.9	16.3
		一般大学生	79.7	13.0	4.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	87.8	8.7	0.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	69.8	20.9	4.7
		壮年者	85.0	12.5	1.7
		老年者	92.5	1.7	0.0
52	人生で大切なのは真理の追求	一般高校生	16.9	62.8	17.9
		ｷﾘｽﾄ教高校生	39.2	45.6	15.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	42.9	49.0	8.2
		一般大学生	24.6	53.6	18.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	51.3	33.9	11.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	51.2	41.9	4.7
		壮年者	30.8	50.0	18.3
		老年者	48.9	30.5	2.9

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
58	人生で大切なのは人様に迷惑をかけないこと	一般高校生	50.7	35.3	11.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	15.2	36.0	48.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	46.9	44.9	8.2
		一般大学生	46.4	30.4	20.3
		ｷﾘｽﾄ教大学生	29.6	38.3	28.7
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	55.8	37.2	4.7
		壮年者	73.3	20.8	5.8
		老年者	85.1	2.3	0.0
19	人生で大切なのは健康	一般高校生	82.1	13.5	3.4
		ｷﾘｽﾄ教高校生	52.0	36.0	12.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	51.0	38.8	10.2
		一般大学生	82.6	14.5	1.4
		ｷﾘｽﾄ教大学生	71.3	23.5	4.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	30.2	58.1	9.3
		壮年者	88.3	7.5	2.5
		老年者	89.1	0.6	0.0
54	人生で大切なのは自分が確立すること	一般高校生	44.0	48.8	5.3
		ｷﾘｽﾄ教高校生	72.0	22.4	5.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	49.0	40.8	10.2
		一般大学生	75.4	18.8	2.9
		ｷﾘｽﾄ教大学生	80.9	13.9	1.7
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	23.3	51.2	23.3
		壮年者	53.3	37.5	9.2
		老年者	85.6	0.6	0.0
26	人生で大切なのは美の追求	一般高校生	7.7	54.1	37.7
		ｷﾘｽﾄ教高校生	15.2	47.2	37.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	4.1	18.4	77.6
		一般大学生	18.8	31.9	47.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	20.0	44.3	35.7
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	2.3	25.6	67.4
		壮年者	13.3	44.2	40.8
		老年者	46.0	34.5	8.0

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
8	人生で大切なのは経済力	一般高校生	6.8	54.6	38.6
		ｷﾘｽﾄ教高校生	8.0	47.2	44.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	6.1	24.5	67.3
		一般大学生	13.0	47.8	37.7
		ｷﾘｽﾄ教大学生	7.8	40.0	52.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	0.0	2.3	95.3
		壮年者	23.3	44.2	31.7
		老年者	35.6	41.4	18.4
23	人生で大切なのは権力	一般高校生	1.9	26.6	70.5
		ｷﾘｽﾄ教高校生	0.0	18.4	81.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	4.1	18.4	75.5
		一般大学生	2.9	13.0	82.6
		ｷﾘｽﾄ教大学生	1.7	13.0	85.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	0.0	7.0	90.7
		壮年者	0.0	14.2	85.0
		老年者	2.3	20.7	66.1
45	人生で大切なのは神を信じて生きること	一般高校生	9.7	46.9	42.0
		ｷﾘｽﾄ教高校生	18.4	49.6	32.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	24.5	46.9	28.6
		一般大学生	4.3	23.2	69.6
		ｷﾘｽﾄ教大学生	33.9	44.3	18.3
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	60.5	30.2	7.0
		壮年者	20.0	46.7	33.3
		老年者	42.5	42.5	6.3

Ｔａｂｌｅ　７・３・２「人生で大切な価値の順位」

数字は％

	一般高校	ｷﾘｽﾄ教高校	ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校	一般大学	ｷﾘｽﾄ教大学	ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学	壮　年	老　年
1位	思いやり 83.1	思いやり 89.6	愛 83.7	思いやり 87.0	思いやり 94.8	愛 86.0	思いやり 92.5	まごころ 92.5
2位	健康 82.1	愛 81.6	思いやり 63.3	健康 82.6	愛 93.9	思いやり 79.1	健康 88.3	健康 89.1
3位	まごころ 67.1	まごころ 76.0	健康 51.0	愛 81.2	まごころ 87.8	まごころ 69.8	愛 まごころ 85.0	思いやり 87.4
4位	愛 61.8	自己の確立 72.0	自己の確立 49.0	まごころ 79.7	自己の確立 80.9	神を信じる 60.5		愛 86.8
5位	迷惑をかけない 50.7	健康 52.0	迷惑をかけない 46.9	自己の確立 75.4	健康 71.3	迷惑をかけない 55.8	迷惑をかけない 73.3	自己の確立 85.6
6位	自己の確立 44.0	真理 39.2	真理 42.9	迷惑をかけない 46.4	真理 51.3	真理 51.2	自己の確立 53.3	迷惑をかけない 85.1
7位	真理 16.9	神を信じる 18.4	まごころ 40.8	真理 24.6	神を信じる 33.9	健康 30.2	真理 30.8	真理 48.9
8位	神を信じる 9.7	迷惑をかけない 美 15.2	神を信じる 24.5	美 18.8	迷惑をかけない 29.6	自己の確立 23.3	経済力 23.3	美 46.0
9位	美 7.7		経済力 6.1	経済力 13.0	美 20.0	美 2.3	神を信じる 20.0	神を信じる 42.5
10位	経済力 6.8	経済力 8.0	美 権力 4.1	神を信じる 4.3	経済力 7.8	経済力 権力 0.0	美 13.3	経済力 35.6
11位	権力 1.9	権力 0.0		権力 2.9	権力 1.7		権力 0.0	権力 2.3

第４節　生きがい感

これまで日本人の生き方意識を、宗教的意識や倫理的価値意識を中心に分析してきたが、最後にその日本人が自分たちの毎日の生活に”生きがい感”を感じているか否かということに焦点をあてて分析を試みる。この生きがい感に関係があると思われる項目に対する被調査者の反応は、Ｔａｂｌｅ　７・４・１「人生の意味と充足感」に示した通りである。

人生に意味があるかということに関しては、年齢、教育、文化の別なくどの群においても、大多数の者が”意味がある”と思っている。すなわち、「一人一人の人生には意味がある」への肯定率は非常に高く、「人生そのものには意味はない」への否定率も非常に高い。

しかし、それでは本人の「毎日の生活は充実しているか」というと、必ずしもそうではなく、肯定の反応が５０％以上だったのは、日本のキリスト教大学生群と壮年者群、老年者群であり、反対の内容に近い「生きていても意味がないとよく思う」に対して５０％以上が否定しているのは、前述の３グループとヨーロッパの大学生群だけである。

毎日の充足感については、上記のグループにヨーロッパの高校生・大学生および一般校の大学生群が続き、日本の高校生群は２群ともさらに低くなっている。Frankl が述べているように、年代が下がるにつれて、充足感が薄れて、実存的空虚感が増大しているということであろうか。

日本の高校生群と大学生群（それぞれ２つずつある群をまとめたもの）、および老年者・壮年者群（この２群をまとめたもの）との間で、日々の充足感に対する反応のカイ自乗検定を行ったところ５％水準で有意差があった。この結果は、年代がさがるにつれて充足感が減少していく傾向があることを示唆していると思われる。

さらに、”人生に意味があると確信すること”と、現実の日々の生活に”充足感

を感じるということ”との間に相関があるかを見るために、Ｔａｂｌｅ　７・４・２「人生の意味と充足感の相関」を作成した。なお、この表には、各グループごとに”人生の意味”と強い相関関係にある項目番号をも付加し、各グループの被調査者が考えている人生の意味を垣間見ようとしている。なお、Ｔａｂｌｅ　７・４・３「価値観項目の内容の要約」に各項目の内容の要約を示している。

表に表れた数字は、「人生には意味がある」「人生には意味がない」ということと、「生活は充実している」「生きていても意味ないとよく思う」との間に、グループにより相関の強さにかなりの違いがあるものの、ヨーロッパの学生群と日本の老年者群を除いては、一応、相関関係があることを示している。

”人生には意味がある”ということが分かっていれば、必ず日々の生活が充実するというわけではなく、より多くの複雑な要素が絡み合って毎日の生活の充足感が生まれるのであろうが、人生に意味があると確信することもまた日々の生活の充足感を増す一つの大切な要素であることを、この結果は示唆しているように思われる。

「一人一人の人生には皆意味がある」という項目と比較的強い相関があった項目番号の内容を吟味すると、おおよそ下記のような傾向が見られる。

すなわち、一般高校生群では、”思いやり””まごころ”、キリスト教高校生群では、”正直””まごころ”、ヨーロッパ高校生群では、”神の望み””善悪”、一般大学生群は、”愛””道徳”、キリスト教大学生群は、“思いやり・愛””まごころ””自己の確立”、ヨーロッパ大学生群は”愛””真実”、壮年者群は、”神の望み””まごころ、”老年者群は、”まごころ””思いやり”の内容の項目と比較的強い相関が見られた。

さらに、多少見方を変えて筆者の周辺でよく耳にする「今生きることに意味はあるが、人生そのものには目的はない」という考え方に関して、別の項目を立てて尋ねてみたが、ヨーロッパの大学生群が否定しているほかは、どの群でも意見が分かれて明確な反応はつかめなかった。

また、上記の問いと関連して「人生に意味がないなら、今を精一杯生きることに

も、意味がなくなる」のではないかと　いう筆者自身から発した問いに関しては、どの群も否定している。

最後の「生きる目的、信じるということなどを、理論的につきつめたい」という項目に関しては、ヨーロッパの大学生群と日本の老年者群のわずか２群が５０％以上の支持を表明し、ヨーロッパの高校生群が４４．９％でこれに続く他は、特別に強い支持は見られない。

以上の種々の結果を考え合わせると、人生の意味や充足感についておおよそ次のような反応が得られたといえよう。

”一人ひとりの人生にはみな意味がある”という考えは、年齢・教育・文化の別なく、どのグループにおいても８０％以上の高率で支持されたが、現実に自分の毎日の生活が充実しているかということになると必ずしもそうではない。日本人の高校生群、大学生群、壮年者・老年者群の３グループを比較すると、日々の充足感に関しては、年齢が下がるほど減少している傾向が見られる。

”人生には意味があると確信すること”と、”日々の充足感”との間には相関関係が見られるが、人生に意味があると確信することが、即日々の生活の充足感につながるというわけではなく、日々の充足感には他の種々の要素が入っていることも示唆されている。

各グループの被調査者が”人生の意味”をどのようにとらえているかを推察するために”人生の意味”と他の項目との相関係数を吟味したところ、グループによりさまざまなニュアンスの違いはあるものの、非常に似通っており、特に”おもいやり””まごころ”を表現している内容とは強い相関関係があることが分かった。

人生そのものに意味があるなら”今”にも意味があり、人生そのものに目的・意味がないなら”今”にも意味がないというような考え方は支持されなかった。

生きる目的、信じるということなどを、理論的にも突き詰めたいという願いは、日本人全般にはー老年者群を除いてーあまり見られない。

Ｔａｂｌｅ　７・４・１「人生の意味と充足感」

数字は％

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
18	一人ひとりの人生にはみな意味がある	一般高校生	87.0	10.6	1.4
		ｷﾘｽﾄ教高校生	92.8	5.6	0.8
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	85.7	14.3	0.0
		一般大学生	87.0	10.1	1.4
		ｷﾘｽﾄ教大学生	97.4	0.9	0.9
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	90.7	7.0	0.0
		壮年者	87.5	9.2	2.5
		老年者	83.3	5.7	0.6
56	人生そのものには意味はない	一般高校生	2.4	21.3	74.4
		ｷﾘｽﾄ教高校生	1.6	8.0	89.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	8.2	18.4	73.5
		一般大学生	1.4	17.4	76.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	0.0	6.1	90.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	0.0	4.7	93.0
		壮年者	6.7	11.7	81.7
		老年者	10.3	13.8	61.5
2	私の毎日の生活は充実している	一般高校生	36.7	44.9	18.4
		ｷﾘｽﾄ教高校生	28.8	43.2	28.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	44.9	49.0	6.1
		一般大学生	40.6	40.6	17.4
		ｷﾘｽﾄ教大学生	60.9	30.4	8.7
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	41.9	48.8	7.0
		壮年者	53.3	38.3	7.5
		老年者	67.2	23.6	6.3
25	生きていても意味がないとよく思う	一般高校生	21.3	33.3	44.9
		ｷﾘｽﾄ教高校生	28.8	28.0	41.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	20.4	30.6	46.9
		一般大学生	23.2	27.5	47.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	7.0	20.0	73.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	11.6	30.2	55.8
		壮年者	10.0	22.5	66.7
		老年者	19.5	10.9	58.6

No.	項目内容	グループ名	はい	どちらとも	いいえ
11	今生きることに意味はあるが、人生そのものには目的はない	一般高校生	31.4	46.4	22.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	32.0	30.4	37.6
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	28.6	24.5	44.9
		一般大学生	29.0	44.9	24.6
		ｷﾘｽﾄ教大学生	22.6	40.0	37.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	4.7	39.5	53.5
		壮年者	39.2	26.7	32.5
		老年者	36.8	33.3	25.3
59	人生に意味がないなら、今を精一杯生きることにも、意味がなくなる	一般高校生	7.7	23.7	66.2
		ｷﾘｽﾄ教高校生	5.6	6.4	88.0
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	4.1	26.5	67.3
		一般大学生	11.6	8.7	76.8
		ｷﾘｽﾄ教大学生	14.8	4.3	77.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	14.0	14.0	67.4
		壮年者	6.7	14.2	79.2
		老年者	10.9	16.1	57.5
17	生きる目的、信じるということなどを、理論的に突き詰めたい	一般高校生	15.5	48.8	34.8
		ｷﾘｽﾄ教高校生	29.6	27.2	43.2
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校生	44.9	28.6	24.5
		一般大学生	17.4	40.6	40.6
		ｷﾘｽﾄ教大学生	30.4	39.1	30.4
		ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学生	55.8	27.9	14.0
		壮年者	23.3	34.2	40.8
		老年者	51.1	23.0	11.5

Ｔａｂｌｅ　７・４・２「人生の意味と充足感の相関」

数字は相関係数

		生活は充実している	生きていても意味ないとよく思う	項目１８「人生には意味がある」と相関が高い項目番号（省項目56、59 ）
一般高校	人生には意味がある	０．０９	－０．０８	＋　３１　４７　１４
	人生には意味がない	－０．１４	０．３６	（相関係数0.28～0.32）
ｷﾘｽﾄ教高校	人生には意味がある	０．０８	－０．０３	＋　１４　３０　４７　５７
	人生には意味がない	０．００	０．０７	（相関係数0.21～0.25）
ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校	人生には意味がある	０．１０	－０．５３	＋ 53　57　4　38　60
	人生には意味がない	－０．０６	０．４８	－ 25　5　22　23　32
				（相関係数0.31～0.61）
一般大学	人生には意味がある	０．１０	－０．２５	＋　１　６０　６　（相関係数
	人生には意味がない	－０．２３	０．３７	－　２３　２５　３５　0.21～0.26）
ｷﾘｽﾄ教大学	人生には意味がある	０．１７	－０．０７	＋　１　３１　４７　５４
	人生には意味がない	－０．３２	０．２２	－　２３　（相関係数0.26～0.50）
ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学	人生には意味がある	０．１８	０．１０	＋　1　10　14　27　52　46　57
	人生には意味がない	０．０５	－０．０２	－　11　19　41（相関係数0.21-0.30）
壮年	人生には意味がある	０．０６	－０．１８	＋　45　53　57　17　47　42
	人生には意味がない	－０．０４	０．２７	－　32　36　（相関係数0.20～0.29）
老年	人生には意味がある	－０．１３	－０．０５	＋　30　47　29　34　7　17　31
	人生には意味がない	－０．０２	０．１９	－　51　（相関係数0.21～0.37）

Ｔａｂｌｅ　７・４・３「価値観項目の内容の要約」

項目番号	項目の内容の要約
１	人生で大切なのは愛すること
２	私の毎日の生活は充実している
３	他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い
４	最も罪意識をもつのは親しい人を裏切ったような時
５	試験で１番の者より２番の恩人の子を採用する
６	人の思わくを気にせず、思うとおりすることが多い
７	行動する前に人がどう思うか考えてみたほうがよい
８	人生で大切なのは経済力
９	親切には人一倍の心づかいをもって恩を返すべき
１０	はっきりした態度をとらない人の話には腹が立つ
１１	今生きることに意味はあるが、人生そのものには目的はない
１２	悪い行ないがばれると恥をかくのでしないほうがよい
１３	注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい
１４	嘘などつくと罰があたりそうで怖い
１５	無理な仕事もさせるが、仕事以外でも世話を見るような課長がよい
１６	たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない
１７	生きる目的、信じるということなどを理論的に突き詰めたい
１８	一人ひとりの人生には皆意味がある
１９	人生で大切なのは健康
２０	おおかたの人がどのように考えるかで事を決めるのがよい
２１	先生に聞かれても親友の悪い行ないを言わないのが思いやり
２２	自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない
２３	人生で大切なのは権力
２４	自分の態度を決める前に他人が考えている事を知ろうとする
２５	生きていても意味がないとよく思う
２６	人生で大切なのは美の追求
２７	自分は罪深いものだと思っている
２８	自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる
２９	あいまいな言葉をやめたら私たちの考えはもっとよくなる
３０	嘘をついたり不正をすると自分が恥ずかしくなる
３１	人生で大切なのは思いやり
３２	たいていの人はわざわざ人を助ける事など好んでいない
３３	見知らぬ土地ではふだんしない事までしてしまいがち
３４	率直であることは常によいこと
３５	無理な仕事はさせないが仕事以外では世話もしない課長を好む
３６	親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの
３７	自分にあった仕事が見つかっても世話になってついた仕事はやめられない
３８	善い事悪い事は状況によるのに基準があると思う人はぎごちなくて好きではない
３９	近い人の幸せには気を使うがその他にはあまり関心がない
４０	親しい者を裏切る行為は恥ずべき行為
４１	人生の中には本当の事ばかりは言っていられない事が多い
４２	人間は神によって救われなければならないもの
４３	神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落とされる
４４	性格のしっかりした人は感情をおもてに表わさない
４５	人生で大切なのは神を信じて生きること
４６	行動する時まわりに合わせるより自分で判断してするのがよい
４７	人生で大切なのはまごころ
４８	私はまわりの人の気持ちや考えに最も神経を使っている
４９	人や動物をいじめるとたたりがあるようで怖い
５０	後悔する時の多くは恥をかいた時
５１	この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない
５２	人生で大切なのは真理の追求
５３	神の望みを念頭において判断し、行動するのがよい
５４	人生で大切なのは自分が確立すること
５５	物事の筋を通すよりまるくおさめるのに心をつかう人のほうが好き
５６	人生そのものには意味はない
５７	悪い行ないは神を悲しませるようでつらい
５８	人生で大切なのは、人様に迷惑をかけないこと
５９	人生に意味がないなら今を精一杯生きる事にも意味がなくなる
６０	私は道徳や善悪の問題をまじめに考える

第５節　倫理的価値意識の因子構造

倫理的価値意識の因子構造をとらえるべく、因子分析を実施した。以下に述べるのがその結果である。因子分析ではバリマックス回転を行ない、固有値の変動状況を考慮に入れて、各グループの因子を抽出した。

ａ）一般高校生群

一般高校生群の因子分析では６因子が抽出され、その累積寄与率は２９．５％であった。因子負荷量はＴａｂｌｅ　７・５・１ａ「倫理的価値意識－因子負荷量－」に示し、その絶対値が　．３０以上の項目を枠で囲んである。

第１因子－－『意味のある人生／意味のない人生』

この因子には、一方に「一人ひとりの人生にはみな意味がある」「私の毎日は充実している」という意味のある人生を肯定する項目群と、他方に「人生そのものには意味はない」「生きていても意味がないとよく思う」「人生に意味がないなら今を一生懸命生きることにも意味がなくなる」という意味のある人生を否定する項目群とがある。さらに、前者には人生で大切なのはまごころ、思いやり、愛、健康、誠実等を表現する内容の項目が集まっており、後者には、思いやりや心遣いのない態度が表現されている項目がある。

この因子名をもう少し詳しくするならば『思いやり、まごころある意味ある人生／思いやり、まごころが欠けている意味のない人生』ということになろう。

第２因子－－『まわりを気づかった判断・行動』

この因子は「注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい」「自分にあった仕事が見つかっても、世話になってついた仕事はやめにくい」「自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとする」「自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる」「他人の意見で簡単に気が変わってし

まうことが多い」「物事の筋を通すよりまるくおさめるのに心を使う人のほうが好き」等の内容で構成されている。

第３因子――『神を主軸とした生き方』

この因子は項目数が６項目で多くはないが、神を生活の主軸としたような内容で構成されている。すなわち、「人生で大切なのは神を信じて生きること」「神の望みを念頭において判断し、行動するのがよい」「悪い行ないは神を悲しませるようでつらい」「人間は神によって救われなければならないもの」等である。

第４因子――『自分の考えによる判断・行動』

この因子は、自分の正しいと思うところにそって判断し行動するという内容の「人生で大切なのは自分が確立すること」「人生で大切なのは人様に迷惑をかけないこと」「行動するときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい」「人の思惑を気にせず思う通りすることが多い」「人生で大切なのは真理の追求」等の項目で構成されている。

第５因子――『打算的で要領のよい生き方』

この因子には「人生で大切なのは経済力」「人生で大切なのは権力」「先生に聞かれても親友の悪い行ないを言わないのが思いやり」「悪い行いがばれると恥をかくのでしないほうがよい」等の、ある意味で打算的な要領のよい生き方が表現されている。

第６因子――『状況によって変わる善と悪』

「たいていの人はわざわざ人を助けることなど望んでいない」「この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない」「人生のなかでは本当のことばかりは言っていられないことが多い」「善いこと悪いことは状況によるのに基準があると思う人はぎごちなくて好きではない」「見知らぬ土地ではふだんしないことまでして

しまいがち」等、状況の変化にともなって変わる振る舞い方がこの因子の基調をなしている。

Table 7・5・1a「倫理的価値意識－因子負荷量－」
<一般高校生群>

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
56. 人生そのものには意味はない	-.58	-.14	.07	.20	-.05	-.13
47. 人生で大切なのはまごころ	.55	-.18	-.19	.22	.14	.05
31. 人生で大切なのは思いやり	.51	-.00	-.22	.10	-.10	-.04
25. 生きていても意味がないとよく思う	-.46	-.15	-.15	-.02	.22	-.32
48. 私はまわりの人の気持ちや考えに最も神経を使っている	.46	.11	-.14	-.05	-.08	-.22
18. 一人ひとりの人生には皆意味がある	.45	-.06	-.06	-.11	.21	-.01
35. 無理な仕事はさせないが仕事以外では世話もしない課長を好む	-.41	.17	-.19	-.10	-.11	-.26
59. 人生に意味がないなら今を精一杯生きることにも意味がなくなる	-.39	.06	.08	.03	-.20	.02
14. 嘘などつくと罰があたりそうで怖い	.38	-.05	-.29	.24	.27	-.13
15. 無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話を見るような課長がよい	.38	-.01	-.01	-.29	.06	.01
2. 私の毎日の生活は充実している	.37	.26	-.02	-.01	-.19	.01
9. 親切には人一倍の心づかいをもって恩を返すべき	.34	-.12	.04	.21	-.17	.00
19. 人生で大切なのは健康	.34	-.06	.10	.19	-.11	-.03
7. 行動するまえに人がどう思うか考えてみたほうがよい	.34	-.14	-.04	.04	-.13	-.22
1. 人生で大切なのは愛すること	.32	.03	-.19	.04	-.14	-.04
30. 嘘をついたり不正なことをすると恥ずかしくなる	.31	-.11	-.19	.16	.19	-.12
40. 親しいものを裏切る行為は恥ずべき行為	.30	.06	-.12	.26	.07	-.15
13. 注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい	-.07	-.62	-.07	-.00	-.04	-.14
37. 自分にあった仕事がきても世話になってついた仕事はやめにくい	.05	-.50	-.14	-.00	.09	.23
24. 自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとする	.17	-.45	-.18	-.19	.05	-.31
28. 自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる	.04	-.43	-.23	-.20	-.24	.00
3. 他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い	-.04	-.41	-.16	-.02	.05	.01
5. 試験で１番の者より２番の恩人の子を採用する	.06	-.38	-.10	.19	-.01	.19
55. 物事の筋を通すよりまるく納めるのに心を使う人のほうが好き	.12	-.38	-.06	-.03	-.18	-.13
60. 私は道徳や善悪の問題をまじめに考える	.36	.37	-.21	.06	.09	.00
16. たいての人は捕まる怖さから悪いことをしない	-.01	-.34	.16	-.00	-.08	-.30
57. 悪い行ないは神を悲しませるようでつらい	.10	.06	-.71	.00	.07	-.12
45. 人生で大切なのは神を信じて生きること	.07	-.15	-.67	.13	-.09	.18
53. 神の望みを念頭において判断し、行動するのがよい	-.03	-.02	-.62	-.04	-.04	.02
43. 神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落とされる	.14	-.10	-.54	-.10	.03	-.12
42. 人間は神によって救われなければならないもの	.04	-.31	-.50	.13	.00	.09
27. 自分は罪深いものだと思っている	-.18	-.00	-.37	.06	.35	-.08
26. 人生で大切なのは美の追求	-.09	.16	-.15	.55	-.15	.15
52. 人生で大切なのは真理の追求	.11	-.08	-.21	.48	.18	.27
10. はっきりした態度をとらない人の話には腹が立つ	.04	.05	.23	.48	-.04	-.16
58. 人生で大切なのは、人様に迷惑をかけないこと	.32	-.01	-.25	.45	-.17	-.01
54. 人生で大切なのは自分が確立すること	.15	-.01	.04	.43	-.09	-.08
23. 人生で大切なのは権力	-.14	-.01	-.10	.41	-.39	-.01
34. 率直であることは常によいこと	.07	.06	.02	.36	.06	-.19
46. 行動するときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい	.04	-.01	.22	.33	.15	-.10
6. 人の思わくを気にせず、思うとおりすることが多い	-.14	.19	.14	.32	.30	.04
8. 人生で大切なのは経済力	-.01	-.05	.07	.17	-.60	-.06
21. 先生に聞かれても親友の悪い行ないを言わないのが思いやり	-.12	-.02	-.06	-.03	-.54	-.17
12. 悪い行ないがばれると恥をかくのでしないほうがよい	.20	-.20	-.16	.02	-.38	.06
32. たいていの人はわざわざ人を助けることなど好んでいない	-.13	.08	.03	-.17	-.18	-.55
50. 後悔するときの多くは恥をかいたとき	-.01	-.15	-.21	.16	-.07	-.47
51. この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない	-.07	-.03	.11	-.05	-.17	-.45
41. 人生のなかには本当のことばかりは言っていられないことが多い	-.05	-.07	.10	.02	.08	-.43
29. あいまいな言葉をやめたら私達の考えはもっとよくなる	.34	-.17	.06	.17	.08	-.42
38. 善悪は状況によるのに基準があると思う人はぎごちない	.13	-.21	.20	.10	.25	-.33
33. 見知らぬ土地ではふだんしないことまでしてしまいがち	-.30	.10	-.11	.10	-.01	-.30
4. 最も罪意識をもつのは親しい人を裏切ったようなとき	.29	-.11	.08	.03	-.01	-.11
11. 今生きることに意味はあるが、人生そのものには目的はない	.11	.04	-.03	-.18	-.26	-.05
17. 生きる目的、信じるということなどを理論的に突き詰めたい	.03	.25	-.21	.03	.02	-.01
20. 大かたの人がどのように考えるかでことを決めるのがよい	.02	-.29	-.15	.13	-.21	-.19
22. 自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない	-.21	-.24	.24	.17	-.26	-.11
36. 親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの	.10	-.08	-.16	-.10	-.06	-.27
39. 近い人のしあわせには気を使うがその他にはあまり関心がない	-.24	-.22	.08	.00	-.15	-.13
44. 性格のしっかりした人は感情をおもてに表わさない	-.04	-.07	-.04	.11	-.16	-.16
49. 人や動物をいじめるとたたりがあるようで怖い	.26	-.11	-.25	.24	.25	-.24

b）キリスト教高校生群

キリスト教高校生群では因子分析の結果６因子が抽出された。その累積寄与率は３２．３％である。因子負荷量はＴａｂｌｅ　７・５・１ｂ「倫理的価値意識－因子負荷量－」に示したとおりであるが、その絶対値が．３０以上の項目を取り上げて解釈を試み、因子に命名した。

第１因子－－『善悪に対する真摯な態度／なげやりな態度』

この因子は一方に、「自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない」「たいていの人はわざわざ人を助けることなど好んでいない」「たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない」「近い人のしあわせには気を使うがその他にはあまり関心がない」といった善悪に対してのなげやりな態度が見られる項目群があり、もう一方に「私は道徳や善悪の問題をまじめに考える」「生きる目的、信じるということなどを理論的に突き詰めて考えたい」という善悪に対する真摯な態度の項目群がある。

第２因子－－『人の思惑を気にした振る舞い／気にしない振る舞い』

この因子は７項目から構成されているが、そのうちの１項目だけが、人の思惑を気にせず思う通り振る舞う内容で、他の６項目は「自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとする」「他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い」「自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる」「私はまわりの人の気持ちや考えに最も神経を使っている」等、人の思惑を気にした内容である。

第３因子－－『神の望みを基準とした善悪／状況を基準とした善悪』

この因子は善悪の基準を神の望みに置くのか、その時々の状況に置くのかを問題にしているものである。

すなわち前者には、「悪い行ないは神を悲しませるようでつらい」「神の望みを念頭において判断し、行動するのがよい」「人生で大切なのは神を信じて生きること」「嘘などつくと罰があたりそうで怖い」等の内容が集まり、後者には「この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない」「善いこと悪いことは状況によるのに基準があると思う人はぎごちなくて好きではない」といった内容が集まっている。

第４因子－－『富や力で固めた充実感』

この因子には”人生で大切なのは、経済力、権力、健康、美”など、この世で安楽に生きていけそうなものばかりが集まり、それに「私の毎日の生活は充実している」という項目が並ぶ。

第５因子－－『処理的姿勢／人情的姿勢』

一応上記のように命名したが、この因子に含まれている項目数は少なく、それらの背後にある共通の意識もつかみにくく、果たして一個の独立した因子として扱えるかどうか疑問である。処理的姿勢には「無理な仕事はさせないが仕事以外では世話もしない課長を好む」等の項目が含まれ、人情的姿勢には「無理な仕事もさせるが、仕事以外でも世話を見るような課長がよい」等の項目がある。

第６因子－－『意味のある人生／意味のない人生』

後者は、「人生そのものには意味はない」の一項目のみであるのに対して、前者の意味ある人生にはこの因子の他のすべての項目が含まれている。すなわち、「一人ひとりの人生にはみな意味がある」をはじめ、意味のある人生の内容とも思われる「人生で大切なのは思いやり」「人生で大切なのはまごころ」「親切には人一倍の心遣いをもって恩をかえすべき」「行動するときまわりに合わせるより自分で判断するのがよい」等である。

Table 7・5・1b「倫理的価値意識－因子負荷量－」
<キリスト教高校生群>

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
22. 自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない	-.68	-.08	-.01	.15	-.05	-.04
60. 私は道徳や善悪の問題をまじめに考える	.66	.00	-.11	.08	-.18	.19
32. たいていの人はわざわざ人を助けることなど好んでいない	-.54	.05	.02	.16	.16	.01
39. 近い人のしあわせには気を使うがその他にはあまり関心がない	-.46	-.05	.26	.15	-.06	.15
25. 生きていても意味がないとよく思う	-.46	.21	.11	-.09	-.28	.22
54. 人生で大切なのは自分が確立すること	.41	-.04	-.02	.30	-.25	.15
17. 生きる目的、信じるということなど理論的に突き詰めたい	.36	.17	-.06	.30	-.20	-.01
16. たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない	-.35	.20	.10	.27	.07	.12
58. 人生で大切なのは、人様に迷惑をかけないこと	.34	.20	.00	.12	.27	.00
24. 自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとする	.04	.67	.04	.20	-.03	-.00
20. おおかたの人がどのように考えるかでことを決めるのがよい	-.07	.59	-.10	.06	.08	.11
3. 他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い	-.30	.55	-.18	.06	-.14	.04
28. 自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる	.14	.51	.13	-.19	-.08	-.02
7. 行動する前に人がどう思うかで考えてみたほうがよい	-.05	.51	-.09	.12	.00	-.13
6. 人の思わくを気にせず、思う通りすることが多い	-.21	-.51	-.08	.29	.02	-.08
48. 私はまわりの人の気持や考えに最も神経を使っている	.21	.51	-.03	.01	.19	.02
57. 悪い行ないは神を悲しませるようでつらい	-.04	.03	-.72	-.02	.02	.21
53. 神の望みを念頭において判断し、行動するのがよい	.03	.10	-.72	-.13	-.03	-.07
42. 人間は神によって救われなければならないもの	.10	-.01	-.71	-.03	.00	.07
45. 人生で大切なのは神を信じて生きること	.12	-.12	-.69	.07	-.02	.09
14. 嘘などつくと罰が当たりそうで怖い	.00	.22	-.39	.12	.19	.23
49. 人や動物をいじめるとたたりがあるようで怖い	-.00	.22	-.39	.29	.15	.11
51. この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない	-.21	.13	.36	.11	.12	.07
38. 善悪は状況によるのに基準があると思う人はぎごちない	.18	-.12	.35	.07	-.02	.32
8. 人生で大切なのは経済力	-.08	.14	.10	.64	.10	.05
26. 人生で大切なのは美の追求	.05	-.03	.02	.60	-.11	.01
23. 人生で大切なのは権力	-.06	.11	.16	.56	-.09	-.24
19. 人生で大切なのは健康	-.26	.03	-.03	.51	.06	.18
2. 私の毎日の生活は充実している	.18	-.27	-.22	.41	.40	-.09
41. 人生のなかには本当のことばかりは言っていられないことが多い	.03	.03	.29	-.30	.08	.19
43. 神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落とされる	.09	.13	-.03	.30	.18	.10
35. 無理な仕事はさせないが仕事以外では世話もしない課長を好む	-.15	.00	.01	.13	.62	-.01
33. 見知らぬ土地ではふだんしないことまでしてしまいがち	.06	-.03	.10	.35	-.47	-.13
55. 物事の筋を通す人よりまるく納めるのに心を使う人のほうが好き	.00	.17	-.00	-.16	.45	-.07
52. 人生で大切なのは真理の追求	.33	-.01	-.10	.09	-.42	-.10
15. 無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話をみるような課長がよい	.33	.17	-.20	-.10	-.36	.07
27. 自分は罪深いものだと思っている	-.08	.28	-.12	-.04	-.36	.33
30. 嘘をついたり不正をすると自分が恥ずかしくなる	-.01	-.06	-.14	-.00	-.08	.58
31. 人生で大切なのはおもいやり	-.15	-.09	-.10	-.07	.14	.53
47. 人生で大切なのはまごころ	.23	.08	-.01	.02	-.12	.51
40. 親しいものを裏切る行為は恥ずべき行為	.12	.26	-.05	.03	.11	.48
18. 一人ひとりの人生にはみな意味がある	.13	.07	-.23	.09	-.21	.45
4. 最も罪意識をもつのは親しい人を裏切ったようなとき	.13	.11	-.10	-.03	.30	.39
9. 親切には人一倍の心遣いをもって恩を返すべき	-.15	.09	-.18	-.16	.22	.39
56. 人生そのものには意味はない	-.22	-.12	.27	-.09	.26	-.33
46. 行動するときまわりに合わせるより自分で判断するのがよい	.15	-.29	-.16	.03	-.21	.30
1. 人生で大切なのは愛すること	.28	-.13	-.09	.01	.13	.18
5. 試験で１番のものより２番の恩人の子を採用する	-.16	.08	-.10	.09	.11	.04
10. はっきりした態度をとらない人の話には腹が立つ	-.01	-.19	.22	.24	-.11	.08
11. 今生きることに意味はあるが、人生そのものには目的はない	-.28	-.17	-.01	.02	.18	.12
12. 悪い行ないがばれると恥をかくのでしないほうがよい	-.22	.25	-.27	-.05	.26	-.05
13. 注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい	-.27	.28	-.03	-.02	-.26	.16
21. 先生に聞かれても親友の悪い行ないを言わないのが思いやり	-.10	-.10	.17	.16	.07	.21
29. あいまいな言葉をやめたら私達の考えはもっとよくなる	-.09	-.02	-.09	-.05	-.09	.29
34. 率直であることは常によいこと	-.05	-.12	.06	.29	-.05	.08
36. 親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの	-.00	-.00	-.09	.25	.19	.18
37. 自分にあった仕事がきても世話になってついた仕事はやめにくい	.04	.29	-.09	-.09	.14	.19
44. 性格のしっかりした人は感情をおもてに表わさない	.14	.13	-.18	.18	-.22	-.05
50. 後悔するときの多くは恥をかいたとき	.03	.27	-.06	.27	.09	-.17
59. 人生に意味がないなら今を精一杯生きることにも意味がなくなる	-.05	.15	.13	-.00	.08	-.12

c）ヨーロッパ高校生群

ヨーロッパ高校生群では因子分析の結果５因子が抽出された。その累積寄与率は４３．２％である。因子負荷量はＴａｂｌｅ　７・５・１ｃ「倫理的価値意識－因子負荷量」に示し、その絶対値が、．３５以上のものを枠で囲んで解釈をすすめ、因子に命名した。

第１因子－－『意味のある人生／意味のない人生』

「一人ひとりの人生にはみな意味がある」という意味ある人生のグループには、「神の望みを念頭に置いて判断し行動するのがよい」「人生で大切なのは神を信じて生きること」「悪い行ないは神を悲しませるようでつらい」等、神を主軸においた生き方が表現されている。もう一方の意味のない人生には、「生きていても意味がないとよく思う」「人生に意味がないなら今を精一杯生きることにも意味がなくなる」「人生そのものには意味はない」と並んで、「たいていの人はわざわざ人を助けることなど望んでいない」「親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの」等の多少なげやり的な善悪に対する考えが方が見られる。

すでに見た一般高校生群・キリスト教高校生群、そして後で見るキリスト教大学生群の日本における３群にも、このヨーロッパ高校生群と同じ『意味のある人生／ない人生』の因子があるが、その意味のある人生を表現する項目と並ぶ項目の内容が、ヨーロッパの高校生群の場合”神を主軸においた生き方”であるのに対して、日本の３群の場合は”まごころや思いやり”等である。

第２因子－－『まわりに合わせた判断・行動／自分の考えによる判断・行動』

この因子は一方に、「他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い」「自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる」「自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとする」「おおかたの人がどのように考えているかでことを決めるのがよい」という、判断・行動の基準をまわりにおく項

目群と、もう一方に「行動するときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい」という項目とを含んでいる。

第３因子－－『あたたかく誠実な生き方／利己的打算的な生き方』

人生で大切なのは思いやり、まごころ、まこと、といった暖かい誠実な生き方を表現する項目群と、人生で大切なのは経済力、権力等であり、「自分の楽しみを犠牲にしてまで人を助ける気はない」「人生のなかには本当のことばかりは言っていられないことが多い」「近い人のしあわせには気を使うがそのほかにはあまり関心がない」「見知らぬ土地ではふだんしなことまでしてしまいがち」といった利己的打算的な生き方を表わす項目群とで構成されている因子である。

第４因子－－『人とのかかわり・束縛』

この因子は、人とのかかわりのなかでも特に、恩・義理、人情、恥などからくる束縛に近い内容のものが多く含まれている。「自分にあった仕事が来ても世話になってついた仕事はやめにくい」「最も罪意識をもつのは親しい人を裏切ったようなとき」「後悔するときの多くは恥をかいたようなとき」「無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話をみる課長がよい」等が、この因子を構成している項目内容である。

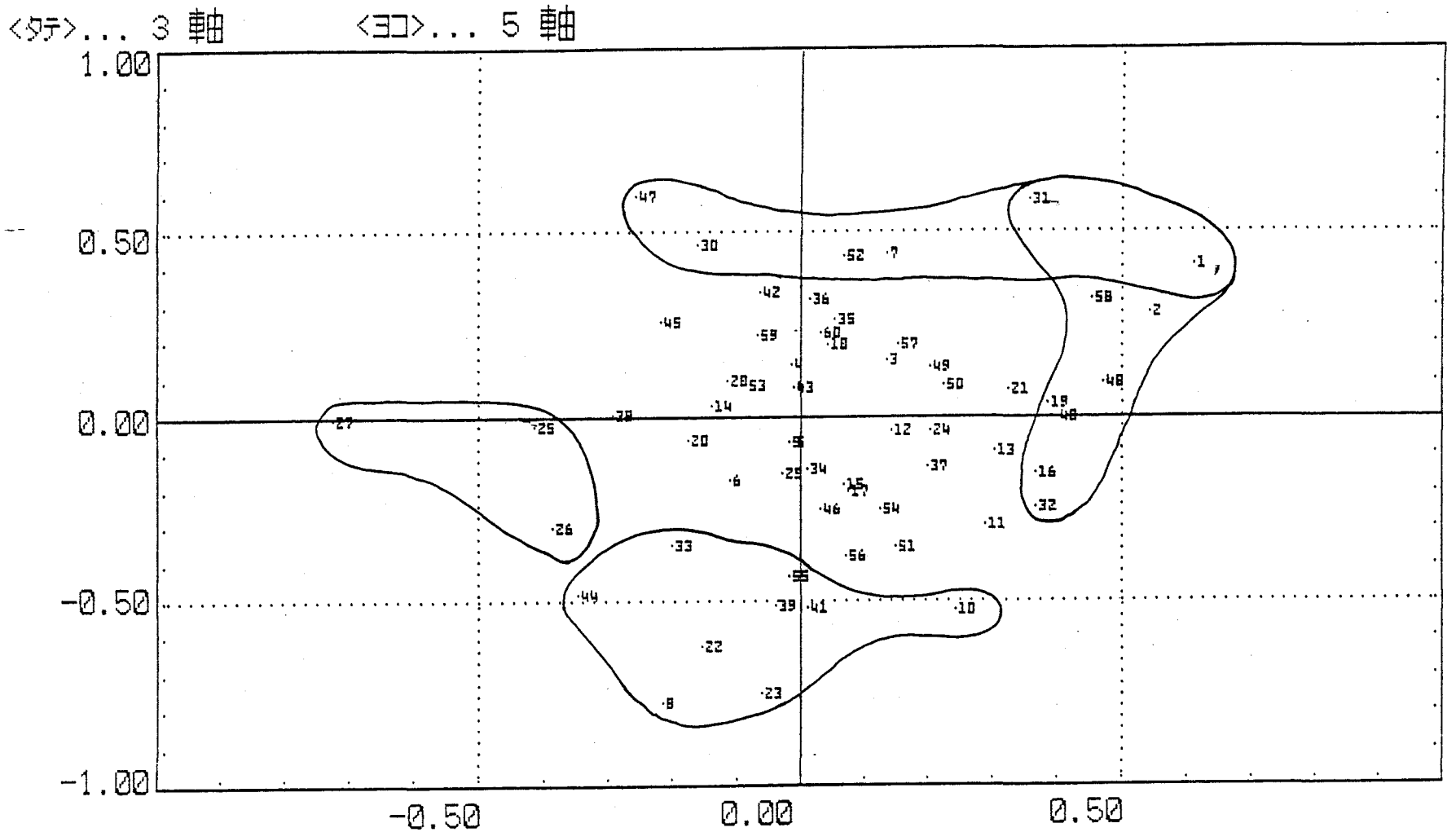
第５因子『健康で充実した生活／不健康でむなしい生活』

この因子にのみ属する項目は７項目あるものの、あとの５項目は他の因子と重複しているので、果たして独立した因子として扱ってよいのか迷うところである。内容としては一方に、「私の毎日の生活は充実している」「人生で大切なのは愛すること」「人生で大切なのは健康」その他、特に悪いこともしない無難な生活があり、他方に「生きていても意味がないとよく思う」「自分は罪深いものだと思っている」等がある。

Ｆｉｇ．７・５・１「第３因子と第５因子によるグラフ」は、第３因子と第５因子の２次元グラフである。縦軸のプラス方向は、暖かく誠実な生き方、マイナス方向は利己的打算的生き方である。横軸ではプラス方向が健康で充実した生活、マイナス方向が不健康でむなしい生活を示す傾向である。第３因子と第５因子の前者同志、後者同志がつながる形となって、互いに対置している。この５因子と３因子とはかなり深い関係があるといえよう。

Table 7・5・1c「倫理的価値意識－因子負荷量－」
<ヨーロッパ高校生群>

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
53. 神の望みを念頭において判断し、行動するのがよい	.78	-.04	.08	-.03	-.08
25. 生きていても意味がないとよく思う	-.73	-.07	-.02	.00	-.41
59. 人生に意味がないなら今を精一杯生きることにも意味がなくなる	-.71	-.01	.21	.16	-.06
18. 一人ひとりの人生には皆意味がある	.67	.19	.19	-.24	.04
56. 人生そのものには意味はない	-.66	.19	-.37	-.26	.07
57. 悪い行ないは神を悲しませるようでつらい	.61	-.08	.19	.07	.15
60. 私は道徳や善悪の問題をまじめに考える	.56	.02	.22	-.22	.03
5. 試験で１番のものより２番の恩人の子を採用する	-.56	-.36	-.07	-.14	-.00
45. 人生で大切なのは神を信じて生きること	.53	-.24	.25	.03	-.21
6. 人の思わくを気にせず、思うとおりすることが多い	-.53	-.14	-.17	-.42	-.11
32. たいていの人はわざわざ人を助けることなど好んでいない	-.47	-.23	-.24	-.07	.36
11. 今を生きることに意味はあるが、人生そのものには目的はない	-.47	.41	-.29	-.14	.29
36. 親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの	-.44	-.01	.31	.15	.01
12. 悪い行ないがばれると恥をかくのでしないほうがよい	-.06	-.82	-.03	-.02	.14
14. 嘘などつくと罰があたりそうで怖い	-.02	-.73	.02	-.03	-.13
29. あいまいな言葉をやめたら私達の考えはもっとよくなる	-.08	-.62	-.15	.25	-.02
3. 他人の意見でかんたんに意見が変わってしまうことが多い	-.26	-.58	.14	-.03	.13
28. 自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる	.21	-.46	.09	.03	-.11
24. 自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとする	.11	-.44	-.04	-.29	.20
42. 人間は神によって救われなければならないもの	.34	-.43	.33	-.23	-.06
13. 注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい	-.12	-.38	-.09	.13	.30
20. おおかたの人がどのように考えているかで事を決めるのがよい	.02	-.38	-.06	.15	-.17
46. 行動するときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい	-.08	.36	-.25	-.16	.03
58. 人生で大切なのは人様に迷惑をかけないこと	.17	-.35	.31	-.08	.45
8. 人生で大切なのは経済力	-.03	-.08	-.77	.06	-.21
23. 人生で大切なのは権力	-.30	.18	-.75	-.02	-.05
22. 自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない	-.37	-.16	-.62	.24	-.15
47. 人生で大切なのはまごころ	.15	-.29	.59	.18	-.25
31. 人生で大切なのは思いやり	.30	.11	.58	-.02	.35
10. はっきりした態度をとらない人の話には腹が立つ	.44	.30	-.53	-.16	.24
41. 人生のなかには本当のことばかりは言っていられないことが多い	.07	-.25	-.52	-.13	.01
39. 近い人のしあわせには気を使うがその他にはあまり関心がない	-.02	-.18	-.51	-.14	-.03
44. 性格のしっかりした人は感情をおもてに表わさない	.02	-.15	-.48	.43	-.34
30. 嘘をついたり不正をすると自分が恥ずかしくなる	.41	-.41	.46	.03	-.15
7. 行動するまえに人がどう思うか考えてみたほうがよい	.24	-.31	.43	-.11	.13
55. 物事の筋を通すよりまるく納めるのに心を使う人のほうが好き	.21	-.08	-.43	.07	-.01
52. 人生で大切なのは真理の追求	.41	-.07	.42	.21	.07
33. 見知らぬ土地ではふだんしない事までしてしまいがち	-.19	-.25	-.35	-.22	-.19
4. 最も罪意識をもつのは親しい人を裏切ったようなとき	.15	.07	.13	-.72	-.01
37. 自分にあった仕事が来ても世話になってついた仕事はやめにくい	.15	.00	-.13	.55	.20
26. 人生で大切なのは美の追求	.05	-.06	-.30	-.52	-.38
51. この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない	-.03	.00	-.35	-.50	.15
50. 後悔するときの多くは恥をかいたとき	.22	-.36	.08	-.50	.22
15. 無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話をみる課長がよい	-.09	-.10	-.18	-.49	.07
43. 神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落とされる	-.04	-.21	.07	.46	-.01
27. 自分は罪深いものだと思っている	-.12	-.17	-.01	-.21	-.72
1. 人生で大切なのは愛すること	-.02	-.17	.40	-.23	.61
2. 私の毎日の生活は充実している	.10	-.26	.27	-.06	.54
48. 私はまわりの人の気持や考えに最も神経を使っている	.18	-.03	.08	.35	.47
40. 親しいものを裏切る行為は恥ずべき行為	-.08	-.34	-.00	-.23	.40
19. 人生で大切なのは健康	.32	-.03	.03	-.01	.38
16. たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない	-.24	-.18	-.15	.08	.37
9. 親切には人一倍の心づかいをもって恩を返すべき	.18	-.22	-.07	.30	-.01
17. 生きる目的、信じるということなどを理論的にも突き詰めたい	-.19	-.32	-.20	-.08	.07
21. 先生に聞かれても親友の悪い行ないを言わないのが思いやり	-.14	.26	.06	-.16	.32
34. 率直であることは常によいこと	-.00	-.27	-.14	.31	.01
35. 無理な仕事はさせないが仕事以外では世話をしない課長を好む	.02	.19	.25	.04	.05
38. 善悪は状況によるのに基準があると思う人はぎごちない	.26	-.14	.00	-.34	-.28
49. 人や動物をいじめるとたたりがあるようで怖い	.15	-.30	.12	.06	.20
54. 人生で大切なのは自分が確立すること	.04	-.09	-.25	.26	.12



Ｆｉｇ．７・５・１「第３因子と第５因子によるグラフ」
－ヨーロッパ高校生群－

d）一般大学生群

一般大学生群の因子分析では６因子が抽出された。累積寄与率は３７．９％である。因子負荷量はＴａｂｌｅ　７・５・１ｄ「倫理的価値意識－因子負荷量」に示したとおりで、因子負荷量の絶対値が．３５以上のものを枠で囲み、解釈を進めた。

第１因子－－『むなしい生活／充実した生活』

「生きていても意味ないとよく思う」ということと自分の罪深さとが結び付いている内容である。まわりの人の目を気にして意見を変え、あるいは恥や、逮捕や、罰や、たたりを恐れて行動する姿を表現している。反対の方向には、「私の毎日の生活は充実している」という１項目がある。

第２因子－－『合理的姿勢／心情的姿勢』

一方は、この群の大学生が合理的であるととらえているであろうと思われる割り切った考え方、すなわち「無理な仕事をさせないが仕事以外でも世話をしない課長を好む」「人生そのものには意味はない」「生きる目的・信じるということなど理論的に突き詰めたい」という項目群があり、他方に「嘘などつくと罰があたりそうで怖い」「無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話を見るような課長がよい」「親しい者を裏切る行為は恥ずべき行為」等の項目群がある。

第３因子－－『善いこと・悪いこと』

人生で大切なのは思いやり、真理の追求、自己の確立、美の追求であり、善悪の問題をまじめに考え、生きる目的信じるということなど理論的に突き詰めたいと思っている項目群と、これに対する「善いこと悪いことは状況によるのに基準があるように思う人はぎごちなくて好きではない」の１項目がある。

第４因子－－『神とのかかわり』

この因子には、人間と神とのさまざまなかかわりを表現する項目が集まっている。すなわち、「人間は神によって救われなければならないもの」「神の望みを念頭において判断し、行動するのがよい」「人生で大切なのは神を信じて生きること」「人や動物をいじめるとたたりがあるようで怖い」「悪い行ないは神を悲しませるようでつらい」等である。

第５因子－－『まわりへの心遣い／我が道』

この因子には他の因子と重複する項目はないが、わずか６項目で構成されている。一方に「人生で大切なのは愛」「行動するまえに人がどう思うか考えてみたほうがよい」「自分にあった仕事が見つかっても世話になってついた仕事はやめにくい」という３項目、他方に「人の思惑を気にせず思う通りすることが多い」「はっきりした態度をとらない人の話には腹が立つ」「人生で大切なのは権力」という３項目がある。

第６因子『妥協的で無難な生き方／誠実な生き方』

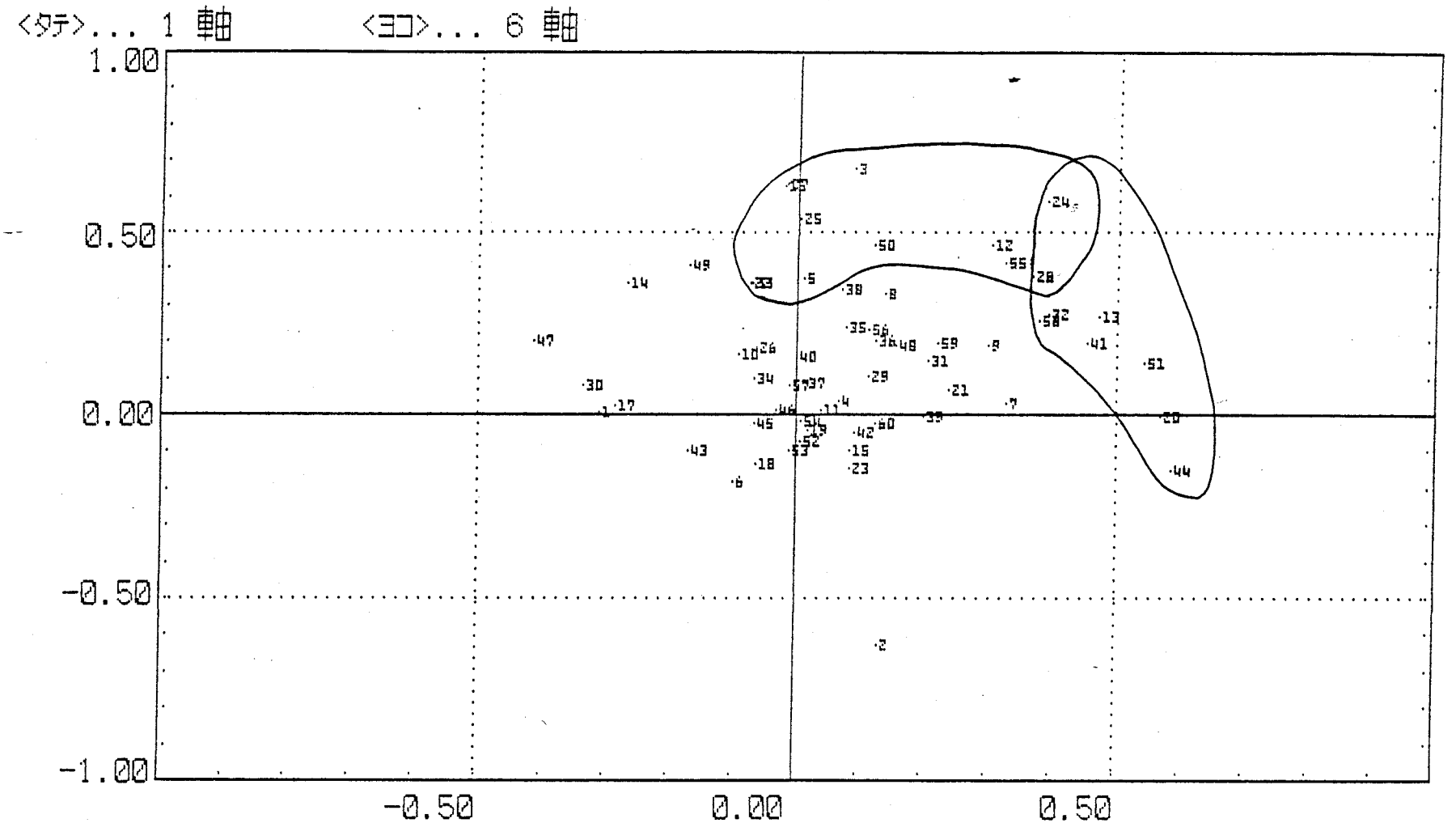
「人生で大切なのはまごころ」という項目に対して、もう一方に「注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい」「この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない」「人生のなかには本当のことばかりは言っていられないことが多い」「たいていの人はわざわざ人を助けることなど望んでいない」「おおかたの人がどのように考えているかでことを決めるのがよい」「人生で大切なのは人様に迷惑をかけないこと」等の妥協的で無難な生き方を表わす９項目がある。

Ｆｉｇ．７・５・２「第１因子と第６因子によるグラフ」は、第１因子と第６因子の２次元グラフである。縦軸のプラス方向はむなしい生活の方向を示し、マイナス方向は充実した生活の傾向である。また横軸のプラス方向は妥協的で無難な生き

方、マイナス方向が誠実な生き方である。第１因子のむなしい生き方と、第６因子の妥協的で無難な生き方は互いに共有する部分を持ちながら、一つの大きな固まりをなしているのが分かる。

Table 7・5・1d「倫理的価値意識－因子負荷量－」
<一般大学生群>

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
3. 他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い	.67	.03	-.05	-.02	.25	.09
2. 私の毎日の生活は充実している	-.63	-.01	.14	.20	.14	.13
27. 自分は罪深いものだと思っている	.63	.19	.20	.07	.02	-.01
16. たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない	.62	-.11	-.07	.17	-.22	-.02
24. 自分の態度を決める前に他人が考えていることを知ろうとする	.57	-.03	-.02	-.01	.17	.39
25. 生きていても意味がないとよく思う	.53	.25	.21	-.35	.11	.00
50. 後悔するときの多くは恥をかいたとき	.46	-.20	.28	.10	-.06	.12
12. 悪い行いがばれると恥をかくのでしないほうがよい	.45	-.16	.08	-.06	.18	.30
55. 物事の筋を通すよりまるくおさめるのに心を使う人のほうが好き	.40	.03	.00	.25	.24	.32
28. 自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる	.37	.10	.16	-.03	.08	.36
5. 試験で１番の者より２番の恩人の子を採用する	.36	.12	-.04	.34	.22	.01
33. 見知らぬ土地ではふだんしないことまでしてしまいがち	.35	.33	.10	.08	-.13	-.07
35. 無理な仕事をさせないが仕事以外では世話もしない課長を好む	.23	.54	-.10	-.02	-.20	.08
40. 親しい者を裏切る行為は恥ずべき行為	.15	-.54	.15	-.03	.13	.00
56. 人生そのものには意味がない	.22	.51	-.03	-.27	-.15	.11
17. 生きる目的信じるということなど理論的に突き詰めたい	.01	.50	.45	.16	-.10	-.28
15. 無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話を見るような課長がよい	-.09	-.46	-.08	.25	.03	.08
30. 嘘をついたり不正をすると自分が恥ずかしくなる	.07	-.43	.09	.13	.01	-.33
19. 人生で大切なのは健康	-.04	-.43	-.12	-.00	.11	.01
14. 嘘などつくと罰が当たりそうで怖い	.35	-.42	-.10	.39	.01	-.26
22. 自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない	.35	-.38	-.03	-.20	-.26	-.07
52. 人生で大切なのは真理の追求	-.07	.01	.81	.01	.12	.00
26. 人生で大切なのは美の追求	.18	.07	.64	.03	-.17	-.06
54. 人生で大切なのは自分が確立すること	-.01	.00	.51	-.37	-.04	.00
31. 人生で大切なのは思いやり	.14	-.16	.50	.08	.33	.20
38. 善悪は状況によるのに基準があると思う人はぎごちない	.33	-.21	-.35	.01	-.33	.07
42. 人間は神によって救われなければならないもの	-.04	-.03	-.08	.74	.08	.09
53. 神の望みを念頭において判断し、行動するのがよい	-.10	.01	-.00	.72	.10	-.00
45. 人生で大切なのは神を信じて生きること	-.03	-.01	.20	.69	.08	-.06
49. 人や動物をいじめるとたたりがあるようで怖い	.40	-.09	.00	.51	-.25	-.17
57. 悪い行いは神を悲しませるようでつらい	.07	-.22	.45	.49	-.03	-.00
60. 私は道徳や善悪の問題をまじめに考える	-.02	-.15	.44	.46	-.10	.12
48. 私はまわりの人の気持ちや考えにもっとも神経を使っている	.18	.20	.12	.43	.08	.15
23. 人生で大切なのは権力	-.15	.15	-.05	-.08	-.70	.08
1. 人生で大切なのは愛すること	.00	-.18	.00	.01	.55	-.30
10. はっきりした態度をとらない人の話には腹がたつ	.16	.18	-.02	.02	-.51	-.09
37. 自分にあった仕事がきても世話になってついた仕事はやめにくい	.07	.31	-.03	.15	.41	.01
7. 行動する前に人がどう思うか考えてみたほうがよい	.03	.00	-.16	.18	.39	.33
6. 人の思惑を気にせず思うとおりすることが多い	-.18	.27	-.22	.01	-.38	-.09
44. 性格のしっかりした人は感情を表に表さない	-.15	.11	.12	.06	-.15	.58
20. おおかたの人がどのように考えるかでことを決めるのがよい	-.00	.07	.04	.32	.04	.57
51. この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない	.13	.04	-.19	-.14	-.20	.54
13. 注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい	.26	-.23	.08	.00	.09	.47
41. 人生の中には本当のことばかりは言っていられないことが多い	.19	-.15	-.15	-.16	-.12	.45
47. 人生で大切なのはまごころ	.19	-.37	.26	.17	-.01	-.41
32. たいていの人はわざわざ人を助けることなど望んでいない	.26	.33	.04	-.22	-.15	.39
58. 人生で大切なのは人様に迷惑をかけないこと	.25	-.25	.16	.27	-.05	.38
4. 最も罪意識をもつのは親しい人を裏切ったようなとき	.03	-.12	.23	.00	.21	.07
8. 人生で大切なのは経済力	.32	-.17	-.03	-.27	-.32	.14
9. 親切には人一倍の心づかいをもって恩を返すべき	.18	-.12	.19	.13	.15	.30
11. 今生きることには意味があるが人生そのものには意味はない	.00	.15	-.33	-.09	-.02	.04
18. 一人一人の人生には皆意味がある	-.13	-.07	-.02	.25	.20	-.06
21. 先生に聞かれても親友の悪い行いを言わないのが思いやり	.06	-.09	-.11	.33	-.21	.24
29. あいまいな言葉をやめたら私たちの考えはもっとよくなる	.10	-.31	.22	.27	-.30	.11
34. 率直であることは常によいこと	.09	.21	.04	.33	-.15	-.06
36. 親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの	.20	-.02	-.26	.16	.32	.12
39. 近い人の幸せには気を使うがその他にはあまり関心がない	-.00	-.16	-.16	-.19	-.19	.20
43. 神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落とされる	-.10	-.05	.02	.22	.08	-.17
46. 行動するときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい	.00	.00	.26	-.01	-.13	-.02
59. 人生に意味がないなら今を精一杯生きることにも意味がなくなる	.19	-.06	.11	-.21	-.18	.22



Ｆｉｇ．７・５・２「第１因子と第６因子によるグラフ」
－一般大学生群－

ｅ）キリスト教大学生群

キリスト教大学生群の因子分析では、６因子が互いに同じ項目を共有することも殆どなくすっきりした形で抽出された。累積寄与率は３４．３％である。因子負荷量は、Ｔａｂｌｅ　７・５・１ｅ「倫理的価値意識－因子負荷量－」に示したとおりである。因子負荷量の絶対値が．３５以上のものを枠で囲んで解釈を進め、因子名を付けた。

第１因子－－『神を主軸とした生き方』

この因子には「神の望みを念頭において判断し、行動するのがよい」「人生で大切なのは神を信じて生きること」「人間は神によって救われなければならないもの」「悪い行ないは神を悲しませるようでつらい」等、神を自分の生き方の主軸としている項目が集まっている。

第２因子－－『自分の考えによる判断・行動／まわりに合わせた判断・行動』

「行動するまえに人がどう思うか考えてみたほうがよい」「他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い」「おおかたの人がどのように考えるかでことを決めるのがよい」「自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる」「自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとする」等のまわりを気遣いまわりに流されている判断や行動を表現している７項目に対し、「行動するときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい」「人の思惑を気にせず思う通りすることが多い」という自分の考えによる判断・行動を表現する項目群がある。この後者のグループには、上記の２項目に加えて「私の毎日の生活は充実している」という項目が加わっている。まわりに流されず自分の信念によって生きることが充実し生き方と密接な関係にあることを示していると思われる。

第３因子－－『意味のある人生／意味のない人生』

この因子は大別すると、人生には意味がある、人生には意味がないという相反する２つのグループで構成されていることになる。前者の、意味ある人生と同じ方向に並ぶ項目としては、人生で大切なのは思いやり、愛、自己の確立、健康等がある。

第４因子――『利己的で無難な生き方』

この因子は上記の因子名が示すような内容の１０項目で構成されている。すなわち、「自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない」「近い人のしあわせには心を使うがその他にはあまり関心がない」「たいていの人はわざわざ人を助けることなど望んでいない」「人生で大切なのは人様に迷惑をかけないこと」「悪い行いがばれると恥をかくのでしないほうがよい」「たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない」等である。

第５因子――『真摯な考え方／刹那的・打算的な考え方』

この因子には一方に、「私は道徳や善悪の問題をまじめに考える」「最も罪意識を感じるのは親しい人を裏切ったようなとき」「無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話をみるような課長がよい」というような内容が集まり、もう一方に「今生きることに意味はあるが人生そのものには意味はない」「人生で大切なのは権力・経済力」という類の項目群がある。

第６因子――『生きる意味の探究』

この因子はわずか４項目で構成されているが、生きる目的や意味、信じるということ、真理、美の探究等を表現している。

Table 7・5・1e「倫理的価値意識－因子負荷量－」
<キリスト教大学生群>

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
53. 神の望みを念頭において判断し、行動するのがよい	.83	.04	-.00	-.08	.04	-.06
45. 人生で大切なのは神を信じて生きること	.79	.06	.07	-.10	-.07	-.01
42. 人間は神によって救われなければならないもの	.71	-.05	.10	.15	-.11	-.10
57. 悪い行いは神を悲しませるようでつらい	.67	-.00	.16	.07	.27	.00
30. 嘘をついたり不正をすると自分が恥ずかしくなる	.47	-.17	.08	-.01	.28	.20
27. 自分は罪深い者だと思っている	.43	-.09	.12	-.04	.05	-.22
51. この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない	-.40	-.09	.10	.28	-.12	-.23
7. 行動する前に人がどう思うか考えてみたほうがよい	.02	-.58	.02	-.10	.00	.16
46. 行動するときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい	.12	.56	.16	-.01	.02	-.31
6. 人の思惑を気にせず思うとおりすることが多い	-.10	.56	.04	.18	-.06	.09
3. 他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い	-.09	-.55	.00	.20	-.00	-.18
37. 自分にあった仕事が来ても世話になってついた仕事はやめにくい	.05	-.50	.07	.04	-.17	.12
20. おおかたの人がどのように考えるかでことを決めるのがよい	.04	-.50	.14	.15	.01	-.13
28. 自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる	-.15	-.49	.01	.12	.03	-.28
2. 私の毎日の生活は充実している	.16	.40	.36	.06	.11	.12
24. 自分の態度を決める前に他人が考えていることを知ろうとする	.10	-.39	.00	-.06	.08	-.05
31. 人生で大切なのは思いやり	.13	-.02	.80	-.07	.08	.07
1. 人生で大切なのは愛すること	.21	.14	.67	-.10	-.16	-.10
18. 一人ひとりの人生には皆意味がある	-.00	.01	.56	-.11	.24	.10
40. 親しいものを裏切る行為は恥ずべき行為	.03	-.22	.50	.06	.17	.07
19. 人生で大切なのは健康	-.07	-.09	.46	.18	-.28	-.05
54. 人生で大切なのは自分が確立すること	.06	.28	.43	.19	.00	-.20
9. 親切には人一倍の心づかいをもって恩を返すべき	.09	-.29	.39	.26	.08	.20
13. 注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい	-.21	-.36	.36	.27	.03	-.05
56. 人生そのものには意味はない	.03	.00	-.36	.24	-.33	-.27
22. 自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない	-.09	.18	-.33	.64	-.09	-.01
16. たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない	-.10	-.11	.10	.62	-.01	.20
39. 近い人の幸せには心を使うがその他には余り関心がない	-.12	-.07	-.03	.57	-.01	.16
14. 嘘などつくと罰があたりそうで怖い	.13	-.09	.04	.45	-.01	-.10
58. 人生で大切なのは人様に迷惑をかけないこと	.12	-.30	-.04	.45	.19	-.14
12. 悪い行いがばれると恥をかくのでしないほうがよい	-.09	.05	-.01	.42	-.10	.20
32. たいていの人はわざわざ人を助けることなど好んでいない	-.01	-.06	-.05	.40	-.30	.07
50. 後悔するときの多くは恥をかいたとき	.04	.02	.10	.37	.10	-.10
34. 率直であることは常によいこと	.28	.13	.22	.37	.08	-.10
23. 人生で大切なのは権力	-.11	.01	-.05	.11	-.64	.02
15. 無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話をみるような課長がよい	-.00	.03	.19	.17	.48	-.18
8. 人生で大切なのは経済力	.09	.01	.11	.32	-.47	.05
49. 人や動物をいじめるとたたりがあるようで怖い	-.05	-.06	-.04	.35	.40	-.04
4. 最も罪意識をもつのは親しい人を裏切ったようなとき	.09	.21	.13	.20	.38	.34
35. 無理な仕事はさせないが仕事以外では世話もしない課長を好む	.02	.09	-.16	.08	-.37	.06
11. 今生きることに意味はあるが人生そのものには目的はない	-.20	.05	-.04	.01	-.37	.29
60. 私は道徳や善悪の問題をまじめに考える	.08	-.01	.03	.24	.35	-.17
52. 人生で大切なのは真理の追求	.28	-.04	.09	-.06	.05	-.63
17. 生きる目的、信じるということなどを理論的に突き詰めたい	.03	-.00	-.20	-.13	.10	-.63
26. 人生で大切なのは美の追求	.21	.07	.16	.21	-.16	-.40
59. 人生に意味がないなら今を精一杯生きることにも意味がなくなる	-.14	.18	-.11	-.29	.05	-.39
5. 試験で１番の者より２番の恩人の子を採用する	.07	-.13	.29	.00	-.28	.33
10. はっきりした態度をとらない人の話は腹が立つ	.10	.20	-.08	.27	.25	.27
21. 先生に聞かれても親友の悪い行いを言わないのが思いやり	.14	-.22	.14	.15	-.08	.14
25. 生きていても意味がないとよく思う	-.17	-.13	-.20	-.01	-.23	-.34
29. あいまいな言葉をやめたら私たちの考えはもっとよくなる	.19	-.05	.00	.32	.27	-.27
33. 見知らぬ土地ではふだんしないことまでしてしまいがち	-.15	-.11	-.29	.34	-.03	.07
36. 親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの	-.09	-.09	.27	.16	-.11	.04
38. 善悪は状況によるのに基準があると思う人はぎごちない	-.22	.26	.09	.07	-.00	.01
41. 人生の中には本当のことばかりいっていられないことが多い	.03	-.14	.16	.13	-.16	-.04
43. 神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落とされる	.12	-.00	.00	.12	.33	.00
44. 性格のしっかりした人は感情を表に表わさない	.18	-.08	-.30	.28	.12	-.00
47. 人生で大切なのはまごころ	.27	.03	.20	-.11	.29	.20
48. 私はまわりの人の気持ちや考えに最も神経を使っている	.15	-.30	.07	.20	.12	-.11
55. 物事の筋を通すよりまるくおさめるのに心を使う人の方が好き	-.08	-.29	.17	.04	.03	-.18

ｆ）ヨーロッパ大学生群

ヨーロッパ大学生群の因子分析では６因子が抽出された。その累積寄与率は、４４．３％である。因子負荷量は、Ｔａｂｌｅ　７・５・１ｆ「倫理的価値意識－因子負荷量－」に示してある。因子負荷量の絶対値が．３５以上のものを取り上げる。

第１因子－『状況に合わせた妥協的な生き方』

「人生のなかには本当のことばかりは言っていられないことが多い」「この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない」「試験で１番のものより２番の恩人の子を採用する」「善いこと悪いことは状況によるのに基準があると思う人はぎごちなくて好きではない」「たいていの人はわざわざ人を助けることなど望んでいない」「たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない」「おおかたの人がどのように考えるかでことを決めるのがよい」「物事の筋を通すよりまるくおさめるのに心を使う人のほうが好き」等、はっきりした判断や行動の基準を持たずにその場の雰囲気や自分のおかれている立場によって判断し、行動する姿勢を表わす項目が集まっている因子である。

第２因子－－『率直に見つめる』

「あいまいな言葉をやめたら私たちの考えはもっとよくなる」「はっきりした態度をとらない人の話は腹が立つ」「率直であることは常によいこと」という率直さを強調する内容と、「生きる目的信じるということなど理論的に突き詰めたい」「生きていても意味がないとよく思う」「人生に意味がないなら今を一生懸命生きることにも意味がなくなる」「人生で大切なのは権力」「人生で大切なのは真理の追求」等の項目が共に含まれている。彼らの日々の生活のなかでは否定されているような内容をも率直に、ありのままに見つめていこうとする姿勢といえるかもしれない。

第３因子「まわりの人への気遣い／自分の考え・自分の都合中心』

「私はまわりの人の気持や考えに最も神経を使っている」「自分にあった仕事が見つかっても世話になってついた仕事はやめにくい」「行動するまえに人がどう思うか考えてみたほうがよい」というまわりへの気遣いを表わす項目群と、「人の思惑を気にせず思う通りすることが多い」「見知らぬ土地ではふだんしないことまでしてしまいがち」「親切には人一倍の心遣いをもって恩を返すべき」「自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない」「行動するときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい」等、自己中心的な要素をも含む我が道を行く姿勢を表現している項目群とがある。

「親切には人一倍の心遣いをもって恩を返すべき」という項目が、自分の考え、自分の都合中心の構造の中に含まれていることを見れば、この項目に対する各グループの反応を吟味したおりに、日本人が全般的にこの内容を支持したのに対し、ヨーロッパの２群は支持しなかったという結果の意味も推測できる。ヨーロッパの生徒・学生にはこの項目が自己中心的な態度として移っているのであろう。

第４因子－－『真摯な考え方／刹那的・打算的な考え方』

「人生そのものには意味はない」「今生きることに意味はあるが人生そのものには目的はない」「後悔するときの多くは恥をかいたとき」「悪い行ないがばれると恥をかくのでしないほうがよい」「自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとする」「人生で大切なのは健康」等の考え方の項目群と、それに対する「私は善悪の問題をまじめに考える」という項目とから構成されている因子である。

第５因子－－『まわりへの気づかい・心づかい』

「他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い」「注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい」「自分の意見があってもいざこざを避けて相手に合わせる」「人生で大切なのは人様に迷惑をかけないこと」「人生で大切なの

は愛」等の項目で構成されている。まわりへのさまざまな形の気遣いの故に、自分の意見も口に出せないでいる姿が浮かび上がっている。

第６因子－－『人生で大切なもの』

”人生で大切なのは”で始まる文のうち、このグループの被調査者が大切であると思っている内容が集まっている。すなわち、人生で大切なのは、神を信じて生きること、まごころ、真理の追求、思いやり等で、そのほかにこれらを補足する内容が加わって１０項目で構成されている。

Table 7・5・1f「倫理的価値意識－因子負荷量－」
<ヨーロッパ大学生群>

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
41. 人生の中には本当のことばかりは言っていられないことが多い	.70	-.30	-.08	-.15	.18	.32
5. 試験で１番の者より２番の恩人の子を採用する	.66	.07	.01	-.12	-.30	-.09
15. 無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話をみるような課長がよい	.56	.01	-.08	.15	-.19	-.10
2. 私の毎日の生活は充実している	-.53	.00	-.23	.36	-.18	.13
35. 無理な仕事はさせないが仕事以外では世話もしない課長を好む	-.52	.13	-.25	-.11	.20	.00
38. 善悪は状況によるのに基準があると思う人はぎごちない	.52	.11	-.07	-.12	-.01	.12
51. この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない	.49	-.06	-.39	.01	.08	.16
49. 人や動物をいじめるとたたりがあるようで怖い	.46	-.28	-.01	.15	-.05	.11
32. たいていの人はわざわざ人を助けることなど望んでいない	.46	.15	-.34	.14	-.06	.33
20. おおかたの人がどのように考えるかでことを決めるのがよい	.43	.10	.02	-.16	-.24	.31
16. たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない	.42	.35	-.11	.21	-.10	.06
55. 物事の筋を通すよりまるくおさめるのに心を使う人のほうが好き	.37	.06	.02	-.10	-.21	.17
29. あいまいな言葉をやめたら私たちの考えはもっとよくなる	-.07	.67	.06	-.09	.09	-.29
23. 人生で大切なのは権力	-.16	.62	-.12	.19	.11	-.01
27. 自分は罪深い者だと思っている	-.09	.55	-.13	-.16	-.12	-.31
17. 生きる目的、信じるということなどを理論的に突き詰めたい	.06	.54	.08	.03	-.24	.31
25. 生きていても意味がないとよく思う	.14	.53	-.28	.08	.10	.00
59. 人生に意味がないなら今を精一杯生きることにも意味がなくなる	-.05	.48	.04	.17	.04	-.11
39. 近い人の幸せには気を使うがその他にはあまり関心がない	-.42	-.44	-.12	-.10	-.42	-.11
10. はっきりした態度をとらない人の話には腹がたつ	.13	.43	-.18	.05	-.39	-.18
43. 神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落とされる	-.01	.38	-.34	-.10	.00	-.13
34. 率直であることは常によいこと	-.33	.37	-.11	-.34	-.07	.00
48. 私はまわりの人の気持ちや考えに最も神経を使っている	.11	-.11	.71	.06	-.15	-.11
9. 親切には人一倍の心づかいをもって恩を返すべき	.11	-.18	-.64	-.04	-.26	.01
6. 人の思惑を気にせず思うとおりすることが多い	-.04	.27	-.63	-.06	.06	-.22
33. 見知らぬ土地ではふだんしないことまでしてしまいがち	.16	.03	-.62	-.05	-.29	.00
21. 先生に聞かれても親友の悪い行いを言わないのが思いやり	.47	-.08	-.56	.27	.04	-.04
26. 人生で大切なのは美の追求	-.24	.10	-.54	-.23	-.09	-.33
37. 自分にあった仕事が来ても世話になってついた仕事はやめにくい	.00	.11	.45	-.25	-.25	-.27
22. 自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない	.24	.05	-.37	-.05	-.12	.20
7. 行動する前に人がどう思うか考えてみたほうがよい	-.07	-.29	.37	.15	-.27	-.11
46. 行動するときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい	-.17	.24	-.36	.12	-.10	.16
11. 今生きることに意味はあるが、人生そのものには目的はない	.18	.05	.15	-.68	-.12	.23
50. 後悔するときの多くは恥をかいたとき	-.00	-.12	-.19	-.58	-.46	.07
19. 人生で大切なのは健康	-.27	-.01	.01	-.58	.28	-.11
60. 私は道徳や善悪の問題をまじめに考える	.03	.18	.18	.58	-.22	.12
44. 性格のしっかりした人は感情を表に表わさない	.11	.11	-.10	-.56	.04	.11
24. 自分の態度を決める前に他人が考えていることを知ろうとする	-.00	-.21	-.04	-.52	-.30	.19
54. 人生で大切なのは自分が確立すること	.40	.33	-.01	-.47	-.09	.02
56. 人生そのものには意味はない	-.05	.00	.13	-.38	.23	.12
12. 悪い行いがばれると恥をかくのでしないほうがよい	.25	-.01	-.15	-.36	-.07	.13
3. 他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い	.10	.01	-.00	-.01	-.67	.01
13. 注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい	.06	-.17	.12	-.06	-.63	-.06
1. 人生で大切なのは愛すること	-.05	.05	-.19	.25	-.54	.14
58. 人生で大切なのは人様に迷惑をかけないこと	.10	.12	-.24	.09	-.49	.23
28. 自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる	-.04	-.07	.19	-.35	-.47	.12
14. 嘘などつくと罰があたりそうで怖い	.07	.19	.38	-.03	-.43	.00
47. 人生で大切なのはまごころ	-.08	.07	-.07	-.00	.11	-.86
42. 人間は神によって救われなければならないもの	-.02	.12	.10	.11	.08	-.78
45. 人生で大切なのは神を信じて生きること	-.45	-.25	.04	.03	-.05	-.63
52. 人生で大切なのは真理の追求	.21	.35	.00	.32	.01	-.58
31. 人生で大切なのは思いやり	-.01	-.06	-.08	-.16	-.04	-.55
57. 悪い行いは神を悲しませるようでつらい	-.05	.01	.05	.46	-.32	-.48
53. 神の望みを念頭において判断し行動するのがよい	-.27	.09	-.13	.21	-.28	-.47
4. 最も罪意識をもつのは親しい人を裏切ったようなとき	.36	.16	-.02	.03	-.30	-.46
30. 嘘をついたり不正をすると自分が恥ずかしくなる	-.15	-.00	.24	-.01	-.23	-.39
36. 親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの	.25	-.25	-.31	.15	.16	-.39
8. 人生で大切なのは経済力	.00	.00	.00	.00	.00	.00
18. 一人一人の人生には皆意味がある	-.15	.19	-.13	.25	-.28	.00
40. 親しい者を裏切る行為は恥ずべき行為	-.02	.01	.23	-.23	-.14	.10

g）壮年者群

壮年者群の因子分析結果では、５因子が抽出された。累積寄与率は３１．１％であった。因子間で共有する項目も少ない。因子負荷量はＴａｂｌｅ　７・５・１ｇ「倫理的価値意識－因子負荷量－」に示したとおりである。因子負荷量の絶対値が．３５以上のものを取り上げて解釈を進めた。

第１因子－－『神を主軸とした生き方』

「神の望みを念頭において判断し行動するのがよい」「人生で大切なのは神を信じて生きること」「悪い行いは神を悲しませるようでつらい」「人間は神によって救われなければならないもの」「生きる目的信じるということなどを理論的に突き詰めたい」等の内容の７項目が含まれている因子である。

第２因子－－『本音』

「たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない」「たいていの人はわざわざ人を助けることなど好んでいない」「悪い行いがばれると恥をかくのでしないほうがよい」「後悔するときの多くは恥をかいた時」「人や動物をいじめるとたたりがあるようで怖い」「人生で大切なのは経済力」「おおかたの人の意見でことを決めるのがよい」等、まわりの目やたたり等を恐れて行動する者の本音のような内容が浮上してきている因子である。

第３因子－－『まわりを気遣った判断・行動／自分の考えによる判断・行動』

この因子には、一方に「他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い」「自分の態度を決める前に他人が考えていることを知ろうとする」「行動する前に人がどう思うか考えてみたほうがよい」「注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい」等のまわりを気づかった判断や行動を示す項目群があり、もう一方にその逆の内容の、「人の思惑を気にせず思うとおりすることが多い」「行動す

るときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい」「人生で大切なのは自分が確立すること」等の項目群がある。

第４因子－－『意味のない妥協的な人生』

この因子は「人生そのものには意味はない」「生きていても意味がないとよく思う」「今生きることに意味はあるが、人生そのものには目的はない」「人生に意味がないなら今を精一杯生きることにも意味がなくなる」等、意味のない人生と、「先生に聞かれても親友の悪い行いを言わないのが思いやり」「善いこと悪いことは状況によるのに基準があるように思う人はぎごちなくて好きではない」「この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない」「親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの」「人生の中には本当のことばかりは言っていられないことが多い」等、不正や不正直に対して場当たり的、妥協的にとらえている内容とが組み合わさっている。

第５因子－－『人生で大切な思いやりとまごころ」

この因子に含まれる項目はわずか５項目であるが、すべて”思いやり”と”まごころ”の大切さを主張する内容である。

Table 7・5・1g「倫理的価値意識－因子負荷量－」
<壮年者群>

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
53. 神の望みを念頭において判断し行動するのがよい	.80	-.08	-.01	-.00	-.02
45. 人生で大切なのは神を信じて生きること	.78	-.06	-.08	.03	.07
57. 悪い行ないは神を悲しませるようでつらい	.77	.10	.13	.06	.07
42. 人間は神によって救われなければならないもの	.73	.08	.16	-.03	.02
27. 自分は罪深いものだと思っている	.58	.15	.10	-.23	-.06
17. 生きる目的、信じるということなどを理論的に突き詰めたい	.50	.09	-.43	.00	.09
60. 私は道徳や善悪の問題をまじめに考える	.38	.18	-.05	.20	.10
20. 大方の人がどのように考えるかで事を決めるのがよい	.01	.63	.15	-.08	.17
16. たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない	.12	.58	.02	-.03	-.10
50. 後悔するときの多くは恥をかいたとき	.18	.54	.24	-.06	.06
58. 人生で大切なのは、人様に迷惑をかけないこと	.00	.54	.10	-.10	.24
12. 悪い行ないがばれると恥をかくのでしないほうがよい	-.11	.52	.07	.19	-.02
8. 人生で大切なのは経済力	-.20	.48	-.28	-.16	-.06
32. たいていの人はわざわざ人を助けることなど好んでいない	-.02	.47	-.15	-.10	-.23
34. 率直であることは常によいこと	.12	.42	-.25	-.12	.23
49. 人や動物をいじめるとたたりがあるようでこわい	-.00	.38	.22	-.01	.07
3. 他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い	.06	.08	.64	-.12	-.07
6. 人の思わくを気にせず、思うとおりすることが多い	-.10	.00	-.60	-.20	-.10
24. 自分の態度を決める前に他人が考えていることを知ろうとする	.07	.30	.49	.19	-.17
46. 行動する時まわりに合わせるより自分で判断してするのがよい	-.08	.07	-.49	-.03	.20
7. 行動する前に人がどう思うか考えてみたほうがよい	.15	-.05	.45	-.03	.13
14. 嘘などつくと罰があたりそうで怖い	-.02	.26	.43	.26	.22
13. 注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい	-.21	.09	.41	-.33	.09
54. 人生で大切なのは自分が確立すること	-.15	-.12	-.37	-.07	.21
5. 試験で１番の者より２番の恩人の子を採用する	-.03	-.12	.36	-.24	-.00
56. 人生そのものには意味はない	-.24	.06	-.18	-.62	.09
21. 先生に聞かれても親友の悪い行ないを言わないのが思いやり	.15	.16	.10	-.56	-.03
35. 無理な仕事はさせないが仕事以外では世話もしない課長を好む	.30	.01	-.15	-.45	-.14
25. 生きていても意味がないとよく思う	.13	.08	.02	-.45	-.17
38. 善悪は状況によるのに基準があると思う人はぎごちない	-.01	-.07	-.14	-.44	.17
51. この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない	.04	.21	.22	-.40	-.31
36. 親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの	.00	.12	.35	-.38	-.11
43. 神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落とされる	.15	.19	.08	.37	.19
11. 今生きることに意味はあるが、人生そのものには目的はない	-.07	.19	.03	-.37	-.01
41. 人生のなかには本当のことばかりは言っていられないことが多い	-.04	-.03	.18	-.37	.23
15. 無理な仕事もさせるが、仕事以外でも世話をみるような課長がよい	.03	.08	.13	.36	.30
59. 人生に意味がないなら今を精一杯生きることにも意味がなくなる	.10	.05	-.11	-.35	.21
40. 親しい者を裏切る行為は恥ずべき行為	.01	.03	-.01	-.02	.66
31. 人生で大切なのは思いやり	.03	.07	.08	.00	.61
47. 人生で大切なのはまごころ	.27	-.03	-.16	.14	.51
52. 人生で大切なのは真理の追求	.31	-.07	-.28	.13	.46
4. 最も罪意識をもつのは親しい人を裏切ったような時	.00	.20	.37	.03	.44
1. 人生で大切なのは愛すること	.32	-.22	.13	.05	.16
2. 私の毎日の生活は充実している	.09	.18	.01	-.01	.31
9. 親切には人一倍の心づかいをもって恩を返すべき	-.16	.06	.16	-.19	.24
10. はっきりした態度をとらない人の話には腹が立つ	-.03	.04	-.22	-.04	.01
18. 一人ひとりの人生には皆意味がある	.33	-.10	-.10	.32	.20
19. 人生で大切なのは健康	-.22	.04	-.09	-.15	.33
22. 自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない	-.18	.20	-.15	-.24	-.05
23. 人生で大切なのは権力	.15	.32	-.16	-.15	-.07
26. 人生で大切なのは美の追求	.20	.27	-.20	-.03	.07
28. 自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる	.21	-.08	.33	-.25	.08
29. あいまいな言葉をやめたら私達の考えはもっとよくなる	.02	.24	-.21	-.02	.07
30. 嘘をついたり不正をすると自分が恥ずかしくなる	.24	.12	.01	.07	.29
33. 見知らぬ土地ではふだんしない事までしてしまいがち	.33	.25	.12	.13	-.23
37. 自分にあった仕事が見つかっても世話になって就いた仕事はやめにくい	.03	.08	.26	.08	.03
39. 近い人の幸せには気を使うがその他にはあまり関心がない	-.29	.18	-.02	-.21	.09
44. 性格のしっかりした人は感情をおもてに表わさない	.02	.23	-.12	-.12	.34
48. 私はまわりの人の気持ちや考えに最も神経を使っている	.04	.19	.24	-.13	.02
55. 物事の筋を通すよりまるくおさめるのに心を使う人のほうが好き	.19	.20	.20	-.24	.21

h）老年者群

老年者群の因子分析では５因子が抽出され、累積寄与率は３１．１％であった。因子負荷量は、Ｔａｂｌｅ　７・５・１ｈ「倫理的価値意識－因子負荷量－」に示した通りである。因子負荷量の絶対値が　．３５以上のものを取り上げて解釈し、各因子に命名した。

第１因子－－『善いこと悪いこと』

「私は道徳や善悪の問題をまじめに考える」「善いこと悪いことは状況によるのに基準があると思う人はぎごちなくて好きではない」「あいまいな言葉をやめたら私達の考えはもっとよくなる」「率直であることは常によいこと」「この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない」「最も罪意識をもつのは親しい人を裏切ったようなとき」「一人ひとりの人生にはみな意味がある」「生きる目的、信じるということなどを理論的に突き詰めたい」等生きるなかでの善いこと悪いことが全体の項目を流れる意識であるように思われる。

第２因子－－『人の目・罰・たたり等を恐れた判断・行動』

この因子は、「注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい」「おおかたの人がどのように考えるかでことを決めるのがよい」「行動するまえに人がどう思うか考えてみたほうがよい」「悪い行ないがばれると恥をかくのでしないほうがよい」「後悔するときの多くは恥をかいたとき」「他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い」「嘘などつくと罰が当たりそうで怖い」「人や動物をいじめるとたたりがあるようで怖い」等の内容の１３項目で構成されている。

第３因子－－『神を主軸とした生活』

この因子に属する項目数は少ないが、その内容は明確である。すなわち、「人間は神によって救われなければならないもの」「悪い行ないは神を悲しませるようで

つらい」「神の望みを念頭において判断し・行動するのがよい」「人生で大切なのは神を信じて生きること」等、いずれも神を主軸においた生き方である。

第４因子－－『意味のない人生、打算的な生き方』

これは、「人生そのものには意味はない」「人生に意味がないなら今を精一杯生きることにも意味がなくなる」「生きていても意味がないとよく思う」「今生きることに意味はあるが、人生そのものには目的はない」という意味のない人生を表現する内容と、「自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる」「見知らぬ土地ではふだんしないことまでしてしまいがち」「先生に聞かれても親友の悪い行ないを言わないのが思いやり」「人生で大切なのは権力」といった打算的な生き方を内容としたものが組み合わされている因子である。

第５因子－－『人生で大切なもの』

この因子は”人生で大切なもの”で始まる項目のうち、このグループの被調査者が大切であると思っているものがまとまっている。すなわち、人生で大切なのはまごころ、真理の追求、思いやり、愛すること、人様に迷惑をかけないこと、自分が確立することであり、さらに、この内容を補足するような項目がこれらに加わる。

この因子のなかに”人生のなかには本当のことばかりは言っていられないことが多い”という項目が入っており、真理の追求等と同じ方向にあることが不思議に思われたが、２次元グラフを吟味するとこの項目は、”人様に迷惑をかけない””まわりの人の気持ちや考えに最も神経を使っている””人生で大切なのは思いやり”という項目と近い位置にあることが分かる。この意味から考えると、この”人生のなかには本当のことばかり言っていられないことが多い”という項目が、ここに位置づけられているわけも推察できる。

最後に、全グループの倫理的価値意識の因子構造を一覧にして、Ｔａｂｌｅ　７・５・２「倫理的価値意識の因子構造一覧」に示しておく。

Ｔａｂｌｅ　７・５・１ｈ「倫理的価値意識－因子負荷量－」
＜老年者群＞

項目	因子１	因子２	因子３	因子４	因子５
29. あいまいな言葉をやめたら私達の考えはもっとよくなる	.61	-.16	-.05	.09	-.16
34. 率直であることは常によいこと	.60	-.06	.02	-.01	-.08
51. この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ない	-.54	-.12	-.06	.11	-.21
44. 性格のしっかりした人は感情をおもてに表わさない	.47	-.08	.00	.12	-.29
17 生きる目的、信じるということなどを理論的に突き詰めたい	.46	.10	.42	.17	-.27
18. 一人ひとりの人生には皆意味がある	.44	.00	.01	-.10	-.17
60. 私は道徳や善悪の問題をまじめに考える	.38	-.01	.06	-.07	-.12
4. 最も罪意識をもつのは親しい人を裏切ったようなとき	.37	-.10	.19	-.17	-.04
38. 善い事悪い事は状況によるのに基準があると思う人は好きになれない	.36	-.02	-.19	-.20	-.27
13. 注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい	-.15	-.65	.07	.04	-.12
20. おおかたの人がどのように考えるかで事を決めるのがよい	.21	-.61	-.03	.09	-.07
14. 嘘などつくと罰があたりそうで怖い	.01	-.53	.26	-.31	.19
7. 行動する前に人がどう思うか考えてみたほうがよい	.24	-.46	-.06	-.12	-.04
8. 人生で大切なのは経済力	.05	-.46	-.19	-.06	.14
39. 近い人のしあわせには気を使うがその他にはあまり関心がない	.16	-.45	-.26	.11	-.04
37. 自分にあった仕事がきても世話になってついた仕事はやめにくい	.27	-.42	.04	-.09	-.01
12. 悪い行ないがばれると恥をかくのでしないほうがよい	-.01	-.40	.03	.06	-.25
55. 物事の筋を通すよりまるくおさめるのに心を使う人のほうが好き	.09	-.38	.14	.13	-.34
49. 人や動物をいじめるとたたりがあるようで怖い	-.28	-.37	.24	.11	-.16
3. 他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い	-.24	-.36	-.01	.26	.15
50. 後悔するときの多くは恥をかいたとき	.15	-.35	.10	.21	-.14
42. 人間は神によって救われなければならないもの	-.07	-.00	.78	-.11	.00
57. 悪い行ないは神を悲しませるようでつらい	.05	-.08	.78	-.02	-.06
53. 神の望みを念頭において判断し、行動するのがよい	-.05	.02	.78	.08	.00
45. 人生で大切なのは神を信じて生きること	.12	-.02	.78	-.07	-.04
59. 人生に意味がないなら今を精一杯生きることにも意味がなくなる	.05	.05	-.19	.55	.18
56. 人生そのものには意味はない	-.20	-.11	-.15	.55	-.06
25. 生きていても意味がないとよく思う	.03	.08	-.04	.49	-.08
28. 自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる	-.04	-.19	.20	.44	-.04
33. 見知らぬ土地ではふだんしない事までしてしまいがち	.13	.14	.05	.42	.25
21. 先生に聞かれても親友の悪い行ないを言わないのが思いやり	.12	-.28	.21	.41	-.03
35. 無理な仕事はさせないが仕事以外では世話もしない課長を好む	.00	-.08	-.10	.39	.11
23. 人生で大切なのは権力	-.08	-.37	-.02	.39	-.13
11. 今生きることに意味はあるが、人生そのものには目的はない	-.16	-.33	-.30	.37	-.06
15. 無理な仕事もさせるが、仕事以外でも世話を見るような課長がよい	-.02	-.32	.13	-.36	-.26
47. 人生で大切なのはまごころ	.15	.03	.07	-.21	-.63
31. 人生で大切なのは思いやり	.05	.04	.02	-.00	-.54
48. 私はまわりの人の気持ちや考えに最も神経を使っている	.15	-.30	.00	.17	-.54
58. 人生で大切なのは、人様に迷惑をかけないこと	.03	-.15	.08	-.03	-.53
41. 人生のなかには本当のことばかりは言っていられない事が多い	-.07	-.23	.00	.07	-.49
30. 嘘をついたり不正をすると自分が恥ずかしくなる	.17	.04	.12	-.31	-.47
24. 自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとする	-.04	-.28	.06	.23	-.42
52. 人生で大切なのは真理の追求	.30	.27	.37	-.00	-.41
54. 人生で大切なのは自分が確立すること	-.00	.14	-.05	-.02	-.41
1. 人生で大切なのは愛すること	.12	-.09	.14	-.18	-.37
2. 私の毎日の生活は充実している	-.10	-.04	.10	-.07	-.09
5. 試験で１番の者より２番の恩人の子を採用する	-.08	-.23	.30	-.19	.33
6. 人の思わくを気にせず、思うとおりにすることが多い	.01	.09	-.06	.24	-.03
9. 親切には人一倍の心づかいをもって恩を返すべき	.34	-.14	.17	-.22	.04
10. はっきりした態度をとらない人の話には腹が立つ	.34	-.13	-.09	-.02	-.34
16. たいていの人は捕まる怖さから悪いことをしない	.23	-.29	.25	.09	-.15
19. 人生で大切なのは健康	-.00	.00	.00	.00	-.00
22. 自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない	-.21	-.08	-.15	-.05	-.22
26. 人生で大切なのは美の追求	.30	-.00	.33	-.13	-.12
27. 自分は罪深いものだと思っている	.14	.22	.25	.21	.18
32. たいていの人はわざわざ人を助けることなど好んでいない	.14	-.11	.10	.33	.23
36. 親が子供の不正をかばったとしてもそれは人情というもの	-.29	-.29	-.12	.20	-.00
40. 親しい人を裏切る行為は恥ずべき行為	.25	-.19	-.00	-.24	-.10
43. 神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落とされる	.01	-.16	.24	.08	-.31
46. 行動するときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい	-.06	-.05	-.22	-.09	-.02

Table 7・5・2「倫理的価値意識の因子構造一覧」

グループ名	因子名
一般高校	意味のある人生 ／ない人生 打算的で要領よい生き方 神を主軸とした生き方
ｷﾘｽﾄ教高校	意味のある人生 ／ない人生
ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校	意味のある人生 ／ない人生 健康で充実した生活 ／不健康でむなしい生活 暖かく誠実な生き方 ／利己的打算的生き方
一般大学	充実した生活 ／むなしい生活 誠実な生き方 ／妥協的で無難な生き方
ｷﾘｽﾄ教大学	意味のある人生 ／ない人生 真摯な考え方 ／刹那的打算的考え方 利己的で無難な生き方 神を主軸とした生き方
ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学	真摯な考え方 ／刹那的打算的考え方 状況に合わせた妥協的な生き方
壮年	意味のない妥協的な人生 神を主軸とした生き方
老年	意味のない人生・打算的な生き方 神を主軸とした生き方

一般高校	自分の考えによる判断行動 状況によって変わる善と悪 回りを気づかった判断行動
ｷﾙｽﾄ教高校	神の望みを基準とした善悪 ／状況を基準とした善悪 善悪に対する真摯な態度 ／投げやりな態度 人の思惑を気にしない振る舞い ／気にした振る舞い
ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校	自分の考えによる判断行動 ／回りに合わせた判断行動 人とのかかわり・束縛
一般大学	善いこと悪いこと 我が道 ／回りへの心づかい
ｷﾘｽﾄ教大学	自分の考えによる判断行動 ／回りに合わせた判断行動
ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学	自分の考え自分の都合中心 ／回りの人への気づかい 回りへの気づかい心づかい
壮年	自分の考えによる判断行動 ／回りを気づかった判断行動
老年	善いこと悪いこと 人の目・罰・たたり等を恐れた判断行動

一般高校	
ｷﾘｽﾄ教高校	処理的姿勢 ／人情的姿勢 富や力で固めた充実感
ﾖｰﾛｯﾊﾟ 高校	
一般大学	合理的姿勢 ／心情的姿勢 神とのかかわり
ｷﾘｽﾄ教大学	生きる意味の探究
ﾖｰﾛｯﾊﾟ 大学	人生で大切なもの 率直に見つめる
壮年	人生で大切な思いやりとまごころ 本音
老年	人生で大切なもの

（１）山縣喜代　１９９０　高齢の日本人の宗教的意識と生き方にかかわる価値観　（兵庫県西宮市の教育長に提出）

第Ⅲ部　総括編

第８章　本研究の諸結果の要約と総括

第１節　各群の結果の要約

１　宗教的意識や心情

ａ）一般高校生群

一般高校生の宗教的意識や心情の因子分析では、『信仰の肯定／否定』『”神”への信仰』『霊的世界の認否』『死後の世界は極楽／地獄』の４因子が抽出された。彼らの宗教的意識や心情は、神が、霊が、死後の世界があるのかないのか、それらを信じるのか、信じないのかということがポイントとなっているように思われる。

信仰に関しての考え方・態度としては、果たして信仰をもつことはよいことなのか、意味あることなのかは定かでないが、積極的に反対しているわけでもない。「どちらとも言えない」という選択肢に対して反応が高かった項目のうち、上位１０位中９項目までが信仰の是非を問うものであった。

神の概念としては、神は偉大で、唯一絶対的な存在とは考えてはおらず、人それぞれに自分が好む神を拝めばよいと考えている。それでは具体的に死後の人間が、太陽が、動物が神であるのかとなるとこれもまたはっきりしないが、どちらかといえばそれらの神々の存在を否定してはいない。また、神の概念のなかに”悪い”神が存在する可能性がありうるか否かも明確ではない。因子分析での『”神”への信仰』の因子のなかには、唯一絶対の神も八百万の神々もともに含まれていた。　神に母性性を感じるのか、父性性を感じるのか、あるいは人格神とは見なさず意志的存在としてとらえるのか等の神のイメージに関しても何等はっきりした答えは得られない。

要するに、この群が抱いている神のイメージは全体的に非常にぼんやりとしたものである。神は見えないが実際に存在すると考え、自分自身も神の存在を認めているという者が半数以上を占めるが、その神の概念ははっきりしていない。事実、「自分が拝んでいる神についてよく知らない」という回答も半数を越えている。

神の存在を信じている者たちのなかでも、具体的に何らかの宗教団体に所属している者たちの割合は少ない。神の存在を認めていながら、何らかの宗教に属していない者達は７５％を越える。

かれらの神とのかかわりは、苦しいときの神頼みで、ふだんの生活と神との関係はあまりない。しかし神の概念ははっきりしないままに、初詣をしたり、合格・安産などのさまざまな祈願をしたり等習俗に近い、ご利益を願うような信心は行っている者がかなり多い。信仰がさらにより深く生活にかかわったほうがよいのかははっきりしない。神の存在や教えの理性的追求よりも、素直に生きることで十分であると思っている。

死後の世界は、暗く、寂しく、恐ろしく、汚れた世界ではないが、果たして喜びに溢れた幸せな世界であるか否かは定かではない。魂は永遠であり、人間は繰り返し生きる。あの世は存在し、死んだ霊はこの世とあの世を行き来する。この世での生き方により死後の状態は異なるが、果たして神がどん生き方をした人でも救うのかどうかは定かではない。この群の高校生たちは輪廻の思想に近い考え方をしているように思われる。

自然に対しても、自然が神によって造られたものなのか、ひとりでに出来上がったものであるのかはっきりせず、意見は分かれている。しかし、自然に対して仲間としての親しみと同時に、畏敬の念を抱いている者は多い。生物にも無生物にも命や霊魂があるということを肯定している者たちも６０％近くいる。全体的にアニミズム的傾向があるように思われる。

b）キリスト教高校生群

因子分析では、『”神”への信仰』『八百万の神々』『この世での生き方とあの

世の関係』『霊的世界の認否』『弱いもののための信仰』の５因子が抽出された。

キリスト教校の高校生群の場合、宗教的意識や心情の因子構造は一般校の高校生群と比べてより複雑になっている。神々の概念や霊的世界の存在、”神”への信仰を問題にしているほかに、信仰は弱いもの、力ないもののためであるのか、この世での生き方とあの世の状態とは関係があるのか等の問題も、はっきりとした意識として浮かび上がっている。

神概念や信仰についての考え方は、以下の通りである。

神は存在しており、神を信じることはよいことで、どの時代どの年齢層にとっても大切なことである。自信があれば信じる必要はないというようなものではなく、神を信じることが科学や理性と矛盾するわけでもない。

神の概念に関しての考えのうち、神は唯一絶対かという点については意見は分かれるが、全般的に言って一般校の高校生より神の偉大さを強く肯定している。しかし果たして自然の延長線上のもの、すなわち死後の人間、太陽や月、動物等も神々になりうるかということになると明確な判断は得られず、肯定はしないもののきっぱりと否定しているわけでもない。また、皆が同じ神を拝む必要はないという考えも強い。しかし、因子分析の２次元グラフは、彼ら自身が”神”への信仰という場合、八百万の神々を含んでいないことを示している。

神に母性性を感じるのか父性姓を感じるのかは定かでなく、多少父性性に傾いてはいるものの、どちらかといえば「人格ではなく意志のような存在」としての神のイメージをもっているようである。しかし、この意志のような存在である神は厳しく怖いものではなく、むしろ暖かさのある存在である。ここでの高校生の、母性性・父性性のとらえは、従来から言われているようなものとは変わってきている可能性がある。神は厳しく怖いものではなくむしろ暖かさを感じるものであるということと、神は母性的であるということとは結び付いていないからである。

このグループは、神は見えないが実際に存在しており信仰することはよいことであるととらえていると言うことはすでに述べた。ところでその被調査者に、「あなたは神の存在を認めているか」と尋ねると、さらに肯定の割合が増えて８１．６％

となる。しかし、そのなかで何らかの宗教に属しているものは３５．０％と低い。

日々のさまざまなことがらを通しての神とのコミュニケーションを感じているが、全般的にいって神とのかかわりは、苦しいときの神頼み的傾向がある。神に生活の全てをかけたり、命がけで神に応えたり、神の存在や教えを理性的に突き詰めて考えたりすることが大切なのかどうかははっきりしない。むしろ自分が感じるままに素直に生きることで十分であると思っている。初詣等の習俗に近い信心にもある程度参加しているが、祈願のため種々の神社等へ参拝することはあまり行っていない。

自然が神によって造られたのか否かははっきりしないが、ひとりでに出来上がったものではないだろうという程度の判断が見られる。しかし、高い山・深い木立のなかで心が清められる思いがするということに対しての支持は非常に高いことから、自然のなかにある種の神聖さも感じていると思われる。生きとし生けるもの皆兄弟という自然に対する仲間意識も強い。

死後の世界に関しては、確かに存在していると思っている。魂は永遠に生きるのであり、人間は死んだらまったくの無に帰するわけではない。その死後の世界は、恐ろしい、汚れた、暗い世界ではないが、果たして喜びに溢れた幸せなものであるかどうかは定かではない。また、この世での生き方により死後の状態は異なるのであり、この世とあの世を死んだ霊は行き来するとも思っている。

ｃ）ヨーロッパ高校生群

因子分析の結果、３因子が抽出された。『八百万の神々』『”神”への信仰の肯定／否定』『合理的な考え方／漠とした不安』の因子である。『”神”への信仰の肯定／否定』の因子に全項目の６０％以上のものが含まれており、他の２つの因子と重複している項目もかなりある。ヨーロッパの高校生群の場合、宗教的意識や心情の構造は単純で、”ある特定の概念をもった神”を信じるか否かということが主軸になっており、それに科学的時代における宗教の位置付けの問題と、自分たちのもつ神概念とは異なる八百万の神々の存在の意識とが付け加わわった構造となって

いる。

彼らがもっている神概念と、それへの信仰とは、以下のようなものである。

神は実際に存在しており、人間がつくりあげたものでは決してない。神を信じることはよいことであり、どの時代にも大切なことである。神を信じることは科学や理性と矛盾するわけではなく、自信があったり、若いうちは信じる必要がないといった類のものでもない。神を信じることが現実からの逃避となるわけでもない。現に被調査者自身も８７．８％の者が神の存在を認めており、そのうち９７．７％の者がキリスト教（宗派は異なる）に所属している。

神は唯一絶対的なもので、何ものにも置き換えられない。したがって、人間が死後神になるということはなく、まして狐等の動物や太陽や月等が神であることもない。この考えは一貫して明確に表明されている。しかし、この考えは、他の人々がそれぞれの信じる神々を拝むことを必ずしも否定するものではない。

神に母性性を感じるのか父性性を感じるのかということに関しては、この群でも明確な反応は得られないが、どちらかといえば母性性を否定し、父性性を肯定しているようである。しかし、その神に厳しく、怖い印象をもっているものは、わずか６％に過ぎない。さりとて、神に包み込むような暖かさを感じているかといえば必ずしもそうではなく、意見は分かれる。さほど顕著に表明されたわけではないが、偉く畏れ多い神というのが、彼らのもっている神のイメージのようである。

以上のことからも分かるように、人間、動物、草木は皆同じ仲間であるが、それらはみな神によって造られたものであり、自然を神聖視する傾向は見られない。

死後についてもかなりはっきりした考えをもっている。魂は永遠であるが、それは人間が繰り返し生きることを意味するのではない。死後の世界は確かに存在し、喜びに溢れた幸せなものである。そこで人は神に出会うが、死後の人間自身が神々になるのではない。また、この喜びの死後の世界においては、死のために別れ別れになっていた親しい人々との再会もある。上記のことは、人間は死後灰になって自然にかえるだけである、まったくの無に帰してしまう、真空のような状態になってしまうというような死後の状態を否定する。ただし、これらの死後についての明る

いとらえ方も、「神は無条件に人間を救われるわけではない」という考えを否定するものではなく、むしろ肯定している。

神とのかかわりに関しては、苦しいときの神頼みだけではなく、ふだんの生活のなかにも神とのかかわりがあるが、神に生活の全てをかける必要はないと思っている。命がけでも神に応えることが大切なのか、神の存在の理性的追求が大切なのか、あるいは理性的追求よりも素直に生きることで十分なのか等は定かではない。初詣に類する、日本でよく見られるような習俗的信心は、あまり行われていない。

d）一般大学生群

宗教的意識の因子分析結果では、４因子が抽出された。『信仰の肯定／否定』『霊的世界の認否』『偉大な神の手中にある恐ろしい死後の世界』『人間の生き方と神の救い』である。一般高校生群のように、神が、霊が、死後の世界があるのかないのか、それらを信じるのか信じないのかは大きなポイントとなっている。もう１つの大きなポイントとしては、死後の世界への不安がある。『偉大な神の手中にある恐ろしい死後の世界』『人間の生き方と神の救い』というように、死後の世界の背後には、人間を裁く厳しい神のすがたが見え隠れする。

この群では、さまざまなかたちの神々の存在を、これとは明確なかたちで把握できないものの、肯定しているものと思われる。「神は見えないが実際に存在するか」と正面きって問われると躊躇するが（８グループのなかで肯定は４２％と最下位）、被調査者自身の半数以上は神の存在を認めている。その神を信じることは、よいことなのか、大切なことなのか、また信仰は弱いもの、力無いもの、年寄りのためのものなのか、あるいは信仰は現実からの逃避なのか、そのいずれに関してもどちらとも言えず戸惑っている様子が見られるが、「神を信じることは科学や理性に矛盾する」という１項目に関してだけはきっぱりと否定している。神の母性性・父性性に関しては意見の分かれるところであり、何等顕著な反応は見られない。そもそもこのグループは、神を人格的なものとしてとらえずに、暖かくも、厳しく怖くもない”意志のような存在”として認めているようである。

自分自身が神の存在を認めていると答えた者たちは５５．１％であるが、そのなかで実際に何らかの宗教に属しているものはわずか５％にすぎない。人間は帰属感を求めて宗教に入ると答えた者が半数を越える。初詣をしたり、さまざまな祈願をしたり等の習俗に近い信心業は行っている。

彼らの神との関係は、苦しいときには神を頼みにもするが、ふだんの生活とは関わりがないというようなものである。習俗的信心業やご利益を願うような信心は行っているが、神に生活のすべてをかける必要はないと思っており、まして命がけで神に応えることが大切であるとはまったく思っていない。神の存在や教えを理性的に追求するよりも、自分が感じるままに素直に生きることで十分であると考えている。

人間や自然が神によって造られたのか否かということに関しては明確ではないものの、どちらかといえば否定に傾いている。人間と動植物との仲間意識は高く、高い山や深い木立のなかでは心が清められる思いがする者たちも非常に多く、自然に対しては仲間としての親しみと同時に畏敬の念を抱いているといえよう。

死後の世界は、恐ろしい、汚れた、暗い世界ではないが、喜びに溢れた幸せな世界でもない。そこで人間は、神に出会えるわけでも、死によって別れていた親しい人々と再会できるわけでもない。そもそも魂が永遠に生きるものであるのかどうかも定かではない。

ｅ）キリスト教大学生群

キリスト教大学生群の因子分析では、全グループの中で最も多い６因子が抽出された。すなわち、『”神”への信仰の肯定／否定』『八百万の神々』『死後の世界は自然のふところ／暗く寂しい』『この世での生き方と死後』『恐れや不安から来る入信』『信仰と生活の関係－その濃淡－』の６因子である。単に、神の概念や、信仰の是非、死後の世界の有無等を問うだけでなく、信仰するということは恐れや不安から来ているのか、今の生き方は死後と関係するのか、信仰はどの程度に生活とかかわるものなのか等、複雑な要素が意識にのぼってきている。

神概念や信仰についての考えは、以下の通りである。神は見えないが実際に存在しており、人間が造りあげたものではない。神を信じることはよいことであり、どの時代にも大切なことである。信仰は自信のないもの、力ないもの、年寄りのためだけのものではなく、また神を信じることが科学や理性と矛盾するわけでもない。神は何ものにも置き換えられない偉大なものであり、彼らが”神”への信仰を考える場合八百万の神々のことではない。しかし、自然界の延長線上にある神々の存在をきっぱりと否定しきっているわけでもない。皆が同じ神を拝む必要はないという意識も強い。神に父性性を感じてはいるが、その神は厳しく怖いものではなく、包みこむような暖かさのある神である。しかし、この父性的なイメージの神も人格神というよりは偉大な意志というとらえが妥当な神である。これら種々の神々に関する自分の意見はあるが、自分の拝んでいる神についてよく知らないという意識もある。

このグループの被調査者自身の９３％が神の存在を認めている。そして、宗教は生活に意味を与えるものであると回答しているにもかかわらず、実際に何らかの宗教に属しているものは３５．５％と、わずかである。

彼らの日常生活と神との関わりは、必ずしも苦しいときにのみ神を思い出すという類のものではない。彼らは、神が日常生活のなかでいろいろな方法を通して、人間に語りかけておられ、いろいろな事柄を通して意思表示をすることがあると考えている。しかし、日々の生活が神に生かされていることが大切なのか、神に生活のすべてをかけたり、命がけで神に応えたりするのが大切で必要なことなのかは定かではない。また、神の存在や教えの理性的追求が大切なのか、あるいは理性的追求よりも素直生きることで十分なのかもはっきりしない。葬式の後の清めや、初詣等の習俗的信心はある程度行っているが、祈願のために種々の神社等に参拝に行くものは多くない。

生きとし生けるものみな兄弟という意識がある。また、自然は神から造られたものであり自然自身が神であるとは見ていないが、偉大な自然のなかに”神聖さ”を感じ畏敬の念も抱いている。

死後の世界は確かに存在し、魂は永遠に生きるのであり、人間は死んだら真空のような状態になるわけでも、まったくの無に帰するわけでもない。その死後の世界は、恐ろしい、汚れた、暗い世界ではないが、果たして喜びに溢れた幸せな世界であるかどうかは定かではない。２次元グラフから、この世と死後の関係についての彼らの４通りの考え方が読み取れる。すなわち、死後は誰でもが暖かい自然のふところのような世界に行くのだとする考え方と、誰でもみな恐ろしい世界に行くかあるいは無に帰してしまうのだという考え方、そして、この世での生き方により死後暗く・恐ろしく、惨めな世界に行くか、それとも永遠の暖かい喜ばしい世界に行くのだとする考え方である。

ｆ）ヨーロッパ大学生群

ヨーロッパ大学生群の因子構造は比較的単純で、３因子が抽出された。『”神”への信仰の肯定／否定』『漠然とした信仰心』『神とのかかわりあい－その濃淡－』の３因子である。

彼らの神概念や信仰についての考えは、以下のようである。神は目には見えないが実際に存在するものであり、人間がつくりあげたものでは決してない。

信仰を持つことはよいことであり、神を信じることはどの時代にも大切である。信仰というものは自信があれば、あるいは若ければ必要ないというものではない。神を信じることは現実からの逃避でもなく、理性や科学と矛盾するわけでもない。この群では神の唯一絶対性を肯定する形での、神の偉大さの肯定が明確になされ、自然界の延長線上にあるような種々の神々の存在の可能性および”悪い”神の可能性をきっぱりと否定している。全能でかげりのない善そのものであるという神の絶対的な善を明確に表明しているのも、このグループのみである。

ただしこれらの判断は、それぞれの人がそれぞれの信じるところの神々を拝むことまでをも否定するものではない。

神の厳しさ怖さに対してもはっきりと否定している。神が包み込むような暖かさをもっているか否かに関しては迷うところであるが、決して否定しているわけでも

ない。むしろ偉く畏れ多い方というのが一番近いイメージのようである。そしてこのことは、彼らが神に母性性を感じるのか父性性を感じるのかということとはなんら関係がない。

この群の自然に対する意識も明確に表明されている。人間や自然は神から造られたものであり、人間・動物・草木等自然は仲間である。それらに霊魂が宿っているわけではなく、ましてそれら自身が神であるわけでは決してないという意識である。

被調査者自身で神の存在を認めている者は９５．３％であり、そのうち、９７．６％の者がキリスト教に所属している。そして、宗教は生活に意味を与えるものであると理解している。

神との関係は、かなり日々の生活に密着したものである。もちろん、苦しいときにも神を思い出すが、それは単に苦しいときの神頼みというわけではない。神に生活のすべてをかける必要があるのか、命がけでも神に応えることが大切なのかは分からないが、日々の生活が神に生かされていてそれに応えるのが真の信仰であると思っている。また、神の存在や人生の意味等を理性的に極めるよりも自分が感じるままに素直に生きることで十分であるとは思っておらず、それらの理性的追求も大切であると思っている。日本で一般に見られる習俗に近い信心に似た活動は行われていない。

魂は永遠に生きるが、それは人間が繰り返し生きることを意味するのではない。また、人間は灰となって自然にかえるだけでも、まったくの無に帰してしまうわけでも、真空のような状態になってしまうわけでもない。死後の世界は確かに存在する。それは、暗く、寂しく、恐ろしく、汚れたものではなく、喜びに溢れた幸せなものである。そこで人は神に出会うが、死後の人間自身が神々になるのではない。また、この喜びの死後の世界においては、死のために別れ別れになっていた親しい人々との再会がある。ただしこのことは、神は無条件に人間を救われるという考え方を肯定することを意味しない。この世での生きかたにより、死後の状態は異なるのである。

g）壮年者群

壮年者群の因子分析結果では５因子が抽出された。『霊的世界の認否』『現世ご利益的信心』『”神”への信仰』『恐ろしい死後の世界』『弱いもののための信仰』である。

神は実際に存在し、神を信じることはよいことで、どの時代でも大切なことである。信仰は自信があれば、あるいは若ければ必要ないといった因子分析の第５因子として抽出されたような”弱い者のため”のものではなく、また科学や理性と矛盾するわけでもない。

神の唯一絶対性にかかわる問いに対しての回答は、いずれも漠然としている。神の偉大さはある程度認めているものの、それは唯一絶対性につながるような類のものであるとは思えない。自然の延長線上にある神々の存在に関しては、その認め方に段階があり、動物の神々や悪神、太陽や月などの神々、死後の人間である神々に対して、顕著ではないものの、順に、否定→迷い→肯定という傾向がある。このことは因子分析の２次元グラフからも読み取れる。また、皆が同じ神を拝む必要はないという考えを支持する者は非常に多く、否定するものはわずかである。いずれにせよこのグループでは、神を”人格ではなく意志のような存在”として認めている者が多い。その神は厳しく怖い神ではないが、果たして暖かい神なのか、畏れ多い神なのかについてはなんら明確な反応はない。

自分自身が神の存在を認めていると答えたものは７０．８％であり、自分が拝んでいる神についてよく知らないと答えた者も７０．８％である。また、神の存在を認めているもののうち何らかの宗教に属しているものは２５．３％と低い。

結局壮年者群は、神の存在を認め、信仰することの大切さを肯定してはいるものの、その神、信仰の対象が具体的にどのようなものであるのかはよく分からないままに、”偉大な意志のような存在”として拝んでいると思われる。

神と日常生活とのかかわりは、苦しいときの神頼みに近いものである。葬式の後の清め、初詣等の参拝、合格・安産等の祈願など習俗に近い信心業や、因子分析で因子の１つとしても抽出されたような、現世のご利益を祈願する信心はなされてい

る。しかし、神に生活のすべてをかける必要があるのか、日々の生活が神に生かされ応えるものであることが真の信仰なのか、命がけでも神に応えることが大切なのかは定かではない。神の存在や教えの理性的追求よりも、自分が感じるままに素直に生きることで十分であると思っている。

自然に対しては、仲間である親しさと同時に、畏敬の念も抱いている。その自然は神によって造られたものなのか否かは定かではない。生物にも無生物にも霊魂があるのだろうというアニミズム的自然観をもっている。

魂は永遠に生きる。死後の世界は、決して暗く、寂しく、恐ろしく、汚れた世界ではないが、果たして喜びに溢れた幸せなものであるか否かは定かではない。

h）老年者群

老年者群の場合因子分析結果では５因子が抽出された。『信仰の肯定／否定』『”神”への信仰』『この世での生き方と死後』『暗いイメージの死後の世界』『八百万の神々』である。５因子中２因子は死後に関するもので死後の状態への関心の高さを表している。

老年者群では基本的に、信仰することはよいこと、どの時代でも大切なことであると表明してはいるものの、細かな面、すなわち神を信じることは科学や理性に矛盾することなのか、自信があれば信じる必要はないのか、そして特に、以下の２項目「若いうちから信じる必要はない」のか「神を信じることは現実からの逃避」なのかに関しては戸惑いが見られる。

自然の延長線上にある神々の肯定／否定に関しては、成人群と同じ傾向が見られるが、成人群よりさらにその傾向がはっきりしている。すなわち、動物の神々や悪神などはどちらかといえば否定に傾き、自然界の太陽や月などの神々に対しては肯定に傾き、死後の人間が神になるということに関しては肯定している。このことは因子分析の２次元グラフからも読み取れることである。老年者群にとって神は偉大ではあるが、決して唯一絶対的なものではない。大多数の者が「皆が同じ神を拝む必要はない」と考えている。

老年者群でも、人格としてではなく意志のような存在として神を認めており、その神は決して厳しく、怖く、温かみのないものではない。むしろ、畏れ多いものである。

神の存在自身に関しては、「神は見えないが実際に存在する」と「神は人間がつくりあげたもの」のいずれもが５０％以上の支持を受けている。この数字は、人間がつくりあげたものも神でありうるということをも含んでいるのであろう。

被調査者本人としては、６５％以上の者が神の存在を認めているが、８１％以上の者が自分の拝んでいる神についてよく知らないと答えている。具体的にいずれかの宗教に属しているか否かに関しては不明回答が２１．３％もあり判断できにくいが、それでも宗教に所属していると答えたものは４５．７％で、日本人のグループのなかでは最も高い。彼らは、宗教は生活に意味を与えるものであると考えている。

神とのかかわりについては、神に生活のすべてをかける必要はないと考えている。神との関わりの多くは一般に習俗として行なわれている信心業を通して、あるいはご利益を願う祈願を通してのようで、非常に多くの者が初詣や祈願等で種々の神々を参拝している。神に生かされ応えるのが真の信仰なのか、命がけでも神に応えることが大切なのかなどは分からないが、神の存在や教えの理性的追求も大切だが、それよりも自分の感じるままに素直に生きることが大切であると考えている。

人間、動物、草木はみな同じ仲間という自然との仲間意識と同時に自然に対する畏敬の念も強い。生物・無生物にも命や霊魂が宿っているというアニミズム的自然観でもある。神による人間や自然の創造ということも、顕著ではないが、肯定の方に傾いている。

死後に関する次の３項目、すなわち「魂は永遠生きる」「人間は神になる」「灰となって自然にかえるだけ」はいずれも５０％以上の支持を受けている。これを矛盾と見る見方もあろうが、自然に宿る霊を神としてとらえる高齢の日本人の神観、自然観と考えあわせると、一つの筋の通った考え方も浮かびあがってくる。

死後の世界は、恐ろしい、汚れた、暗い世界ではないが、果たして喜びに溢れた

幸せなものであるのかははっきりしないという回答も、死後の状態が自然にかえる状態であるという考え方と矛盾するものではない。「神は無条件に救われるわけではない」という項目も５０％以上の支持を受けており、冒頭に述べた「この世での生き方と死後」の因子、そしてさらに「暗いイメージの死後の世界」という因子とも考え合わせると、”死”というものが他のグループより身近に感じられているだろう高齢の被調査者の死に対する不安、関心の高さが伺われる。

この老年者群が表明した意識、すなわち神は人間がつくりあげたものであるという可能性、人間や自然が神によって創造されたという可能性、さまざまな形で表明された神や信仰や死後の状態に関する考え方、これらを考え合わせるとこの老年者群が日本人の他のグループに比して最も神に対す畏敬の念が強いにもかかわらず、最も自然の延長線上にある神々を認めているということがわかる。

２．倫理的価値意識

ａ）一般高校生群

一般高校生群の倫理的価値意識の因子分析からは、『意味のある人生／意味のない人生』『まわりを気づかった判断・行動』『神を主軸とした生き方』『自分の考えによる判断・行動』『打算的で要領のよい生き方』『状況によって変わる善と悪』の６因子が抽出された。

第１因子からは、意味ある人生とは思いやり、愛、健康、誠実さがあるもので、それらが欠けた人生は意味のないものであるというとらえが伺える。

罪意識に関しては、自分が罪深いもので、神によって救われなければならないものだという意識は低く、悪い行いをすると神を悲しませるようでつらいという意識も低いが、”罰があたりそうで怖い”とは思う。たたりや恥に関しては、特に顕著な反応はみられない。

しかし、上記のような自分の悪い行いに対する外からの報いとしての”恥”では

なく、”悪い行いをした自分自身を恥じる”あるいは”その行い自身が恥ずべきものである”というとらえに対しては肯定が高い。そして、このような意味での恥の意識は罪の意識とも重なり合うことが示唆されている。

善悪の判断ということに関しては、善いこと悪いことは状況によるのに基準があると思う人はぎごちなくて好きではないと思っている。人生のなかには本当のことばかりは言っていられないことが多いとも考えている。

ものごとを判断したり行動するときには、まわりに合わせる方がよいのか、自分で判断してするのがよいのかはわからないが、いずれにせよ、行動するまえには人がどう思うか考えてみたほうがよいと考えている。

親切には人一倍の心遣いをもって恩を返すべきであり、職場においても、無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話をみるような人情味のある課長がよいと思っている。

人生で大切なものとしては第１位に”思いやり”があげられるが、その他”健康””まごころ””愛””人に迷惑をかけないこと”等も大切であると思っている。支持が最も低いものは”権力”であり、”経済力”がそれに続く。

一人ひとりの人生にはみな意味があるが、自分の毎日の生活が充実しているかというとそうとも言えない。一人ひとりの人生に意味があるという項目と比較的高い相関があった内容は思いやりとまごころである。

ｂ）キリスト教高校生群

キリスト教高校生群の因子分析からは『善悪に対する真摯な態度／投げやりな態度』『人の思惑を気にした振る舞い／気にしない振る舞い』『神の望みを基準とした善悪／状況を基準とした善悪』『富や力で固めた充実感』『処理的姿勢／人情的姿勢』『意味のある人生／意味のない人生』の６因子が抽出された。

この第６因子の意味ある人生とは、思いやり、まごころ、自己確立のある人生を意味していると思われる。”神の望み”と”状況”を、善悪の判断の基準として対置させた因子をもつのは、この群だけである。

そして、この群の被調査者自身は、善いこと悪いことは状況によるという立場を取り、人生の中には本当のことばかりは言っていられないことが多いとも考えている。

また、自分は道徳や善悪の問題をまじめに考えるほうだと思っている。

罰やたたり、恥に対する意識は一般高校生群とまったく同じであるが、自分が罪深いものであること、悪い行いは神を悲しませるようでつらいということに関しては、半数弱の支持があり、一般高校生群より高い。

また、神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落とされるということに象徴されるような、罪を洗い流すというような考え方は否定している。

行動を起こすにあたっては、その前に人がどう思うか考えてみたほうがよいとは思っているが、おおかたの人の考えでことを決めるようなまわりに合わせたやり方より自分で判断して行動するのがよいと思っている。現実には自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとしている。

恩・義理・人情と言うことに関しては、親切には人一倍の心遣いをもって恩を返すべきである、無理な仕事もさせるが、仕事以外でも世話をみるような課長がよい等、一般高校生群と同じだが、さらに注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくいということも肯定している。

人生で大切なものの第１位は、思いやりであり、以下愛、まごころ、自己の確立、健康の順でそれに続く。たいていの人は、わざわざ人を助けることなど好んでいないとは思っていない。

権力を支持している者は皆無で、経済力に対しても１０％以下の者しか支持していない。

一人ひとりの人生にはみな意味があるとは思っているが、自分の毎日の生活が果たして充実したものであるか否かは定かではない。人生の意味と高い相関関係にある内容は、正直、まごころである。

ｃ）ヨーロッパ高校生群

ヨーロッパ高校生群の因子分析では、『意味のある人生／意味のない人生』『まわりに合わせた判断・行動／自分の考えによる判断・行動』『暖かく誠実な生き方／利己的で打算的な生き方』『人とのかかわり・束縛』『健康で充実した生活／不健康でむなしい生活』の５因子が抽出された。

この群での意味ある人生とは、神を主軸とした生き方であり、意味のない人生とは善悪に対して投げやりな態度のものである。第３因子のあたたかく誠実な生き方は第５因子の健康で充実した生活と、また前者の利己的で打算的な生き方は、後者の不健康でむなしい生活と密接なつながりがある。

罪意識に関しては、人間は神によって救われなければならないものであるという認識は半数弱と低くはないが、自分は罪深いものであるとか、悪い行いは神を悲しませるようでつらいという意識は低い。

自分が犯した悪い行いが招くであろう報いとしての罰や恥等に対しては明確な反応は見られないが、たたりに関してははっきりと否定している。

しかし、上記のような自分の悪業に対する報いとしてではなく、悪い行ないをした自分を恥じるあるいはその行ない自身が恥ずべきものであるというとらえに関しては日本人の高校生と同様肯定しており、この意味での恥の概念は日本人特有のものではないと言える。そしてそのような意味での恥の意識は罪の意識とも重なりあうという認識も、日本の高校生群と同様である。

「神社の手水で洗うと罪の汚れが洗い落される」というような考え方に関しては、日本のキリスト教高校生群と同様否定している。

善悪の基準は状況にあるとは思っていないが、人生のなかには本当のことばかりは言っていられないことが多く、この世で生きていくためには多少の不正はやむを得ないとも思っている。

判断や行動の基準に関しては、「自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる」「物事の筋を通すよりまるくおさめることに心を使う人のほうが好き」であるというような事なかれ主義に対しては反対し、「行動するときまわりに合わせるより、自分で判断してするのがよい」としている。しかし、現実生活

においては考えほどにわりきって行動しているわけではないようで、他人の意見で簡単に気が変わってしまうこと、まわりの人の気持や考えに最も神経を使っていることを否定していない。

恩・義理・人情に関しては、「注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい」と思っており、「無理な仕事はさせないが、仕事以外では世話もしない課長がよい」とは思っていず、人情や恩に無縁というわけではない。しかし、日本人群ほどにその意識は強くなく、すべての日本人群が５０％以上の支持を表明している「無理な仕事もさせるが、仕事以外でも世話をみるような課長がよい」という項目に対しての支持率は２０％台にとどまっている。また「試験で１番の者より２番の恩人の子を採用する」という考えに５０％以上の者が否定しているのは、ヨーロッパの２つの群だけである。

人生で大切なものとしては、最上位に愛があり、続いて思いやり、そして健康となり、これらは５０％以上の支持を得ている。また多数の者が「近い人の幸せには関心があるが、その他にはあまり関心がない」という項目内容を否定している。

最下位は、権力と美であり、それに経済力が続く。

一人ひとりの人生にはみな意味があるとはっきりと思っているが、自分の毎日の生活が充実しているとは言いきれない。人生の意味の項目と高い相関があった内容は、神の望みと善悪であった。

ｄ）一般大学生群

一般大学生群の倫理的価値意識の因子分析では、『むなしい生活／充実した生活』『合理的姿勢／心情的姿勢』『善いこと・悪いこと』『神とのかかわり』『まわりへの心遣い／我が道』『妥協的で無難な生き方／誠実な生き方』の５因子が抽出された。

第１因子のむなしい生き方と第６因子の妥協的で無難な生き方は互いに共有する部分を持ちながら１つの固まりを成しているような関係にある。

第６章での分析において日本の一般大学生群は、信仰自身を否定しているわけで

はないものの、信仰に関する細かい内容に関しては、どの群よりも一番否定的・懐疑的であったが、第７章においても同様の傾向が見られる。「人間は神によって救われなければならないものである」という点も、また「悪い行いは神を悲しませるようでつらい」という点もきっぱりと否定しているのは、全被調査者のなかでこの群だけである。

嘘やいじめその他さまざまな自分が犯した悪い行いが招くであろう報いについては、罰への恐れはあるが、たたり、恥に関しては明確な反応はない。

しかし、前述の高校生群と同様、悪い行いをした自分自身を恥じるあるいはその行ない自身が恥ずべきものであるというとらえに関しては肯定している。またその意味での恥の意識は、罪の意識とも重なり合うものであることも他と同様である。

善悪の基準に関しては、善いこと悪いことは状況によるのに基準があるように思う人はぎごちなくて好きではないと思っており、人生のなかには本当のことばかりは言っていられないとも思っている、

日常生活の中で物事を判断し、行動するとき、神の望みを念頭に置いてする必要はなく、人がどう思うか考えてみた方がよいと思っており、現に自分の態度を決めるまえに他人が考えていることを知ろうとしているが、人の思惑を気にせず、思う通りすることも多い。

親切には人一倍の心遣いをもって恩を返すべきである、無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話を見るような人情味のある課長がよく、無理な仕事はさせないが仕事以外では世話もしないような課長は好まない、注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくい等、恩・義理・人情の意識がある。

人生で大切なものの第１位は思いやりであり、それに健康、愛、まごころ、自己の確立が続く。「たいていの人はわざわざ人を助けることなど好んでいない」という考え方を否定している。

支持されない価値としては、最下位が権力的価値で他の群と同じであるが、次に神を信じることとなっている点は他の群と異なるところである。

一人ひとりの人生にはみな意味があると思っているが、自分の毎日の生活が充実

しているかどうかとなると定かではない。一人ひとりの人生の意味と比較的高い相関のあった項目の内容は、愛と道徳である。

e）キリスト教大学生群

キリスト教大学生群の因子分析では、『神を主軸とした生き方』『自分の考えによる判断・行動／まわりに合わせた判断・行動』『意味のある人生／意味のない人生』『利己的で無難な生き方』『真摯な考え方／刹那的・打算的な考え方』『生きる意味の探究』の６因子が抽出された。

意味ある人生と同方向に並ぶものは、思いやり、愛、自己の確立、健康などがある。

罪意識や悪い行いが招く報いに関しては、キリスト教高校生群と非常に似通った傾向を示している。

善悪に対する考え方も、キリスト教高校生群と同様である。

行動するにあたっては、まわりに合わせるより自分で判断してするのがよいとは思っているが、行動するまえに人がどう思うか考えてみたほうがよいとも思っている。

親切には人一倍の心遣いをもって恩を返すべきである、無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話を見るような人情味のある課長がよく、無理な仕事はさせないが仕事以外では世話もしない課長がよいとは思わない等、他の日本人高校生・大学生群と類似した傾向がみられる。

人生で大切なものとしては、最上位が思いやりであり、続いて愛、まごころ、自己の確立、健康、真理の追求となっている。

たいていの人はわざわざ人を助けることなど好んでいない、自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない、近い人のしあわせには関心があるがその他にはあまり関心がない、見知らぬ土地ではふだんしないことまでしてしまいがち等の考え方は、すべて否定している。

支持が最も低かった価値は権力的価値で、次が経済力である。

一人ひとりの人生にはみな意味があると思っている。また自分の毎日の生活が充実しているとも思っている。人生の意味を表現している項目と高い相関のあった項目の内容は思いやり、愛、まごころ、自己の確立であった。

f）ヨーロッパ大学生群

ヨーロッパ大学生群の因子分析からは、『状況に合わせた妥協的な生き方』『率直にみつめる』『まわりの人への気遣い／自分の考え・自分の都合中心』『真摯な考え方／刹那的・打算的な考え方』『まわりへの気遣い・心遣い』『人生で大切なもの』の６因子が抽出された。

第６章の分析においてこのヨーロッパ大学生群は、信仰に関してあらゆる面から肯定的な反応を示していたが、第７章での分析においても同様の傾向が見られ、この群のみが「人間は神によって救われなければならないものである」という認識を表明している。しかし、自分は罪深いものである、悪い行いは神を悲しませるようでつらいという意識は低い。

その他、自分が犯した悪い行ないが招くであろうたたり、罰、恥に関して、また自分の悪業が招く報いとしてではなく、その悪い行ないをした自分を恥じる、その行ないは恥ずべき行為であるという意味での恥に関して、そしてさらにこの意味での恥の意識と罪の意識の関係に関しては、ヨーロッパ高校生群と同様の反応を示している。

善いこと悪いことは状況によるのに基準があると思う人はぎごちなくて好きではないという考えに対しては迷いがあるものの、「人生のなかでは本当のことばかりは言っていられない」という考えを否定している唯一のグループである。

道徳や善悪の問題に関しては、まじめに考えていると思っている。

判断や行動の基準に関しては、ヨーロッパの高校生群と類似した傾向が見られる。「自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる」「物事の筋を通すより、まるくおさめるのに心を使う人のほうが好き」であるという事なかれ主義に対して反対し、さらに「おおかたの人がどのように考えるかでことを決める

のがよい」という項目も否定している。しかし、ヨーロッパの高校生群が「行動するときまわりに合わせるより自分で判断してするのがよい」と考えているのに対して、ヨーロッパの大学生群はまわりに合わせるより「神の望みを念頭に置いて判断し、行動するのがよい」と考えている点が、異なるところである。

現実には、「他人の意見で簡単に気が変わってしまうことが多い」「自分の態度を決めるまえに他人がどう考えているか知ろうとする」「まわりの人の気持や考えに最も神経を使っている」こと等を否定するような生活をしているわけではなく、考えほどにすっきりと行動しているわけでもない姿が浮上してきている。

恩・義理・人情等に対する考え方も、ヨーロッパ高校生群とまったく同じである。

人生で大切なものの最上位は愛であり、その後に思いやり、まごころ、神を信じること、人に迷惑をかけないこと、真理の追求と続く。

近い人の幸せには気を使うがその他にはあまり関心がない、自分の楽しみを犠牲にしてまで他人を助ける気はない等の考え方を否定している。

一方、価値の最下位は権力と経済力で、いずれも支持するものは皆無である。

一人ひとりの人生にはみな意味があると思っており、今生きることに意味はあるが人生そのものには目的はないという考えも否定しているが、自分の毎日の生活が充実しているかは定かではない。

人生の意味を表現している項目と高い相関のあった項目の内容は愛と真実であった。

さらに、生きる目的、信じるということなどを理論的にも突き詰めたいという願いもある。このことは宗教的意識や心情のところで、この群が神の存在や教えの理性的追求は大切であることを強調していたのと符合する。

g）壮年者群

壮年者群の因子分析では、『神を主軸とした生き方』『本音』『まわりを気遣った判断・行動／自分の考えによる判断・行動』『意味のない妥協的な人生』『人生

で大切な思いやりとまごころ』の５因子が抽出された。

罪意識に関しては、自分は罪深いもので神によって救われなければならないものであると言う意識は低く、悪い行いをすると神を悲しませるようでつらいという意識も低い。

しかし、自分が犯した悪い行ないが招くであろう罰やたたりへの恐れはある。

自分の悪業に対する外からの報いとしての恥に関しては明確な反応はないが、悪い行ないをした自分自身を恥じるということ、あるいはその行ない自身が恥ずべきものであるという意識は高い。また、そのような意味での恥の意識は罪の意識と重なりあうものであることも他の群と同様である。

また、罪の汚れというものが神社の手水で洗うと洗い落とされるような類のものとは考えていない。

道徳や善悪の問題をまじめに考えてはいるが、人生のなかには本当のことばかりは言っていられないことが多いとも思っている。

日常生活での判断・行動にあたっては、「自分の意見が正しいと思ってもいざこざを避けて相手に合わせる」「おおかたの人がどのように考えるかでことを決めるのがよい」という点に関しては迷いがあるものの、行動するまえに人がどう思うか考えてみたほうがよいとは思っている。

親切には人一倍の心づかいをもって恩を返すべきであり、無理な仕事もさせるが仕事以外でも世話を見るような人情味のある課長がよく、無理な仕事はさせないが仕事以外では世話もしない合理的な課長は好まない等、恩・義理・人情に関する考え方は、他の日本人群と類似している。ソトの者には無関心であるという類の「見知らぬ土地ではふだんしないことまでしてしまいがち」は否定している。

人生で大切なものの第１位は思いやりであり、それに順次健康、愛、まごころ、人に迷惑をかけない、自己の確立と続く。

最下位は権力で肯定するものは皆無で、次に支持の低いものは美の追求である。

一人ひとりの人生にはみな意味があると思っており、自分自身の毎日の生活も充実していると感じている。人生の意味の項目と高い相関のあった内容は神の望みと

まごころであった。

h）老年者群

老年者群の因子分析では『善いこと悪いこと』『人の目・罰・たたり等を恐れた判断・行動』『神を主軸とした生活』『意味のない人生、打算的な生き方』『人生で大切なもの』の５因子が抽出された。

罪意識に関しては、自分は罪深いものだという意識は低いものの、人間は神によって救われなければならないもの、悪い行いは神を悲しませるようでつらい等に関しては半数弱の肯定があり、決して低いわけではない。

自分が犯した悪い行ないが招くであろう報いに関しては、どの群よりも肯定率が高く、罰やたたりへの恐れ、人の目を意識した恥の気持が強い。さらに恥に関しては他の群と同様、自分の悪業に対する外からの報いとしてだけでなく、悪い行ないをした自分を恥じるあるいはその行ない自身が恥ずべきものであるというとらえ方もあり、この意味での恥の意識は罪の意識とも重なりあっている。

罪の汚れが神社の手水で洗うと洗い落とされることも肯定している。

善悪に関しては、自分は道徳や善悪の問題をまじめに考えると思っているが、善いこと悪いことは状況によるのに基準があると思う人はぎごちなくて好きではなく、人生のなかには本当のことばかりは言っていられないことが多いとも思っている。

日常での行動にあっては、まわりに合わせるより自分で判断するのがよく、率直であることは常によいことだと考えているが、一方でまた「行動する前に人がどう思うか考えてみたほうがよい」とも考えている。現実には、まわりの人の気持や考えに最も神経を使っており、さらに「物事の筋を通すより、まるくおさめるのに心を使う人のほうが好きである」ことを半数以上が支持しているのは、このグループだけである。

親切には人一倍の心遣いをもって恩を返すべきであり、無理な仕事もさせるが、仕事以外でも世話を見るような課長がよく、無理な仕事はさせないが仕事以外では

世話もしない課長は好まず、注意すべきことがあっても世話になっていると言いにくいと思っている等、恩・義理・人情の意識がある。

見知らぬ土地ではふだんしないことまでしてしまいがちだとは思っていない。

人生で大切なものは第１位にまごころであり、次に健康、思いやり、愛　自己の確立、人に迷惑をかけないことと続く。最下位は権力であり、次に低いのは経済力ではあるが、経済力に対しては３５％以上の支持がある。

一人ひとりの人生にはみな意味があると大多数が肯定し、自分自身の毎日の生活も充実していると多数の者が感じている。

人生の意味の項目と高い相関のあった内容はまごころとおもいやりである。

生きる目的、信じるということなどを、理論的に突き詰めたいとも思っている。

以上が、倫理的価値意識に関して出てきた結果を、各群ごとに細かく羅列したものであるが、それを大まかに表に表すと、Ｔａｂｌｅ　８・１・１「各群の倫理的価値意識の特徴」となる。

特徴の似通っているもの同志に注目していくと、大きく４つのグループに分けられる結果となった。すなわち、老年者のグループ、一般校の高校生・大学生・および壮年者のグループ、キリスト教校の高校生・大学生のグループ、そしてヨーロッパの高校生・大学生のグループである。

宗教的意識と心情のまとめと比較すると、今回の場合、壮年者群・老年者群がキリスト教校の生徒・学生群に属するよりも、一般校の生徒・学生群に属したほうが適切であることと、壮年者群の結果と老年者群の結果の間にも多少異なるところがあったという違いがある。しかし、高校生・大学生に関しては、一般校群、キリスト教校群、ヨーロッパ校群の３群に分かれ、まったく宗教的意識や心情の結果と同じになった。

Table 8・1・1「各群の倫理的価値意識の特徴」

グループ名 内容	老年者	壮年者	一般校 高校生	一般校 大学生	キリスト教校 高校生	キリスト教校 大学生	ヨーロッパ校 高校生	ヨーロッパ校 大学生
神との関係における罪意識		（意識低い）			（罪深さ意識）		（救いの必要性意識）	
悪い行いの報い	たたり・恥を肯定	たたりを肯定	罰を肯定				たたりを否定	
罪と恥の意識	重なり合う可能性がある							
判断・行動の基準	自分で判断するのがよい ➡➡	回りに合わせるのがよいのか自分で判断するのがよいのか迷う			自分で判断するのがよい ⬅⬅		事なかれ主義反対 自分で判断	神の望みで判断
恩・義理・人情	意識は濃い						意識はあるが薄い	
人生で大切なもの 上位 第1位	まごころ	思いやり					愛	
第2位	健康				愛		思いやり	
人生の意味	ある							
	グループ 1	グループ 2			グループ 3		グループ 4	

第２節　種々の視点からの要約

１　文化・教育の視点から

本研究の結果、明確に浮上してきたポイントは、文化的、教育的影響力の大きさということである。それは、宗教的意識や心情に関する調査においても、倫理的価値意識に関する調査においても見られた。

まず、出てきた意見の特徴によりグループを大別すると、被調査者の居住地域が一般校の高校生と大学生、キリスト教校の高校生と大学生がクロスしているにもかかわらず、宗教教育を受けていない日本の高校生と大学生同志、日本でキリスト教教育を受けている高校生と大学生同志、そしてヨーロッパの高校生と大学生同志が、同じグループに属するという結果となった。そして壮年者群、老年者群は、宗教的意識や心情に関しては、日本のキリスト教教育を受けている高校生・大学生群と非常に似通った反応を示し、倫理的価値意識に関しては、日本の一般校の高校生・大学生群と近似した反応を示しているという結果が出ている。

上記の結果を、分析してみよう。ヨーロッパのキリスト教世界の文化領域のなかで生きている高校生・大学生の意識や心情の特徴が、日本でかなりの長期にわたり同じキリスト教教育を受けている（被調査者の多くの者は１４年以上、少なくとも高校生の場合５年以上、大学生の場合８年以上）同じ年齢の高校生・大学生の意識や心情と異なるということは、その文化的背景が大きく影響している故であろう。

しかしまた、日本でキリスト教教育を受けている高校生と大学生の意識や心情が、同じ日本の似た地域に住み、同じ年齢である一般校の高校生・大学生の意識や心情とも異なるということは、教育の影響力を示していると思われる。

さてそれでは、壮年者群・老年者群の位置づけをいかにみるか。

いくつかの先行研究は、時系列的分析の結果、日本人の信仰や信心をもつ比率は加齢によると言っていることは、前に述べた。そして、本研究においても同様の結果を得ている。この事実は、日本の壮年者群・老年者群は若年層に比べ、宗教により強く関心をもち、宗教について考えることも多いことを意味しているのであろう

。そして、日本に住んで、キリスト教教育を受けている者たちは、教育とその環境のゆえに、一般の高校生や大学生より早目に、壮年者や老年者が辿り着く境地に達しているのではないか。もちろん生活経験が浅い彼らが、教えられることによって体得していることと、自らの長い人生経験の上にたって辿り着いた境地とは、自ずから異なるであろうが、調査のうえで同じ傾向を示していたという事実は説明できるように思う。そして加齢とはさして関係なく、先行研究ではむしろ日本人性として特徴があった内容が多い一般生活における倫理的価値意識に関しては、一般校の高校生・大学生群と近似しているわけである。

それでは、キリスト教校の高校生・大学生が一般校群よりも一足さきに壮年者群・老年者群と類似した境地に辿り着くということは、彼らのこれからの壮年・老年に至るまでの生き方が、一般校群のそれとどう変わるということなのであろうか。今後調査し、検討する必要のある課題であろう。

以上、文化・教育の影響の概要を見たわけだが、ここでさらに、詳細を検討してみたいと思う。日本のキリスト教校群は、日本の一般校群とヨーロッパ校群の媒介的存在となっていることが調査の結果からも明白になったので、このキリスト教校群を機軸に考察を進めることとする。

教育により、日本のキリスト教校群が、ヨーロッパ校群と同様の考えをもつようになっていると思われる点は、”信仰に対するはっきりした肯定の姿勢”である。それはあらゆる方面の回答から明確に浮上してきた姿である。

しかし、その信仰の内容に関してはヨーロッパ校とはかなり異なり、むしろ日本の他の群と濃淡の差（キリスト教校は一般校よりヨーロッパ校寄り）こそあれ、似た傾向を示している。

すなわち、ヨーロッパ校群が自然界の延長線上にある八百万の神々の存在をはっきりと否定しているのに対し、キリスト教校群の意見は明確ではないこと、ヨーロッパ群は自然に対し、神に造られたものとしての仲間意識をもっているのに対し、キリスト教校群は他の日本人と同様、仲間としての親しさと同時に、神聖視するような畏敬の念を抱いていること、またキリスト教校群の多くは、初詣等の慣習的信

心を行なっていることなどである。

また、神のイメージに関しては、日本人は全般的に、神は厳しくも怖くもない”大いなる意志”としてとらえる傾向が強いが、キリスト教校群はさらにこの存在が包み込むような暖かさをもっているとも感じている。ヨーロッパ校群も、日本のいずれの群よりも高い率で、神の厳しさ怖さを否定しており、キリスト教世界では神を厳しく恐ろしい父と見るといった通念を覆す反応を示しているが、神の偉大さに対する畏敬の念は同年齢の日本人に比べて強い。

死後の世界に関しては、被調査者のいずれの群も、暗く、寂しく、恐ろしく、汚れた、惨めな世界ではないということで一致しているが、日本のキリスト教校群は果たして喜びに溢れた幸せな世界であるかは分からないとし、ヨーロッパ校群は喜びに溢れた幸せな世界で、そこで人は神に出会い、大切な人々に再会し、永遠に生きると思っている。

宗教的意識や心情の因子分析では、一般高校生群・大学生群からはともに４因子が抽出されたが、それは神が、霊が、死後の世界があるのかないのか、それらを信じるのか信じないのかが大きなポイントとなっている。また、ヨーロッパ高校生群・大学生群からは、ともに３因子が抽出され、比較的単純な因子構造となっている。日本のキリスト教校の２群および壮年者・老年者群からは５～６因子が抽出され、他と比べて、より複雑な因子構造となっているのがわかる。

倫理的価値意識に関しては、宗教的意識や心情ほどグループ分けが単純ではないが、やはりキリスト教校群は、一般校群－この場合成人・老人群はどちらかといえばこのグループに入る－とヨーロッパ校群との中間的位置を占めている。

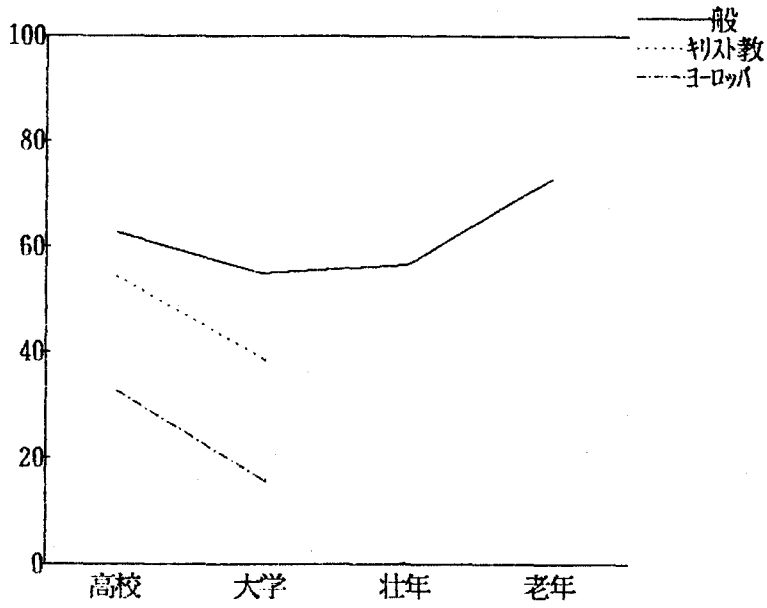
例えば、一般校群は物事を判断し行動するとき、まわりに合わせるより自分で判断するのがよいのかどうか迷っているが、キリスト教校群では自分で判断するのがよいと思っている。しかし、ヨーロッパ校群のように事なかれ主義にはっきりと反対しているわけではない。

また人生で大切なものとして、ヨーロッパ校群は第１に愛、第２に思いやりをあげ、一般校群は第１に思いやり、第２に健康を上げているのに対し、キリスト教校

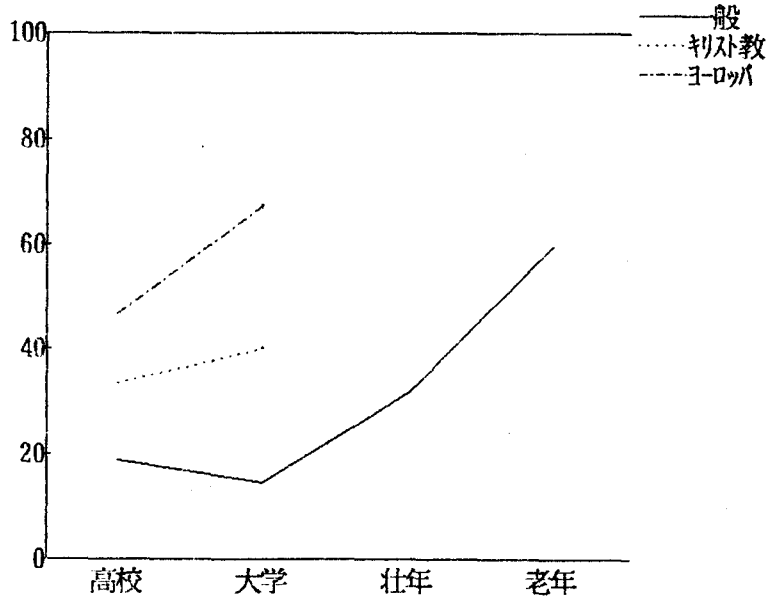
群は第１に思いやり、第２に愛を上げている。思いやりを第１に上げるという点では日本人群的であるが、健康より愛の支持者が上回るのはヨーロッパ群的であると言えよう。”愛”についてみるとキリスト教の土壌の強さに比例して、順位が高くなっていることが分かる。すなわち高校・大学ともに一般校、日本のキリスト教校、ヨーロッパ校の順に徐々に順位が上がっているということである。また「近い人の幸せには気を使うが、その他にはあまり関心がない」という内容への否定が高かった順位が、そっくり同じであることも、キリスト教の土壌の強さと関係があるかもしれない。

”健康”に関しても一般に高い支持があるが、キリスト教と直接に関係のない一般のグループでは、年齢その他と関係なくいずれも第２位という高い順位となっている。

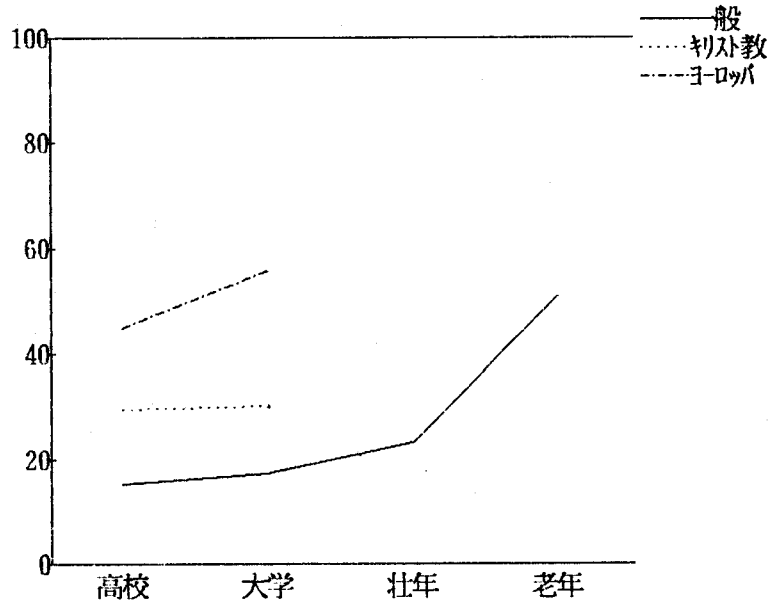
さらに、キリスト教の土壌と関係あると思われるものとして、生き方にかかわる内容を”理性的”にも探究したいということがある。Ｆｉｇ．８・２・１「素直に生きる」は、「理性的追求より素直に生きることで十分である」という意見への支持率を、Ｆｉｇ．８・２・２「理性的追求」は、「神の存在や教えの理性的追求は大切」への支持率、そしてＦｉｇ．８・２・３「理論的に突き詰める」は、「生きる目的、信じるということなどを、理論的に突き詰めたい」への支持率を示している。キリスト教の土壌の強さ、キリスト教教育を受けている年数の長さに比例して、理性的探究の必要性が強調されている。老年者群は、他の日本人群と異なり、理性的追求の大切さも強調してはいるが、それ以上に素直に生きることで十分であると思っている。



Ｆｉｇ．８・２・１「素直に生きる」



Ｆｉｇ．８・２・２「理性的追求」



Ｆｉｇ．８・２・３「理論的に突き詰める」

自分が犯した悪い行ないへの報いということに関しては、日本人の全グループが”罰”を意識しているのに対し、ヨーロッパ群の罰に対する恐れはそれほどでもなく、さらにヨーロッパ群は”たたり”への恐れをはっきりと否定している。

日本人の特性のように言われることが多い”恥”に関しては、その内容を吟味する必要がある。人の目を意識した恥ということではなく、罪意識との絡みでの恥、すなわち、自分の罪深さを恥じたり、ある行為は恥ずべき行為であると思ったり、人を裏切ることは罪深いことで恥ずべきことであると思ったりする恥の意識は、ヨーロッパ校群も認めているところである。

自分の罪深さ、神からの救いの必要性の意識などに関して、日本人の意識は低いといわれることがあることは、理論編で述べた。事実、本調査においても、自分の罪深さ、救いの必要性をを肯定する一般の日本人は少ない。また、キリスト教校群・ヨーロッパ校群に比べて、一般の日本人群は多少その自覚が低めであるという結果は出ている。しかし、大した差はない。そしてまた、大方の日本人は、罪が神社

の手水で洗い落とされるような類のものであるとも思っていない。これらの結果を見るかぎり、罪意識の低さ、罪への融通性を、日本人の特性の１つとするのは強引すぎるであろう。ただし、ここで注意しなければならないのは、自分の罪深さの自覚ということは、高校生大学生段階の課題というよりは、もっと年齢の高い人々の課題であるかもしれないということである。壮年者群・老年者群同志の比較をしてみないと、日本人の罪意識の特徴はつかめないことかもしれない。今後の課題である。

恩・義理・人情も、日本人に固有の特性であるとは断言できない。日本人は全般的にヨーロッパの２群に比べて、より強い恩・義理・人情の意識や心情を表明してはいるが、ヨーロッパの両群にも恩・義理・人情の気持やそれらにまつわる戸惑いは見られる。

以上が文化的・教育的影響からみられる特徴の主なものである。

このほか１つ１つの項目への各群の細かい反応を吟味すると、この大別された３つのグループの特性の差は、より鮮明に浮かび上がるが、繰りかえしになるので、ここでは割愛する。実証編を参考にされたい。

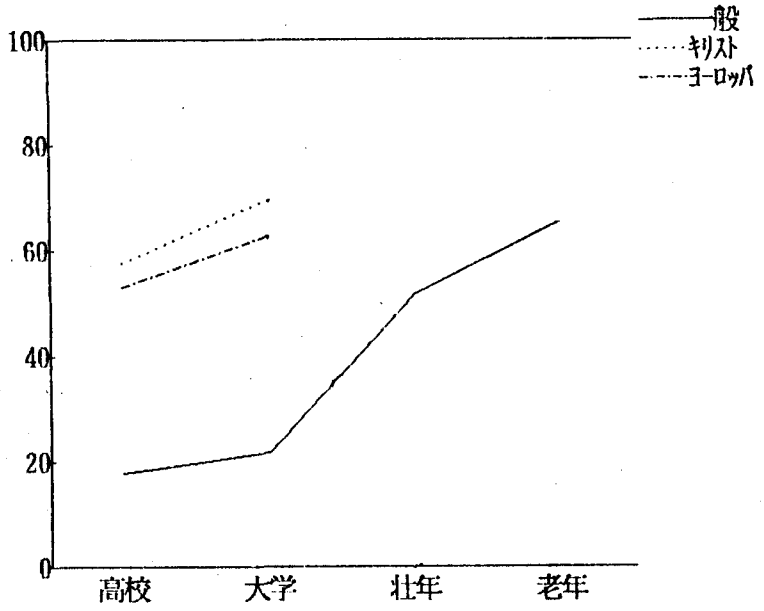
２．世代、ライフサイクルの視点から

次に年齢との関係でみられる特徴を検討してみたいと思う。

前述の考察は、宗教的意識や価値意識に及ぼす文化的・教育的影響力は、年齢による差異をも左右するまでに強い可能性があることを示唆していると思われる。

しかし、条件が同じグループのなかを見ていくと、すなわち、一般校の高校生・大学生・壮年者・老年者のグループ、日本でキリスト教教育を受けている高校生・大学生のグループ、そしてヨーロッパの高校生・大学生のグループに分け、そのなかのそれぞれの年齢層の特性を見ていくと、そこには年齢による差異が見られる。そして宗教的意識や心情の場合、この差異は宗教心の発達・成熟としてとらえられるようなものとなっている。

一般日本人群では、信仰の内容に対するとらえに、大した年齢差はないが、信仰を肯定する心情は、Ｆｉｇ．８・２・４「信仰をもつのはよいこと」に示したように、年齢が上がるにつれて高まっていく傾向が見られる。この傾向は他の先行研究と同様である。



Ｆｉｇ．８・２・４「信仰をもつのはよいこと」

なお、高校生群の肯定は１７．９％、大学生群の肯定は２１．７％で、割合からすると大学生群のほうが多少高いが、種々の回答の詳細を吟味すると高校生群の意識はぼんやりとしているのに対し、大学生群の回答にはかなり懐疑的なものが多い。理論編の「ライフサイクル・世代」の節で、松本滋の青年期の描写を引用したが、そこで彼は、青年期は「下限は１２歳から１４歳位、上限は２０歳から２５歳くらい」でその「基本的特徴として、特に上げられるべきものは、種々のレベルにおける不均衡の状態」であり、「こうした青年期の一般的特徴は、宗教生活の面では、まず懐疑というかたちをとって現れる」[1] と述べている。ここで問題にする高校

生群も大学生群もこの分け方からすれば共に青年期に入っており、大学生群が宗教を明確に否定していないまでも他の群に比べて格段に懐疑的であるのは青年期の特徴のゆえと言えるかもしれない。しかし、Allport.G.W.は、青年の約３分２が懐疑を経験し、しかもそのうちの半ば近くは１６歳を境として生じること、一般に女のほうが男よりもその時期が早いようであること、そしてまた回心の平均も両親の信仰系譜への反逆時期と同じく16歳であること、ただし最近ではその年齢は少し早まりつつあるという証左がこと等を述べている。[2]　本研究の調査結果と、このAllport.G.W.の結果とをどのように解釈したらよいであろうか。筆者の以前の調査[3]が、ここで一つのヒントを与えてくれるように思う。日本のキリスト教校において、小学生から成人までを対象に実施したその調査では、小学生は宗教に対して非常に好意的、中学生は他の群に比して非常に懐疑的、高校になると人生の意味や目的に関する関心が高まりそれにつれて宗教に対しても肯定的になるというＵターン現象を見せ、そのあとは大学生群、成人群へと徐々に上がっていくという結果が得られた。そして高校生から初めた今回の調査でも、キリスト教校の大学生群は高校生群より、より高い成熟度を示している。この傾向は正に松本やAllport の図式に則った発達の仕方である。すなわち、幼い頃には両親や権威ある目上の先生などの言うことを素直に疑うことなく受け入れているが故の素朴で無邪気な信仰心をもち、青年期に入って１６歳前後に幼少期に与えられた宗教観念や習慣に疑問を抱き、そして回心を経験するのである。

さて、ここで問題になっている一般校の生徒・学生の場合は、幼少期に宗教的な事柄や姿勢に関して両親や権威ある目上の人から教えられる機会は非常に少ないということである。それ故、キリスト教を基盤としているヨーロッパの世界や、日本でも宗教教育を基盤にしている学校にいる中学生が抱く懐疑を、日本の一般の中学生や高校生はあまり感じていない、そして大学生位の年ごろになって初めて自分の生き方などを考え始め、疑問を持ち始めるのではないだろうか。

ところで、信仰への肯定的心情が、高年齢になるほど高くなる結果が出ていること、しかしその信じている内容のとらえに関しては、他の群と大差ないことはすで

に述べた。さらに実証編では、Ｆｉｇ．６・４・１「信仰の肯定」に示したように、老年者群は信仰することへの肯定は高いものの、その信仰することに関してさらに突っ込んで細かく尋ねると戸惑いが見られることも見た。すなわち、神を信じることは科学や理性に矛盾するのか、自信があれば信じる必要はないのか、若いうちから神を信じる必要はないのか、神を信じることは現実からの逃避なのかなどに関し、はっきりした表明が見られないということである。このことは何を意味するのだろうか。上記の結果と、林知己夫が「日本ではなんとなく年をとると宗教を信じるようになる。（中略）別の調査でも年をとるとなんとはなしに、素朴な宗教感情が高くなることが示されている。こうなると通説に反し、日本人は本来的にきわめて宗教的であるということになる。宗教教育で叩き込まれなくても、自然に身についていくわけである」[4] と述べていることと考え合わせると、高年齢になるにつれて高まる信仰への肯定は、長年追求していったうえで納得した信仰への肯定というよりは、”なんとはなしの宗教的感情の高まり”であることが推察される。但し、このことが、日本人が通説に反し宗教的であることの証明になるのかは、はなはだ疑問である。宗教をどうとらえるかにより賛否両論があろう。

さて、日本においてキリスト教教育を受けている高校生群・大学生群の間にも、ヨーロッパにおける高校生群・大学生群の間にも、それぞれ宗教的意識の発達・成熟が見られることは先に述べた。その分析はそれぞれのテーマのなかで詳しく述べたが、例を上げれば前者の場合、大学生群は高校生群よりも神とのかかわりが密で苦しいときの神頼みばかりでなく、ふだんの生活のなかにも神とのかかわりがあること、後者のヨーロッパ大学生群の場合、一貫して信仰への肯定や理解の度合いが高校生群より高いことなどがあげられる。

その他目につく点としては、日本の高校生群が２群とも霊の存在を他の群にも増して肯定していることがあげられるが、これは他の先行研究と一致する現代の若者の傾向を示しているのであろうか。

倫理的価値意識となると、壮年者群は一般高校生・大学生群に属し、老年者群は別のグループを構成することになる。物事を判断し行動する際、前者はまわりに合

わせるのがよいのか自分で判断するのがよいのか迷っているが、老年者群は自分で判断するのがよいと考えている。しかし、人の目を気にした”恥”を一番意識しているのも、そして筋を通すことより物事をまるくおさめることに一番気を使っているのもまた、この老年者群である。

”罰”への恐れも、”たたり”への恐れも、老年者群が最も高い。（たたりを恐れる者が半数以上を占めるのは、壮年者群と老年者群である。）

人生で大切なものとしては、日本の一般校の高校生・大学生と壮年者の３群が、第１位に思いやり、第２位に健康をあげているのに対し、老年者群では、第１位に”まごころ”、第２位に健康をあげている。この結果だけでは”まごころ”を大切にする気持が、高齢者により高いとは言いにくいが、筆者のこの女性群と同年齢層の男性群を対象にして行った調査[5]でも、”まごころ”が第１位にあがっていたことを考え合わせると、”まごころ”がいかに高齢の人々に大切にされているかが推し測られる。

自分の毎日の生活の充足感の度合いを、日本の高校生群、大学生群（いずれも一般校とキリスト教校を合わせたもの）、壮年者・老年者群という３群の間で比較すると、年齢が下がるほど減少している傾向が見られる。

以上、年齢との絡みで考察を進めてきたが、これは前の段階を踏まえて次の段階へと進む成熟の行程としてのライフサクルによるものなのであろうか、それともその特性は世代によるものなのであろうか。これを見極めるためには、時系列的研究の上にたって分析しなければならないが、宗教への肯定的な意識や心情は他の先行研究を足掛りにして考えれば、日本の場合はライフサイクル的な要素が強いと言えるであろう。しかし、もっと生活に密着した倫理的価値意識に関しては、例えば高齢になるにつれて見られた種々の傾向ーーたたりを恐れたり、人の目を気にする恥の気持が強かったり、”まごころ”を人生で最も大切なものとする心などーーは、世代としての特徴なのではないだろうか。時系列的研究が必要なことは言うまでもないが、この調査結果は、少なくとも上記のような高齢の日本人の考え方を、現在の日本人一般の考え方のようにして論を進めることに警告を発しているように思わ

れる。

第３節　総括

それでは、包括的にみた日本人女性の特性とは、結局どのようなものとして浮かび上がってくるのであろうか。以下、一般の日本人女性の特性を中心に、全体をまとめていく。

一般の日本人群では、信仰することに対する肯定の割合は、年齢が上がるにつれて高まっていく傾向があり、壮年者・老年者群は高いが、高校生・大学生群は低い。しかし、日本の土壌にあっても、キリスト教教育を受けている者たちの、信仰に対する肯定的な意識や心情は高い。

自分自身は神の存在を認めていると表明する者は、どのグループでも半数を超えるが、日本人の場合、このことが即、現実にある宗教団体に入ることを、必ずしも意味しない。ヨーロッパ群の場合「神の存在を認めている」者のほぼ全員が具体的にいずれかの宗教団体に所属しているのに対し、日本人の場合、高齢になるほど宗教に属する者たちの数が増加してはいるものの、全般的には非常に少ない。一般の若者たちはほとんど所属していない。日本でキリスト教教育を受けている生徒・学生でも、現実に宗教団体に属している者たちは、信じている者の約３割強に過ぎない。

神とのかかわり方としては、日本人群の場合、キリスト教大学生群を除いて、全般的に苦しいときの神頼み的傾向が強い。あるいは、折々の習俗的信心への参加という程度のケースが多い。もちろんヨーロッパの高校生・大学生群も、苦しいときに神に頼るが、苦しいときばかりでなくふだんの生活のなかにも神とのかかわりがある。また、一般に日本人群においては、キリスト教校の大学生群を除いて、神の教えの理性的追求よりも素直に生きることで十分であるという考えが強い。

さて、その信仰の対象となっている神について日本人は、どのようにとらえているのであろうか。自然の太陽や山川を神とするのか、きつねなどの動物も神になりうるのか、人間は死後神になるのか等、どこまでを神とするかに関しては、年齢により異なるものの、全般的に多神教的であり、八百万の神々への信仰心がある。少なくとも、複数の神々の存在を否定してはいない。日本でキリスト教教育を受けている者たちの場合、神の一般的概念としては「神は偉大で何ものにも置き換えられない」ということを支持しているが、ひとたび具体的な神の姿となると、多神教的な神のとらえを否定してはいない。しかし、自分たちが神を想うときには、八百万の神々を想定してるわけではないようでもある。ヨーロッパの高校生・大学生は、人それぞれが自分の信じる神々を拝むことを必ずしも否定しているわけではないが、八百万の神々の存在をきっぱりと否定し、唯一絶対の神を信仰している。

神に母性性を感じるか父性性を感じるかというとらえかたは、何れのグループにとってもさほど意味のあるものではない。いわゆる父性性・母性性が意味すると思われる内容（例えば厳しさ・暖かさ）が、神を父親像と結びつけるか母親像と結びつけるかの鍵とはなっていない。これは先行研究のなかのVergote,A 等の分析結果[6] と同じである。神のイメージがぼんやりしている一般高校生群を除いて被調査者のいずれの群も、神を厳しく怖いものとはとらえていないが、日本人の場合は人格神としてもとらえていないようで、”大いなる意志のような存在”として認めていると思われる。さらに、日本のキリスト教教育を受けている高校生・大学生群は、この神が厳しく怖いものでないばかりか、包み込むような暖かさのあるものであるととらえている。ヨーロッパの高校生・大学生群は、日本人のどの群よりも高い率で神が厳しく恐ろしいものであることを否定しているが、偉く畏れ多いものというイメージは抱いている。

自然に対しては、いずれの群も、仲間としてみる気持が強い。ただし、日本人はその仲間意識と同時に、自然を神聖視し、畏れ敬う気持もあるのに対し、ヨーロッパの生徒・学生は神から造られた同じ被造物としてみている。キリスト教大学生群の場合は、この中間に位置する考え方を示している。

また、一般の日本人の自然観には、アニミズム的傾向も見られる。

死後の世界に関する反応の特徴は、いずれの群でも、暗く・寂しく・恐ろしく・汚れた・惨めな死後の世界を否定している者が、非常に多いということである。それでは果たして喜びに溢れた幸せな世界であるのかとなると、日本人群では、一般大学生群が否定している以外は、「どちらとも言えない」という反応が圧倒的に多い。これも他の項目には見られない特徴的な反応である。これに対して、ヨーロッパの生徒・学生は、死後の世界は喜びに溢れた幸せな世界であり、そこで人は神に出会い、大切な人々と再会し、永遠に生きるという考えを表明している。

自分が犯した悪い行ないが招くであろう報いに関しては、年齢や受けている教育とは関係なく、日本人全般に、”罰”に対する恐れの気持が強い。しかし、”たたりへの恐れ”や”恥への懸念”に関しては年齢と関係しており、年齢が上がるにつれてたたりや恥を恐れる気持が強くなっていく傾向がある。ヨーロッパの生徒・学生たちには、そのような悪い行ないに対する報いのような意識はあまり見られず、特に”たたり”に対しては強く否定している。

”恥”という概念が、日本人特有のものであると断言することはできない。まず”恥”が意味する内容を吟味する必要がある。人の目を意識した恥の気持は高年齢層にかなり根強く残っているが、他の日本人群では大して特徴的なことではない。しかし、罪の意識と重なりあうような恥の意識・心情は、年齢、文化、教育のいかんにかかわらず、どのグループにも見られる。

善悪の判断に関しては、ヨーロッパの生徒・学生たちも、状況により異なる可能性がありうることを認めないわけではないが、日本人より、より筋を通すことを主張しているように思われる。老年者群は日本人のなかでも、筋を通すことより物事をまるくおさめることに一段と気を使っている。

日常の物事の判断や行動に関しては、日本の一般高校生群・大学生群・壮年者群は、まわりに合わせるのがよいのか自分で判断したほうがよいものか迷っているという状態にある。老年者群は理屈のうえでは自分で判断するのがそして率直であるのがよいと思っているものの、現実の生活においては他の群にもまして、まわりの

状況に気を使っている様子が伺われる。ヨーロッパの生徒・学生たちも、現実の生活においては、まわりの状況が判断や行動の基準になりうることを肯定はしないまでも否定もしていないが、”考えかたとしては”自分で判断して行動するのがよい、おおかたの人の意見で事を決めるのはよくないと思っており、まるくおさめるより物事の筋を通すこと、いざこざを避けて相手に合わせずに正しいと思うことは通すことを支持している。日本のキリスト教高校生群・大学生群も、現実の生活ではまわりの状況に左右されうるが、一応考えとしては”自分で判断して行動するのがよい”と思っている。しかし、”物事の筋を通すこと””正しいと思うことは通すこと”に関してはヨーロッパの学生たちのような明確な反応は示していない。

上記のような各群の反応を考え合わせると、現実の生活においてまわりの状況を物事の判断や行動の基準とするということは、日本人ばかりでなく他にもありうることだが、やはり一般の日本人にはその傾向が一段と強く、考えのうえでさえも多くの者がそれを肯定している、あるいは少なくとも否定していないという点は、日本人の特性でありうる。

恩・義理・人情に関する意識や心情は、年齢や受けている教育に関係なく、ヨーロッパ群に比べて日本人全般に、より強く見られる傾向である。しかし、ヨーロッパ人にもそのような意識や心情、そしてそれにまつわる戸惑いはあり、源了円も指摘しているように[7]、日本人に固有の心情とは言い切れない。また日本人でも恩・義理・人情にかかわる項目にはすべて肯定の反応を示しているわけではなく、林知己夫も指摘しているように[8]、現実の日本人は、舞台で演じられるようなまったくの恩・義理・人情人間というわけではない。

人生で大切なものとしては、年齢・教育・文化を問わず、どのグループにおいても、上位３以内の支持を得た価値は、”思いやり”であり、上位４位以内の支持を得たのは”愛”である。この２つは非常に似通った概念ではあるが、日本人群は全般的に”思いやり”をより支持し、ヨーロッパ群は”愛”をより支持している。”愛”についてみるとキリスト教の土壌の強さに比例して順位が高くなっていることが分かる。　このことから”思いやり””愛”のような価値は、洋の東西を、年齢

、教育を問わず、人間である以上共通に大切にしている価値であるといえるだろうが、”思いやり”という概念はどちらかといえば日本人に親しみやすく”愛”という概念はキリスト教の土壌でとらえやすいものであるといえよう。”まごころ”も、人間として全般的に大切にされている価値ではあるが、日本人の高年齢層には特に大切にされている価値のようである。

反対に非常に低い支持しか得られない、あるいはむしろ否定されている価値をみると、そのトップは”権力的価値”で、どのグループにおいても最下位で強く否定されている。権力的価値に続いて低い支持率のものは”経済的価値”であり、それに”美的価値”が続く。両者ともに全般的に見て下位２～４位以内にある。

以上の結果を見ると、種々の価値に対して被調査者がどの程度大切であると思っているかは、文化や受けている教育、年齢によって多少のニュアンスの違いは見られるものの、反応が顕著であった価値に関しては、それらの差異を越えて、人間としての意識・心情によって共通であるといえる。

”一人一人の人生にはみな意味がある”ということに対しては、年齢、教育、文化の別なく、どのグループにおいても肯定の反応が非常に高かったが、現実に自分の毎日の生活が充実しているかということになると、必ずしもそうではない。日本人の高校生群、大学生群、壮年者・老年者群の３グループ間で比較すると、日々の充足感は、年齢が下がるほど減少している傾向が見られる。この結果は、佐藤文子の調査結果[9]と一致する。またFrankl.V.E. も指摘しているように[10]、”人生に意味があると確信すること”と、”日々の充足感”との間には相関関係が見られるが、人生に意味があると確信することが、即日々の充足感につながるというわけではなく、日々の充足感には他の種々の要素が交ざっていることも示唆されている。

（１）松本滋　１９７９　宗教心理学　東京大学出版会　pp.９２－９４

（２）Allport,G.W.　１９５１　The Individual and His Religion
- A Psychological Interpretation. Constable and Co.
オルポート，G.W.　原谷達夫（訳）　１９５３　個人と宗教　岩波書店
p.３６

（３）山縣喜代　１９９０　生き方に関する価値観の発達－シュプランガーの価値の６類型を中心に－　人間性心理学研究　７，　pp.　６４－７５

（４）林知己夫　１９８８　日本人の心をはかる　p.９５

（５）山縣喜代　１９９０　高齢の日本人の宗教的意識と生き方にかかわる価値観　（兵庫県西宮市の教育長に提出）

（６）Vergote,A. & Tamayo,A.　１９８０　The Parental Figures and the Representation of God.　Mouton.
（ここの引用は、Brown,L.B.の　The Psychology of Religious Belief, pp.８１－８２による）

（７）源了円　１９６８　徳川時代の文学に現われた義理と人情
高坂正顕（編）　近世日本の人間尊重思想　上　福村出版　p.１０９

（８）林知己夫　１９８８　日本人の心をはかる　p.　６０

（９）佐藤文子　１９７５　実存心理検査－ＰＩＬ－
岡堂哲雄（編）　心理検査学－心理アセスメントの基本－　垣内出版
pp.　３３５－３３６

（１０）Frankl,V.E.　１９７０　The Will to Meaning-Foundations and Applications of Logotherapy.　New American Library.

第９章　本研究の諸制約

第８章で、本研究の実証結果を総括した。日本人の生き方意識の特性を、単に文献や日々の事象を解釈することから把握するのではなく、現実の生のデータをもとに把握し、その結果をもとに考察したい、そして今後の論議の共通の足場としたいというのが、本研究のねらいであった。そして前述の結果は、それなりに当初のねらいを達成したように思う。しかし同時に、この結果は、非常に限られた制約のもとで出てきた結果でもあることを、認識しておく必要がある。

そこで本章では、本研究の諸制約からくる限界の主なものを列挙しておくこととする。

① テーマと方法の関連からくる制約

どのような調査にしろ、人間にかかわる内容の調査であれば、実証研究は非常に難しい。特に統計的手法による検証は、他にはない利点は多々あるが－それゆえ今回もこの手法を導入したのであるが－おのずから限界があることは、誰しも認めるところであろう。そして、人間性に直結するような内容の中でも、宗教的意識や価値観などの人間の心の内奥を探究するようなことは、果たして実証研究の対象となりうるのだろうかという懸念は常につきまとう。たしかに、宗教や価値自体の本質の追求、それへの個人個人の主体的かかわりに 実証研究がどこまで入り込めるか、果たして入り込めるものなのかは、大いに疑問がある。しかし、この深遠な領域にかかわっている人間の意識や心情の表層的現象を対象とするならば、問題は別である。したがって、本研究で取り上げる領域は、この後者の実証可能な領域であり、さらにその中のほんの一小部分に限定されたものである。

さらにまた、本研究の調査・分析が、実証可能な領域を対象としたものであっても、その結果は質問紙法という、一定手法を用いた一時点での部分的確認に過ぎな

い。もちろん、種々の似通った発問に対する回答の整合性にも留意したつもりであるし、林知己夫も「同じ人を３回にわたって調べたパネル調査の結果、回答者はいつも必ずしも同じ回答をするとは限らないが、３回を通して、大体どのような意見をもつかを、考えの筋道をみる方法を用いて検討すると大きな差異を示すものは少なかった」[1] と述べていることもうなづけることであるので、調査で得られた結果が、一回かぎりの偶発的なものであるとは思わない。しかし、さらに幅広く他の手法も取り入れて、調査・分析する必要はあろう。

また、ここに浮上してきた種々の特性は、多数の人々の意識であることは確かだが、それは日本人であれば個々人が皆このような意識や心情をもっていることを意味しない。同様のことがキリスト教校の生徒・学生、ヨーロッパ校の生徒・学生にも言える。この点も論を進めるときに留意すべき点であろう。

しかしいずれにせよ、本研究のような現象面を対象とした研究は、そのテーマ自体のもつ深遠さを思うとあまりにも表層的、あまりにも部分的であるとの感は免れ得ないにしても、やはり貴重な一般的・実態的なデータとしてなくてはならないものであり、本質的研究のためにも大いに役立つものであろうと思っている。

② 先行研究から来る制約

人間の内面にかかわるような内容は、上述のような難しさから実証研究としてはとかく敬遠されがちであった。また、”いわゆる”科学的研究の見地から没価値的な内容こそ、研究の対象になりうるものであるという通念もあった。それら多くの理由からであろう、筆者がねらいとしているような内容を追求した、実証的な先行研究は非常に少なく、したがってそれらを踏まえての研究を進めることができにくかったという限界を、本研究はもっている。日本の研究の場合、宗教心自体を云々する研究はあってもその中身を吟味したものはほとんどなく、逆に西洋の研究は詳細な中身はあるが、内容があまりにもキリスト教的で、日本人の特性を測定するには不向きであった。

このような状況から、それらわずかな先行研究の一部を取り入れながら、独自のやり方で研究を進めたわけであるので、さらに多くの研究を重ねないかぎり、本研究の結果も未完の途上的結果であるという限界を－どの研究結果もそうであろうが今回の場合先行研究との関連が薄いのでなおさらこの限界がある－免れることはできないであろう。

③　被調査者に起因する制約

本研究では、日本人の生き方意識を、宗教的意識および倫理的価値意識の側面から吟味することにより、その特性を浮上させようというのがねらいであったので、調査票の配布にあたっては、さまざまなカテゴリーに属する人々に依頼する必要があった。地域的にも年齢的にも広範囲にわたり、その回答の収集は困難を極めたが、多くの方々の尽力でどうにか分析可能なところまでこぎつけることができた。しかし、各群の人数などにはばらつきがあり、サンプル数もより多いほうが好ましかったケースもあるが、現段階での個人の調査としては、これが限界であったように思う。

また、被調査者の居住地域も統制したかったが、必要なサンプル数の確保を主眼に置いたので、かなりのばらつきが出た。しかし、結果的には地域の条件を越えて文化的・教育的影響力が大きくはたらくという結果を得て、思わぬメリットもあった。しかしながら、今後の研究としては、やはり地域性に焦点を当てた調査・分析も必要であろう。

しかし、このような実証研究は、地域の問題もさることながら可能な限りの条件統制を行っても、諸要素を不可分離的に内包しているということも認識しておかなければならないであろう。

ところで、筆者の前回の調査[2]で小学生や中学生からも多くの興味深い知見を得たという体験から、調査の対象としては、今回もせめて中学生からを対象にしたいと考えたが、低年齢層に対象を広げると内容が限定されることになるので断念し

た。しかし、それでもなお、高齢の被調査者には内容的にも、量的にも負担が大きすぎるということで、内容をできるだけ変えないようにして一部補足修正し、調査票も２部に分けた。一般の被調査者と同じ調査票を配布したところで、回答者に負担が大きすぎれば当然正確な反応は得られないことになるので、致し方のないことではあるが、老年者群と他の日本人群と全く同じ尺度で測定したとは言い切れない限界もある。同様に、あるいはそれ以上に、英訳された質問文がどの程度日本人と同じようにアイルランドや英国の被調査者に理解されたのかということも、英文調査票の作成にあたってはかなり綿密な手続きを踏んだとはいえ、懸念が残る。しかし、たとえ全く同じ文であったとしても違うように解釈すること自体が文化の違いであろうし、今迄西洋のものが日本に導入されたときも同じ問題が起こったことを思えば、これは逃れることのできない限界なのかもしれない。そしてこの限界を意識して大切にすることが、ひいては国際社会のなかにあって、協調していくことへとつながる重要な鍵なのかもしれない。

（１）林知己夫　１９８８　日本人の心をはかる　p.３７

（２）山縣喜代　１９８７　生きる意味の意識と価値観に関する研究
－自己教育力の心理学的基礎をめぐって－　大阪大学修士論文
（未公刊）

第１０章　本研究の意義と展望

現代日本女性の生き方意識の特性を、実証研究により把握することを目指して本研究を進めてきた。それは、生き方意識という広範な領域の中でも、特に”宗教的意識や心情””倫理的価値意識”に焦点をあててなされた。その調査・分析・考察の結果導き出された諸要素・諸結論の総括は、第８章ですでに述べた。その結果は、多くの制約のもとで行われた、限界のある、ささやかな規模のものではあっても、以下の点において意義があったのではないかと思っている。

その第１点は、”女性の”意識や心情の調査・分析を、”女性が”綿密に行ったということである。序章や理論編で触れたように、今までの研究には男性を対象とした、男性の分析による研究が目立っていた。これも十分に意義あることではあるが、人間は男性と女性で構成されている以上、片手落ちであることは否定できない。その意味で、女性性をめぐって考察し、種々のカテゴリーの女性を対象に調査・分析した本研究は、今後の研究の踏み台として、意味あるものとして位置付けられよう。

第２点目としては、”生き方意識”という人間の心の内面にふれる意識の”実証研究”を、試みたことである。

今までのこの分野に関する研究は、文献研究や日々の現象の解釈をもとに論議したものがほとんどで、実証研究は数えるほどしかないというのが現状である。本研究では、第９章で触れたように、その人間の内面にかかわる意識の極表層の現象、しかもその極一小部分であるという限られたものではあるが、生のデータを回収したことにより、同じ客観的資料をもとに議論が進められるという素地を提供したことになると思っている。

また、心理学研究の分野においても、今までとかく敬遠されていた、人間の内面に触れる領域への挑戦という意味で、１つの意味をもっているように思う。もちろ

ん人間の心の中に土足で踏み込むような暴挙を企てるつもりは毛頭ないが、人間というものを研究する以上、最も人間らしい内面の部分をブラックボックスとして刺激に対する反応のみを対象としていたのでは、研究として大切な部分を欠くことになる。確かに長年積み上げられてきた研究の成果は、人間心理の解明に一役も二役もかっている。そして、それらの礎である人間の内面を直視する研究は、現実問題としてなかなか困難で、導き出される結論もそのテーマが難解なだけに、さまざまな疑問は残る。しかしそれでも、グローバルな意味での、真の意味での人間性研究のためには、この領域の研究は欠かせないものであり、今後、一層の工夫と努力を要求される分野であると思っている。

第３点は、日本人の特性を探究するにあたって、”現代の”日本人の、”若年層から老年層まで”の種々のライフサイクルにある者、種々の世代に属する者たちを対象に研究を進めたことである。日本人の特性はこれこれであるという議論の中には往々にして、日本のどの時代のどの年齢層を対象にして議論をしているのかはっきりしていないものが多い。日々の現象に対する筆者の観察からすると、一般的な日本人の特性として議論の対象となっているその日本人の特性は、かなり高齢の日本人のそれであって若者たちの特性ではないのではないか、あるいはそれは徳川時代の一般的日本人の特性ではあったかもしれないが、現代の日本人のものではないのではないか、たとえ今日の日本人の特性であってもかなり変形しているのではないだろうかと思われることが多々ある。このような意味から、本研究が、現代の種々の年齢層の日本人を対象として研究をすすめ、どの部分が年齢を問わず現代の日本女性全般に共通な特性なのか、どの部分はある年齢層に特有なことなのかを明確にしたことは意義あることであったと思っている。

第４点目としては、日本人の特性を把握するために、日本人によって作成された調査票により調査し、西洋人をも比較のためにその対象に入れたことである。その対象が高校生・大学生に限られていたために、全体を見渡した結論は得られなかったものの、少なくともいくつかの意識や心情が、日本人に固有なものなのかあるいは他の国の人々にも見られることなのかは、吟味できたように思う。文化・国境を

越えて人間として共通に抱いている意識や心情を把握し、同時にそれぞれの文化や国特有の、あるいはその文化や国が比較的強く持っている意識や心情を知り、互いに尊重しあうことは、国際社会の中にあって非常に大切なことであろう。本研究が、その共通点・相違点のいくつかを指摘できたことはその一助となり得よう。

さらに本研究は、通説として日本にあるいは西洋のキリスト教文化圏に固有の特質とされるいくつかの意識や心情が、必ずしもそうとは言い切れないという結果をも導き出した。本研究で得られた結果が、確かに一般的な傾向であることを確認するためには、さらに多くの調査・分析を重ねることが必要であろうが、少なくとも本調査のこの結果は、安易に日本人の特性、西洋人の特性と種々の意識や心情を断定することに警告を発していると思われる。

第５点としては、生き方意識にどこまで教育というものが影響し得るかということを、一部の領域ではあるが、具体的に明示できたということである。学校で特に宗教教育を受けていない日本の生徒・学生群と、キリスト教文化圏で生活している生徒・学生群の間に、日本においてキリスト教教育を受けている生徒・学生群を置くことによって、連鎖的な比較を試み、文化的土壌の影響が強く及ぶ範囲と事柄、教育による影響が強い範囲と事柄を抽出しようと試みた。筆者の拙い分析能力の故に、貴重なデータがどこまで十分に活用されたかには疑問が残るが、それでも予想以上に文化、教育の影響力の大きさを示す結果を手にすることができ、今後の研究のための貴重な示唆が得られたと思っている。

以上、本研究にはいくつかの意義があることを並べたが、これは当然のことながら、長い道のりの小さな第一歩であって、これから進むべき道、携わっていきたい領域は、あまりにも遠大、広範、深遠で見通しもつかない。ここでは少なくとも次の一歩の足がかりになると思われる方向を、今後の展望として記しておく。

今回は日本の土壌においてキリスト教教育がどの程度影響力をもちうるかということが大きな関心事の１つであったのでーーヨーロッパの他の年齢層のデータを大量に回収することが困難であったこともあるがーーヨーロッパの被調査者を高校生・大学生に限定した。しかし、日本女性一般の特性を明確に浮上させるためには、

若年者層のみでなく、壮年者層、老年者層をも対象に比較する必要があると思っている。また、ヨーロッパだけでなく、日本と同じアジアの人々、例えば隣国の韓国などでの調査も出来れば、さらにさまざまな特性や普遍性が明確に浮上してこよう。

また、日本のキリスト教校で学んだ壮年・老年の卒業生たちの調査も必要であろう。日本のキリスト教校で学んでいる高校生・大学生は、日本の一般校の生徒・学生たちと多少異なる反応を示していたが、その生徒、学生たちが壮年や老年に至る過程において、一般校の生徒・学生達とどのように異なった生き方意識の発達を示すのであろうか、あるいは示さないのであろうか。一方、彼らはヨーロッパ校の生徒・学生達とも異なった日本的な反応をも示したが、その傾向は年を経るにつれてどのように変化していくのか、いかないのか。これらの調査も、真の教育の影響力を測るうえで欠かすことはできないであろう。

キリスト教校で学んでいる者たちは実証編でも述べたように、キリスト教信者というわけではない。むしろキリスト教信者は非常に少ない。その意味で、本研究の結果は日本のキリスト教信者の反応というわけではない。日本の土壌のなかでキリスト教を現に信じている信者たちだけを対象にした調査・分析にも関心がある。

さらに、年齢の高いほうへ向けての調査・分析の拡大だけでなく、低年齢層の調査も必要であろう。今回は調査したい内容が複雑で哲学的なことを多く含んでいたので、調査対象を高校生以上に絞らざるを得なかったが、今後中学生・小学生むけの調査方法も開発して、低年齢層での意識や心情を探ることも試みたいと思っている。幼少期あるいは思春期のどのような段階で、どのような意識や心情が育成されるのか、それぞれの段階のもつ意味、以後の人生に及ぼす影響力とはどのようなものなのかにも大いに関心がある

また、今回の場合、時系列的研究ではないので、各年齢層の反応の違いが出てきていても、それが果たしてライフサイクルによるものなのか、世代によるものなのか断定することはできなかった。今回の調査票と同じものを使って、何年か毎に調査を継続できれば、さらにいろいろな特性が明確になり、発達段階における特性も

把握できて時宜に適った教育への可能性を広げることにもなろう。

また本研究では、３件法による回答や、ＹＥＳ・ＮＯ方式で答えられたものを統計的手法にかけて分析したものが主であり、文章完成法や自由記述形式で書かれた回答は、統計的な結果を解釈するうえでの背景としてのみ使用したが、今後はそのように一段と深く表現されているデータを分析し、被調査者の心のもう一段深いレベルの意識や心情にも触れていくことが、このテーマの場合は特に必要であろうと思っている。そのような分析の結果、浮上してきた課題を切り込み口としてインタヴューをしたり、事例研究ができれば、さらに深められた内容の把握が可能となろう。

上記のような今後にむけての種々の研究は、人間として文化や国境を越えて共有する普遍的な意識や心情、それぞれの国民に特有の意識や心情を、種々の側面から決め細かく洗い出す手掛かりとなるであろうと思っている。

日本人が国際人として立っていくということ、あるいは子どもたちが国際人として育っていくということは、よりヨーロッパ的になるということではないだろう。しかし、同時に日本の国際社会における立場が大きくなったからといって日本人の中だけで通用するようなメンタリティを押し通すならば、そこには当然のことながら問題が起きてくる。

互いに共有する人間性、互いに異なる国民性、教育や年代により変わりうる種々の意識や心情の傾向、これらを把握し、尊重しあうことは、国際相互理解を深め、協力していくために大切なことであろうと思っている。

参考文献

阿部正雄　１９９０　アメリカにおける仏教事情－禅・真宗・キリスト教－
研究所報，２３　大谷大学真宗総合研究所

間場寿一（編）１９８６　社会心理学を学ぶ人のために　世界思想社

Albert,A.A. & Porter,J.R. １９８６　Children's Gender Role Stereotypes: A Comparison of the United States and South Africa.　Journal of Cross-Cultural Psychology,１７（１），pp.45-66

Allport,G.W.　１９５１　The Individual and His Religion -A Psychological Interpretation. Constable and Co.
オルポート　G.W.　原谷達夫（訳）１９５３　個人と宗教　岩波書店

Allport,G.W.　１９５５　Becoming - Basic considerations for a Psychology of Personality.　Yale University Press.

青柳文雄　１９８６　日本人の犯罪意識　中央公論社

Batson,C.D. １９８６　An Agenda Item for Psychology of Religion:Getting Respect. Journal of Psychology and Christianity,５（２），pp.6-11

Beauvoir,S.　Le Deuxième Sexe.
ボーヴォワール　S.　生島遼一（訳）１９６６　第２の性　人文書院

Benedict,R. １９６７ The Chrysanthemum and the Sword. Houghton Mifflin Co.
ベネディクト R.　長谷川松治（訳）　１９７２　菊と刀－日本文化の型－
社会思想社

Bollnow,O.F.　１９７６　Erziehung zur Frage.
ボルノー，O.F.　森田孝・大塚恵一（訳編）１９７８問いへの教育
－哲学的人間学の道－　川島書店

Britanica　１９８１　Book of The Year.

Brown,L.B.　１９８７　The Psychology of Religious Belief. Academic Press.

文化庁　１９８２，１９８５，１９８６，１９８７　宗教年鑑　ぎょうせい

Cantril,H.　１９５０　The "WHY" of Man's Experience.　The Macmillan Company.
キャントリル　H.　安田三郎（訳）１９５７　人間経験の謎　創元社

Carter,J.D. １９８６　The Psychology of Religion: Present Concerns,Future Issues.　Journal of Psychology and Christianity,５（２），pp.20-24

Castañeda,J.・長島正（編）　１９８９　ライフサイクルと人間の意識　金子書房

Cobb,J.B. Jr.　１９８３　Beyond Dialogue.　Fortress Press.
カブ J.B. Jr.　延原時行（訳）　１９８５　対話を越えてーキリスト教と仏教の相互変革の展望ー　行路社
Collins,G.R.　１９８６　The Psychology of Religion Today. Journal of Psychology and Christianity,５（２）, pp.26-30
Crumbaugh,J.C.　１９６８　Cross-Validation of Purpose-in-Life Test based on Frankl's Concepts. Journal of Individual Psychology, ２４, pp.74-81
Crumbaugh,J.C. & Maholick,L.T.　１９６４　An Experimental Study in Existentialism; The Psychometric Approach to Frankl's Concept of Noogenic Neurosis.　Journal of Clinical Psychology, ２０, pp.200-207
Davies D.　１９７８　The Notion of Salvation in the Comparative Study of Religions.　Religon,８, pp.85-100
Dawson,L.L.　１９８７　On References to the Transcendent in the Scientific Study of Religion: A Qualified Idealist Proposal.　Religion,１７, pp.227-250
De Vogler,K.L. & Ebersole,P.　１９８０　Categorization of College Students' Meaning of Life.　Psychological Reports,４６, pp.387-390
De Vogler,K.L. & Ebersole,P.　１９８１　Adults' Meaning in Life. Psychological Reports,４９, pp.87-90
De Vogler,K.L. & Ebersole,P.　１９８３　Young Adolescents' Meaning in Life Psychological Reports,５２, pp.427-431
土居健郎　１９７１　「甘え」の構造　弘文堂
Dowling,C.　１９８１　The Cinderella Complex - Women's Hidden Fear of Independence.　Summit Books
コレット D. 柳瀬尚紀（訳）　１９８５　シンデレラ・コンプレックス　ー自立にとまどう女の告白ー　三笠書房
Ebersole,P. & De Vogler,K.L.　１９８１　Meaning in Life: Category Self -Ratings.　The Journal of Psychology, １０７, pp.289-293
Ebersole,P. & Sacco,J.　１９８３　Depth of Meaning in Life: A Preliminary Study. Psychological Reports, ５３, p.890
越前喜六・斎藤いつ子（編）　１９８６　多神と一神との邂逅ー日本の精神文化とキリスト教　平河出版社
Eisenberg, M.　１９８１Life Review and Life Preview.　International Forum for Logotherapy.　４（１）, pp,49-51
遠藤周作　１９８０　侍　新潮社

遠藤周作　１９７７　日本人はキリスト教を信じられるか　講談社

Erikson,E.H.　１９５９　Identity and the Life Cycle.　International University Press.

European Value Systems Study Group　１９８５　日米欧価値観調査　余暇開発センター

Feiner,J. & Vischer L. (ed.)　１９７５　Neues Glaubensbuch - Der Gemeinsame Christliche Glaube.　Herder.

ファイナー J. & フィッシャー L. （共編）　小林珍雄（訳）

新しい信仰の本ーキリスト教新全書　エンデルレ書店

Fowler,J.W.　１９８１　Stages of Faith: The Psychology of Human Development and the Quest for Meaning.　Herper & Row.

Fowler,J.W.　１９８２　Faith Development in the Adult Life Cycle.　Winson　Goody.

Frankl,V.E.　１９４７　Ein Psycholog Erlebt das Konzentrationslager -Österreichische Dokuments zur Zeitgeschichte. Verlag für Jugend und Volk.

フランクル V. E.霜山徳爾（訳）　１９６１　フランクル著作集１　夜と霧　みすず書房

Frankl,V.E.　１９５２　Aerztliche Seelsorge. franz Deuticke

フランクル V. E.　霜山徳爾（訳）　１９５７　フランクル著作集２　死と愛　みすず書房

Frankl,V.E.　１９５０　Zehn Thesen über die Person.

１９５１a　Homo Patiens, Versuch einer Pathodizee.

１９５１b　Logos und Existenz.

フランクル V. E.　真行者功（訳）　１９８６　苦悩の存在論　新泉社

Frankl,V.E.　１９５９　Das Menschenbild der Seelenheilkunde. Hippokrates.

フランクル V. E.　宮本忠雄・小田　晋（共訳）１９６１　フランクル著作集６　精神医学的人間像　みすず書房

Frankl,V.E.　１９７０　The Will to Meaning - Foundations and Applications of Logotherapy.　New American Library

Frankl,V.E.　１９７８　The Unheard Cry for Meaning - Psychotherapy and Humanism.　Washington Square Press.

Frankl,V.E.　１９８１　Das Leiden am Sinnlosen Leben Psychotherapie fur Heute.　Herder.

フランクル V.E.　中村友太郎（訳）　１９８２　生きがい喪失の悩み

－現代の精神療法－　エンデルレ書店
Frankl,V.E.　１９８４　Man's Search for Meaning - An Introduction to Logotherapy.　Simon & Schuster.
Fromm,E.　１９５６　The Art of Loving; An Enquiry into the Nature of Love. Harper & Brothers Publishers.
福田一政（編）　１９９０　宗教情報５３　鈴木出版
古屋安雄　１９８６　宗教の神学－その形成と課題－　ヨルダン社
Gilligan,C.　１９８２　In a Different Voice - Psychological Theory and Women's Development.　Harvard University Press.
濱口惠俊　１９７７　「日本らしさ」の再発見　日本経済新聞社
濱口惠俊１９８２　間人主義の社会日本　東洋経済新報社
Hardcastle,B.　１９８５　Midlife Themes of Invisible Citizens: An exploration into How Ordinary People Make Sense of Their Lives. Journal of Humanistic Psychology, ２５（２）, pp.45-63
Harding,M.E.　１９７１　Woman's Mysteries: Ancient and Modern. G.P.Putnam's Sons.
ハーディング M.E. 樋口和彦・武田憲道（共訳）　１９８５　女性の神秘－月の神話と女性原理－　創元社
Harman,W.　１９８１　Science and the Clarification of Values: Implications of Recent Findings in Psychological and Psychic Research.　Journal of Humanistic Psychology, ２１（３）
Hashimoto,E. & Shimizu,T.　１９８８　A Cross-Cultural Study of the Emotion of Shame/ Embarrasment : Iranian and Japanese Children. Psychologia,３１（１）, pp.1-6
林知己夫　１９８１　日本人研究三十年　至誠堂
林知己夫　１９８８　日本人の心をはかる　朝日新聞社
Heisig,J.W.　１９７９　Imago Dei: A Study of C.G.Jung's Psychology of Religion.　Associated University Presses.
ハイジック　J.W.　纐纈泰兵・渡辺学（共訳）　１９８５　ユングの宗教心理学－神の像をめぐって　春秋社
Hick,J.　１９８０　God Has Many Names - Britain's New Religious Pluralism. The Macmillan Press.
ヒック J.　間瀬啓允（訳）１９８６　神は多くの名前をもつ－新しい宗教的多元論－　岩波書店
樋口清之１９７７　日本女性の生活史　講談社

ホーン川嶋瑶子　１９８８　女たちが変えるアメリカ　岩波書店
堀一郎　１９６２　日本宗教の社会的役割　未来社
堀一郎　１９８６　日本の宗教　大明堂
井門富二夫・吉田光邦（編）　１９７０　世界の宗教１２　日本の宗教　淡交社
Ikenga-Metuh,E.　１９８５　The Paradox of Transcendence and Immanence of God in African Religions - A Socio-Historical Explanation- . Religion, １５, pp.373-385
稲村博（編）　１９８７　女３０代にして惑う　現代のエスプリ２３６　至文堂
井上英治・中村友太郎（編）　１９８４　宗教のこころ－日本の宗教とキリスト教　みくに書房
石井完一郎・笠原嘉（編）　１９８１　現代のエスプリ１６８　スチューデント・アパシー　至文堂
石田英一郎　１９７０　人間と文化の探究　文芸春秋社
磯部忠正　１９８３　日本人の信仰心　講談社
James,W.　１９０１－１９０２　The Varieties of Religious Experience - A Study in Human Nature. Being the Gifford Lectures on Natural Religion. Delivered at Edinburgh.
ジェームス W. 桝田啓三郎（訳）　１９６２　宗教的経験の諸相上・下　日本教文社
Jones,R.H.　１９７９　Jung and Eastern Religious Traditions. Religion, 9, pp.141-156
Jourard,S.M. & Landsman,T.　１９８０　Healthy Personality - An Approach from the Viewpoint of Humanistic Psychology. Macmillan Publishing.
Jung,C.G.　１９３１　Wirklichkeit der Seele, Anwendungen und Fortschritte der Neueren Psychologie. Rascher Verlag.
ユング C.G.　江野専次郎（訳）　１９７０　ユング著作集３　こころの構造－近代心理学の応用と進歩　日本教文社
Jung,C.G. Psychologie und Religion. Die Frau in Europa.
ユング C.G.　浜川祥枝（訳）　１９７０　人間心理と宗教　ユング著作集４　日本教文社
Jung,C.G.　１９３１　Seelenprobleme der Gegenwart. Rascher Verlag.
ユング C.G.　高橋義孝・江野専次郎（訳）　１９７０　現代人のたましい　日本教文社
梶田叡一・新井郁男・菊池城司　１９７５　青少年の内面的成熟に関する研究　教育の成果分析研究会

梶田叡一　１９８２生き方と人生観　講座現代の心理学８　文化と人間　小学館
梶田叡一　１９８５　自己教育への教育　明治図書
梶田叡一　１９８５　自ら学び、自ら鍛える教育ー「弱さ」からの出発を考えるー　教育評価展望，４，pp.96-109
梶田叡一　１９８５　子供の自己概念と教育　東京大学出版会
梶田叡一　１９８６　ブルーム理論に学ぶ　明治図書
梶田叡一　１９８９　自己意識の発達心理学　金子書房
梶田叡一　１９９０　生き方の心理学　有斐閣
神谷美恵子　１９８０　神谷美恵子著作集１　生きがいについて　みすず書房
金岡秀友　１９８５　世界の宗教と経典　自由国民社
金子晴勇　１９８５　恥と良心　教文館
鹿野政直　１９８９　婦人・女性・おんなー女性史の問いー　岩波書店
鹿嶋敬　１９８９　男と女の変わる力学ー家庭・企業・社会ー　岩波書店
加藤秀俊　１９６５　見世物からテレビへ　岩波書店
加藤周一・M. ライシュ・R.J. リフトン　矢島翠（訳）　１９７７　日本人の死生観上・下　岩波書店
カトリック広報委員会　１９７８　キリスト教に関する調査報告書　中央出版社
河合隼雄　１９８２　昔話と日本人の心　岩波書店
河合隼雄　１９８４　日本人とアイデンティティ　創元社
河合隼雄・樋口和彦・小川捷之（編）　１９８６　ユング心理学ー男性と女性ー　新曜社
木村敏　１９７２　人と人との間ー精神病理学的日本論ー　弘文堂
木村敏　１９８８　あいだ　弘文堂
岸本英夫　１９６１　宗教学　大明堂
喜多川忠一　１９８３　日本人を考えるー国民性の伝統と形成　日本放送出版協会
北森嘉蔵　１９７３　日本の心とキリスト教　読売新聞社
北森嘉蔵　１９８５　哲学と神　日本之薔薇出版社
小林純　１９８５　カウンセリングにおける人間観ー人間学的実存的アプローチー　上智大学カウンセリング研究所紀要，９・１０，pp.3-13
Kohlberg, L.　１９７１　From Is to Ought. Academic Press.
コールバーグ L.　内藤俊史・千田茂博（共訳）　「である」から「べきである」へ　永野重史（編）　道徳性の発達と教育ーコールバーグ理論の展開ー　新曜社
小沢浩　１９８８　生き神の思想史　岩波書店
Kuhlen,R.G.　１９４４　Age Differences in Religious Beliefs and Problems

during Adolescence. Journal of Genetic Psychology, ６５, pp.291-300
Lebra,T.S. & Lebra,W.P.(ed.) １９７４ Japanese Culture and Behavior. An East-West Center Book The University Press of Hawaii.
Levinson D.J. １９７８ The Seasons of A Man's Life. The Sterling Lord Agency.
レビンソン D.J. 南博（訳）１９８０ 人生の四季－中年をいかに生きるか－ 講談社
Lynd H.M. １９５８ On Shame and the Search for Identity. Brace & World.
毎日新聞社特別報道部宗教取材班 １９８９ 宗教を現代に問う上・中・下 角川書店
丸山真男 １９６１ 日本の思想 岩波書店
Maslow,A.H. １９６２ Toward a Psychology of Being. D.Van Nostrand Co.
マスロー A.H. 上田吉一（訳） １９６４ 完全なる人間 誠信書房
Maslow,A.H. １９７１ The Farther Reaches of Human Nature. Viking Press.
マスロー A.H. 上田吉一（訳） １９７３ 人間性の最高価値 誠信書房
増田四郎 １９７０ 西洋と日本－比較文明史的考察－ 中央公論社
松井やより １９８７ 女たちのアジア 岩波書店
松本滋 １９７９ 宗教心理学 東京大学出版会
松本滋 １９８７ 父性的宗教母性的宗教 東京大学出版会
Mead, M. １９４９ Male and Female - A Study of the Sexes in a Changing World. William Morrow & Co.
ミード M. 田中寿美子・加藤秀俊（訳） １９６１ 男性と女性－移りゆく世界における両性の研究 創元社
南博 １９５３ 日本人の心理 岩波書店
南博 １９８３ 日本的自我 岩波書店
源了円 １９６８ 徳川時代の文学に現われた義理と人情 高坂正顕（編） 近代日本の人間尊重思想上・下 福村出版
見田宗介 １９８２ 価値意識の理論－欲望と道徳の社会学－ 弘文堂
村上英治 １９８６ 人間性心理学への道 誠信書房
中村元 １９８８ 日本思想史 春日屋伸昌（編訳） 中村元英文論集 東方出版
中村元・諸橋轍次 １９８８ 東洋の心－日本の心の原点を探る－ 大修館書店
中村元 １９８９ 中村元選集３ 日本人の思惟方法 春秋社
中根千枝 １９６７ タテ社会の人間関係－単一社会の理論 講談社
中根千枝 １９７７ 家族を中心とした人間関係 講談社
中根千枝 １９７８ 日本人の可能性と限界 講談社

中根千枝他　１９８１　日本人と隣人　ＹＭＣＡ出版
Nagatomi,M. １９８９ The Internationalization of Shin Buddhist Studies: Shinran's "Self" and "Other". Ryukoku University's 350th Anniversary Symposium 資料
南山宗教文化研究所（編）　１９８１　絶対無と神－西田・田辺哲学の伝統とキリスト教－　春秋社
Nelson,M.O. １９７１ The Condept of God and Feelings toward Parents. Journal of Individual Psychology, ２７, pp.46-49
Nemeshegyi,P. １９８０　キリスト教入門　南窓社
Neumann,E. １９５６ Amor and Psyche - The Psychic Development of the Feminine: A Commentary on the Tale by Apuleius - Routledge and Kegan Paul.
ノイマン　E.　河合隼雄（監修）玉谷直實・井上博嗣（共訳）　１９７３　アモールとプシケー　女性の自己実現　紀伊國屋書店
Neumann,E. １９５３ Zur Psychologie des Weiblichen. Rascher & Cie.
ノイマン　E.　松代洋一・鎌田輝男（共訳）　１９８０　女性の深層　紀伊國屋書店
Newman. B.M. & Newman. P.R. １９７５ Development Through Life - A Psychological Approach.
ニューマン　B.M. & ニューマン P.R.　福富護（訳）　１９８８　川島書店
日本放送協会　放送世論調査所（編）１９７５　日本人の意識－ＮＨＫ世論調査－　至誠堂
ＮＨＫ世論調査部（編）　１９８４　日本人の宗教意識　日本放送出版協会
１９８０ International Conference of Human Values -Secretariat Office(ed.) Survey of 13 Countries of Human Values. IBM Japan.
西山俊彦　１９８５　宗教的パーソナリティの心理学的研究　大明堂
沼田健哉　１９８８　現代日本の新宗教－情報化社会における神々の再生　創元社
小川芳男　１９８３　フロムの宗教心理学－宗教の精神分析的研究－　北樹出版
大平健　１９９０　豊かさの精神病理　岩波書店
岡堂哲雄（編）　１９７７　現代女性の精神構造－アイデンティティの模索－　現代のエスプリ，１１７　至文堂
岡堂哲雄（編）　１９８６　女性のストレス－おんなのライフコースと精神病理－　現代のエスプリ，２２６　至文堂
大村英昭・西山茂（編）　１９８８　現代人の宗教　有斐閣
大野久　１９８４　現代青年の充実感に関する一研究　教育心理学研究，３２，

pp.100-108
大沢博　１９７０　臨床心理学的人間理解のための一試論－フランクルとマスローの説を検討して－　岩手大学教育学部研究年報，３０，pp.47-56
Patterson,C.H.　１９６６　Theories of Counseling and Psychotherapy. Harper & Row,Inc.
パターソン C.H. 小林純一（訳）１９７５　カウンセリングとサイコセラピィ　岩崎学術出版社
Phenix.P.H.　１９６６　Education and The Worship of God. The Westminster Press.
フェニックス P.H.　佐野安仁・吉田謙二（訳）　１９８７　晃洋書房
Plath,D.W.　１９８０　Long Engagements -Maturity in Modern Japan-. Stanford University press.
プラース D.W.　井上俊・杉野目康子（共訳）　１９８５　日本人の生き方－現代における成熟のドラマ－　岩波書店
Rahner,K.　１９７６　Grundkurs des Glaubens - Einführung in den Begriff des Christentums.　Herder.
ラーナー K.　百瀬文晃（訳）　１９８１　キリスト教とは何か　エンデルレ書店
Reischauer,E.O.　１９６５　The United States and Japan. Harvard University Press.
相良亨　１９８４　日本人の死生観　ぺりかん社
相良亨　１９８４　日本人の心　東京大学出版会
三枝充悳　１９８２　比較思想論文集２　東と西の思想　春秋社
酒向健・高森充（編）　１９９１　教育と社会・制度・経営を学ぶ　福村出版
作田啓一　１９６７　恥の文化再考　筑摩書房
佐藤文子　１９７５　実存心理検査－ＰＩＬ　岡堂哲雄（編）　心理検査学：心理アセスメントの基本　垣内出版　pp.323-343
Schultz,D.　１９７７　Growth Psychology- Models of the Healthy Personality Van Nostrand Reinhold Company.
シュルツ D.　上田吉一（監訳）　１９８２　健康な人格　川島書店
聖心女子大学キリスト教文化研究所（編）　１９７９　宗教と文明シリーズ２　キリスト教と文明の風土　春秋社
関根文之助　１９８６　日本人と八百万神－「やまとごころ」と外来思想　広池学園出版部
Shapiro S.B.　１９８５　An Empirical Analysis of Operating Values in

Humanistic Education. Journal of Humanistic Psychology, 25 (1), pp.94-108
司馬遼太郎・キーン D. 1984 日本人と日本文化 中央公論社
宗教社会学の会（代表塩原勉） 1985 現代都市の民俗宗教－生駒の神々 創元社
Skager, R. & Dave, R.H. 1978 Curriculum Evaluation for Lifelong Education. Pergamon Press.
Skager, R. 1984 Organizing Schools to Encourage Self-Direction in Learners. Pergamon Press and the Unesco Institute for Education.
総理府青少年対策本部 1978 世界青年意識調査（第2回）結果報告書（中間報告）
Spranger, E. 1922 Lebensformen.
シュプランガー E. 伊勢田耀子（訳） 1961 文化と性格の諸類型1・2 明治図書
Spranger, E. 1955 Pädagogische Perspektiven - Beiträge zu Erziehungsfragen der Gegenwart. Quelle & Meyer.
シュプランガー E. 村田昇・片山光宏（共訳） 1987 教育学的展望－現代の教育問題－ 東信堂
Starbuck, E.D. 1911 The Psychology of Religion - An Empirical Study of the Growth of Religious Consciousness. The Walter Scott Publishing Co.
Stecker, R.E. 1981 The Existential Vacuum in Eastern Europe. International Forum for Logotherapy, 4 (2), pp.79-82
Stouffer, S.A. 1949 The American Soldier Vol 2; Combat and Its Aftermath. Princeton University Press.
Strunk, O.J. 1959 Perceived Relationships between Parental and Deity Concepts. Psychological Newsletter, 10, pp.222-226
隅谷三喜男 1991 時の流れを見すえて 岩波書店
砂田良一 1982 価値という視点からみた自我同一性 愛媛大学教育学部紀要 15, pp.287-300
Sutich, A. & Vich, M.A. 1969 Reading in Humanistic Psychology. The Free Press.
鈴木大拙 1972 日本的霊性 岩波書店
鈴木秀夫 1976 超越者と風土 大明堂
高階秀爾（編） 1976 講座比較文化7 日本人の価値観 研究社

田村芳朗・源了円（編）　１９７７　日本における生と死の思想－日本人の精神史入門　有斐閣
田中賢　１９７０　価値意識の研究（１）－価値の比較判断の発達的研究－　愛媛大学教育学部紀要，教育科学，　pp.19-35
田中賢　１９７１　価値意識の研究（２）－価値の比較判断の発達的研究－　愛媛大学教育学部紀要，教育科学，　pp.23-26
田中賢　１９７２　価値意識の研究（３）－性格と価値評定の関係を中心として－　愛媛大学教育学部紀要，教育科学，　pp.23-37
田中賢　１９７３　価値意識の研究（４）－Morrisの「生きかた」の評定を中心として－　愛媛大学教育学部紀要，教育科学，　pp.31-50
Tillich,P.　１９４８　The Protestant Era.　The University of Chicago Press.
ティリッヒ P.　古屋安雄（訳）　１９７４　現代キリスト教思想叢書８　プロテスタント時代　白水社
徳永恂　（編）１９７９　マックス・ウェーバー著作と思想　有斐閣
鳥山平三１９８０青年の価値意識　園原太郎（編）　認知の発達　培風館
Tweedie,D.F.　１９６１　Logotherapy and the Christian Faith.　Baker Book House.
トゥィディ D.F. 武田健（訳）　１９６８　フランクルの心理学　みくに書店
上田正昭他　１９８５　京の社－神々と祭り－　人文書院
梅原猛　１９８３　地獄の思想　中公文庫
梅原猛　１９８９　日本人の「あの世」観　中央公論
梅棹忠夫　１９８８　女と文明　中央公論社
Vergote,A.　１９７８Dette et Désir: Deux Axes Chrétiens et La Dérive Pathologique.　Seuil.
Vergote,A. & Tamayo,A.　１９８０　The Parental Figures and the Representation of God.　Mouton.
渡部昇一　１９７４　日本語のこころ　講談社
渡部照宏　１９５９　死後の世界　岩波書店
和辻哲郎　１９３５　風土－人間学的考察－　岩波書店
Weber M.　１９６４　Vorbemerkung zu den Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie.
Einleitung in die Wirtschaftsethik der Weltreligionen.
Theorie der Stufen und Richtungen Religiöser Weltablehnung.
ウエーバー M.　濱島朗・徳永恂（訳）　現代社会学体系　５　ウェーバー社会学

論集－方法・宗教・政治－　青木書店
Weizsacker,R.　永井清彦（訳）　１９８６荒れ野の４０年　ヴァイツゼッカー大統領演説全文（１９８５．５．８）　岩波書店
Whitehead,A.N.　１９２６　Religion in the Making.　Cambridge University Press.
ホワイトヘッド A.N.　齊藤繁雄（訳）　１９８６　ホワイトヘッド著作集７　宗教とその形成　松籟社
Whitehead,A.N.　１９３８　Modes of Thought.
ホワイトヘッド A.N.　藤川吉美・伊藤重行（共訳）　ホワイトヘッド著作集１３　思考の諸様態　松籟社
Whitehead,A.N.　１９４９　The Aims of Education.
ホワイトヘッド A.N.　森口兼二・橋口正夫（共訳）　ホワイトヘッド著作集９　教育の目的　松籟社
Whitehead,E.E. & Whitehead,J.D.　１９８２　Christian Life Patterns. The Psychological Challenges and Religious Invitations of Adult Life. A Division of Doubleday & Company,Inc.
Wilson,C.　１９７２　New Pathways in Psychology: Maslow & Post-Freudian Revolution.　Gollancz.
コリン W.　由良君美・四方田剛己（共訳）　１９７９　至高体験－自己実現のための心理学　河出書房新社
Wilson,J.　１９７７　Making Inferences about Religious Movements. Religion, ７，pp.149-166
Winston, L.K.　１９８６　Eschatology: Christian and Buddhist, Religion, １６，pp.169-185
Wittmann,J.J.　１９８６　A Factor Analytic Study of Religious Motivation. Psychological Reports,　５８（２），pp.457-458
山縣喜代　１９８７　生きる意味の意識と価値観に関する研究－自己教育力の心理学的基礎をめぐって－　大阪大学修士論文（未公刊）
山縣喜代　１９９０ａ　生き方に関する価値観の発達－シュプランガーの価値の６類型を中心に－　人間性心理学研究，７，pp.64-75
山縣喜代　１９９０ｂ　女性の充足感－カトリック学校における実存心理検査の分析を通じて－　カトリック教育研究，７，pp.43-52
山縣喜代　１９９０ｃ　高齢の日本人の宗教的意識と生き方にかかわる価値観（兵庫県四宮市教育長に提出）
山岸明子　１９７６道徳判断の発達教育心理学研究，２４（２），pp.97-106

山岸明子　１９７７　道徳判断に関するKohlbergの理論とその発展　心理学評論，２０（４），pp.348-368
山岸明子　１９８３　おとなになるということ－Kohlberg理論とErikson 理論をめぐって－　心理学評論，２６（４），pp.272-288
山本七平　１９７８　日本人の人生観　講談社
山本七平　１９８５　日本教の社会学　学習研究社
山本七平　１９８９　日本人とは何か－神話の世界から近代までその行動原理を探る上・下　ＰＨＰ研究所
山折哲雄　１９８３　神と仏－日本人の宗教観－　講談社
余暇開発センター　１９７７　人間と社会に関する総合研究Ⅱ－現代日本社会研究　機械振興会新機械システムセンター
余暇開発センター　１９７８　人間と社会に関する総合研究Ⅳ－現代日本社会研究　機械振興会新機械システムセンター
湯浅泰雄　１９８１　日本人の宗教意識－習俗と信仰の底を流れるもの－　名著刊行会

一般用調査票

宗教的意識と心情の調査

1989年___月___日

男 ・ 女

年齢___歳

A） 次の文章について、あなたの気持ちや考えに最もよくあてはまるものを右側の選択肢から1つ選んで、その数字に○をつけてください。

		はい	どちらともいえない	いいえ
例）	私は神仏等人間を越えた存在を信じています。	③	2	1
1	私は、神仏等人間を越えた存在を信じることは、科学や理性に矛盾すると思っています。	3	2	1
2	私は、神仏等人間を越えた存在に母性性を感じます。	3	2	1
3	私の死後の世界のイメージは、喜びにあふれた幸せな世界です。	3	2	1
4	私は、お葬式などから帰ってくると、塩をかけて清めてもらいます。	3	2	1
5	私は、生物にも無生物にも命があり霊魂が宿っているのだと思います。	3	2	1
6	私は神の存在や神の教えを、心情面ばかりでなく理性的にもつきつめていくことが大切であると思っています。	3	2	1
7	私は、神の存在や人生の意味について理論的に考えることにあまり興味をもっていません。自分が感じるままにすなおに生きればそれで十分だと思っています。	3	2	1
8	私は、人間は死んだあと、神仏等人間を越えた存在になるのだと思っています。だから、私達は祖先を神や仏として大切にするのです。	3	2	1
9	神のなかには善い神もありますが、悪神悪霊もあるので、私達はそのたたりを恐れて、悪神も祭るのです。	3	2	1
10	私は、人間の現在の肉体は死んでも、魂は永遠に生きるのだと思います。	3	2	1
11	私は、神をその時々の必要に応じて拝んだりお願いするのであって、生活のすべてをかける必要はないと思います。	3	2	1
12	私は、死後の世界で神仏等人間を越えた存在に会えるのだと思っています。	3	2	1

はい・・・・　どちらともいえない・・　いいえ・・・

１３　私は、人間の側から神に祈ったり願ったりすることはあっても
神の側からいろいろなことがらを通して意思表示する（自分の
おもいを表わし示す）ことはないと思っています。・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

１４　私は、神は実際には存在しないが、人間が自分たちの
生活のよりどころとしてそのイメージをつくりあげた
のだと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

１５　私は、人間は死んだらこの世でどのように生きたかに
よって、異なった状態になるのだと思っています。・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

１６　私は神仏等人間を越えた存在に、厳しくこわい印象を
受けています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

１７　私は、合格、安産、交通安全、縁結び、商売繁盛などを
願って、必要な時々にそれぞれの方面に力のある神々を
お参りします。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

１８　私は、自分に強い自信があったり、人生に満足していれば、
神仏等人間を越えた存在を信じる必要はないと思っています。・・・ 3 - 2 - 1

１９　私は、人間も動物も草や木も、皆大自然の一部であり
同じ仲間であると思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２０　私は、死後の世界　すなわちあの世というものは
ないと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２１　私は、苦しんでいた人が自殺すると、やっと自然に
かえって楽になれたなと思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２２　私は、我々を取り囲んでいる大自然はひとりでに
出来上がったものだと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２３　私は、人間は死んでもまた異なる動物などに生まれ変わって
繰り返し生きるのだと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２４　私は、人間が１つの宗教に入るのは、そこに
帰属感（・・・のものになるという感じ）を
求めているからだと思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２５　私は、神に生かされ、神の望みにこたえていくことが
真の信仰生活であると思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２６　私は、神は愛に満ちた方ですが、どんな生き方を
している人でも、皆よしとして無条件に救われる
のではないと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２７　私は、苦しいことやお願いごとがあるときに
神仏等人間を越えた存在を思い出しますが、
ふだんはあまり考えません。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

		はい・・・・	どちらといえないも・・・	いいえ・・・
２８	私は、神仏等人間を越えた存在は目には見えないが実際に存在していると思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・	3	2	1
２９	私は自然や宇宙のなかに、太陽や月、山や川などのいろいろな神々があると思っています。・・・・・・・・・・・・・・	3	2	1
３０	私は、人間は死んだら全くの”無”に帰するのだと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3	2	1
３１	私は、時には命がけになることがあるとしても、神が望まれると思われることをすることが、最も大切なことだと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・	3	2	1
３２	私は、信仰をもつことは心のよりどころができ多くの恵みを受けることができるので、よいことだと思っています。・・・・・	3	2	1
３３	私の死後の世界のイメージは、恐ろしい地獄の世界です。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3	2	1
３４	私は、高い山に登ったり、奥深い木立のなかに入ると心が清められるような気がします。・・・・・・・・・・・・・・・・	3	2	1
３５	私の死後の世界のイメージは、汚れの世界です。・・・・・・・・・	3	2	1
３６	私は、神と言いうるものは唯一であり、絶対的なものだと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3	2	1
３７	私は、死んだらみんな灰となって自然に帰るだけであり、自然の一部になるのだと思っています。・・・・・・・・・・・・・	3	2	1
３８	私は、人格としての神を認めていませんが何か人間を越えた意志のようなものの存在を認めています。・・・・・	3	2	1
３９	私は、自分の大切な人がなくなるととても悲しみますが、いつかまた会えると思っているのでなぐさめられます。・・・・・	3	2	1
４０	私は、神に包み込むような暖かさを感じます。・・・・・・・・・・	3	2	1
４１	私は、神は何でもでき、少しのかげりもない善そのものであると思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3	2	1
４２	私は、神仏等人間を越えた存在に父性性を感じます。・・・・・・	3	2	1
４３	私は、死後の世界は暗く、寂しく、みじめな世界だと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3	2	1
４４	私は、この世とあの世は完全に断絶しているのではなく、死んだ霊が行き来できるものであるので、盆には迎え火や送り火をたいて、霊を迎えたり送ったりするのだと思います。・・	3	2	1

はい・・・・　どちらともいえない・・・　いいえ・・・

４５　私は、神というものは、死者や動物その他自然のなかの
どんなものにもおきかえられるものではなく、それらを
全く越えた偉大なものであると思っています。・・・・・・・・・・・・　３－２－１

４６　私は、神は日常生活のなかでいろいろな方法を通して、
人間に語りかけておられるように思います。・・・・・・・・・・・・　３－２－１

４７　私は、年をとってからよりどころを求めて神仏等
人間を越えた存在を信じることはよいが、若いうちから
信じる必要はないと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・　３－２－１

４８　私は、神は慈悲深い方であるのでどんな生き方をしている
人間でも、みなそのまま救ってくださると思っています。・・・・・・　３－２－１

４９　私は、自分が拝んでいる神についてよくわかりませんが、
手を合わせたりお祈りすると、清められたような
ありがたい気持ちになります。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３－２－１

５０　私は、神仏等人間を越えた存在に偉くおそれおおい方
という印象をもっています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３－２－１

５１　私の死後の世界のイメージは、喜びも悲しみもない
真空のような状態です。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３－２－１

５２　私は、宗教は人間の生活に意味を与え、人生の目的を
明らかにすると思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３－２－１

５３　科学が進歩している現代社会において神仏等人間を
越えた存在を信じることは時代遅れであるという人も
いますが、私はどの時代にも大切なことだと思っています。・・・・　３－２－１

５４　きつねや象などを祭ったお社をよく見かけますが、
それらの動物は私達を守ってくれる神々だと思います。・・・・・・・　３－２－１

５５　私は、みんなが同じ神を拝む必要はなく、人それぞれに
あった神を拝めばよいと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・　３－２－１

５６　私は、死後の世界とこの世の生き方とは関係なく、どんな
生き方をしていても、皆同じようになるのだと思います。・・・・・・　３－２－１

５７　私は、神仏等人間を越えた存在を信じることは現実の
わずらわしさからの逃避であると思っています。・・・・・・・・・・　３－２－１

５８　私は、お正月が来れば初詣に行ったり、いろいろな神社や
お寺の前を通れば拝んだりお参りしたりします。・・・・・・・・・・　３－２－１

５９　私は、日々の生活のなかで苦しいことに出くわしても、
神仏等人間を越えた存在の助けを求めることはありません。・・・・　３－２－１

６０　私は、人間や自然は神によってつくられたと思っています。・・・・　３－２－１

B）次のことがらに関して、あなたのイメージと合うものから順に（　）のなかに番号を記入していってください。

1　神仏等人間を越えた存在に対して私がもっているイメージを近いものからあげてみると
お父さん的　・　お母さん的　・　おじいさん的　・　非人格的
（　）　（　）　（　）　（　）
イメージの順になる。

2　神仏等人間を越えた存在のイメージを色で表わすと

赤　・　緑　・　黄　・　白　・　無色　・　黒　・　灰色
（　）　（　）　（　）　（　）　（　）　（　）　（　）
の順になる。

3　人生のなかで大切なことを大切な順にあげていくと、

愛すること　・　権力を持つこと　・　健康であること　・　美を追求すること
（　）　（　）　（　）　（　）
自己が確立すること　・　経済的に安定していること　・　真理を追求すること
（　）　（　）　（　）
神を信じて生きること
（　）
の順になると思う。

4　私のキリスト教に対してもっている印象として近いものからあげていくと、

あたたかい　・　情緒的な　・　理論的な　・　浅い　・　きびしい　・　深い
（　）　（　）　（　）　（　）　（　）　（　）
の順になる。

C）　次のそれぞれの句を完成してください。あまり考えすぎないで最初に心に浮かんだことを書いてください。

1　私の人生は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2　死後＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3　宗教は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

4　私の望みは＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

5　私が最も情けなく感じることは＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

6　日本人は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

7　人生のなかで最も大切なことは＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

8　私と神との関係は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

D）　次の文章について、あなたの気持ちや考えに最もよくあてはまるものを右側の選択肢から１つ選んで、その数字に〇をつけてください。

		はい	どちらともいえない	いいえ
１	私は、人生のなかで大切なのは、愛することだと思っています。	3	2	1
２	私の毎日の生活は、充実しています。	3	2	1
３	私はあることがらについて考えが決まっていても、他人から何か言われると簡単に気が変わってしまうことが多いです。	3	2	1
４	私が最も罪意識をもつ時は、自分の言動が親しい人を裏切ったようになる時です。	3	2	1
５	自分が社長だったら入社試験で１番の者より２番の恩人の子供のほうを採用するでしょう。	3	2	1
６	私は人がどう思おうと関係なく、自分が思う通りにすることがよくあります。	3	2	1
７	私は自分が何か行動するときには、まずまわりの人がそのことについてどう思うかを考えてみたほうがよいと思っています。	3	2	1
８	私は、人生のなかで大切なのは、経済力だと思っています。	3	2	1
９	いろいろ親切をしてくれた人には、他の人よりも尚一層の心づかいを示して恩を返すべきだと思います。	3	2	1
１０	ある問題について、自分としてのはっきりした態度をとらないような人の話を聞いていると、腹立たしくなります。	3	2	1
１１	私は、今、一生懸命生きることに意味があるのであって、人生そのものが何かの目的に向かっているのではないと思っています。	3	2	1
１２	私は、悪いことをしたことがばれると恥をかくのでしないほうがよいと思っています。	3	2	1
１３	注意すべきことがあってもその人にいろいろ世話になっていれば本当のことは言いにくく大目に見てしまうものです。	3	2	1
１４	私は、うそをついたりずるいことをしたりすると、罰があたりそうな気がしてこわいです。	3	2	1
１５	時には規則をまげて無理な仕事をさせることもありますが、仕事のこと以外でも人のめんどうをよくみるような課長のもとで働きたいと思います。	3	2	1
１６	たいていの人は、つかまるのがこわいから悪いことをしないのです。	3	2	1

はい・・・・　どちらといえば・・・　いいえ・・・

１７　私は、人間は何のために生きているのか、人間が神を信じる
ということはどう言うことなのかなどを、人間の頭で
考えられるかぎり理論的にもつきつめたいと思います。・・・・・・・・3 - 2 - 1

１８　私は、人間一人ひとりの人生にはみな意味があると思います。・・・・3 - 2 - 1

１９　私は、人生のなかで大切なのは、健康だと思っています。・・・・・・・3 - 2 - 1

２０　私は、物事を決めるとき、おおかたの人がどのように
考えているかで決めるのがよいと思っています。・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

２１　先生に聞かれても、親友のした悪いことを決して
言わないのが思いやりというものです。・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

２２　私は自分の楽しみを犠牲にしてまでも、
わざわざ他人を助けようとは思いません。・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

２３　私は、人生のなかで大切なのは、権力であると思います。・・・・・・・3 - 2 - 1

２４　正直なところ私は自分の態度をはっきりさせるまえに、
他人が何を考えているだろうかを知ろうとします。・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

２５　私は生きていても意味がないと思うことがよくあります。・・・・・・・3 - 2 - 1

２６　私は、人生のなかで大切なのは、
美を追求することであると思います。・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

２７　私は、自分は罪深いものだと思っています。・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

２８　私は自分の考えの方が正しいと思っているときでも、よけいな
いざこざを起こしてはつまらないので、相手の言う通りにします。・・3 - 2 - 1

２９　「たいてい」とか「たぶん」とか「だいたい」などという
あいまいな言葉を使うのをやめたら、私達の考えは
もっとよくなると思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

３０　私はうそをついたり不正なことをすると、
自分が恥ずかしくなります。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

３１　私は、人生のなかで大切なのは、思いやりだと思っています。・・・・3 - 2 - 1

３２　たいていの人は内心では、わざわざ人を助けることなど
好んでいないものです。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

３３　私は、見知らぬ土地に行くと人の目を気にしなくてすむので
ふだんしないようなことまでしてしまいがちです。・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

３４　率直であることは常に良いことです。・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

３５　規則をまげてまで無理な仕事をさせることはありませんが、
仕事以外のことでは人のめんどうを見ないような課長の
もとで働きたいと思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

はい　どちらともいえない　いいえ

３６　親が自分の子供の不正をかばったとしても、それは人情と
いうものでとがめるのは酷だと思います。・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

３７　自分の才能にあった仕事が見つかったとしても、今の
仕事につくためにいろいろ骨折ってくれた人がいる場合、
とても悪くて移る気にはなれないものです。・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

３８　私は、よいこと悪いことというのは、その時その時の状況に
よって異なるのに、あたかも何かの基準があるかのように
ふるまう人は、ぎごちなくて好きではありません。・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

３９　私は、自分の身内や仲間内のしあわせには気を使いますが、
それより外の人の生活にはあまり関心がありません。・・・・・・・・・3 - 2 - 1

４０　親しい者たちを裏切るような行為は、恥ずべき行為です。・・・・・・・3 - 2 - 1

４１　人生のなかには、本当のことばかりは
言っていられないことが多いと思います。・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

４２　人間は、神によって救われなければ
ならないものだと思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

４３　私は、神社に入るとき門前の手水で口をすすいだり手や
顔を洗うと、罪の汚れが洗い落とされると思っています。・・・・・・・3 - 2 - 1

４４　性格のしっかりした人は、感情をおもてに表わしません。・・・・・・・3 - 2 - 1

４５　私は、人生のなかで大切なのは、神を信じて
生きることであると思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

４６　私は、何か行動するときには、まわりの人に合わせて
するより、自分で判断してするのがよいと思っています。・・・・・・・3 - 2 - 1

４７　私は、人生のなかで大切なのはまごころ、すなわち
いつわりのない真実な心であると思っています。・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

４８　私のふだんの行動をふりかえってみると、まわりの人の
気持ちや考えに最も神経を使っているのがわかります。・・・・・・・・3 - 2 - 1

４９　人や動物をいじめると、たたりがあるようでこわいです。・・・・・・・3 - 2 - 1

５０　私が日常生活のなかで後悔し、しなければよかったと
思う場合の多くは恥をかいたときです。・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５１　この世のなかで生きていくためには、
多少の不正はやむを得ないと思います。・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５２　私は、人生のなかで大切なのは真理の追求であると思います。・・・・3 - 2 - 1

５３　私は、物事を決めたり何か行動するときには、
神がどのように望んでいられるかを念頭において
判断するのがよいと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

はい・・・・　どちらといえば・・・　いいえ・・・

５４　私は、人生のなかで大切なのは、自分が確立することだと思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５５　私は、物事の筋を通すというよりは、物事をまるくおさめるのに心をつかう人のほうが好きです。・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５６　私は、人はただ生まれて死んでいくだけで、人生そのものには意味はないと思います。・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５７　人の悪口を言ったり、意地の悪いことをすると、神が悲しんでいられるようでつらいです。・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５８　私は、人生のなかで大切なのは、”人様に迷惑をかけないこと”だと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５９　私は、人生そのものに意味はなく死んで灰になるだけなら、今を精一杯生きることにも意味がなくなると思います。・・・・・・・3 - 2 - 1

６０　私は、道徳や善悪の問題をまじめに考えます。・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

Ｅ）　あなたは宗教あるいは神を信じることにたいして、どのような気持ちや考えをもっていますか。詳しく書いてください。

＊　次頁の　問Ｆ）についてもご記入ください。

F）　次の質問であなたにあてはまるものにそって答えていってください。
あなたにあてはまるものの（　）のなかに　○をつけてください。

あなたは、神仏等人間を越えた存在を認めていますか？

（　）認めている

↓

どこかの宗教に所属していますか？

（　）所属している
（　）所属していない

↓

どこかの宗教に所属している方はおさしつかえがなければ、その宗教名をお書きください。

（　　）

↓

その宗教に所属していてよかったと思いますか？

（　）思う
（　）思わない
（　）もう所属しているのでしかたがない

（　）認めていない

↓

出来れば信じたいと思いますか？

（　）信じたい
（　）信じたくない
（　）わからない
（　）関心がない

↓

信じたいと思っている方は信じる場合どこかの宗教に所属したいですか？

（　）所属したい
（　）所属したくない

↓

一般的に言って神を信じる心をもつことは大切であると思いますか？

（　）思う
（　）思わない

御協力ありがとうございました。

老 年 者 用 調 査 票

宗教的意識と心情の調査　Ⅰ

実施日：　平成元年　___月___日

生年月日：　明治___年___月___日
大正
昭和

年齢___歳

男　・　女（いずれかに○をつけてください）

A）　次の文章について、あなたの気持ちや考えに最もよくあてはまるものを右側の選択肢から１つ選んで、その数字に○をつけてください。

	はい	どちらともいえない	いいえ
例）私は、勉強するのが好きです。	③	2	1
1　私は、人生のなかで大切なのは、愛することだと思っています。	3	2	1
2　私の毎日の生活は、充実しています。	3	2	1
3　私は自分の考えをもっていても、人から何か言われると簡単に気を変えてしまうことが多いです。	3	2	1
4　自分のことを最も罪深く思う時は、自分の言葉や行ないが親しい人を裏切ってしまったようになる時です。	3	2	1
5　自分が社長だったら、入社試験で１番の者より２番の恩人の子供のほうを採用するでしょう。	3	2	1
6　私は人がどう思おうと関係なく、自分が思う通りにすることがよくあります。	3	2	1
7　私が何かをするときには、まずまわりの人がそのことについてどう思うかを考えてみたほうがよいと思っています。	3	2	1
8　私は、人生のなかで大切なのは、経済力だと思っています。	3	2	1
9　親切にしてくれた人には、他の人よりも尚一層の心づかいをして、恩を返すべきだと思います。	3	2	1
10　ある問題について、自分としてのはっきりした態度をとらない人の　話を聞いていると、腹立たしくなります。	3	2	1
11　私は、今を一生懸命生きることは大切だと思っていますが、人生に何か目的があるとは思っていません。	3	2	1
12　私は、悪いことをしたことがばれると、恥をかくのでしないほうがよいと思っています。	3	2	1
13　注意すべきことがあっても、その人にいろいろ世話になっていれば、本当のことは言いにくく、大目に見てしまうものです。	3	2	1

はい・・・・　どちらともいえない・・・　いいえ・・・

１４　私は、うそをついたり、ずるいことをすると、
罰があたりそうな気がして、こわいです。・・・・・・・・・・・・・・・3 － 2 － 1

１５　時には規則をまげて無理な仕事をさせることがあっても、
仕事以外のことでも、人の世話をよくするような
課長のもとで働きたいと思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 － 2 － 1

１６　たいていの人は、つかまるのがこわいから
悪いことをしないのです。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 － 2 － 1

１７　私は、人間は何のために生きているのか、
人間が神を信じるとはどう言うことなのか
などを、理論的に考えてみたいと思います。・・・・・・・・・・・・・・3 － 2 － 1

１８　私は、一人ひとりの人生には　みな意味があると思います。・・・・・・3 － 2 － 1

１９　私は、人生のなかで大切なのは、健康だと思っています。・・・・・・・3 － 2 － 1

２０　私は、何かを決めるとき、おおかたの人がどのように
考えているかということで、決めるのがよいと思います。・・・・・・・3 － 2 － 1

２１　先生に聞かれても、親友のした悪いことを
決して言わないのが思いやりというものです。・・・・・・・・・・・・3 － 2 － 1

２２　私は自分の楽しみを犠牲にしてまでも、
わざわざ他人を助けようとは思いません。・・・・・・・・・・・・・・・3 － 2 － 1

２３　私は、人生のなかで大切なのは、権力であると思います。・・・・・・・3 － 2 － 1

２４　正直なところ、私は自分の態度をはっきりさせるまえに、
他人が何を考えているだろうかを知ろうとします。・・・・・・・・・・3 － 2 － 1

２５　私は生きていても意味がないと思うことがよくあります。・・・・・・・3 － 2 － 1

２６　私は、人生のなかで大切なのは、
美を追求することであると思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・3 － 2 － 1

２７　私は、自分は罪深いものだと思っています。・・・・・・・・・・・・・3 － 2 － 1

２８　私は、自分の考えの方が正しいと思っているときでも、
よけいないざこざを起こしたくないので、相手の言う通りにします。・3 － 2 － 1

２９　「たいてい」とか「たぶん」とか「だいたい」
などというあいまいな言葉を使うのをやめたら、
私達の考えはもっとよくなると思います。・・・・・・・・・・・・・・3 － 2 － 1

３０　私はうそをついたり不正なことをすると、
自分が恥ずかしくなります。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 － 2 － 1

３１　私は、人生のなかで大切なのは、思いやりだと思っています。・・・・3 － 2 － 1

３２　たいていの人は内心では、わざわざ人を助けることなど
好んでいないものです。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 － 2 － 1

はい・・・・　どちらといえば・・・　いいえ・・・

３３　私は、見知らぬ土地に行くと人の目を気にしなくてすむので
ふだんしないことまでしてしまいがちです。・・・・・・・・・・・・・・３－２－１

３４　率直であることは常に良いことです。・・・・・・・・・・・・・・・・・３－２－１

３５　規則をまげてまで無理な仕事をさせませんが、
仕事以外のことでは、人の世話をしないような
課長のもとで働きたいと思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３－２－１

３６　親が自分の子供の不正をかばったとしても、それは人情と
いうもので、とがめるのは酷だと思います。・・・・・・・・・・・・・・３－２－１

３７　自分の才能にあった仕事が見つかったとしても、
人の世話になって今の仕事についている場合
とても悪くて移る気にはなれないものです。・・・・・・・・・・・・・・３－２－１

３８　私は、よいこと悪いことというのは、その時その時の状況によって
違ってくるのに、何か善悪の基準があるかのようにふるまう人は、
ぎごちなくて好きではありません。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３－２－１

３９　私は、自分の身内や仲間内のしあわせには気を使いますが、
他人の生活にはあまり関心がありません。・・・・・・・・・・・・・・・３－２－１

４０　親しい者たちを裏切るような行為は、恥ずべき行為です。・・・・・・３－２－１

４１　人生のなかには、本当のことばかりは
言っていられないことが多いと思います。・・・・・・・・・・・・・・・３－２－１

４２　人間は、神あるいは仏等によって
救われなければならないものだと思います。・・・・・・・・・・・・・・３－２－１

４３　私は、神社に入るとき門前の手水で口をすすいだり手や
顔を洗うと、罪の汚れが洗い落とされると思っています。・・・・・・・３－２－１

４４　性格のしっかりした人は、感情をおもてに表わしません。・・・・・・３－２－１

４５　私は、人生のなかで大切なのは、
神を信じて生きることであると思っています。・・・・・・・・・・・・・３－２－１

４６　私は、何かをするときには、まわりの人に合わせてするより、
自分で判断してするのがよいと思っています。・・・・・・・・・・・・・３－２－１

４７　私は、人生のなかで大切なのはまごころ、すなわち
いつわりのない真実な心であると思っています。・・・・・・・・・・・・３－２－１

４８　私のふだんの行動をふりかえってみると、まわりの人の
気持ちや考えに、最も神経を使っているのがわかります。・・・・・・・３－２－１

４９　人や動物をいじめると、たたりがあるようでこわいです。・・・・・・３－２－１

５０　私が、日常生活でしなければよかったと後悔するのは
多くの場合、恥をかいたときです。・・・・・・・・・・・・・・・・・・３－２－１

はい・・・・　どちらともいえない・・・　いいえ・・・

５１　この世のなかで生きていくためには、
多少の不正はやむを得ないと思います。・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５２　私は、人生のなかで大切なのは真理の追求であると思います。・・・・3 - 2 - 1

５３　何かを決めたり行なったりするときは、神仏等が
どのように望んでいられるかを念頭において
判断するのがよいと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５４　私は、人生のなかで大切なのは、自分が自分として
しっかり立つことだと思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５５　私は、物事の筋を通す人より、
物事をまるくおさめることに、心をつかう人のほうが好きです。・・・3 - 2 - 1

５６　私は、人はただ生まれて死んでいくだけで、
人生には意味はないと思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５７　人の悪口を言ったり、意地の悪いことをすると、
神仏等が悲しんでいられるようでつらいです。・・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５８　私は、人生のなかで大切なのは、
”人様に迷惑をかけないこと”だと思っています。・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

５９　私は、人生そのものに意味はなく
どうせ死んで灰になるだけなら、
今を精一杯生きることにも、意味がなくなると思います。・・・・・・3 - 2 - 1

６０　私は、道徳や善悪の問題をまじめに考えます。・・・・・・・・・・・3 - 2 - 1

B）　あなたは宗教あるいは神を信じることにたいして、どのような気持ちや
考えをもっていられますか。さしさわりがないようでしたら書いてください。

C）　次の質問であなたにあてはまるものにそって答えていってください。
あなたにあてはまるものの（　）のなかに　○をつけてください。

あなたは、「人間を越えた存在」（神・仏等）を認めていますか？

（　）認めている

↓

どこかの宗教に属していますか？

（　）属している
（　）属していない

↓

どこかの宗教に属している方はおさしつかえがなければ、その宗教名をお書きください。

（　　）

↓

その宗教に属していてよかったと思いますか？

（　）思う
（　）思わない
（　）もう属しているのでしかたがない

＊

（　）認めていない

↓

出来れば信じたいと思いますか？

（　）信じたい
（　）信じたくない
（　）わからない
（　）関心がない

↓

信じたいと思っている方は信じる場合どこかの宗教に属したいですか？

（　）属したい
（　）属したくない

↓

一般的に言って神を信じる心をもつことは大切であると思いますか？

（　）思う
（　）思わない

御協力ありがとうございました。

宗教的意識と心情の調査　2

実施日：　平成元年＿＿月＿＿日

生年月日：　明治＿＿年＿＿月＿＿日
大正
昭和

年齢＿＿歳

男　・　女（いずれかに○をつけてください）

A）　次の文章について、あなたの気持ちや考えに最もよくあてはまるものを右側の選択肢から１つ選んで、その数字に○をつけてください。

	はい	どちらともいえない	いいえ
例）私は「人間を越えたもの」（神・仏等）を信じています。	③	2	1
1　私は、「人間を越えたもの」（神・仏等）を信じることは、科学や理性に矛盾すると思っています。	3	2	1
2　私は、「人間を越えたもの」（神・仏等）に、母性性を感じます。	3	2	1
3　私は死後の世界を、喜びにあふれた幸せな世界だと思っています。	3	2	1
4　私は、お葬式などから帰ってくると、塩をかけて清めてもらいます。	3	2	1
5　私は、生物にも無生物にも命があり霊魂が宿っているのだと思います。	3	2	1
6　私は神の存在や教えを、気持で味わうだけでなく頭でも考えていくことが大切であると思っています。	3	2	1
7　私は、神のことや人生の意味について理論的に考えることにあまり興味をもっていません。自分が感じるままにすなおに生きればそれで十分だと思っています。	3	2	1
8　私は、人間は死んだあと、神仏等になるのだと思っています。だから、私達は祖先を神や仏として大切にするのです。	3	2	1
9　神のなかには善い神もありますが、悪神悪霊もあるので、私達はそのたたりを恐れて、悪神も祭るのです。	3	2	1
10　私は、人間の今の身体は死んでも、魂は永遠に生きるのだと思います。	3	2	1
11　私は、神をその時々の必要に応じて拝んだりお願いするのであって、生活のすべてをかける必要はないと思います。	3	2	1

はい・・・・　どちらともいえない・・・　いいえ・・・

１２　私は、死後の世界で「人間を越えたもの」（神・仏等）に
会えるのだと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

１３　私は、人間の側から神に祈ったり願ったりすることはあっても、
神の方がいろいろなことがらを通して、自分のおもいを表わす
ことはないと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

１４　私は、神は実際にはいないが、人間が自分たちの生活の
よりどころとしてつくりあげたのだと思っています。・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

１５　私は、人間が死んだ後の状態は、その人がこの世で
どのように生きたかによって、違ってくるのだと思います。・・・・ 3 - 2 - 1

１６　私は「人間を越えたもの」（神・仏等）に、
厳しくこわい印象を受けています。・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

１７　私は、合格、安産、交通安全、縁結び、商売繁盛などを願って、
それぞれの神々にお参りします。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

１８　私は、自分に強い自信があったり、人生に満足していれば、
「人間を越えたもの」（神・仏等）を信じる必要は
ないと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

１９　私は、人間も動物も草木も、皆大自然の一部であり
同じ仲間であると思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２０　私は、死後の世界　すなわちあの世というものは
ないと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２１　私は、苦しんでいた人が自殺すると、
やっと自然にかえって楽になれたなと思います。・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２２　私は、大自然はひとりでに出来上がったものだと思っています。・・ 3 - 2 - 1

２３　私は、人間は死んでもまた違った動物などに生まれ変わって
繰り返し生きるのだと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２４　私は、人々が１つの宗教に入るのは、その団体の
一員であるという感じを、求めているからだと思います。・・・・・・ 3 - 2 - 1

２５　私は、神に生かされ、神が望まれるように生きていくことが
真の信仰生活であると思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２６　私は、神はやさしい方ですが、どんな生き方をしていても、
皆よしとして、救ってくださるわけではないと思っています。・・・ 3 - 2 - 1

２７　私は、苦しいことやお願いごとがあるときに
「人間を越えたもの」（神・仏等）を思い出しますが、
ふだんはあまり考えません。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

２８　私は、「人間を越えたもの」（神・仏等）は目には見えないが、
実際に存在していると思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 - 2 - 1

		はい	どちらともいえない	いいえ
２９	私は、自然や宇宙のなかに、太陽や月、山や川などのいろいろな神々があると思っています。	３	２	１
３０	私は、人間は死んだら全くの”無”になるのだと思っています。	３	２	１
３１	私は、命がけになることがあっても神が望まれることをすることが、一番大切なことだと思っています。	３	２	１
３２	私は、信仰をもつことは、心のよりどころができ多くの恵みを受けることができるので、よいことだと思っています。	３	２	１
３３	私は、死後の世界は、恐ろしい地獄の世界だと思っています。	３	２	１
３４	私は、高い山に登ったり、奥深い木立のなかに入ると心が清められるような気がします。	３	２	１
３５	私は、死後の世界は、汚れた世界だと思っています。	３	２	１
３６	私は、神はただ１つであり、絶対的なものだと思っています。	３	２	１
３７	私は、死んだらみんな灰となって自然に帰るだけであり、自然の一部になるのだと思っています。	３	２	１
３８	私は、人格としての神を認めていませんが何か人間を越えた意志のような存在を認めています。	３	２	１
３９	私は、自分の大切な人がなくなるととても悲しみますが、死後の世界でまた会えると思っているのでなぐさめられます。	３	２	１
４０	私は、神に包み込むような暖かさを感じます。	３	２	１
４１	私は、神は何でもでき、少しのかげりもない善そのものであると思います。	３	２	１
４２	私は、「人間を越えたもの」（神・仏等）に父性性を感じます。	３	２	１
４３	私は、死後の世界は暗く、寂しく、みじめな世界だと思っています。	３	２	１
４４	私は、この世とあの世ははっきりと分かれているのではなく、死んだ霊が行き来できるので、盆には迎え火や送り火をたいて、霊を迎えたり送ったりするのだと思います。	３	２	１
４５	神は、死者や動物、山や川等におきかえられるものではなく、それらを完全に越えた偉大なものであると思っています。	３	２	１
４６	私は、神は日常生活のなかでいろいろな方法を通して、人間に語りかけておられるように思います。	３	２	１

はい　どちらともいえない　いいえ

４７　私は、年をとってからはよりどころを求めて
「人間を越えたもの」（神・仏等）を信じることはよいが、
若いうちから信じる必要はないと思っています。・・・・・・・・・・　3 - 2 - 1

４８　私は、「人間を越えたもの」（神・仏等）は
慈悲深い方であるので、どんな生き方をしている人間でも、
みなそのまま救ってくださると思っています。・・・・・・・・・・・・　3 - 2 - 1

４９　私は、自分が拝んでいる神仏等についてよくわかりませんが、
手を合わせたりお祈りすると、清められたような
ありがたい気持ちになります。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3 - 2 - 1

５０　私は、「人間を越えたもの」（神・仏等）に、
偉く、おそれおおい印象をもっています。・・・・・・・・・・・・・・　3 - 2 - 1

５１　私は、死後の世界とは、喜びも悲しみもない
真空のような状態だと思っています。・・・・・・・・・・・・・・・・　3 - 2 - 1

５２　私は、宗教は人間の生活に意味を与え、
人生の目的を明らかにすると思っています。・・・・・・・・・・・・・　3 - 2 - 1

５３　科学が進歩している現代において、
「人間を越えたもの」（神・仏等）の存在を信じることは
時代遅れであるという人もいますが、
私はどの時代にも大切なことだと思っています。・・・・・・・・・・　3 - 2 - 1

５４　きつねや象などを祭ったお社をよく見かけますが、
それらの動物は私達を守ってくれる神々だと思います。・・・・・・・　3 - 2 - 1

５５　私は、みんなが同じ神を拝む必要はなく、
人それぞれにあった神を拝めばよいと思っています。・・・・・・・・　3 - 2 - 1

５６　私は、死後の世界とこの世の生き方とは関係なく、
どんな生き方をしていても、皆同じようになるのだと思います。・・　3 - 2 - 1

５７　私は、「人間を越えたもの」（神・仏等）を信じることは
現実のわずらわしさからの逃避であると思っています。・・・・・・・　3 - 2 - 1

５８　私は、お正月が来れば初詣に行ったり、いろいろな神社や
お寺の前を通れば、拝んだりお参りしたりします。・・・・・・・・・　3 - 2 - 1

５９　私は、日々の生活のなかで苦しいことに出くわしても、
「人間を越えたもの」（神・仏等）の助けを
求めることはありません。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3 - 2 - 1

６０　私は、人間や自然は、神によってつくられたと思っています。・・・　3 - 2 - 1

B）次のことがらに関して、あなたのイメージと合うものから順に（　）のなかに番号を記入していってください。

1　「人間を越えたもの」（神・仏等）のイメージを、近いものから順にあげると、

お父さん的（　）・お母さん的（　）・おじいさん的（　）・非人格的（　）

となる。

2　「人間を越えたもの」（神・仏等）のイメージを色で表わすと

赤（　）・緑（　）・黄（　）・白（　）・無色（　）・黒（　）・灰色（　）

の順になる。

3　人生のなかで大切なことを大切な順にあげていくと、

愛すること（　）・権力を持つこと（　）・健康であること（　）・美を追求すること（　）

自分が自分としてしっかり立つこと（　）・経済的に安定していること（　）

真理を追求すること（　）・神を信じて生きること（　）の順になると思う。

4　私のキリスト教に対してもっている印象を、近いものからあげていくと、

あたたかい（　）・情緒的な（　）・理論的な（　）・浅い（　）・きびしい（　）・深い（　）

の順になる。

C）　もしお差し支えがなければ、次のそれぞれの句の後に、あなたが考えておられることを記入して文章を完成してください。あまり考えすぎないで最初に心に浮かんだことを書いてください。

1　私の人生は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2　死後＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3　宗教は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

4　私の望みは＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

5　私が最も情けなく感じることは＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

6　日本人は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

7　人生のなかで最も大切なことは＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

8　私と神との関係は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

御協力ありがとうございました。

英 文 調 查 票

STUDY OF RELIGIOUS SENSE AND FEELINGS

Date: _____, 1989
Sex : M. F.
Age : _____

A) Indicate your personal feelings and ideas on the following statements by drawing circles around the appropriate numbers.

3 means "Yes"
2 means "Yes and No"
1 means "No"

ex. I believe in a transcendental being (god, etc.). ····· ③ - 2 - 1

1 I think to believe in a transcendental being (god, etc.) is to contradict science and reason. ····· 3 - 2 - 1

2 I feel "motherhood" in a transcendental being (god, etc.). ···· 3 - 2 - 1

3 My image of the world after death is a happy world full of joy. ····· 3 - 2 - 1

4 After a funeral I purify myself to avoid the impurity of death. ····· 3 - 2 - 1

5 I think objects, both animate and inanimate, have a life and soul in them. ····· 3 - 2 - 1

6 I think it is necessary to study about the existence of God and His teachings not only with our feelings but also with our intellect. ····· 3 - 2 - 1

7 I am not interested in thinking theoretically about the existence of God and the meaning of life. It is sufficient for me to live simply according to my own feelings. ····· 3 - 2 - 1

8 I think human beings will become transcendental beings (god, etc.) after death. That is why we worship our ancesters as gods. ····· 3 - 2 - 1

9 Among gods there are not only good gods but also evil gods and spirits. Therefore we worship evil gods as well as good gods because we are afraid of their curse. ····· 3 - 2 - 1

10 I think even though our present body may perish, our soul will live forever. ····· 3 - 2 - 1

11 I think we can worship God according to our daily needs and need not risk our whole life for Him. ····· 3 - 2 - 1

		Yes	Y&N	No
12	I think we will encounter a transcendental being (god, etc.) in the world after death.	3	2	1
13	I think there are times when we pray and ask God for help but He never reveals His thoughts or intentions.	3	2	1
14	I think God does not exist. Man made the image of Him, to give meaning and a sense of security to life.	3	2	1
15	I think the condition of life after death will differ for each person according to the way in which he has lived in this world.	3	2	1
16	My impression of a transcendental being (god, etc.) is one of severity and fear.	3	2	1
17	I pray in different shrines/temples or churches to various deities who are known to be powerful to aid us in our different needs: success in examinations, successful pregnancy and an easy delivery, safe journeys, a good selection of a marriage partner, prosperity, etc.	3	2	1
18	I think if one can believe in one's own power or is content with his own life ,he need not believe in a transcendental being (god, etc.).	3	2	1
19	I think all human beings, animals, and plants are a part of nature and companion to one another.	3	2	1
20	I think there will be no other world after death.	3	2	1
21	When man/woman who is suffering commits suicide, I think he/she will finally gain comfort in returning to nature.	3	2	1
22	I think nature around us was there from the beginnning coming into being on its own.	3	2	1
23	I think when a person dies, he/she comes back to life again taking some other form eg. an animal, and thus will keep on living on this earth.	3	2	1
24	I think a person enters into a denomination of a religion because he/she is seeking to have a sense of belonging.	3	2	1
25	I think true life of faith is a life made alive by God and responsive to the will of God.	3	2	1
26	I think that God is always filled with love. However that does not mean that God saves every person unconditionally no matter how that person lives in this world.	3	2	1
27	I think of a transcendental being when I am in distress or am in need of help but rarely think of such a higher being in ordinary life.	3	2	1

		Yes	Y&N	No
		·	·	·
28	I think that a transcendental being (god, etc.) does exist really though invisible to man.	3	2	1
29	I think in nature and the universe there are various gods such as the sun, moon, mountains, rivers, etc.	3	2	1
30	I think when man dies he returns to utter "nothingness".	3	2	1
31	I think the most important thing is to do the will of God, even though at times it requires that we may need to risk our life.	3	2	1
32	I think it is good to believe in God because through belief one can experience abundant grace and source for security.	3	2	1
33	My image of the world after death is one of a frightening hell.	3	2	1
34	I feel cleansed when I climb a high mountain or enter into a deep forest.	3	2	1
35	My image of the world after death is one of a world of impurity.	3	2	1
36	I think what one can call "God" is only one and absolute.	3	2	1
37	I think when we die we merely return to nature and become a part of it.	3	2	1
38	I do not believe in the existence of a personal god but admit the existence of a kind of will which transcends human beings.	3	2	1
39	I feel sad when my dear ones die, but I also feel consolation because I know that we shall see each other some day.	3	2	1
40	I feel in God the warmth that enfolds my whole being.	3	2	1
41	I think God is omnipotent and of utter goodness without a shadow..	3	2	1
42	I feel "fatherhood" in a transcendental being(god, etc.).	3	2	1
43	I think the world after death is dark, lonely, and miserable.	3	2	1
44	I think this world and the other world are not separated completely. Therefore the souls of the dead can come and go between both worlds.	3	2	1
45	I think God cannot be replaced by anything else such as the deceased, animals, or nature. He is the Great One who transcends all things.	3	2	1

		Yes	Y&N	No
		·	·	·
46	I think God speaks to us in various ways in our daily life.	3	2	1
47	I think it is good to believe in a transcendental being (god, etc.) when we become old and need a source of security, but it is not necessary to believe in him when we are young.	3	2	1
48	I think as God is a merciful being, he will save everyone no matter how he/she is good or bad.	3	2	1
49	I do not know well about God whom I worship, but I feel purified and blessed when I pray or when I assume the posture of prayer.	3	2	1
50	I have an image of a transcendental being (god, etc.) as being that is great and awesome.	3	2	1
51	My image of the world after death is of a vacuum world with no joy and no sadness.	3	2	1
52	I think religion gives meaning to life and explicitly explains the purpose of life.	3	2	1
53	There are people who say that it is out-of-date to believe in a transcendental being (god, etc.) in this modern scientific world. But I think it is important to believe in such a being in whatever era we may live.	3	2	1
54	There are shrines which are dedicated to animals such as fox, elephants, etc. I think those animals are the gods that protect us.	3	2	1
55	I think it is unnecessary that everybody should worship the same god. Each person may worship any god which suits him/her.	3	2	1
56	I think there is no relationship between one's way of living in this world and our condition of life in the next world. Everybody will be in the same condition in the next life however he may have lived in this world.	3	2	1
57	I think to believe in a transcendental being (god, etc.) is to escape from the problems of real life.	3	2	1
58	I go and pray in various temples and churches when I happen to pass by or when special occasions occur.	3	2	1
59	I do not ask help from a transcendental being (god, etc.) even if I face sufferings in my daily life.	3	2	1
60	I think human beings and nature were created by God.	3	2	1

B) Number the following words/phrases in ascending order of the image you have. (1=nearest to your image, → 2 →····· farther away from your image)

1 My image of a trancsendental being (god, etc.) is:
fatherly, motherly, grandfather-like, impersonal
( ) ( ) ( ) ( )

2 The colour I most associate with the image of a transcendental being (god, etc.) are:
red, green, yellow, white, colorless, black, gray
( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )

3 The important things in life in order are:
to love, to have power, to be healthy, to pursue beauty,
( ) ( ) ( ) ( )
to be able to stand by oneself, to have economic security,
( ) ( )
to pursue truth, to live in faith in God
( ) ( )

4 My image of Chritianity is:
warm, emotional, intellectual, shallow, severe, deep
( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )

C) Complete the following sentences. Do not think much but write down what first comes to your mind.

1 My life is _____
2 After death _____
3 Religion is _____
4 My desire is _____
5 What I feel most wretched about _____
_____
6 Japanese are _____
7 The most important thing in life is _____
_____
8 The relationship between myself and God is_____
_____

D) Indicate your personal feelings and ideas on the following statements by drawing circles around the appropriate numbers.

3 means "Yes"
2 means "Yes and No"
1 means "No"

1 I think the important thing in life is to love. ····· 3 - 2 - 1
2 I live a full life. ····· 3 - 2 - 1
3 When somebody says something I often change my opinions even though I previously had my own. ····· 3 - 2 - 1
4 The time when I feel my sinfulness most is in cases where my deeds and words seem to betray those to whom I feel very close. ····· 3 - 2 - 1
5 If I were the president of a company ,I would employ the son of my benefactor who may be a 2nd rank person rather than employ the top ranking person at the entrance examination. ··· 3 - 2 - 1
6 I often go my way without caring about others'opinions. ····· 3 - 2 - 1
7 I think it is better to think about how others think before starting to do something. ····· 3 - 2 - 1
8 I think the important thing in life is financial power. ····· 3 - 2 - 1
9 To those who were kind to me I should repay their kindnesses by showing them more favor than I show to others. ····· 3 - 2 - 1
10 I feel irritated when listening to a person who does not state his own opinions clearly. ····· 3 - 2 - 1
11 I think what gives meaning to life is to live fully now, and I do not think life has some purpose or has some meaning in itself. ····· 3 - 2 - 1
12 I think it is better not to do bad things because I would be put to shame if it is found out. ····· 3 - 2 - 1
13 When I am faced in the situation in which I have to point out some faults to someone it is difficult to be truthful to him. This is particularly so when the person is someone to whom I owe a lot. ····· 3 - 2 - 1
14 When I tell a lie or do something unfair I am afraid of being punished. ····· 3 - 2 - 1
15 I would like to work under a boss who takes care of his men/women well; not only at work but also in other occasions even though he may sometimes force us to work disregarding the rules. ····· 3 - 2 - 1

		Yes	Y&N	No
		·	·	·
16	Most people do not do bad things because of the fear of being caught.	3	2	1
17	I would like to think about life logically as far as human reason can follow. For example: For what reasons does man live? What does it mean that man believes in God? etc.	3	2	1
18	I think there is meaning in each person's life.	3	2	1
19	I think the important thing in life is health.	3	2	1
20	I think it is good to decide something in accordance with the views that most people have about it.	3	2	1
21	It is thoughtfulness not to talk about the bad deeds which my close friend has done, even if my teacher asks me.	3	2	1
22	I have no intention of helping others if it requires me to sacrifice my own pleasure.	3	2	1
23	I think the important thing in life is power.	3	2	1
24	To be honest, I want to know other's opinions before I decide my attitude concerning which line of action I should take.	3	2	1
25	I often think life has no meaning.	3	2	1
26	I think the important thing in life is to pursue beauty.	3	2	1
27	I think I am a sinful man/woman.	3	2	1
28	I follow others'opinions even if I think my opinion is right, because I do not want to cause trouble between others and me.	3	2	1
29	I think our thinkings will be better if we do not use ambiguous words such as "probably","perhaps","almost".	3	2	1
30	I feel ashamed when I tell a lie or do unfair deeds.	3	2	1
31	I think the important thing in life is consideration for others.	3	2	1
32	At heart most people do not like to go out of their way to help others.	3	2	1
33	When I go to unfamiliar places, I tend to do things which I do not usually do because I need not worry about others' reactions.	3	2	1
34	To be straightforward is always good.	3	2	1
35	I want to work under a boss of a company who does not care about his men/women except in business and who also does not force us to work beyond what the regulations permits.	3	2	1

		Yes	Y&N	No
		·	·	·
36	It is cruel to blame a mother when she excuses a dishonest act of her child because this comes from her humaneness.	3	2	1
37	Even if I should find a job which better fits my talents, I would not feel inclined to change my present job if somebody had gone through various troubles to help me to get it.	3	2	1
38	I do not like people who behave as if there are norms for good and evil. Good and evil are different according to the conditions or circumstances.	3	2	1
39	I care about the happiness of my relations and my comrades, but I do not have as much interest about the happiness of others.	3	2	1
40	It is a shameful deed to betray our intimate ones.	3	2	1
41	I think in life there are many times we cannot tell the truth.	3	2	1
42	I think man must be saved by God.	3	2	1
43	I think my sins are cleansed when I purify myself with holy water before I enter a holy place to pray.	3	2	1
44	A person of strong character does not show his feelings.	3	2	1
45	I think the important thing in life is to live according to our belief in God.	3	2	1
46	When I decide my actions, it is better to follow my own judgment than to follow other's opinions.	3	2	1
47	I think the important thing in life is to have a sincere heart without lies.	3	2	1
48	When I reflect on my daily acts, I notice that I use most of my energies to giving careful attention to other's feelings and ideas.	3	2	1
49	If I maltreat a person or an animal, I fear I will incur a curse.	3	2	1
50	In daily life, most of the cases in which I regret having done something are the ones in which I was put to shame.	3	2	1
51	I think that to live in this world, we cannot help being dishonest to some extent.	3	2	1
52	I think the important thing in life is the pursuit of truth.	3	2	1

		Yes	Y&N	No
53	I think when we act or decide something it is good to judge those things by bearing in mind the intention of God.	3	2	1
54	I think the most important thing in life is to be able to stand on our own.	3	2	1
55	I prefer a person who smoothes over all unpleasant things to the one who speaks out about problems in a logical way.	3	2	1
56	I think there is no meaning in life itself. Man is born and dies. That is all.	3	2	1
57	It is painful when I speak ill of a person or am unkind to him/her because I feel God is in grief.	3	2	1
58	I think an important thing in life is not to put others into trouble.	3	2	1
59	I think there is no meaning to live fully in the present moment if there is no meaning to life itself and everybody merely becomes ashes after death.	3	2	1
60	I think sincerely about morals and the matter of good and evil.	3	2	1

E) How do you think and feel about religion or to believe in God? Please write in detail.

* Please turn over.

F) Continue answering the questions for either the yes or no column.
Put "√" in the brackets when the answer is appropriate to you.

Do you admit the existence of a transcendental being (god, etc.)?

( ) Yes

↓

Do you belong to a denomination of a religion?

( ) Yes
( ) No

↓

If possible could you write down the denomination of the religion to which you belong?

( )

↓

Are you satisfied with your religion?

( ) Yes
( ) No
( ) There is no other choice because I already belong to it.

( ) No

↓

Do you want to believe if possible?

( ) Yes, I want to believe
( ) No, I do not want to believe
( ) I do not know how to answer
( ) I have no interest

↓

Would you like to have a denomination of a religion? (This question is addressed to those who want to believe)

( ) Yes
( ) No

↓

Generally speaking, do you think it is important to believe in God?

( ) Yes
( ) No

Thank you very much for your cooperation.

あとがき

現代日本女性の生き方意識をめぐる本研究には、そのテーマの性質上、当初から種々の困難が立ちはだかり、果たして何らかの成果をあげ得るものなのかという疑問が常につきまとった。しかし、こうして拙いながらも１つの論文にまとめあげることができたのは、ひとえに諸先生をはじめ、先輩方、友人の皆様のお蔭によるものであることを痛感している。特に大阪大学人間科学部の梶田叡一教授には、ひとかたならぬご指導と御鞭撻を賜った。心の底から感謝の意を表したい。また、人間科学部の諸先生方、島田一男川村学園女子大学教授、小林久盛西宮教育長のご指導や、ご配慮にも心から感謝している。さらに、調査票の作成、調査の実施にあたっては国内はもちろんのこと国を越えて数多くの方々や数多くの学校のお世話になった。心からの御礼を申し上げたい。